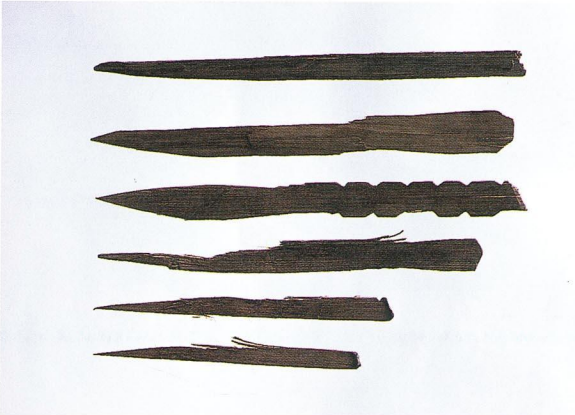
# 川入・中撫川遺跡

－吉備中枢地における港湾遺跡の発掘調査報告－

2006年3月

岡山市教育委員会

題簽　水内昌康先生



１．井戸６出土　斎串

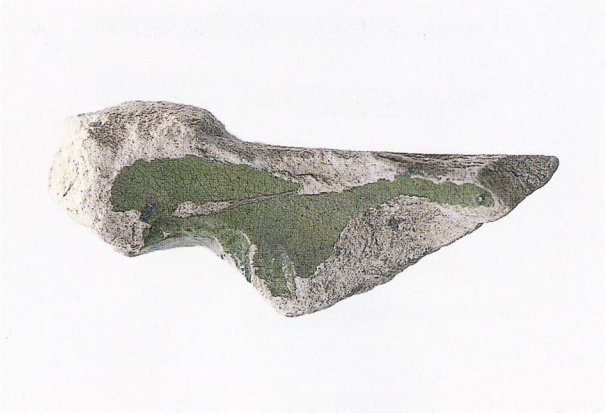
２．井戸６出土　神功開宝

３．石帯（大道西Ｅ区）

４．石帯（建物４付近）

# 巻頭図版 2

1．二彩陶器（244）



2．緑釉陶器・香炉（159）

3．河道出土　漆器

4．河道出土　緑釉陶器

5．特殊文様の描かれた土器

# 序

古代に「吉備」といわれた地域の中心地に位置する岡山市には、数多くの遺跡が存在します。その中には、墳丘の全長が350mにも達し、全国で第4位の規模を有する造山古墳や、地方では極めて稀な凝灰岩製の壇上積基壇を備えた賞田廃寺などがあり、質的にもすばらしいものが含まれています。

川入・中撫川遺跡は市道建設に伴って発掘調査されました。この遺跡は新幹線建設やそれに平行する都市計画道路建設の際に発掘調査され、その結果、奈良時代の港に関する遺跡の可能性が推測されました。今回の発掘調査では、より具体的な遺構や遺物が出土したことから、国府の管轄する港である国府津と考えられました。全国的にも実体の明らかでない国府津を研究するための重要な資料になるものと期待されます。また、鎌倉時代や弥生時代にも古代とは性格が異なる港湾施設が存在したようです。列島における重要航路といえる瀬戸内海の流通構造や、政治的関係を追求するための極めて興味深い遺跡であることは間違いありません。

本報告書は以上の成果をまとめたものです。岡山地域の地域史研究の基礎的な資料として多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と発掘参加者のご支援をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成18年3月31日

岡山市教育委員会
教育長　山根　文男

# 例　言

1．この報告書は、岡山市教育委員会文化財課は平成14年８月１日から平成16年４月30日にかけて、市道２号線建設事業に伴う、岡山市中撫川436－１他の発掘調査に関するものである。

2．この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆は草原がおこなった。

3．遺物の実測およびトレースは木村真紀、矢部桃子、山元尚子、和田かほりがおこなった。

4．報告書の作成にあたって、粘土採掘跡の粘土および凝灰岩製石材の分析については、岡山理科大学の白石純氏にお願いし玉稿を掲載させていただいた。

5．この報告書に用いている高度値は標準海抜高度である。

6．この報告書に用いている方位は磁北である。

7．図２は国土交通省国土地理院発行の２万５千分の１地形図「倉敷」および「総社東部」を複製し加筆したものである

8．遺物・実測図・写真等は岡山市教育委員会において保管している。

9．報告書に用いている方位は、日本測地系による国土座標第Ⅴ座標系の表示である。

# 目　　次

第Ⅰ章　位置と環境……1

第Ⅱ章　調査の経過……9

第Ⅲ章　遺構と遺物……12

Ⅰ　船橋区　……12

Ⅱ　法万寺区　……16

Ⅲ　大道西Ｂ区　……38

Ⅳ　大道西Ａ区　……49

Ⅴ　大道西Ｆ区　……52

Ⅵ　大道西Ｇ区　……52

Ⅶ　大道西Ｃ区　……56

Ⅷ　大道西Ｄ区　……69

Ⅸ　大道西Ｅ区　……88

Ⅹ　大道西Ｈ区　……100

Ⅺ　出土土器観察表　……124

Ⅻ　河道出土土錘計測値　……135

第Ⅳ章　結　　語　……138

附　　章

1　川入・中撫川遺跡出土粘土採掘跡の粘土分析　……183

2　川入・中撫川遺跡出土凝灰岩製石材の分析　……186

# 挿 入 図 目 次


図１　川入・中撫川遺跡の位置……１
図２　周辺遺跡分布図……２
図３　黒住山古墳墳丘測量図……４
図４　伝賀陽氏館跡地形測量図……６
図５　調査区域図……10
図６　船橋区断面図……12
図７　船橋区近世遺構配置図……13
図８　船橋区古墳遺構配置図……14
図９　井戸１実測図……15
図10　溝４出土遺物（１）……15
図11　古墳溝断面図……16
図12　溝４出土遺物（２）……16
図13　法万寺区中世末～近世遺構配置図……17
図14　法万寺区15世紀遺構配置図……18
図15　法万寺区断面図……19
図16　河道１上層出土遺物（１）……19
図17　河道１上層出土遺物（２）……19
図18　法万寺区13世紀遺構配置図……20
図19　河道１下層出土遺物（１）……21
図20　河道１下層出土遺物（２）……22
図21　河道１下層出土遺物（３）……23
図22　河道１下層出土遺物（４）……24
図23　河道１下層出土遺物（５）……24
図24　河道１下層出土遺物（６）……24
図25　河道１下層出土遺物（７）……25
図26　法万寺区古代遺構配置図……27
図27　建物１実測図……28
図28　井戸６実測図……29
図29　井戸６出土遺物（１）……30
図30　井戸６出土遺物（２）……30
図31　井戸６出土遺物（３）……31
図32　井戸６出土遺物（４）……31
図33　井戸６出土遺物（５）……31
図34　井戸６出土遺物（６）……31
図35　法万寺区古墳遺構配置図……32
図36　竪穴住居１実測図……33
図37　竪穴住居２実測図……33
図38　竪穴住居３実測図……34
図39　竪穴住居３出土遺物……34
図40　井戸５実測図……35
図41　井戸５出土遺物……35
図42　井戸７実測図……36
図43　井戸７出土遺物……36
図44　井戸８実測図……36
図45　井戸９実測図……37
図46　井戸９出土遺物……37
図47　大道西Ｂ区断面図……38
図48　大道西Ｂ区中世遺構配置図……39
図49　大道西Ｂ区西半部中世遺構配置図……40
図50　建物１実測図……41
図51　建物２実測図……41
図52　柱穴列１実測図……41
図53　突堤状遺構実測図……42
図54　河道出土遺物……42
図55　大道西Ｂ区古代遺構配置図……43
図56　大道西Ｂ区西半部古代遺構配置図……44
図57　建物１実測図……45
図58　建物２実測図……45
図59　建物３実測図……6
図60　建物４実測図……46
図61　建物４付近出土遺物……46
図62　建物５実測図……47
図63　柱穴列１実測図……47
図64　大道西Ｂ区土器溜まり実測図……48
図65　土器溜まり出土遺物……48
図66　Ｐ205実測図……49
図67　大道西Ａ区遺構配置図……50
図68　大道西Ａ区断面図……51
図69　大道西Ｆ区近世遺構配置図……51
図70　大道西Ｆ区断面図……52
図71　大道西Ｇ区中世遺構配置図……52
図72　Ｐ644実測図……53
図73　大道西Ｇ区古代遺構配置図……53
図74　大道西Ｇ区出土遺物……53
図75　大道西Ｇ区古墳遺構配置図……54
図76　Ｐ645実測図……54
図77　大道西Ｇ区断面図……55
図78　大道西Ｇ区斜面堆積及び溝24出土遺物（１）……55
図79　大道西Ｇ区斜面堆積及び溝24出土遺物（２）……55
図80　大道西Ｃ区中世遺構配置図……56
図81　大道西Ｃ区古代遺構面配置図……57
図82　柱穴列1実測図……57
図83　溝11上面出土遺物……57
図84　溝11出土遺物（１）……57
図85　溝11出土遺物（２）……57
図86　大道西Ｃ区古代斜面堆積出土遺物……58
図87　大道西Ｃ区古墳・弥生遺構配置図……59
図88　大道西Ｃ区断面図……60

図89　井戸１実測図……60
図90　井戸２実測図……61
図91　井戸３実測図……61
図92　井戸３出土遺物……62
図93　井戸４実測図……62
図94　井戸４出土遺物（１）……63
図95　井戸４出土遺物（２）……64
図96　溝９断面図……64
図97　溝13出土遺物（１）……64
図98　溝13・溝21遺物出土状況……65/66
図99　溝13出土遺物（２）……67
図100　溝13出土遺物（３）……68
図101　溝13出土遺物（４）……69
図102　大道西Ｄ区中世遺構配置図……70
図103　Ｐ609実測図……70
図104　Ｐ613実測図……70
図105　Ｐ609出土遺物……70
図106　Ｐ613出土遺物……71
図107　包含層出土遺物……72
図108　大道西Ｄ区古代遺構 配置図……72
図109　溝20・溝17遺物出土状況……73/74
図110　溝20出土遺物（１）……75
図111　溝20上面出土遺物……76
図112　溝20出土遺物（２）……76
図113　大道西Ｄ区弥生遺構配置図……77
図114　大道西Ｄ区断面図……77
図115　Ｐ633出土遺物……78
図116　Ｐ633実測図……78
図117　Ｐ635実測図……78
図118　Ｐ635出土遺物……79
図119　井戸11実測図……79
図120　井戸11出土遺物（１）……80
図121　井戸11出土遺物（２）……81
図122　井戸12出土遺物……82
図123　井戸12実測図……82
図124　井戸13実測図……82
図125　井戸13出土遺物（１）……83
図126　井戸13出土遺物（２）……84
図127　溝21出土遺物（１）……85
図128　溝21出土遺物（２）……87
図129　大道西Ｄ区３層出土遺物……87
図130　大道西Ｅ区近世遺構配置図……88
図131　大道西Ｅ区古代後半～中世遺構配置図…89
図132　土器溜まり実測図……89
図133　土器溜まり出土遺物……89
図134　Ｐ477・Ｐ479出土遺物（１）……90
図135　Ｐ474・Ｐ477実測図……90
図136　Ｐ477・Ｐ479出土遺物（２）……90
図137　大道西Ｅ区古代遺構配置図……91
図138　大道西Ｅ区断面図……91
図139　柱穴列１実測図……92
図140　柱穴列２実測図……92
図141　Ｐ554土器溜まり遺物出土状況……92
図142　Ｐ554出土遺物……93
図143　溝17出土遺物（１）……94
図144　溝17出土遺物（２）……94
図145　溝17出土遺物（３）……95
図146　溝17出土遺物（４）……96
図147　古代遺構面精査時及び水田層出土遺物（１）……97
図148　古代遺構面精査時及び水田層出土遺物（２）……97
図149　古代遺構面精査時及び水田層出土遺物（３）……97
図150　大道西Ｅ区古墳遺構配置図……98
図151　溝18出土遺物……98
図152　大道西Ｅ区弥生遺構配置図……99
図153　溝19出土遺物……99
図154　古墳・弥生遺構面精査時出土遺物……100
図155　大道Ｈ区近世遺構配置図……101
図156　大道西Ｈ区断面図……102
図157　礎石建物実測図……103
図158　三十番神社本殿平面図……104
図159　溝27断面図……104
図160　大道西Ｈ区中世遺構配置図……105
図161　溝28断面図……106
図162　溝28出土遺物……106
図163　大道西Ｈ区水田層出土遺物……107
図164　大道西Ｈ区古墳遺構配置図……108
図165　竪穴住居４実測図……109
図166　竪穴住居４出土遺物……109
図167　溝31実測図……109
図168　溝31出土遺物……109
図169　大道西Ｈ区弥生遺構配置図……110
図170　Ｐ656実測図……111
図171　Ｐ656出土遺物……111
図172　Ｐ658実測図……112
図173　Ｐ658サブトレンチ４断面図（図169対応）……112
図174　Ｐ659実測図……113
図175　溝29遺物出土状況……113
図176　溝29出土遺物……114
図177　Ｐ655・溝29断面図……115
図178　溝30出土遺物（１）……116
図179　溝30遺物出土状況……117/118
図180　溝30出土遺物（２）……119
図181　溝30出土遺物（３）……120
図182　溝30出土遺物（４）……121

図183　溝30出土遺物（５）……122
図184　溝30出土遺物（６）……123
図185　弥生遺構面精査時出土遺物……124
図186　川入・中撫川遺跡周辺の海岸線(推定)　……139
図187　川入・中撫川遺跡周辺の微地形……140
図188　第３微高地南半下水道立会柱状図位置図　…140
図189　下水道立会柱状図……141
図190　下水道立会出土遺物……141
図191　第３微高地調査区合成図……142
図192　河道出土Ｃｂ類土錘……145
図193　『兵庫北関入船納帳』にみる備前･備中船籍の積み荷　…148
図194　中世以前の鯛骨出土遺跡分布……148
図195　第１微高地古代遺構合成図……151
図196　第１微高地古代区画の範囲(推定)……152
図197　区画溝の下限を示す土器……152
図198　軒瓦分類図……153
図199　第２微高地の時期を示す土器……154
図200　第３微高地の時期を示す土器……156
図201　川原寺式系軒瓦の分布と大廻小廻山城　……161
図202　第３微高地弥生後期末・古墳前期遺構配置　…164
図203　古墳前期前・中葉の土器の変遷……167/168
図204　第１微高地弥生後期中葉遺構合成図……173
図205　溝13・19・21・30出土土器分類(１)……176
図206　溝13・19・21・30出土土器分類(２)……177
図207　溝13・19・21・30出土土器分類(３)……178

# 図　版　目　次

巻頭図版１
１．井戸６出土 斎串
２．井戸６出土 神功開宝
３．石帯(大道西Ｅ区)
４．石帯(建物４付近)

巻頭図版２
１．二彩陶器 (244)
２．緑釉陶器・香炉(159)
３．河道出土 漆器
４．河道出土 緑釉陶器
５．特殊文様の描かれた土器

図版１
１．船橋区 掘り上がり
２．船橋区 溝４ 遺物出土状況
３．法万寺区 中世末～近世遺構

図版２
１．法万寺区 河道１ａ
２．法万寺区 河道１ｂ
３．法万寺区 河道１ 土錘出土状況

図版３
１．法万寺区 河道１ 馬骨 出土状況
２．法万寺区 平安時代遺構面
３．法万寺区 建物１

図版４
１．法万寺区 井戸６
２．法万寺区 井戸６
３．法万寺区 井戸６

図版５
１．法万寺区 古墳時代遺構面
２．法万寺区 竪穴住居２
３．法万寺区 竪穴住居３

図版６
１．法万寺区 竪穴住居３ 遺物出土状況
２．法万寺区 井戸５ 遺物出土状況
３．法万寺区 井戸９ 遺物出土状況

図版７
１．大道西Ｂ区 建物５
２．大道西Ｇ区 古代遺構面
３．大道西Ｇ区 古墳時代 遺物出土状況

図版８
１．大道西Ｇ区 古墳時代遺構面
２．大道西Ｃ区 古墳･弥生時代遺構面(南から)
３．大道西Ｃ区 古墳･弥生時代遺構面(西から)

図版９
１．大道西Ｃ区 井戸４ 検出状況
２．大道西Ｃ区 井戸４ 土層断面

3．大道西Ｃ区 井戸４ 掘り上がり

図版10
1．大道西Ｃ区 溝13 遺物出土状況
2．大道西Ｃ区 溝13 遺物出土状況
3．大道西Ｃ区 溝13 遺物出土状況

図版11
1．大道西Ｄ区 中世遺構面
2．大道西Ｄ区 溝20 検出状況
3．大道西Ｄ区 溝20 掘り上がり

図版12
1、大道西Ｄ区 井戸11 遺物出土状況
2．大道西Ｄ区 井戸11 掘り上がり
3．大道西Ｄ区 Ｐ633

図版13
1．大道西Ｄ区 弥生時代遺構面 掘り上がり
2．大道西Ｅ区 土器溜まり
3．大道西Ｅ区 古代遺構面 掘り上がり

図版14
1．大道西Ｅ区 溝17 遺物出土状況
2．大道西Ｅ区 Ｐ554 遺物出土状況
3．大道西Ｅ区 古墳・弥生時代 遺構面

図版15
1．大道西Ｈ区 礎石建物
2．大道西Ｈ区 中世遺構面
3．大道西Ｈ区 溝28

図版16
1．大道西Ｈ区 竪穴住居４
2．大道西Ｈ区 竪穴住居４ 柱穴 遺物出土状況
3．大道西Ｈ区 溝29 遺物出土状況

図版17
1．大道西Ｈ区西半 古墳・弥生時代遺構面
2．大道西Ｈ区 溝30 遺物出土状況(北から)
3．大道西Ｈ区 溝30 遺物出土状況(東から)

図版18
1．大道西Ｈ区 溝30 遺物出土状況(西から)
2．大道西Ｈ区 溝30 掘り上がり(西から)
3．大道西Ｈ区 溝30 掘り上がり(北から)

図版19
遺物写真

図版20
遺物写真

図版21
遺物写真

図版22
遺物写真

# 第Ⅰ章　位置と環境

川入・中撫川遺跡は近世の干拓の結果、岡山平野の中央に位置することとなった。現在は岡山市域に含まれているが、川入は明治８年に宮内村、板倉村と合併して真金村となるが、同14年には分かれて元の川入村となり、庭瀬村、庭瀬町、吉備町を経て、昭和46年には岡山市に編入された。中撫川は明治22年に日畑村東組・下撫川村と合併して撫川村となり、明治37年に撫川町となった後、吉備町となり、昭和46年には岡山市に編入された。両村は郡域が異なっており、川入は賀夜郡、中撫川は都宇郡に属するため、江戸時代には同じ庭瀬藩に含まれ、隣接しているにもかかわらず、別々の経緯をたどったのであろう。いずれにせよ、新幹線やそれに沿う都計道路の建設によって、岡山市域の西半部の主要交通路が貫通するようになったため、遺跡周辺の旧来の景観は激変しており、宅地化が急速に進んでいる。

本州島の西側を東西に伸びる中国山地の南側には、標高300～600mのなだらかな隆起準平原が広がっている。川入・中撫川遺跡は足守川流域に属する。足守北側の丘陵部の地形は谷部の解析がよくすすみ、流路もかなり蛇行している。足守以南の足守川は、現在は岡山市今保で笹ヶ瀬川に合流して児島湖に流入しているが、かつては庭瀬の辺りで縄文海進により生じた内海である吉備穴海に注いでいた。流路についても日畑丘陵の東側に接して流れているが、現地形の高低差や、水田畦畔の形状などから、かつては吉備津神社の南側で大きく弧状に曲がりながら南流していたと推定される。流路延長は24.4kmで、本陣山に水源を発する。足守周辺では流路傾斜は急なため、周囲の山居部では扇状地の発達が顕著であるが、高松から吉備津にかけては自然堤防と後背湿地が列状に並ぶ氾濫平野が主体となっている。したがって、足守周辺の集落遺跡は扇状地上に位置する場合が多いが、高松から吉備津周辺は平野の自然堤防である微高地上に位置する場合が多く、複数の微高地にわたって、同時期の遺跡が形成されている場合も多い。旧石器時代の遺物は窪木薬師遺跡（島崎ほか1993）、甫崎天神山遺跡（宇垣ほか1994）、菅生小学校裏山遺跡（中野ほか1993）、吉備津杉尾西遺跡（柴田・安川2003）で出土しているが、高梁川や足守川などの中小河川が形成した沖積平野に遺跡が認められるようになるのは縄文時代からで、矢部奥田遺跡（高畑ほか1993）や真壁遺跡（村上1987）では早期の押し型文土器が出土している。しかし、継続的に遺跡数が増加するようになるのは後期ぐらいからで、南溝手遺跡では多くの遺物が出土し、そのなかにはイネの籾圧痕のある土器片も含まれている（平井ほか1995）。縄文時代におけるイネの出土例は続出の観があり、さらに年代も遡っている。イネが列島にいつ渡来したのかは重要な問題の一つではあるが、弥生時代との関係と考えると、大規模な集団編成への契機

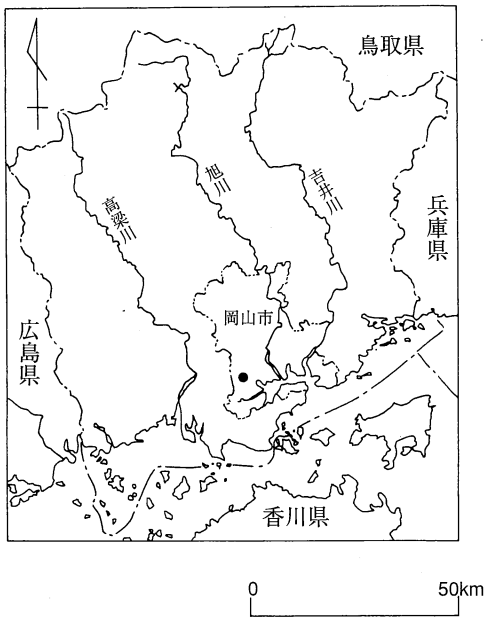



図１　川入・中撫川遺跡の位置

散布地　寺院跡　黒塗：古墳

500m　0　500　1000　1500

①川入・中撫川遺跡
②高塚遺跡
③三手向原遺跡
④立田遺跡
⑤加茂政所遺跡
⑥津寺遺跡
⑦津寺(加茂小)遺跡
⑧矢部南向遺跡
⑨新邸貝塚
⑩吉野口遺跡
⑪東山遺跡
⑫岩倉遺跡
⑬上東遺跡
⑭下庄遺跡
⑮小造山遺跡
⑯造山古墳
⑰雲山鳥打墳丘墓
⑱鯉喰神社墳丘墓
⑲矢部遺跡
⑳矢部大坎古墳
㉑真城寺裏山古墳
㉒中山茶臼山古墳
㉓車山古墳
㉔矢藤治山墳丘墓(古墳)
㉕伝賀陽氏館跡
㉖楯築墳丘墓
㉗王墓山遺跡群
㉘日畑廃寺
㉙二子御堂奥窯
㉚黒住山古墳

図２　周辺遺跡分布図

を生じる可能性の高い水田稲作と、イネの渡来とは別次元の問題と考えた方が妥当と思われる。

弥生時代にはいると、遺跡数は増加する。岩倉遺跡・東山遺跡・川入遺跡(正岡ほか1974)では、前期の遺構・遺物が検出されている。特に東山遺跡では微高地部上ではあるが、たわみ状に低くなっている部分に水路を掘削して水田を形成しており、百間川遺跡群で検出されている前期水田の様相と似ている(中野ほか1995)。南溝手遺跡では朝鮮半島との関係が推定される松菊里型の竪穴住居も検出されている(平井ほか1995)。高梁川流域の真壁遺跡でも前期全般の遺構や遺物も検出されている(村上1987)。しかし、検出される遺物や遺構の量は多くなく、この時期はそれ程大規模な集落は形成されていないと考えられ、集落の基盤は微高地周辺の可耕しやすい比較的小規模な水田であったと思われる。

中期の前半についても新邸貝塚(近藤1953)や、高松城下層遺跡(高橋2000)など新たに遺跡が形成されるものもあるが、基本的な様相は前期と変わらない。旭川流域では、中期中頃から複数の微高地に平行して大規模な集落が形成されている。それらは拠点集落であったと思われる。しかし、当流域では中期後半に集落規模がやや大きくなる傾向はあるものの、後期になるまではそのような集落は形成されていない可能性が高い。

中期末になると、平野部周囲の丘陵に多数の遺跡が形成される。丘陵部において弥生土器の散布地として認識される遺跡のほとんどがこの時期である。足守川中流域の標高87mの小丘陵である甫崎天神山から、南の丘陵部を縦走した山陽自動車道の建設に伴う調査でも、該期の集落が多数検出されており(宇垣ほか1994)、標高46mの王墓山丘陵でも集落の一端を検出している(間壁ほか1974)。これらの集落は数棟の竪穴住居と掘立柱建物で構成された小規模なもので、山裾部に発達した小扇状地上の水田を基盤としていたと考えられる。当地域の平野部周辺には小規模な扇状地の単位がいくつかあり、それらを基盤とする水田の広がりは、地形により規定されるものの、水田経営はある程度自立的におこなわれていたと思われる。このような集落形態は津山市沼遺跡の発掘調査で抽出された水田経営の基本単位とされる「単位集団」(近藤1959)に相当する。このような集団がどの段階の水田経営までを主体的におこなっていたのかは不明だが、各単位に高床倉庫と考えられる建物が付属することから、それを次年度の種籾を保有している倉庫と考えると、田植え(種蒔き)は主体的におこなっていた可能性が高い。単位集団が明確になるのは中期末からである。それ以前でも、竪穴住居がいくつか集まった単位によって構成された集落はあるものの、倉庫と竪穴住居数軒が強固に結びついた単位集団によって構成された集落は認められない。おそらく、中期末以前の竪穴住居数軒の単位というものは、水田稲作遂行といった生産関係を第一義的な目的として結ばれた単位ではなく、血縁原理を中心に結ばれていた単位ではないかと推測される。そのため大規模な集落であっても、各単位にはその単位を維持するための生産基盤はなく、集落の周囲に展開する集落全体で取り組む水田経営が失敗すると、集落そのものの崩壊へと直ちに結びつくものであった。おそらく旭川西岸の沖積平野に形成された当地における中期中葉の最大規模の集落である南方遺跡は、中期末になって急速に解体したのもそのためであろう。中期末の集落は、血縁関係主体の単位であったものが、水田経営のための労働編成を主な目的とした単位に変化したといえる。そのため、そういった単位集団の形成や、維持のためのイデオロギー的な支柱として、この時期に多く出土する分銅形土製品が用いられたのではなかろうか。またこの時期は、土器の文様の中に銅鐸や平形銅剣と共通する文様が顕著になる。単位集団間、あるいはより広い集団間の相互関係を成立、維持させるために青銅製の祭器が用いられるようになったことの反映ではなかろうか。単位集団が広く展開する背景には、小規模集団を維持するための相互扶助のネ

ットワークが不可欠であったと考えられる。多くの場合、集落とは離れた場所に青銅製の祭器は埋納されている。これは青銅製の祭器が特定の集落に属するものでなかったということであり、それがイデオロギー的な支柱となっていたネットワークも特定の集落を中心とした求心的な構造でなかったことを示している。

後期になると、平野部周囲の丘陵裾部にあった集落が一斉に消え、平野部にいくつかの大規模な集落が出現する。高塚遺跡(岡本ほか1990)、津寺遺跡(高畑ほか1998)、矢部南向遺跡(江見ほか1996)、東山遺跡、上東遺跡(伊藤ほか1974)などである。それらの集落の内部には竪穴住居数軒からなる単位の存在が指摘(高畑ほか1998)されている。これは中期末に明確となった単位集団と考えられ、自立的な単位集団によって、後期の集落は構成されているといえる。具体的に示すと、中期末の集落は後期になると廃絶しているが、中期末の集落が発展した小扇状地部の水田は後期になっても維持されており、それが後期の集落内部における単位集団の存立基盤であったといえる。その一方で、集落の位置する平野部における大規模な水田開発が集落構成員全員の協業によっておこなわれたと考えられる。維持と発展といった2つの性格を備えた水田形態の現出によって、後期の集落は安定的な拠点集落へと変貌したといえる。ところが、同一流域内における複数の拠点集落間には、水田経営のための用水や広域流通物の確保をめぐっての対立が生じやすく、それが表面的な軋轢へとつながっていく。軋轢の結果、高塚遺跡のように、銅鐸を独占する集落が認められるようになる。集落間の不均等は、後期中葉になると高塚遺跡や矢部南向遺跡のように、遺構・遺物が集中する集落と、そうでない集落、さらに廃絶する拠点集落とに具現化される。矢部南向遺跡の背後には、弥生時代においては、最大規模クラスの墳丘墓である復原全長が80mにも達する楯築墳丘墓(近藤1992)が築かれ、古墳祭式の原点の一つともいえる特殊器台・壺の祭式も成立する。足守川流域の平野部は、それまでの等質的な構造から、特定集落、特定首長を中心とした求心的な構造に変化したのであろう。この構造は、かなり広範囲の地域の集団を結集したであろう巨大前方後円墳や、多量の舶載鏡を副葬する古墳が築かれる古墳時代の集団関係と共通する点が極めて多かったと考えられる。求心的な首長の墳丘墓の系譜は、長さ約40m、幅約32mの長方形の墳形である鯉喰神社墳丘墓(近藤1991)に引き継がれ、全長36mの前方後円墳である矢藤冶山墳丘墓(古墳)(近藤ほか1995)まで

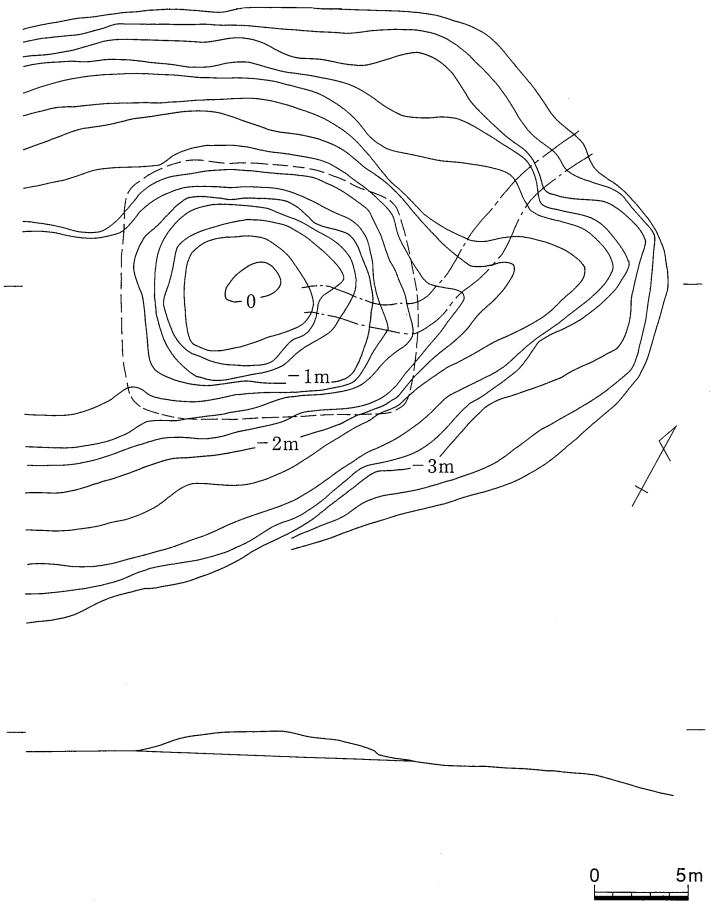



図3　黒住山古墳　墳丘測量図

認められる。ただし、矢藤冶山についてはいわゆる纏向型前方後円墳(寺沢1984)に比定される可能性がある。

古墳時代前期になると、特殊器台形埴輪、もしくは撥形に開く前方部を有する前方後円墳は2基存在するが、いずれも全長が50m未満の規模である。津寺遺跡の西側にある丘陵上には黒住山古墳という前期の時期と推測されている前方後方墳がある。しかし、測量図を見る限り(図3)、前方部とされる部分は山道によって若干の改変を受けた自然地形で、一辺15m前後の方墳である可能性が高い。楯築墳丘墓以来、求心的首長墓の規模は段階的に縮小しており、それと歩調を合わすように、後期中葉に廃絶、縮小した集落が後期末以降拡大を始める。古墳時代前期中葉における集落の変化はまだ明確に把握できていないが、同期の古墳であると考えられる中山茶臼山古墳(近藤1986)、尾上車山古墳(水内1986)の全長が100mを越える大形古墳であることから、再び求心的な構造が強化されたと考えられる。しかも2墳とも臨海性であり、中山茶臼山古墳が行燈山古墳(伝崇神陵古墳)の1/2相似形(草原1993)であることからも、畿内政権や瀬戸内海航路などの地域外の要因によって求心性が強化されたことが推測される。

古墳時代前期末には、大形古墳の築造は内陸へ移動し、しかも円墳(小盛山古墳)(草原1995)となるが、中期初頭の次世代の首長墓である佐古田堂山古墳(西川1986)は前方後円墳である。次の首長墓と考えられる造山古墳については全長が350mにも達する巨大古墳であることから、吉備の大首長(西川1964)、大王の后(水野1986)、倭の大王(出宮1993)など、様々な位置づけがなされている。造山古墳は吉備の地域史、あるいは『古事記』・『日本書紀』で描かれている大王の存在形態、つまり、大王が1人しかいなかったのか、それとも複数いたのかという点などを追求するためのキーポイントになるものであろう。また、高塚遺跡や津寺遺跡からは朝鮮系の遺物や、カマド付きの竪穴住居が検出されており、さらに造山古墳の前方部の正面に位置する榊山古墳からは陶質土器が採集されている(島崎1982)。大形古墳・巨大古墳の動向は、朝鮮半島との関係とも無関係でなかったといえる。榊山古墳の周囲には中規模程度の古墳が5基築かれており、被葬者が造山古墳と卑近な関係であったことがうかがわれる。そのうち方墳と推測される造山第2号墳(安川2000)、帆立貝式前方後円墳の造山第4号墳(安川1998)では、周囲の発掘調査がおこなわれている。

5世紀末～6世紀初頭には、顕著な古墳の築造は停止する。これは「吉備の反乱伝承」に反映されるように、政治的な動向の反映とする考えと、生産力に起因するという考え(根木1996)がある。この時期は大規模な集落が廃絶したり、小規模集落が随所に出現しており、集落の動向にも画期を見出すことができる(草原2000)。おそらく地域首長の没落といった政治的要因だけではなかったと考えられる。

古墳時代前期になっても、平野部では津寺遺跡のように多くの竪穴住居が重複して検出されているような様相が続いており、大規模な集落が引き続き形成されている。そのなかには、窪木薬師遺跡(島崎ほか1993)や、吉野口遺跡(草原1997)のように、鍛冶をおこなう集落も認められ、千引遺跡(武田1999)などのような製錬遺跡と結びついて、原料鉄の生産から鉄製品の製造までを地域内で完結的におこなっている様相がうかがわれる。中期に築かれた全長40mの小規模な帆立貝式古墳である随庵古墳の副葬品中には鍛冶道具があることから(鎌木ほか1965)、当地域の鉄生産は後期ほど数は多くなく、工程的にも稚拙かもしれないが、中期にもある程度独自におこなっていたと考えられる。

6世紀になると古墳の築成は大きく変化する。大形古墳の築造は途切れて、6世紀後半のこうもり塚古墳(全長100m)(葛原1979)の前後は築かれていない。6世紀前半の中小規模の古墳は、すりばち

池２号墳(高田ほか1993)、三輪山第６号墳(西川1963)などがあるが、それほど多くない。６世紀後半になると、横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳が周囲の丘陵部に多数築かれており、三井谷古墳群・大崎古墳群(小郷ほか1994)のように群集墳を形成する古墳群もいくつかある。高梁川西岸の西団地遺跡群(村上ほか1991)では後期古墳群と重なって製鉄関係の遺構が多数検出されており、また、大崎古墳群でも炭窯と推定される焼土が確認されていること(小郷ほか1994)などは、当地域に多数築かれた後期古墳の基盤を考える上で示唆的である。また、当地域における古代前期での寺院建立の最盛期は白鳳時代であるが、この時期には「吉備式瓦当文」、「水切り瓦」といわれる特徴的な形態をした軒丸瓦が用いられている。前者は備中国の氏寺に、後者は備中国、備後国、安芸国、出雲国の氏寺に分布している。ともに氏寺を建立した主体者である在地首長層間のつながりを示しており、特に「吉備式瓦当文」の分布は集中的であり、強固な連帯関係が存在していたと考えられる。官衙関連の遺跡は川入遺跡(正岡ほか1974)、津寺遺跡(高畑ほか1993)などで、前者は築地塀と平城宮式系瓦、後者は規則的な掘立柱建物群とそれをかこむ二重の溝が検出されている。ただし川入遺跡の築地塀については、

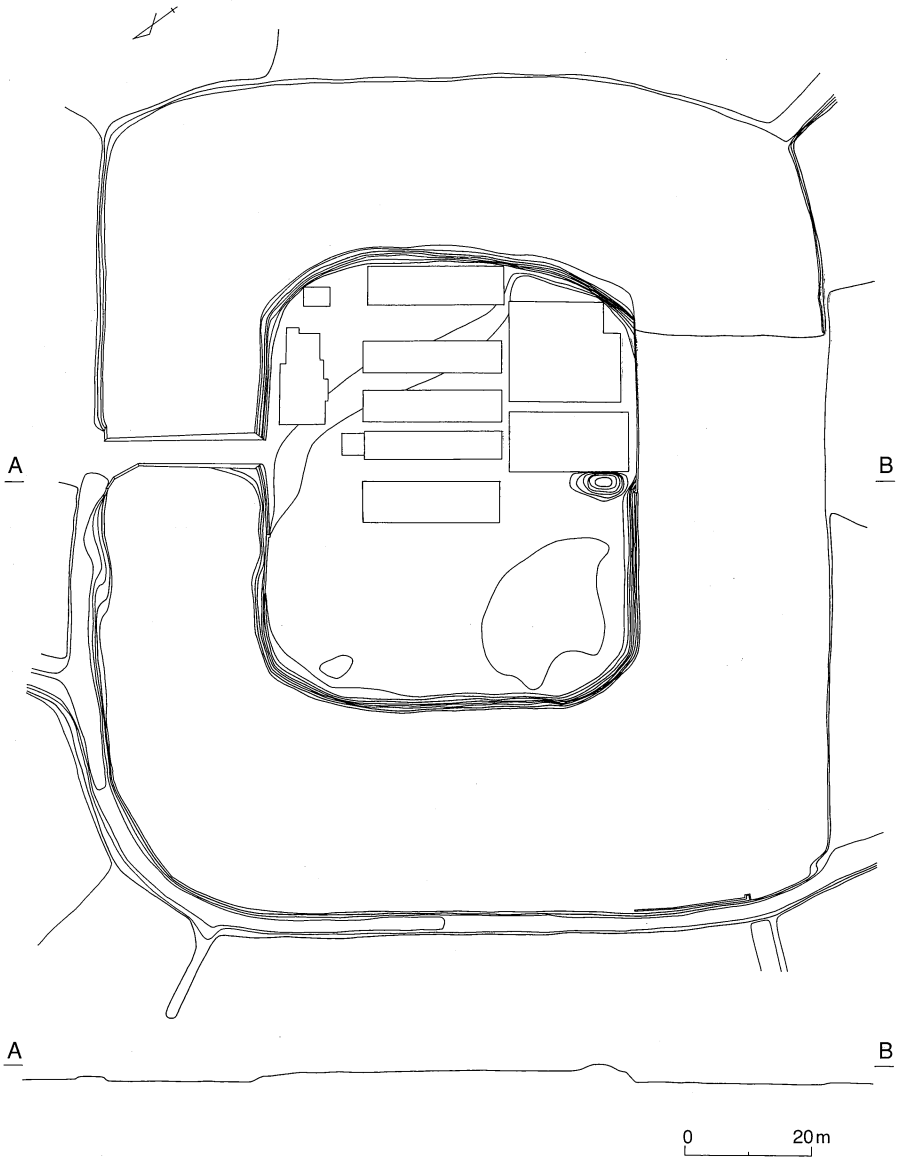



図４　伝賀陽氏館跡　地形測量図　（コンター：25㎝）

今回の調査の結果、築地塀でない可能性が高くなったが、規模の大きな総柱建物で構成された倉庫群(河田・安川2002)や銅印の鋳型や多量の緑釉陶器が出土(岡田ほか2004)していることから、官衙であることは間違いない。また寺院とされていた矢部廃寺は、出土した瓦と地名の考証から山陽道の駅家に推定されている(伊藤1986)。同様に巨大な心礎の残存している惣爪廃寺は、古代の山陽道を挟んで北側に「幸利神社」があり、これを地名から都宇郡衙であるとすると、美作の久米廃寺(粟野1973)のように郡衙に付属する寺であることも考えられる。このほか吉備中山の山塊では海獣葡萄鏡の出土も伝わっており、出土地付近から同時に須恵器も出土していることから終末期古墳が存在したと推定されている(水内1975)。当地域では切り石を用いた終期末古墳はほとんどなく、現在確認されている横穴式石室の中には終末期古墳が含まれており、終末期古墳の実数もある程度存在するものと考えてよい。

古代末から中世前半の集落遺跡の調査例は多く、当地域の微高地上を調査した際には、12世紀末～14世紀ぐらいの時期の柱穴が密集して検出されることも稀ではない。津寺遺跡(正岡ほか1994)や三手向原遺跡(草原2001)では、区画溝を伴う建物群も検出されている。吉備津神社の南に位置し、方形の掘がめぐる中世の館跡である伝賀陽氏館跡(図４)の周囲にも、館の方向と同じ地割りが分布している。その地割りの中に位置する東山遺跡の発掘調査では、14世紀に地割りと同じ方向の溝が掘削されており、柱穴列の方向もそれに平行していることが確認されている。これら中世集落の内部にみられる小区画は、在地秩序が自立的に形成されてきているということを示しており、近世の城下町にみる画一的な町割とはかなり隔たりがあるが、それへとつながる要素の１つである可能性も推定される。伝賀陽氏館跡は、南北61m、東西76mの方形の館本体の周囲に、幅26～31mの堀を巡らしている(図４)。かつては本体の外周には土塁がめぐっていたが、現在は南側面部にだけその一部が残存している。残存部から、その規模を推測すると、幅が10m前後、高さが1.2mはあったものといえる。現在、堀を渡る土手があるが、これが当初のものかどうかは不明である。小規模な調査であるが、南西コーナー付近から陸橋状の遺構が確認されており(扇崎ほか2003)、陸橋が複数存在していた可能性もある。いずれにせよ、県下では同様の居館遺構はあまり存在しておらず、貴重な遺跡といえる。

引用文献

近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』８　1953
近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』６－１　1959
西川　宏「備中三輪山第６号墳」『古代吉備』第５集　1963
西川　宏「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』　1964
鎌木義昌ほか『総社市随庵古墳』総社市教育委員会　1965
粟野克己「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』４　1973
間壁忠彦ほか「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報』10　1974
正岡睦夫ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集　1974
水内昌康「吉備中山の古墳」『吉備中山総合調査報告』岡山市教育委員会　1975
葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35　1979
島崎　東「備中榊山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』３　1982
寺沢　薫「纒向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』六　吉川弘文館　1984
伊藤　晃「矢部遺跡」『岡山県史』考古史料　1986

近藤義郎「中山茶臼山古墳」『岡山県史』考古史料　1986
西川　宏「佐古田堂山古墳」『岡山県史』考古史料　1986
西川　宏「造山古墳」『岡山県史』考古史料　1986
水内昌康「尾上車山古墳」『岡山県史』考古史料　1986
村上幸雄「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編　1987
近藤義郎「弥生墳丘墓の成立と展開」『岡山県史』原始古代　1991
村上幸雄ほか「水島機械金属工業協同組合西団地遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9　1991
近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会　1992
草原孝典『小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会　1993
島崎　東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　1993
高田明人ほか「すりばち池古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』13　1993
高畑知功ほか「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　1993
出宮徳尚「吉備津彦伝承考－非吉備政権論への史料的検討－」『古文化談叢』第30集　九州古文化研究会　1993
島崎　東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　1993
中野雅美ほか「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81　1993
小郷利幸ほか「岡山市足守地域史研究(2)」『古代吉備』第16集　1994
宇垣匡雅ほか「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　1994
平井泰男ほか「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100　1995
近藤義郎ほか『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団　1995
草原孝典「小盛山古墳」『古代吉備』第17集　1995
水野正好「弥生から古墳時代へ」『発掘が語る日本史』4 近畿　1982
根木　修「古墳づくりの時代」『岡山県の歴史』ぎょうせい　1996
江見正己ほか「矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　1996
草原孝典「吉備の古墳群」『季刊考古学　古墳群を考える』47　2000
草原孝典『吉野口遺跡』岡山市教育委員会　1997
高畑知功ほか「津寺遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127　1998
安川　満『造山第4号古墳』岡山市教育委員会　1998
武田恭彰「奥坂遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15　1999
岡本寛久ほか「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150　2000
安川　満ほか『造山第2号古墳』岡山市教育委員会　2000
草原孝典『三手向原遺跡－中世土師器窯と集落遺跡の発掘調査報告－』岡山市教育委員会　2001
河田健司・安川　満「川入・中撫川(市道)遺跡」「岡山市埋蔵文化財センター年報1　2000(平成12)年度」2002
柴田英樹・安川　満「吉備津杉尾西・奥田遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報2　2001(平成13)年度』2003
扇崎　由ほか「伝賀陽氏館跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報2　2001(平成13)年度』2003
岡田　博ほか「川入遺跡・中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182　2004
高橋伸二『高松城三の丸跡発掘調査概報』岡山市教育委員会　2000

# 第Ⅱ章　調査の経過

岡山市川入・中撫川で、市道(市道２号線)の建設事業が設定された。敷地は山陽新幹線の南側に沿う位置にあり、山陽新幹線や、その北に平行する都市計画道路建設の際に発掘調査された川入遺跡の範囲に含まれると予想された。そのため平成14年２月12日に試掘調査を行った。その結果、遺構の粗密はあるが、敷地全体から微高地基盤層や遺物包含層が確認された。そのため、市道建設敷地が埋蔵文化財包蔵地にあり、文化財保護法の適用を受け、記録保存による事前の行政的処置の必要な旨の試掘調査に関する結果を担当課である岡山市道路建設課に通知し、その実施に対する両者の連絡・協議を要請した。文化財課と道路建設課で協議を重ねた結果、平成14年度から記録保存を行うことで合意に達した。さらに市道２号線から直角に南へ派生する市道中撫川平野線の敷地の中で、未買収のため発掘調査ができていなかった部分についても併せて発掘調査を行うこととした。発掘調査は平成14年８月１日に着手し、平成16年４月30日に終了した。着手後、岡山市教育委員会教育長から、岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第58条２第１項に基づく「埋蔵文化財調査の報告」が提出された。発掘調査面積は3700㎡である。

その後、平成15年５月10日(土)には、発掘調査現地説明会を行い、約200名の参加があった。

発掘調査組織

発掘調査主体者　　玉光源爾

発掘調査対策委員　　稲田孝司（岡山大学教授）
亀田修一（岡山理科大学教授）
西川　宏（山陽学園講師）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）
水内昌康（日本考古学協会会員・前岡山市文化財保護委員会会長）

発掘調査担当者　　出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課長）
根木　修（岡山市教育委員会文化財専門監）
神谷正義（岡山市教育委員会文化財課主査（平成16年度から文化財副専門監））
扇崎　由（岡山市教育委員会文化財課主任）
（調査員）草原孝典（岡山市教育委員会文化財保護主事（平成16年度から主任））
西田和浩（岡山市教育委員会文化財保護主事）
（経理員）福永みどり

発掘調査現場作業員　赤木悦子　赤木正輝　浅沼信子　安藤一江　坂田勝利　佐々木龍彦
高谷瑞恵　仲達綾子　中山政太郎　畑谷豊志　林　祥介　宮崎美枝子
三好誠一

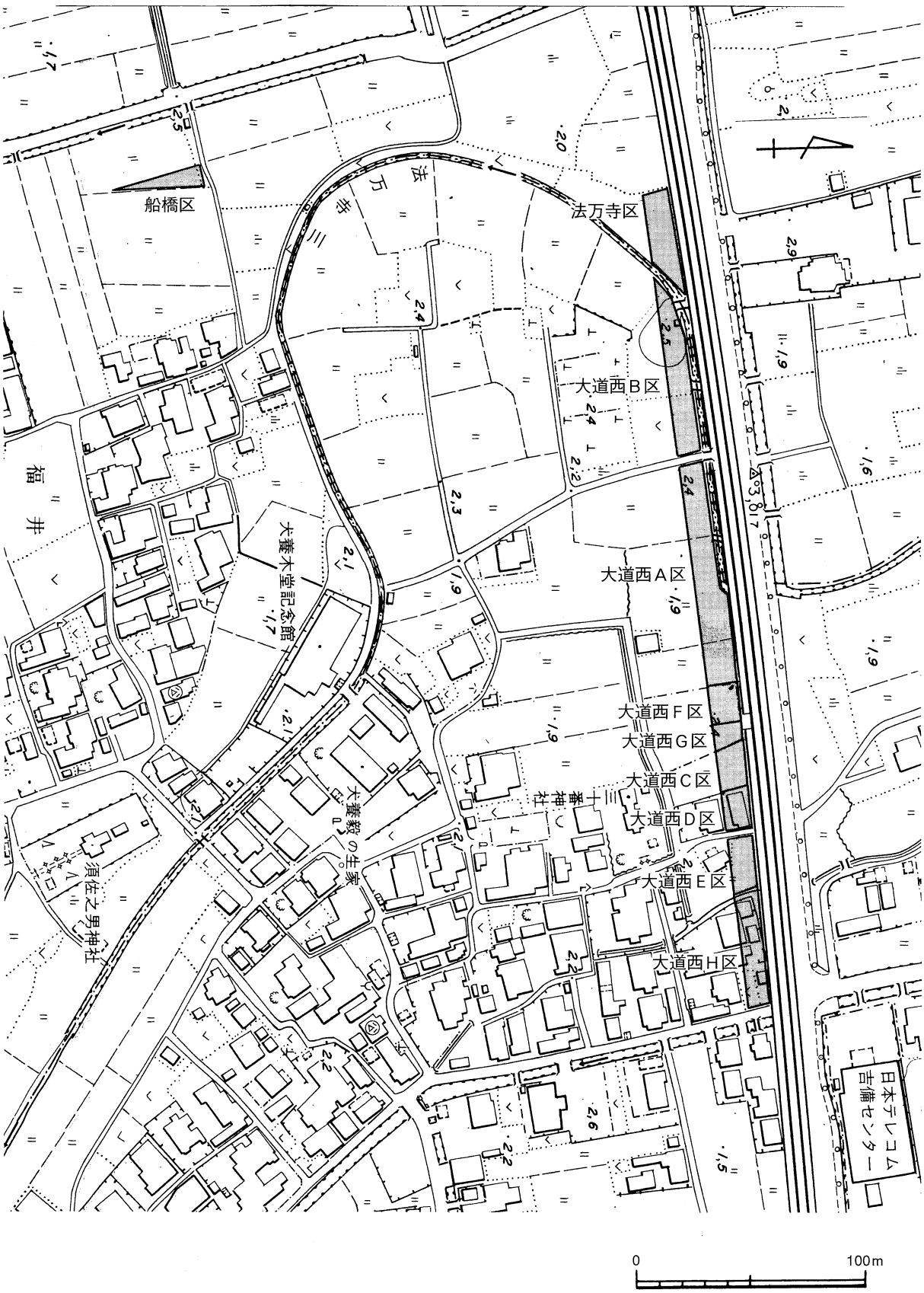

船橋区
法万寺区
法万寺川
大道西Ｂ区
大道西Ａ区
大道西Ｆ区
大道西Ｇ区
大道西Ｃ区
大道西Ｄ区
大道西Ｅ区
大道西Ｈ区
福井
犬養木堂記念館
犬養毅の生家
須佐之男神社
日本テレコム
吉備センター
0
100m

図５　調査区域図

発掘調査現場事務員　　前田裕子
出土物整理事務員　　矢部桃子　和田かほり

調査にあたり、対策委員会の先生方には多大なるご指導・ご助言をいただいた。また、伊藤晃、宇垣匡雅、岡本寛久、河本清、小松原基弘、鈴木景二、鈴木康之、高橋照彦、武田恭彰、中野雅美、橋本久和、平井典子、弘田和司、真鍋篤行、山川純一、柳瀬昭彦、山元敏裕の諸氏には諸処のご教示、ご助言をいただいた。諸処にご助勢くださった方々に深謝する次第である。

## 経過と概要

造成土や現代水田の耕土については重機によって除去した。発掘区は、調査区を南北に横切る生活道や水路等の関係から９小区に分けた。西から法万寺区、大道西Ｂ区、大道西Ａ区、大道西Ｆ区、大道西Ｇ区、大道西Ｃ区、大道西Ｄ区、大道西Ｅ区、大道西Ｈ区である。中撫川平野線の部分は、船橋区である。調査区名の最初は、その調査区の位置する小字名で、アルファベットについては調査した順番が反映されている。

調査区は大まかにみると、東西に並ぶ３つの微高地に対して東西方向のトレンチを設定したことになる。微高地の間に位置することとなる大道西Ａ区、同Ｆ区、同Ｇ区は、湿地というよりも微高地低位部的な環境であり、古墳時代以降の水田層が認められる。水田層は確認されなかったが、微高地上から続く弥生時代後期の溝が、水田開発のためのものと考えられることから、該期の水田も開発されていたと考えられる。法万寺区東側と大道西Ｂ区西側には、現在も同じ位置を流れる法万寺川の旧河道が検出され、中世の遺物が多量に出土した。法万寺川は郡境であり、ある段階での足守川の本流であったと推測される。現法万寺川は平野中央を流れている現足守川に接続しているが、旧河道の痕跡から追跡すると、大きく東へ蛇行し、吉備津神社の西側をかすめながら北へ続いている。この流路の位置は板倉川と一致する。板倉川とは、源平合戦の頃の足守川の本流のことである。

微高地上からは弥生時代の遺構や遺物が出土した。特に新幹線建設時や、都市計画道路建設時の発掘調査で検出されていた築地状遺構については新たな知見が得られた。さらに古代の遺構に関しては、平城宮式系の瓦や築地状遺構が検出されていたことから、漠然と津に関する遺跡との認識がなされてきていたが、今回の調査によってその内容や性格がかなり具体的なものとなったといえる。

## 発掘日誌(抄)

| | | |
|---|---|---|
| 平成14年 | ８月１日 | 船橋調査区から発掘調査開始 |
| | 12月20日 | 発掘調査対策委員会開催 |
| 平成15年 | ５月10日 | 現地説明会開催 |
| | ９月８日 | 発掘調査対策委員会開催 |
| | 10月９日 | 岡山市立吉備小学校の児童(６年生)に見学会をおこなう |
| | 10月10日 | 岡山市吉備小学校の児童(３年生)に見学会をおこなう |
| | 11月19・20日 | 岡山市立高松中学校生徒職場体験 |
| 平成16年 | ３月29日 | 発掘調査査対策委員会開催 |
| | ４月30日 | 発掘調査終了、発掘機材撤収。 |

# 第Ⅲ章　遺構と遺物

調査対象地が東西に細長いことや、調査区を南北に走る道路や水路の影響により、いくつかの調査区に区切って調査をおこなった。　ここでは、各調査区ごとに遺構と遺物の説明をする。

## Ⅰ　船橋区

三角形の平面形を呈する調査区である。遺構面は２面ある。

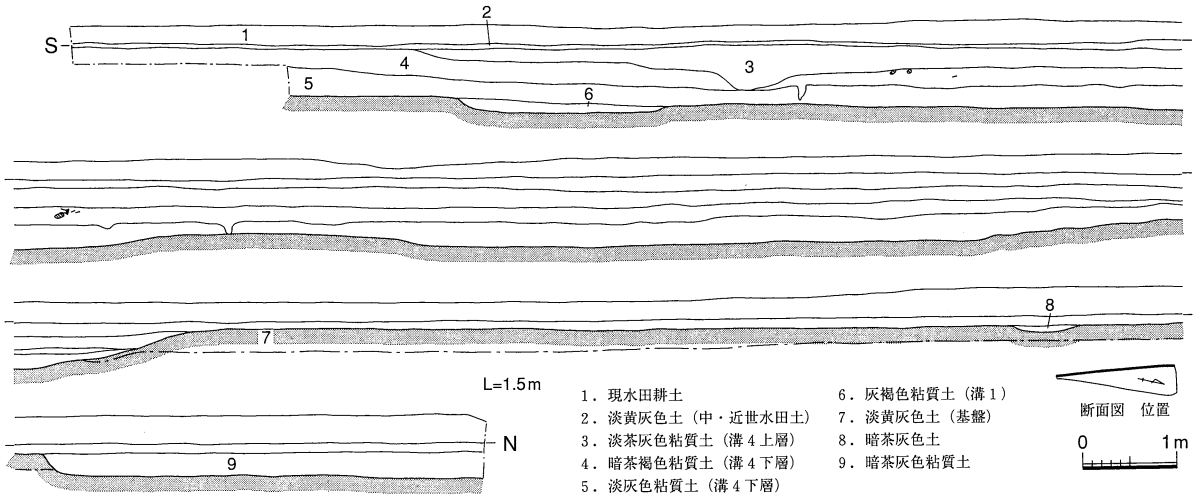



図６　船橋区　断面図

### （１）近世（図７）

現水田耕土直下は、厚さが10cm前後の近世水田層がある。近世水田層除去後に近世水田層と極めてよく似た埋土の土壙がいくつか検出された。いずれも検出面からの深さが0.3～0.5mである。遺構の性格を示す遺物が出土しなかったが、おそらく、粘土を採集するために掘られた粘土取り穴と推測される。

### （２）古墳時代（図８）

井戸１（図９）

調査区の中央付近で検出された井戸である。溝４によって上半部を削平されている。検出状況面でかなり凹凸があるため、平面的な数値で計測すると、径0.6mの円形の平面形となる。遺構検出面は1.1m前後である。壁面はほぼ垂直になっており、最も高い検出面から0.5mで平坦となる。その面から径0.4m、深さ0.3m、底面の径0.3mの逆台形気味の断面形に掘り下げ、径0.3mの自然木の中身を刳り抜いた井戸枠を据えている。ただし、底面は平坦ではなく、西から東に向かって若干傾斜している。これは井戸枠の形状と一致している。

遺物は、井戸枠内から甕形土器の胴部片が出土した。若干肩が張り気味であることから、溝４よりも少し先行する時期と考えられる。古墳時代前期初頭であろう。

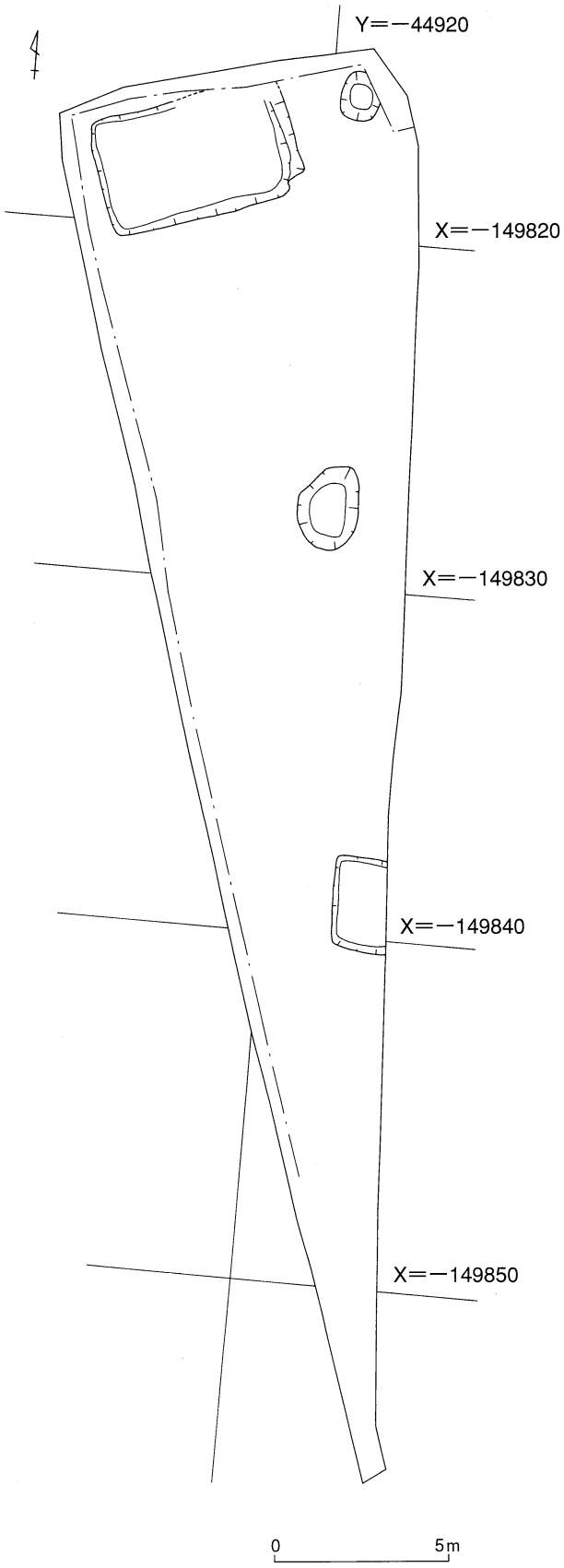



図７　船橋区　近世遺構配置図

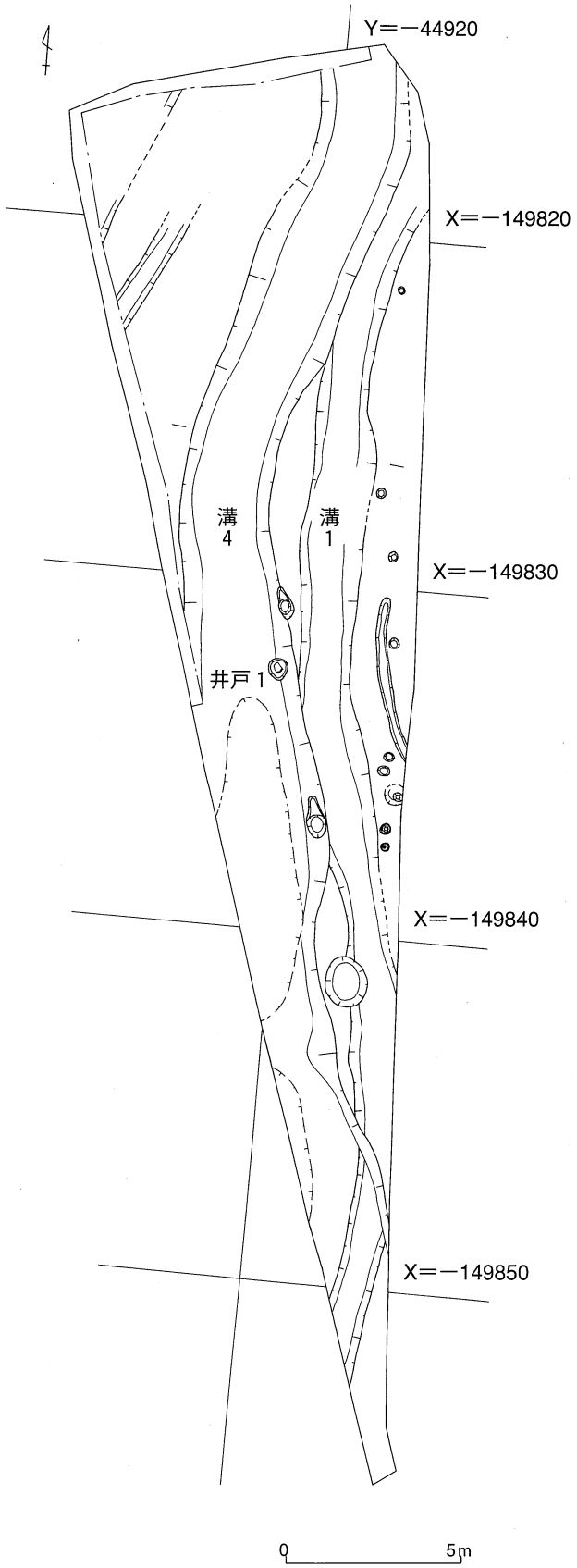



図8　船橋区　古墳遺構配置図

溝１・溝４（図８・10～12）

調査区の中央を南北方向に流れる溝群で、東側に広がる微高地縁辺をめぐる溝と考えられる。溝１は溝４によって部分的に削平されており、両溝は同じ溝が掘り直された結果と考えられる。遺構検出面は1.4m付近で、溝１の幅は1.6m、溝４の幅は2.4mである。溝１の深さは検出面から0.3m、溝４の深さは検出面から0.5mである。溝１からは遺物はほとんど出土しなかったが、溝４の２層中からは土器がまとまって出土した。ただし、土器の出土は、その分布に偏りがある。特に調査区内の北半部分からはブロック状にかたまった状況で出土した。しかも完形品が多く、まとめて廃棄された結果と考えられる。最終埋土である１層からは、須恵器の小片とともに、手ずくね土器が出土しており、５世紀初頭頃

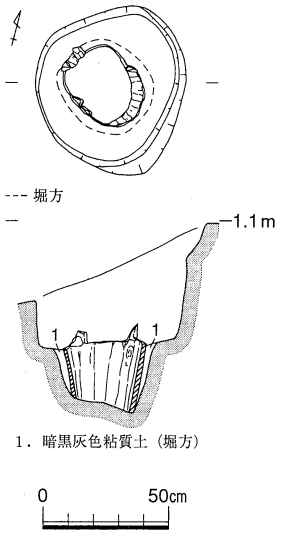



図９　井戸１　実測図

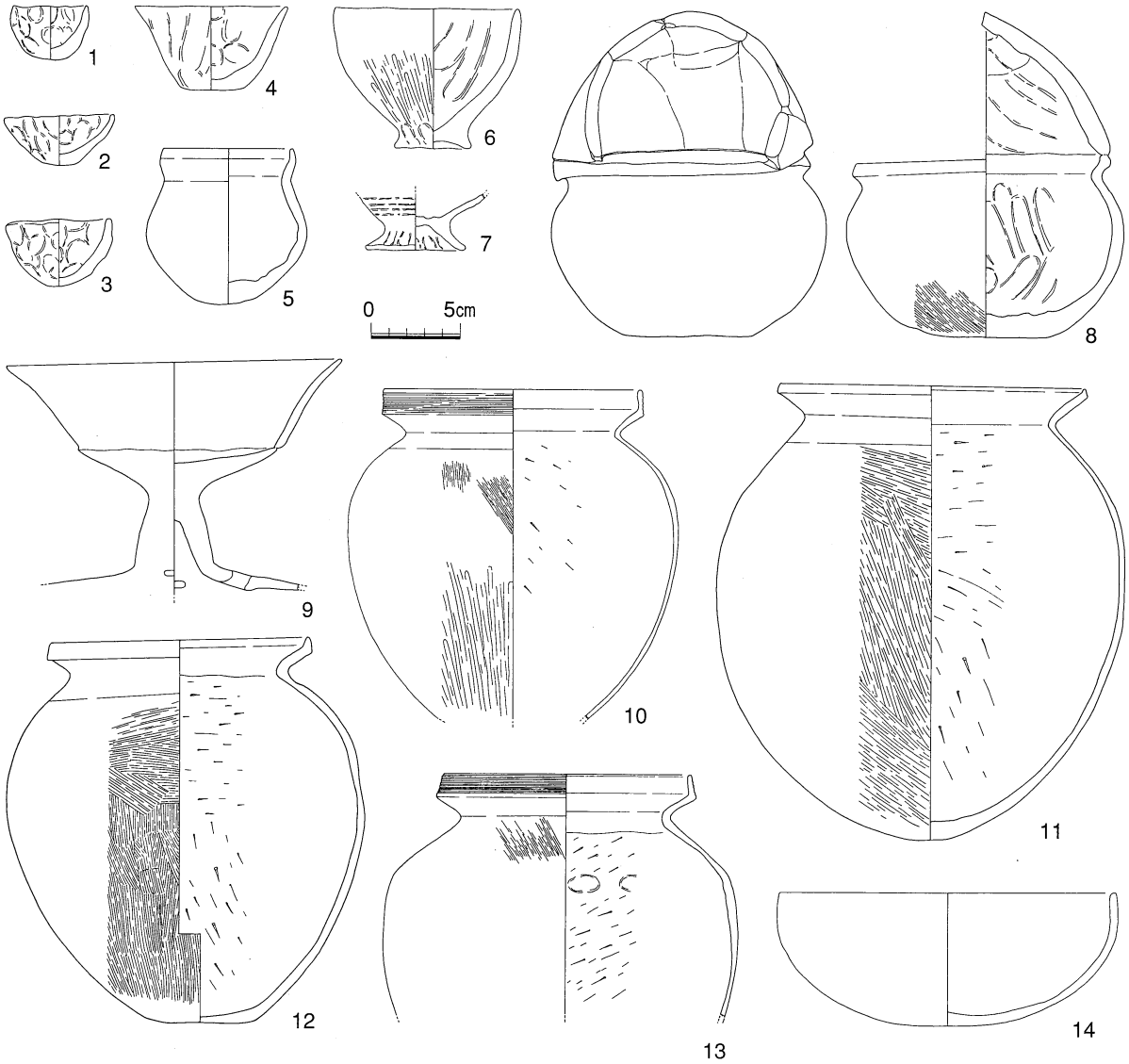



図10　溝４　出土遺物（１）

まではくぼみ状の遺構として存在していたと考えられる。

遺物は、手ずくね土器（１～４）、壺形土器（５）、鉢形土器（６・14）、製塩土器（７）、手あぶり形土器（８）、高杯形土器（９）、甕形土器（10～13）、土製勾玉（Ｄ１～Ｄ５）である。甕形土器（11）は、庄内式土器を模倣したものである。これらから、溝４の時期は古墳時代前期初頭といえよう。

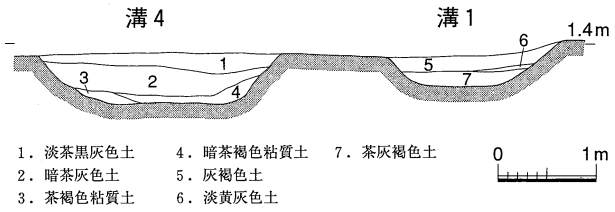



図11　古墳溝　断面図

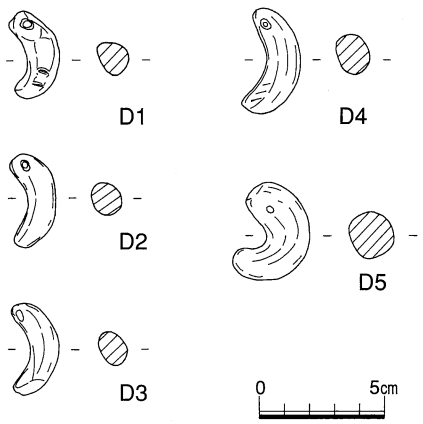



図12　溝４　出土遺物（２）

## Ⅱ　法万寺区

現法万寺川の西岸に接する調査区である。遺構面は５面である。

### （１）中世末～近世（図13）

調査区西端は現水田面でも0.2mほどの段差があり、法万寺川の氾濫による削平の影響と推測される。ただし、削平されたと考えられる東側の低位面には中世の素堀溝が幾筋も検出され、それらは中世末～近世の時期である。幅は0.3～0.5mほど、深さは２～３cmほどで、方向は大体N-20°-Eである。調査区東端には最大幅が１mに近い畦畔状の高まりがあり、法万寺川と水田を画する大畦畔であったと考えられる。ただし、この畦畔の東側は0.1mほどの段差があって平坦となっており、この部分はいわゆる河田であった可能性が高い。つまり、法万寺川の氾濫で微高地が削平されて低位部となった部分は、中世末～近世になって水田開発されたといえる。削平を免れた微高地高位部については、現水田以外の耕土層はなく、素堀溝なども検出されなかったことから、現況のように微高地全体が水田化されたのはかなり新しい時期の可能性が高い。

### （２）13世紀～15世紀

河道（図14～25）

調査区中央付近から東側で検出された河道である。調査区の東側を流れる現法万寺川の旧河道と考えられる。この位置は現況の水田地割から推測される法万寺川の旧流路とも一致する。遺構検出面は1.1mである。河道内の埋土は上･下の２層に大別できる。上層は２段掘り状になっている。微高地部から幅４～10mほどの間に若干浅い部分が広がり、その後急激に深くなっている。このようになったのは、おそらく下層の河道と比べると、若干流路方向が東へ振ったためと考えられる。段は流路変更の痕跡といえる。傾斜変換点付近、言い換えると上層の河道の河岸付近からは、礫がまとまって検出されている。礫の分布は平面的にみても明確な規則性はうかがえないが、ある程度面的に広がってい

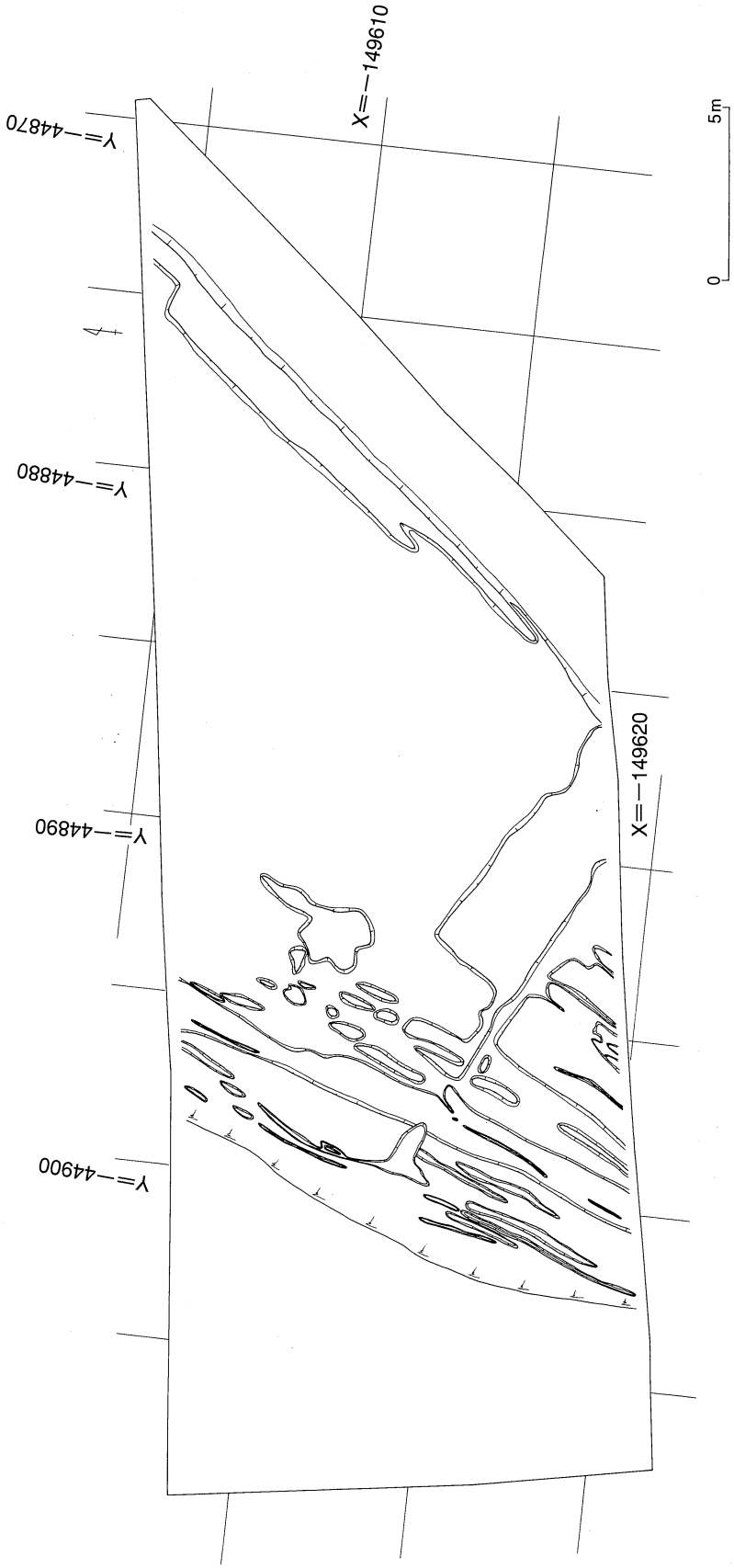



図13　法万寺区　中世末～近世遺構配置図

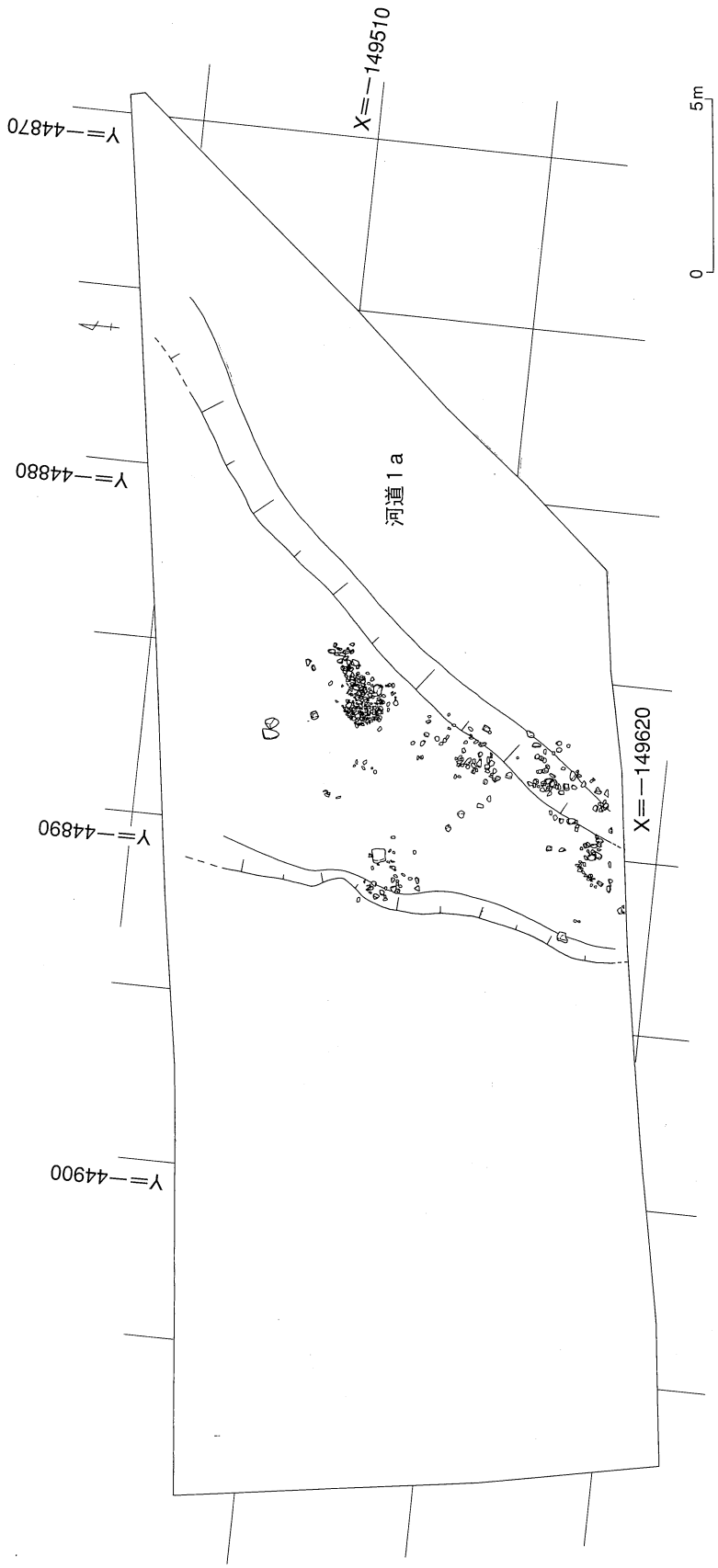
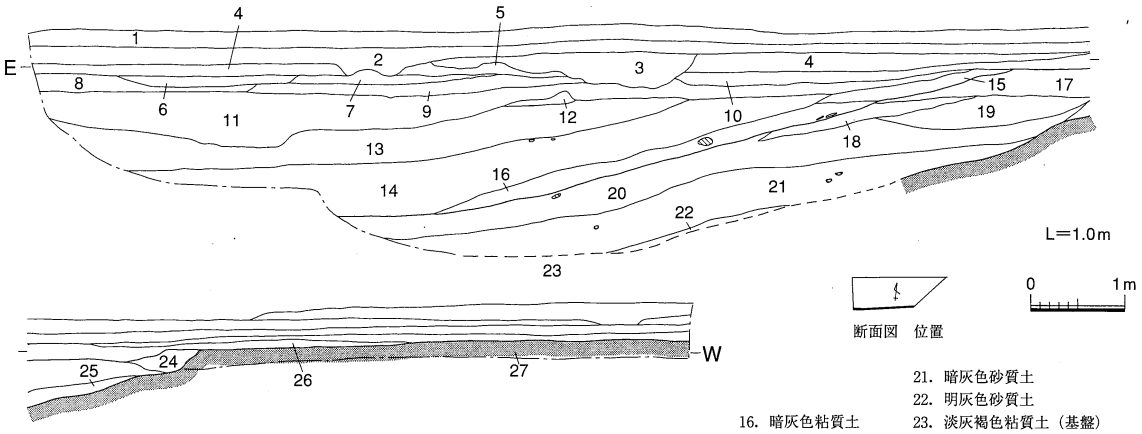



図14　法万寺区　15世紀遺構配置図




1．橙褐色土
2．淡橙褐色土
3．橙灰褐色細砂
4．橙褐色土　含　Mn多
5．暗褐色土
6．明褐色細砂
7．淡褐色土
8．明橙灰褐色細砂
9．灰褐色土
10．淡灰色土　含　Mn
11．淡黄灰色砂質土
12．暗黄灰色砂質土
13．明灰色粘質土
14．灰色粘質土
15．暗灰褐色土
16．暗灰色粘質土
17．明黒褐色土
18．黒褐色土
19．暗灰褐色粗砂
20．暗橙灰色粗砂
21．暗灰色砂質土
22．明灰色砂質土
23．淡灰褐色粘質土（基盤）
24．黄橙灰色粘質土
25．暗灰褐色粘質土
26．明橙褐色土　含　Mn
27．暗黄褐色砂質土（基盤）

図15　法万寺区　断面図

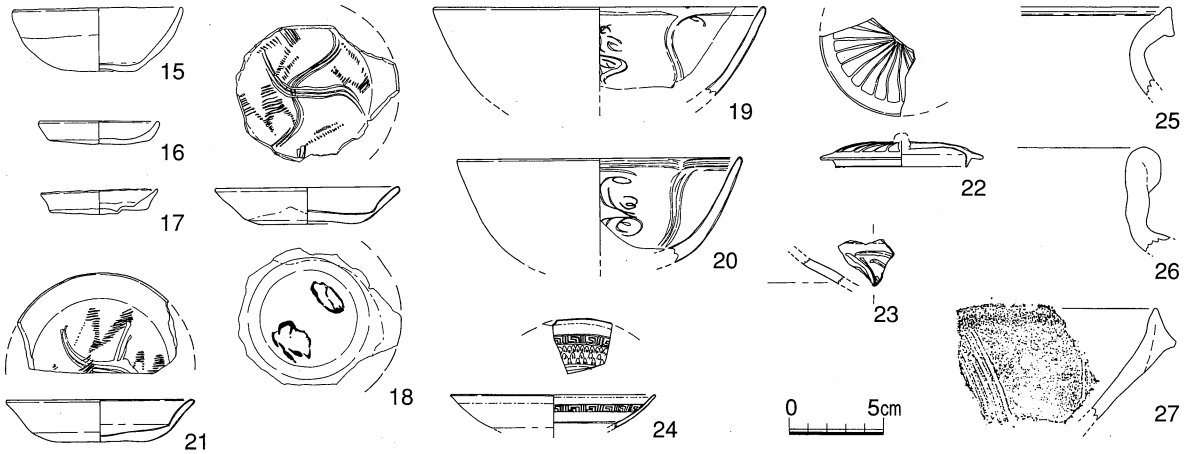



図16　河道１上層　出土遺物（１）

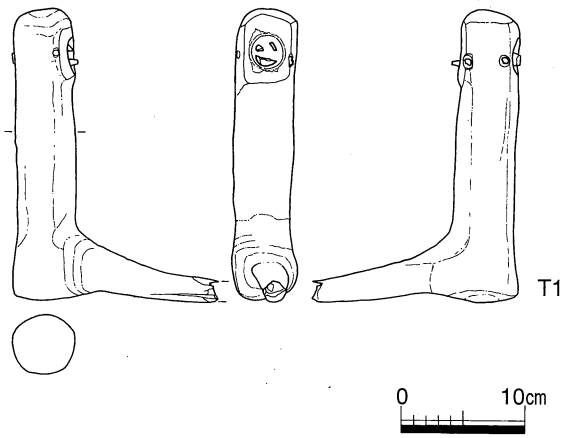



図17　河道１上層　出土遺物（２）

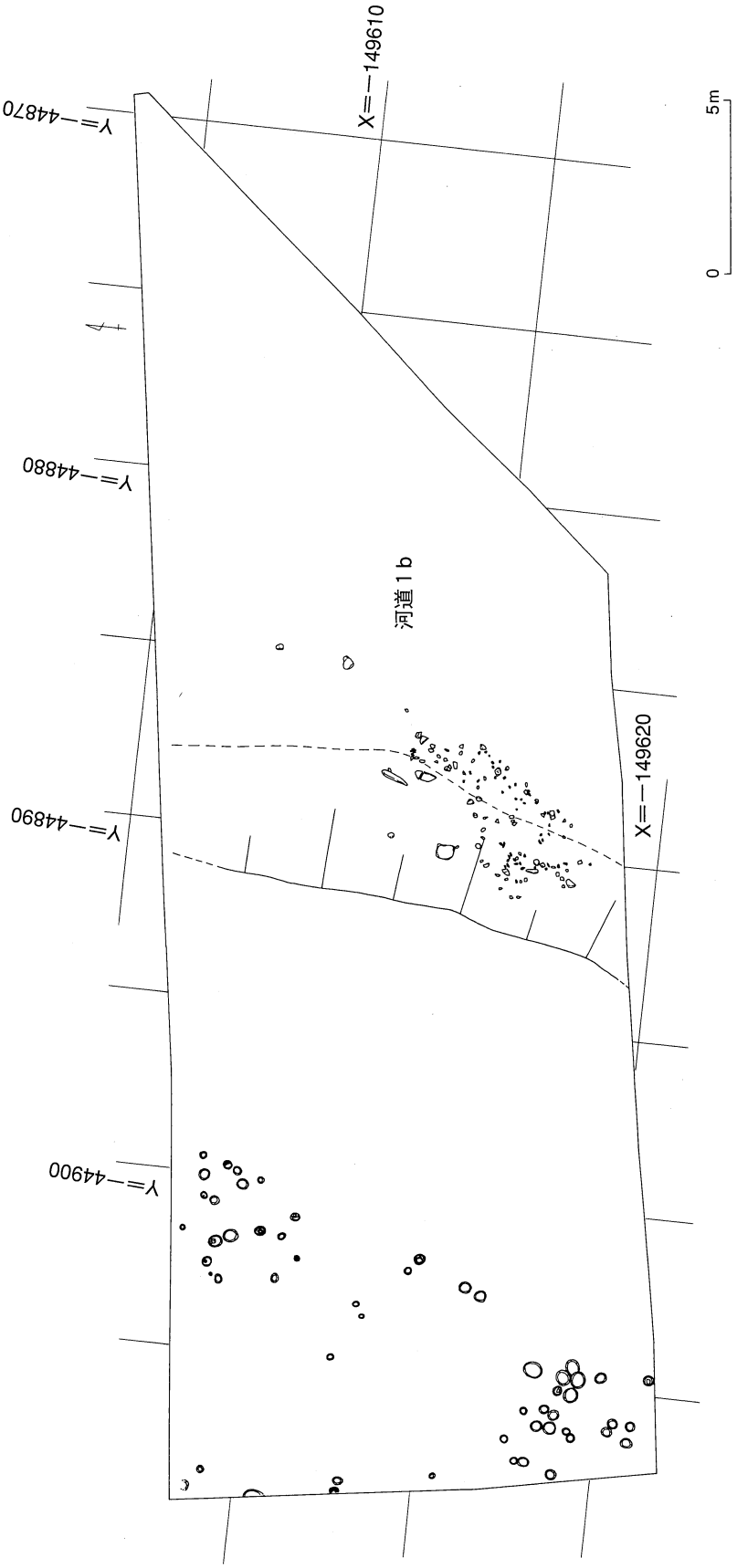



図18　法万寺区　13世紀遺構配置図

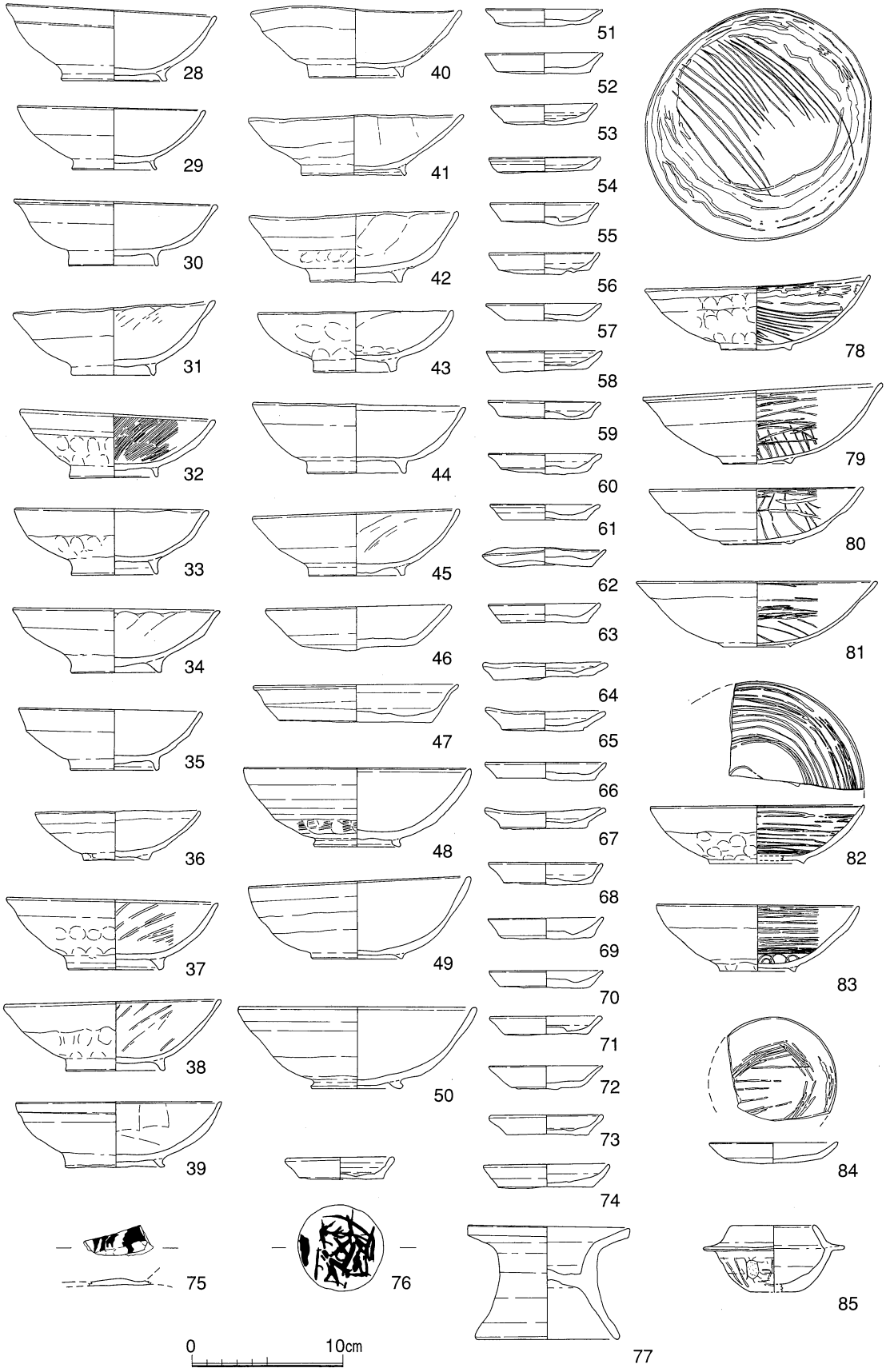



図19　河道１下層　出土遺物（１）

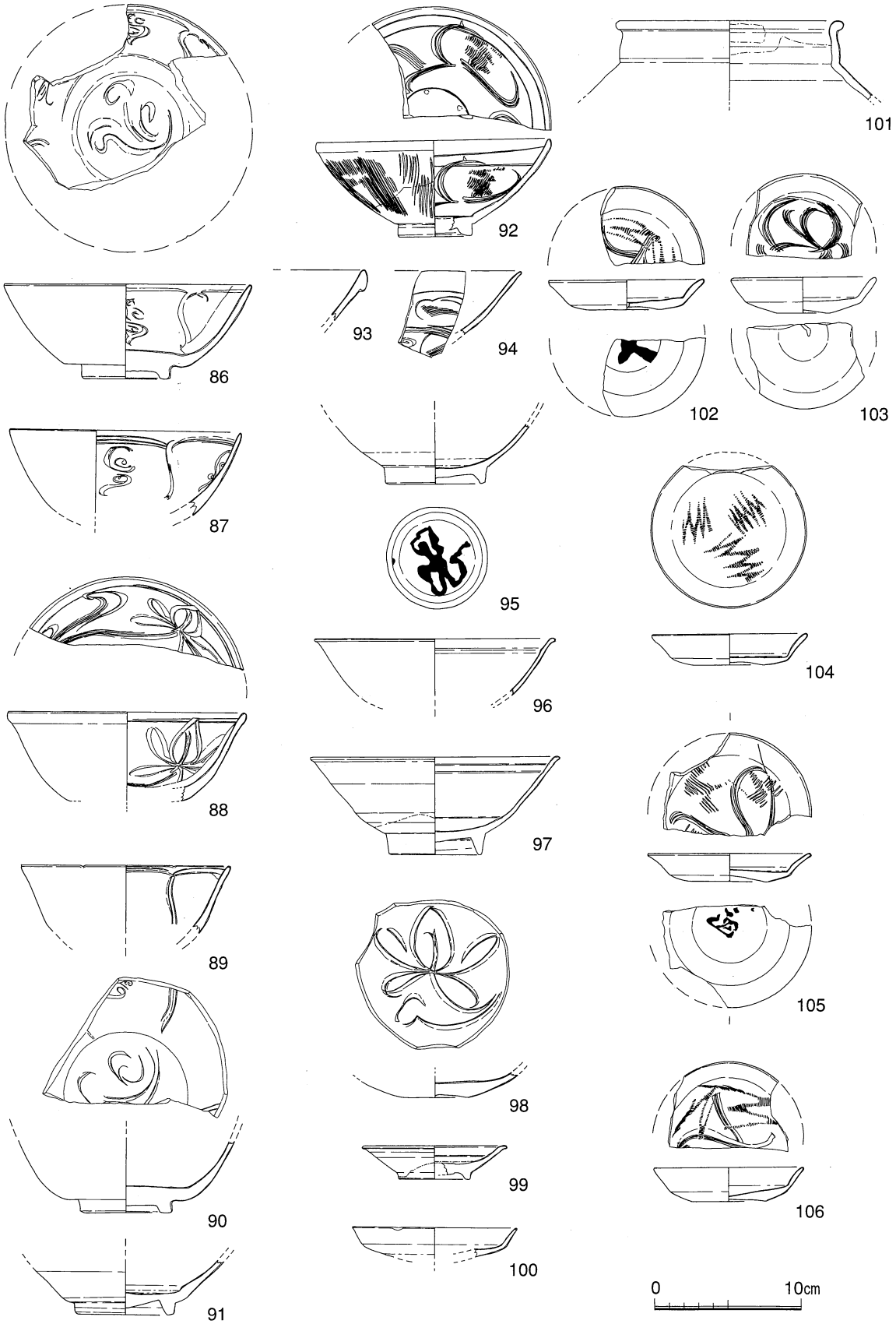



図20　河道１下層　出土遺物（２）

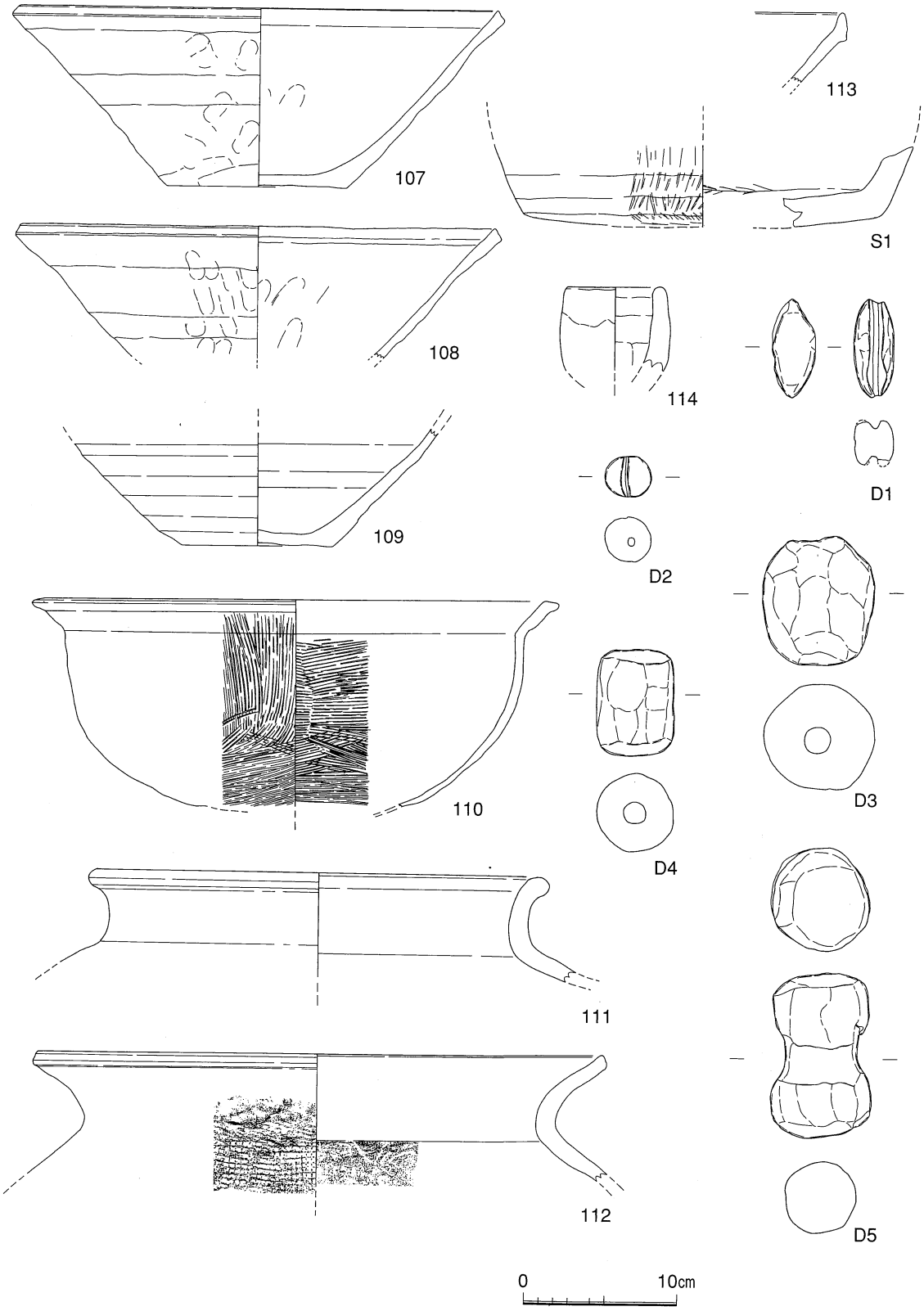



図21　河道１下層　出土遺物（３）

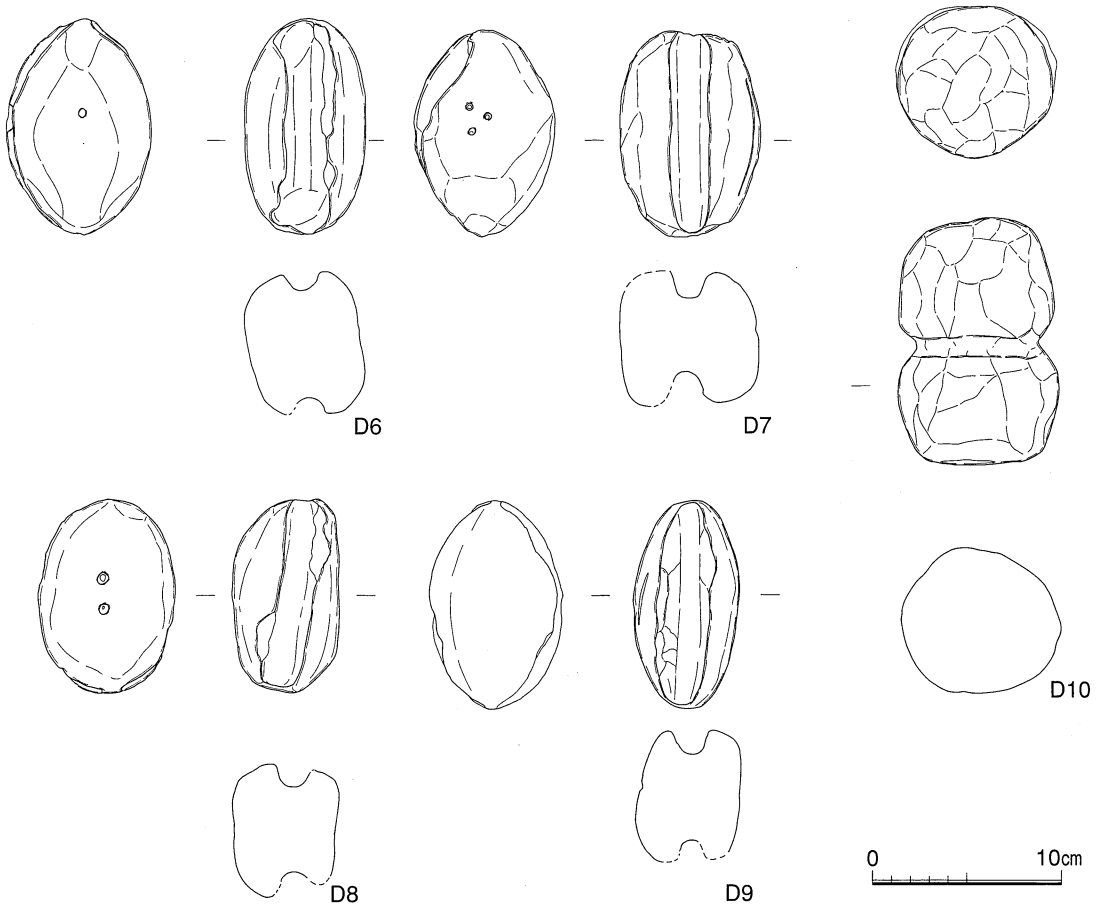



図22　河道１下層　出土遺物（４）

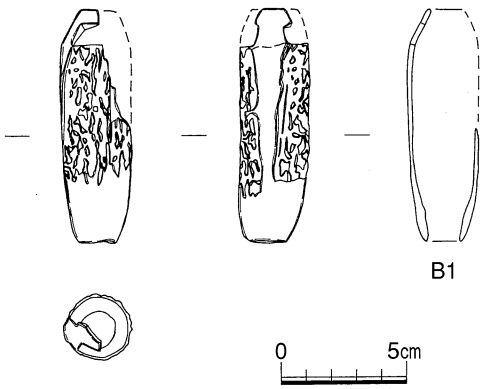



図23　河道１下層　出土遺物（５）

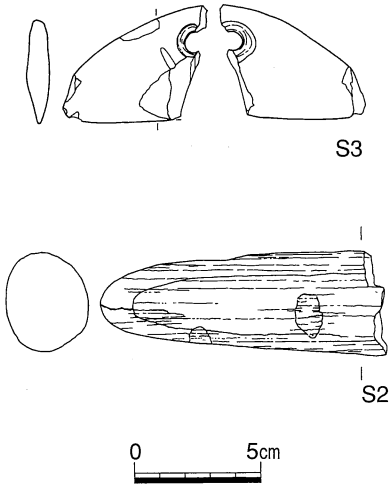



図24　河道１下層　出土遺物（６）

ることから、おそらく護岸の捨て石であったと考えられる。上層から出土した遺物は少なく、微高地上からもこの期に属する柱穴等の遺構や遺物は検出されなかった。下層に属する遺物が多量であったのとは対称的である。微妙な流路方向の変更などの影響により、集落の移動があったことを示しているのかもしれない。

上層の時期を示すのは、備前焼甕(25)、備前焼擂鉢(27)、土師質土器椀(15)で、その上限時期は14世紀中葉まで遡る可能性がある。さらに注目されるのは中国製の緑釉陶器(23)と枢府窯系白磁(24)(1)の存在である。これらの存在から、下層から出土した多くの中国製陶磁器から推測される川入遺跡の拠点的港湾施設としての性格が、位置は微妙に移動しているものの継続されていたことを示唆している。このほか、牛や馬の骨も比較的まとまって出土しており、くびき状の木製品(Ｔ１)も出土した。

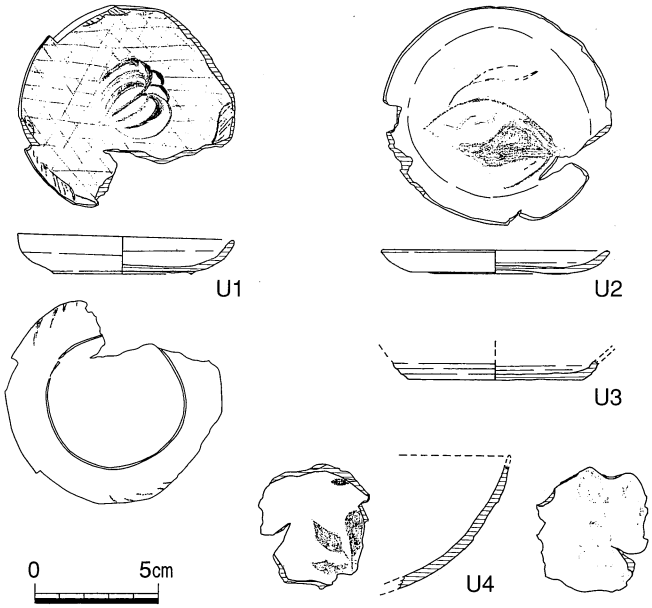


図25　河道１下層　出土遺物（７）

下層は、壁面の傾斜も急であり、東岸部よりも深い。それは大きくみると、法万寺川がこの付近で東から南へ大きく流路方向を変えているからで、そのため西側が流速の早い攻撃面となったためといえる。海抜高－１ｍまで掘り下げたものの、河道の底部には達しなかった。より下層まで掘り下げようとしたが、湧水による埋土の流出によって、調査区そのものが崩落する危険性が出てきたため、それ以上の掘り下げを中止した。部分的に掘り下げた感触では、実際の底面までは10cm前後の深さではないかと推測された。下層の河道西岸にも上層と同様に護岸に用いたと推測される捨て石が部分的にみられた。ただし、上層と比べて礫の集中性は稀薄で、その範囲も限定的であった。

遺物は埋土に多量に含まれており、かつ多彩といえる。大半を占めるのは土師質土器の椀や皿などで、籾痕が認められるものも含まれていた。皿の底部調整について注目すると、ほぼ全てがヘラ切り後に板状工具による圧痕があり、内面底部付近をナデている。当遺跡より北へ約２kmにある吉野口遺跡では、12世紀末の土師質土器を多量に投棄した土壙が検出された。出土状況からして一括性の高い性格のものであるが、それらの皿の調整を見てみると、ヘラ切り後ナデしているもの、ヘラ切り後板状工具による圧痕があるもの、ヘラ切りのままのものなどいくつかの調整技法が混在している（草原1997)。この点は川入遺跡の様相とは異なっているといえる。また和泉型と楠葉型の瓦器椀と（78～83)も出土しており(2)、備中地域では瓦器の出土が稀であることからすると、例外的な状況といえる。さらに皿(84)は、回転台を用いた成形で、底部を回転ヘラ切りした後に丁寧にその痕跡をナデ消し、内面には暗文風のヘラミガキをおこなっている。焼成も瓦質である。瓦器の皿を模倣したように見える。また、ミニチュアの羽釜型(85)の瓦器も出土している。瓦器のほかに須恵質土器椀（48～50）が

あり、これは讃岐産である(3)。東播系の須恵質土器(109・113)、備前焼(111)、亀山焼(107・108・112)、滑石製石鍋(Ｓ１)、坩堝(114)、鹿の角を刳り抜いて側面に窓を創り出した鳴鏑(Ｂ１) もある。

漆製品は４点あり、椀(Ｕ４)と小皿(Ｕ１～Ｕ３)である。(Ｕ１)は黒漆塗りの下地に赤漆で南瓜と格子目、(Ｕ２)は黒漆塗りの下地に赤漆で扇子を描いている。ただし(Ｕ２)は、底部外面に黒漆を塗布しておらず、(Ｕ１)のように高台も作り出されていない。(Ｕ３)は黒漆を塗布しただけであるが、底部外面にまで塗布されており、高台は作り出されていない。(Ｕ４)は黒漆塗りの下地に赤漆で、内面には紅葉がかかれ、外面にも何らかの文様が描かれている。

注目されるのは、瀬戸内海でおこなわれている追い込み漁に近・現代まで使用されていた、素焼きの土錘とほとんど変わらない形態のもの(有溝土錘Ｃｂ)が多量に出土したことである。完形のものだけでも100個体はある。埋土全体から出土したことや、隣接する新幹線建設に伴う発掘調査からも出土していることから、網に付着した状態で埋没し、偶然その部分を今回調査したために多量の土錘が出土したということは考えられない。調査区外周辺にも、多量に土錘が埋没していると考えられる。土錘の種類は真鍋氏の分類（真鍋1994）にしたがうと、管状土錘(Ｄ２・Ｄ３・Ｄ４)、有溝土錘Ｃｂ(Ｄ６～Ｄ９)、有溝土錘Ｈ(Ｄ５・D10)、有溝土錘Ｃａ(Ｄ１)、有溝管状土錘(Ｄ２)である。大半は有溝土錘Ｃｂである。また、有溝土錘Ｈはこれまで知られていない形態のもので、今回出土したのも図化した２点だけである。またそれぞれの個体数は、計測していない一部欠損および、破片数も加えると、管状土錘が15、有溝土錘Ｃｂが193、有溝土錘Ｈが２、有溝土錘Ｃａが２、有溝管状土錘が21である。有溝土錘Ｃｂが圧倒的多数を占めている。さらに当該期の集落で出土する土錘としては、かなり普遍的に出土する小型の管状土錘は一点も出土せず、今回出土した土錘についても小型のものは極めて少なかった。有溝土錘Ｃｂは重量が300～400ｇもあり、地引き網や巻き網などの大型網漁に用いられたものである。下層出土遺物の時期については、ほぼ13世紀前半でまとまっており、これらの土錘の年代もほぼ同じと考えてよい。平安時代末以降になると、土錘の変化から操業規模の大きな網漁業が出現したと指摘されており(真鍋1994)、当遺跡の土錘はその状況の一端を証明する事例ということになろう。さらに有溝土錘Ｃｂについては、網の綱を土錘の溝にあわせたために残った綱の圧痕を確認できるものがあることや、焼成失敗品も若干認められることから、当地で生産されていた可能性が極めて高い。同様の土錘が他の遺跡ではほとんど出土していないことからも、流通させるためにこの地で集中的に生産されていたのではなく、この地で生産し使用されていたと考えることが妥当であろう。このほか、縄文期の遺物と推測される結晶片岩製の石棒(Ｓ２)や、弥生期の遺物と推測される砂岩製の石包丁(Ｓ３)も出土した。また、牛や馬の骨もコンテナ４箱分出土した(4)。

柱穴（図18）

調査区内の最も高所である地点で、径0.2～0.3m前後の柱穴がいくつか検出された。調査範囲が限られていることもあり、建物等は明確にできなかった。また旧法万寺川の影響で、現況の水田面でも一段低くなっている部分については、柱穴は全く検出されなかった。急に柱穴がなくなるのは不自然で、おそらく削平されたのであろう。柱穴埋土からは微細な土師質土器片などが出土している。また、包含層からも若干中世の土器が出土しており、それらは大体13世紀代と考えられ、下層の時期と一致する。

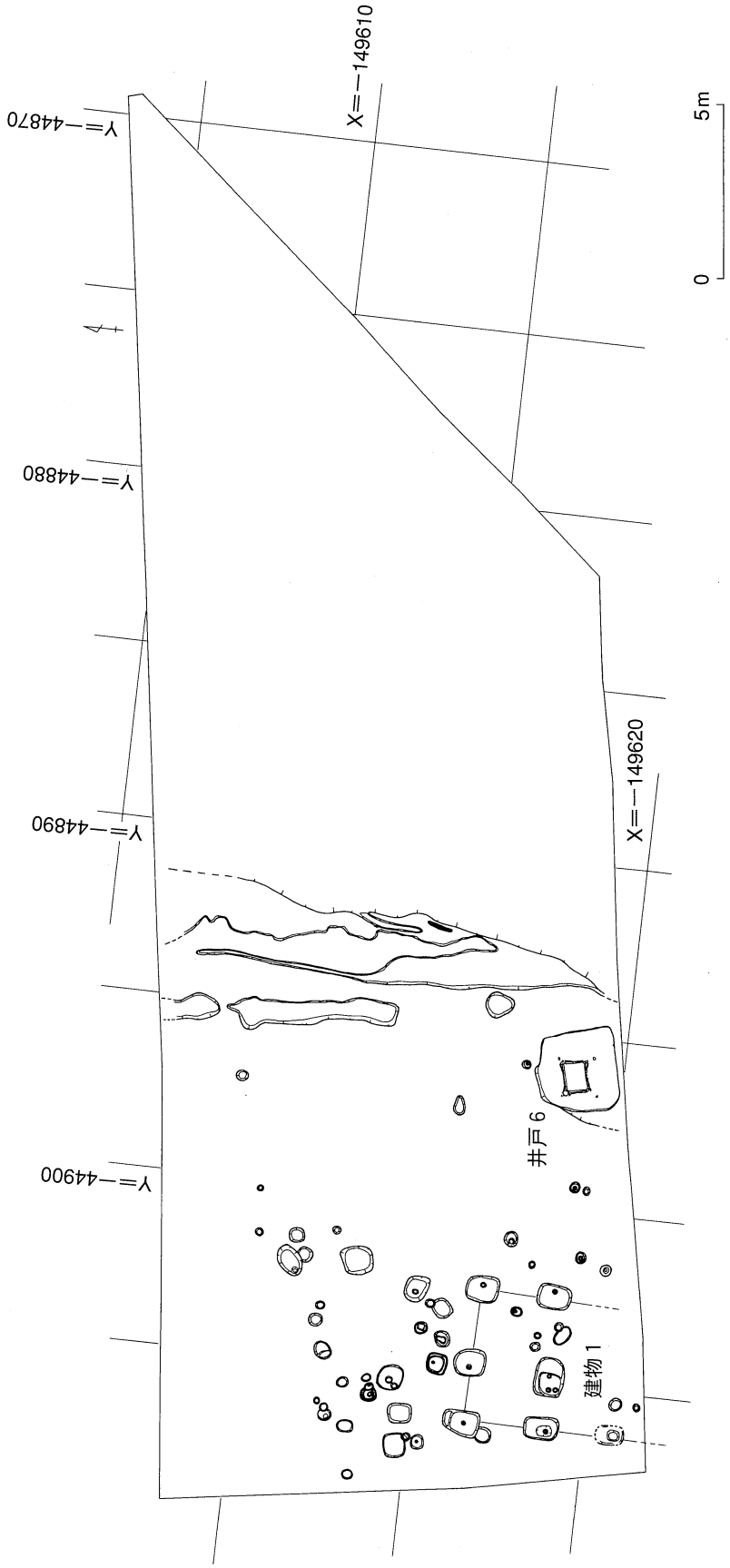



図26　法万寺区　古代遺構配置図

## （3）古代

### 建物１（図27）

調査区南西コーナー付近で検出された側柱建物である。南半は調査区外へ出るため全形は不明である。棟方向はほぼ真北方向といえる。梁間２間、桁２間以上である。遺構検出面は1.4m付近、柱穴の掘り方は一辺が0.6～0.9mの方形を呈する。柱穴の底部は検出面から0.2～0.3mである。柱の大きさは柱痕跡から、径0.1～0.2mである。

遺物は微細な土器片が出土したが、その中に回転台成形の土師器が含まれていることから、東側にある井戸６と同時期である可能性が高いと考えられる。

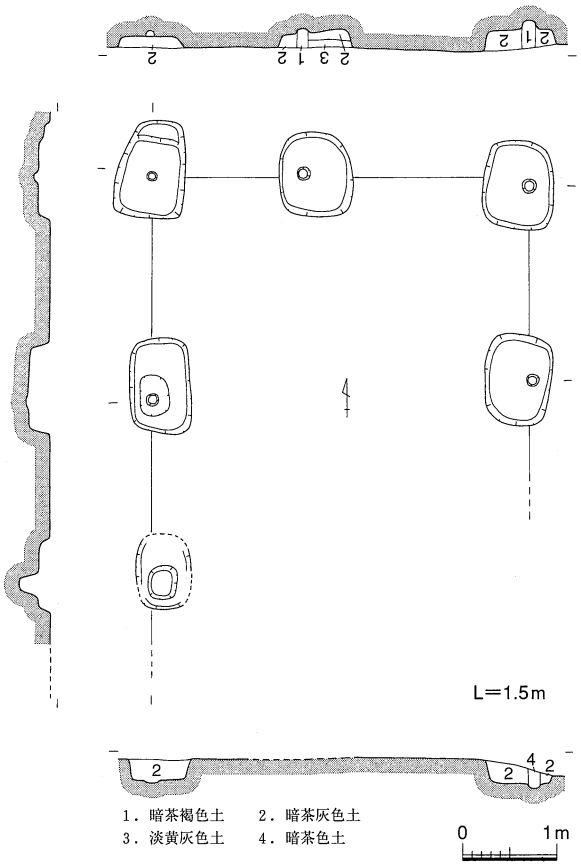
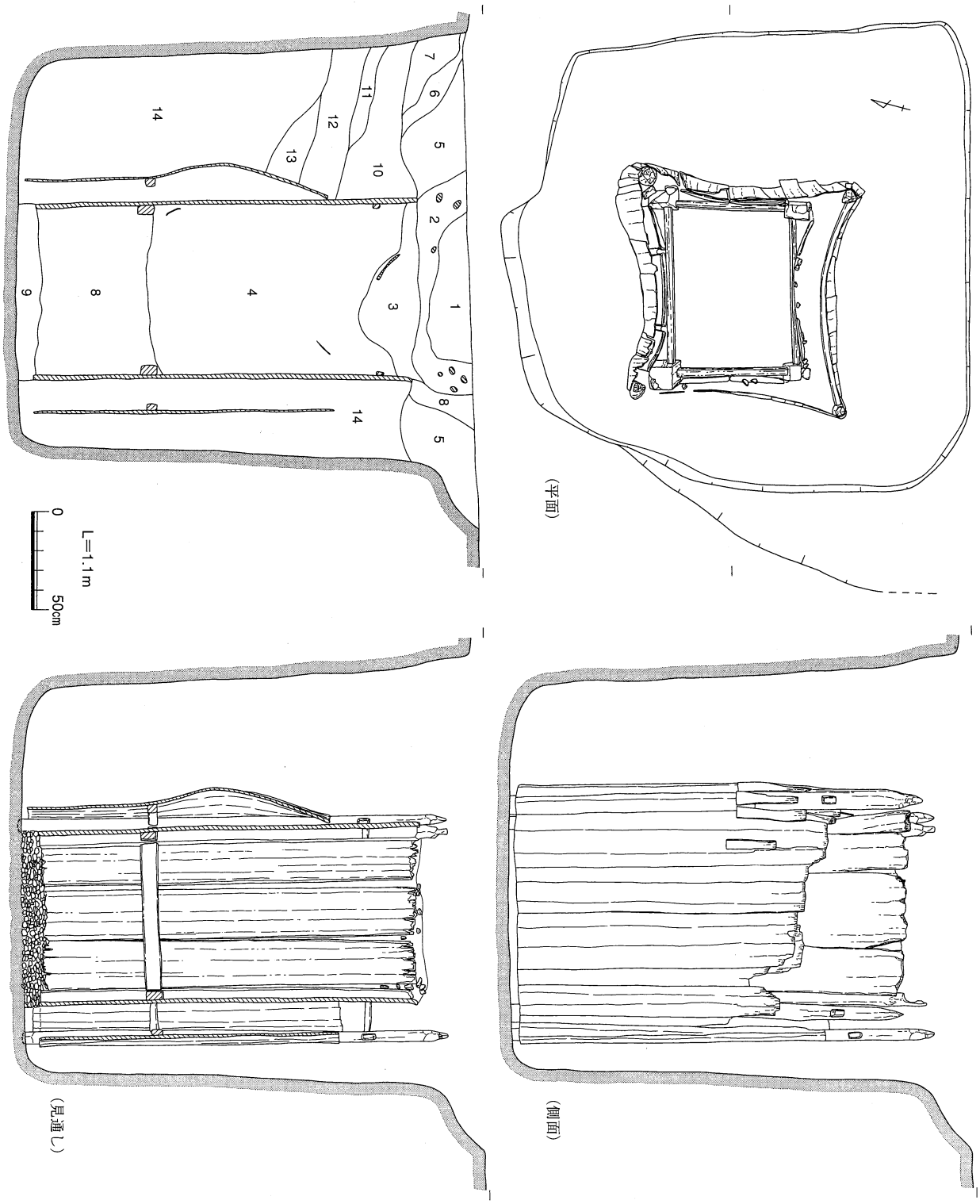



図27　建物１　実測図

### 井戸６（図28～34）

建物１の５ｍ東側で検出された井戸である。遺構検出面は1.1m付近で、当初は一辺が2.3mほどの隅丸方形気味の平面形である土壙と考えていたが、若干掘り下げた位置から井戸枠の一部と考えられる材が出土したため、井戸であることが判明した。ただし、井戸枠の隅柱が0.9×0.8mと、1.2m×1.0mの二重に認められることから、内側の井戸枠を保護するために外側にもう一重枠を設定したのか、それとも、最初に外側の井戸枠であったものを内側の井戸枠に作り替えたのかという２つの可能性が考えられた。調査は内側の井戸枠内埋土の掘り下げからおこなった。埋土は２層で、底には径５cm前後の玉砂利を厚さ10cmほど敷いていた。玉砂利は内側の井戸枠下端にも認められたことから、外側の井戸枠を設置後に砂利を敷いてその上に内側の井戸枠を設置したといえる。井戸枠の構造は、幅22～30cm、長さ180cm前後、厚さ５cmの板材を、東西方向の長辺には３枚、南北方向は短辺に２枚並べ、四隅に一辺が10cm前後の角材を立て、その角材の底から50cmの位置に柄穴をあけ、縦８cm、横５cmほどの角材の先端を凸状に加工して差し込み、横桟を組んでいる。その横桟から108cm上方でも横桟が認められたが、これは用いた材も細く、柄組によって固定もされていなかった。そのため、掘り下げ途中で崩落してしまった。井戸枠の外側にはもう一重枠が施されている。この外側の枠については内側の井戸枠の前身であることも想定されたが、土層断面を検討した結果、外側の枠の裏込めである14層が内側井戸枠の裏込めと分離できず、同じ土層と判断されたことから、外側の枠を固定すると同時に、内側の枠の固定もほぼ同時におこなわれたと考えられた。そのため、外側の枠は内側の井戸枠を保護するために施されたといえる。内側の井戸枠と外側の枠は構造的によく似ているが、外側の材は用いられている材が内側の材と比べるとかなり脆弱であり、板材などにはアンペラ状の薄いものも使用されていた。外側の枠は、東西1.2m、南北1.0～1.2mの方形の範囲に幅10～20cm、長さ150cm前後、厚さ１cm未満の不揃いの大きさの板材を並べ、四隅に径７cm前後の円柱状の材を立て、その材の底辺から60cmの位置に柄穴をあけ、一辺が４




1．灰褐色土
2．淡灰褐色土含小礫
3．暗青灰褐色粘質土
4．暗灰色粘質土
5．灰褐色土
含 黄灰色土塊
6．淡灰白色細砂
7．暗茶灰褐色土
8．淡灰黄色微砂
9．礫層（5㎝程度の小礫）
10．淡青灰色粘質土
11．淡青灰色細砂
12．淡青灰色土
13．灰褐色粘質土
14．淡灰青色粘質土

図28　井戸6　実測図

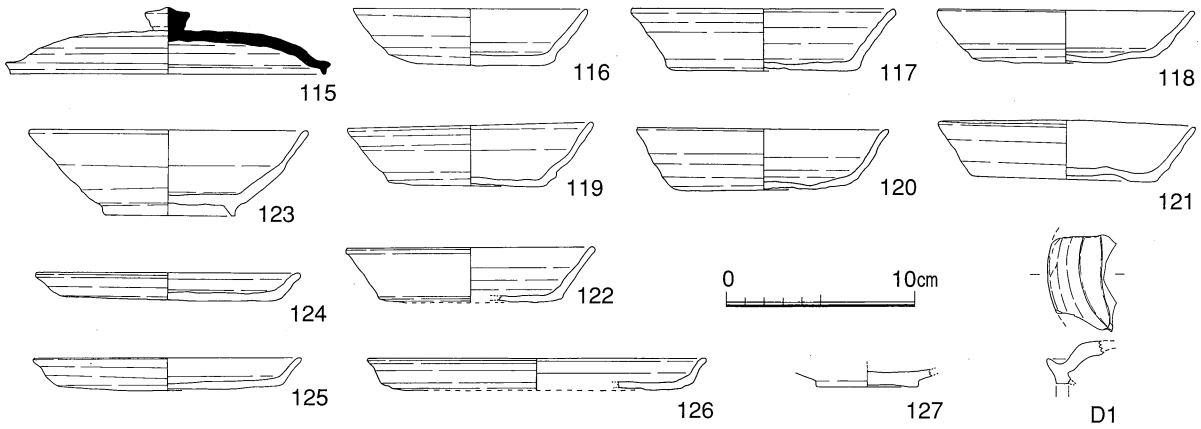



図29　井戸６　出土遺物（１）

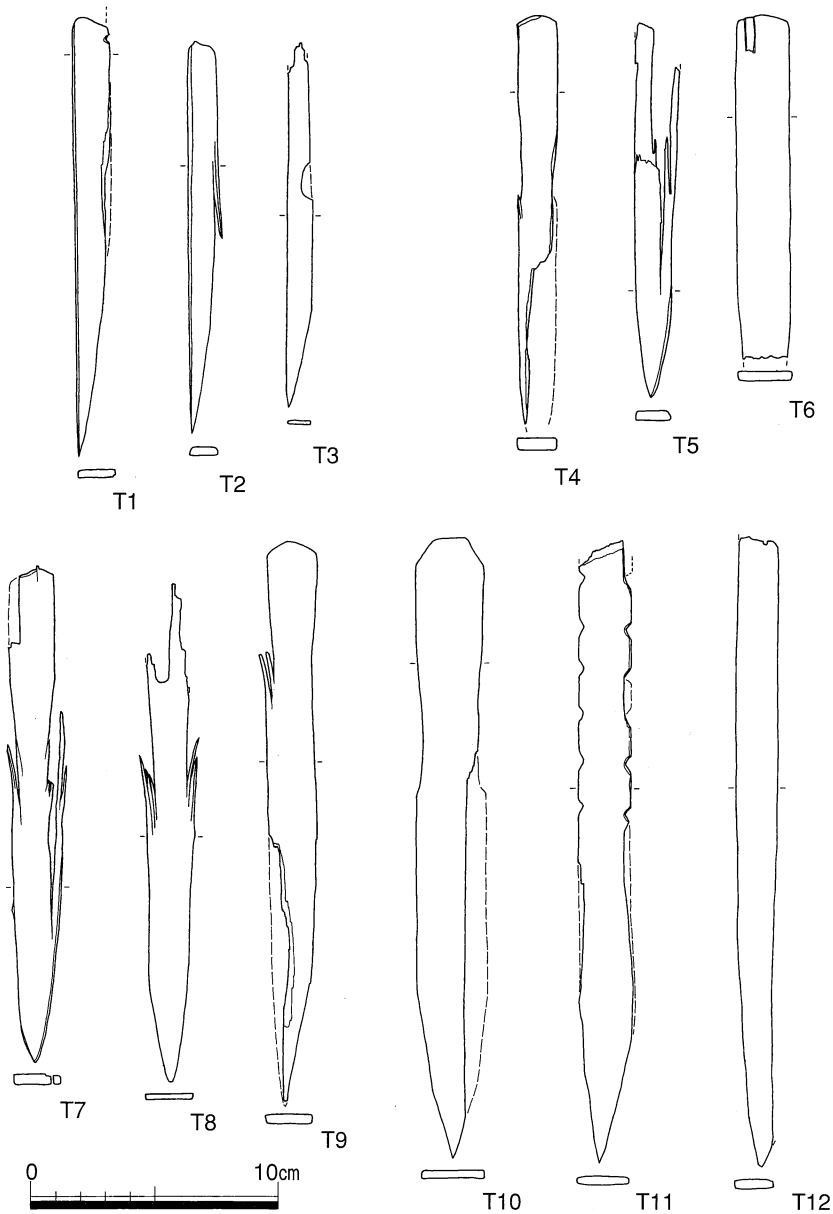



図30　井戸６　出土遺物（２）

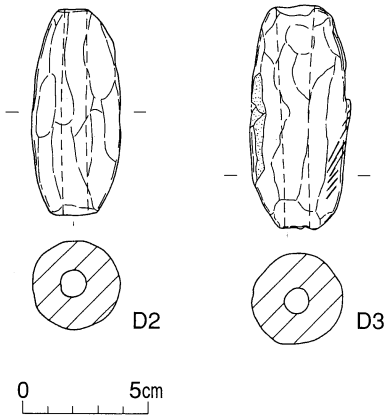



図31　井戸６　出土遺物（３）

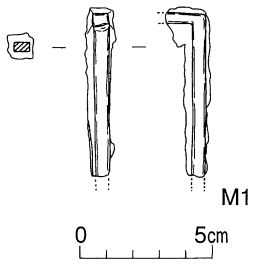



図32　井戸６　出土遺物（４）

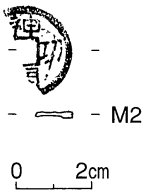



図33　井戸６　出土遺物（５）

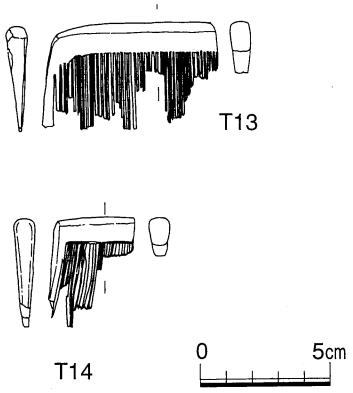



図34　井戸６　出土遺物（６）

cmほどの角材の先端を凸状に加工して差し込み横桟を組んでいる。円柱状の材には横桟から100cm上方の位置にも柄穴が認められる。ここにも横桟が存在していたといえる。

この井戸の掘り方は、東西が2.3m、南北2.2～2.3mの隅丸方形の平面形で、北側に若干張り出し状の部分が認められる。断面形はほぼ垂直の壁面と平坦な底面である。土層観察の結果、外側と内側の井戸枠を設置後、一気に埋めて固定し(14層)、上端については、数層に分けられることから、やや異なる土質で若干丁寧に埋めたようである。井戸枠上面の埋土である２層には、底面に敷かれていた砂利よりも若干大ぶりの礫が比較的多く含まれていた。井戸周囲に礫敷き等が付属していたことをうかがわせる。

遺物は、井戸枠内と井戸掘り方の埋土である14層からのものに分けられる。まず井戸枠内については、３・４・８層の各層から出土した。土師器の杯(116～123)、同皿(124～126)、緑釉陶器椀(127)、斎串(Ｔ１～Ｔ12)、鉄釘(Ｍ１)、土錘(Ｄ２・Ｄ３)、神功開宝(Ｍ２）である。それらは井戸底部にかたまることもなく、各層から出土したことから、埋没過程で投棄されたと考えられ、とくに斎串に関しては井戸廃絶に伴う儀礼で使用されたと考えられる。斎串の(Ｔ１)は欠損し、半載されているが、長さ17.4cm以上、幅1.1cm以上、厚さ0.4cmで、先端は焼けており、一部切込みが認められる。樹種はヒノキ科アスナロ属である。(Ｔ２)は上端が焼かれて欠損し半載されているが、長さ15.5cm以上、幅1.4cm以上、厚さ0.2cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。(Ｔ３)は先端が欠損し、半載もさ

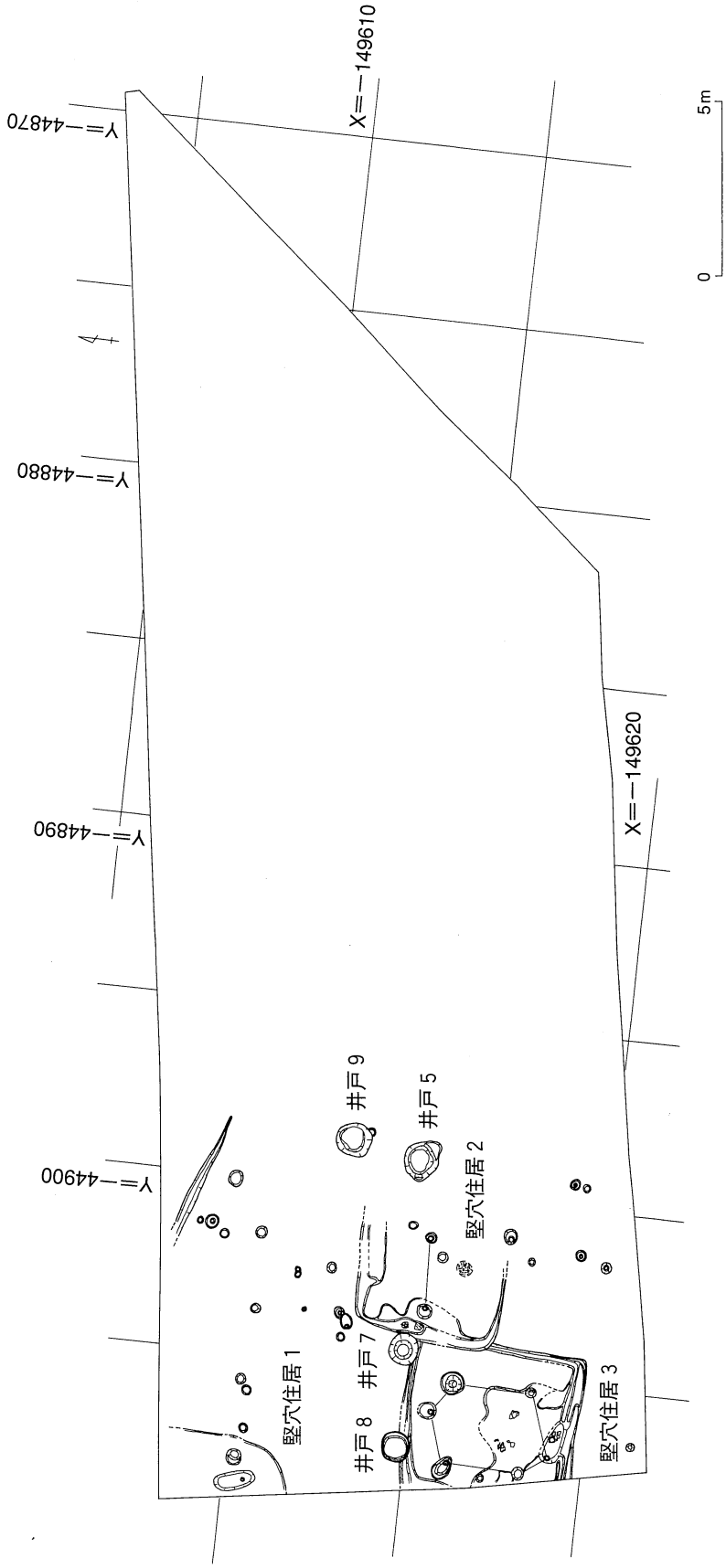



図35　法万寺区　古墳遺構配置図

れているが、長さ14.5cm、幅0.9cm以上、厚さ0.2cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。（Ｔ４）は先端を圭頭状にしており側面には切込みを入れない。欠損しているが、長さ16cm以上、幅1.4cm、厚さ0.4cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。（Ｔ５）は先端を剣先状につくる。上端は欠損のため不明。長さ14.5cm以上、幅1.2m、厚さ0.3cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。（Ｔ６）は先端を圭頭状にしており、側面には切込みを入れない。下端は欠損のため不明。長さ14cm以上、幅2.0cm、厚さ0.3cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。（Ｔ７）は上端を圭頭状にしており、下端を剣先状にしている。上端から4.0cmの所で両側面に切込みを入れている。長さは20.5cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。（Ｔ８）は下端を剣先状にし、下端から15cmのところで両側面に切込みを入れている。長さは19.2cm以上。幅1.6cm、厚さ0.1cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。（Ｔ９）は上端を圭頭状に、下端を剣先状にし、上端から３cmのところで両側に切込みを入れている。長さは22.2cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。（T10）は上端の角を斜めに切り落とし、圭頭状にする。下端は剣先状にしている。長さは24.6cm、幅2.4cm、厚さ0.2cmである。上端から６cmの位置に若干くびれ部を形成している。樹種はヒノキ科アスナロ属である。（T11）は下端を剣先状にし、下端から14cmの所から両側面に左右対称に三角形の切込みを６ヶ所以上入れている。上端は欠損している。長さは25cm以上、幅2.0cm、厚さ0.3cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。（T12）は下端を剣先状にし、上端は欠損している。長さ25cm以上、幅1.5cm、厚さ0.2cmである。樹種はヒノキ科アスナロ属である。

井戸の掘り方埋土である14層からは、須恵器杯蓋（115）と円面硯（Ｄ１）が出土した。掘り方埋土からは、これ以外にも土師器の小片が若干出土しているが、全体的に遺物の出土は極めて少なかった。井戸６の時期は、出土した土師器の杯の法量や、緑釉陶器の年代観から９世紀後半といえる。

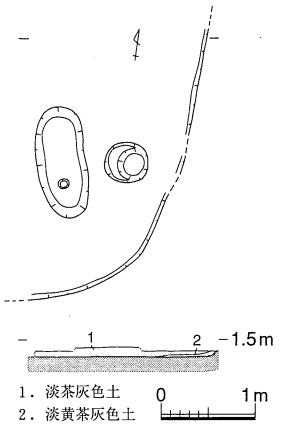



図36　竪穴住居１　実測図

## （４）弥生時代後期・古墳時代前期

### 竪穴住居１（図36）

調査区北西コーナー付近で検出された竪穴住居である。一辺が3.0m以上の隅丸方形の平面形である。微高地の最高所であるため、上面は後世の削平をかなり受けている。遺構検出面は1.4m付近で、埋土は厚いところで10cmほどしかなかった。壁帯溝は検出されず、柱穴と土壙状のピットが検出された。柱穴は径0.4m、深さは床面から0.2m、ピットは長さ1.2m、幅0.3mの長楕円形で、深さは床面から0.1mである。

遺物は土器の小片が若干出土したのみである。

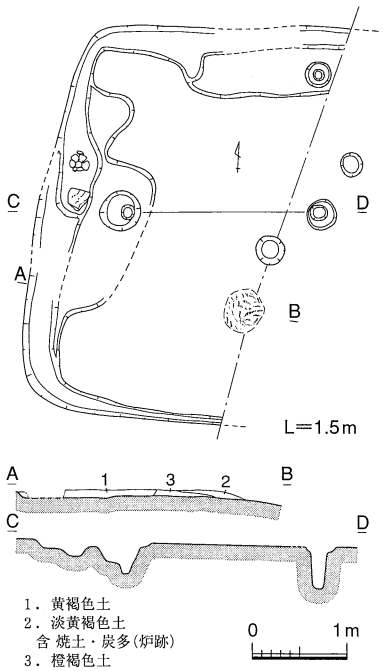



図37　竪穴住居２　実測図

竪穴住居２（図37）

調査区中央西端で検出された竪穴住居である。東半は残存していなかったが、一辺４ｍほどの隅丸方形の平面形といえよう。遺構検出面は1.4m付近で、床面までの深さは検出面から0.1mである。外周には幅0.1～0.4mの不整形な壁帯溝がめぐっている。中央には径0.4m前後の円形の柱穴が２つ並んでおり、柱痕跡から柱の大きさは径0.1m前後といえる。ほかにも３つ柱穴が床面から検出されたが、いずれも深さが0.1m以下と浅く、竪穴住居の柱穴ではないと判断された。住居の中央やや南よりの床面では、径0.4mの範囲が被熱のため赤化している。炭も多く認められることから火所と考えられる。

遺物は西側中央付近の壁帯溝から甕の胴部片が比較的まとまって出土した。図化できなかったが古墳時代前期初頭の時期の特徴を有している。

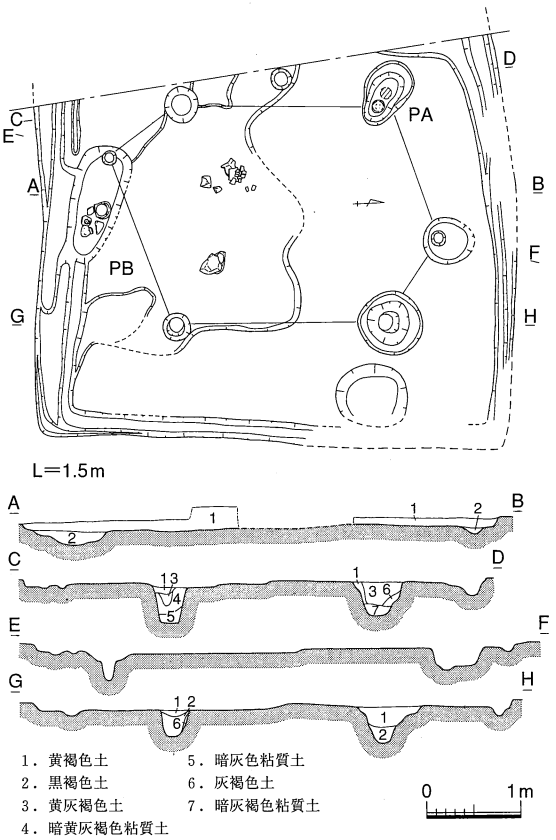



図38　竪穴住居３　実測図

竪穴住居３（図38・39）

調査区南西端部で検出された竪穴住居である。竪穴住居２によって北東コーナー付近の上面が削平されている。西端は調査区外となるが、大半は調査区内となるため一辺５ｍほどの方形の平面形と推測される。遺構検出面は1.4m付近で床面までの深さは検出面から0.1mである。幅0.2mほどの壁帯溝が外周をめぐるが、南側については２本平行していることから、拡張もおこなっているといえる。柱穴は６つ検出され、それぞれがバランスよく並んでいることから、全て竪穴住居３に伴うものと考えられる。しかし拡張していることを考慮すると、当初は４本柱であったものが、拡張時に柱を２本増やして６本柱にした可能性が推測される。柱穴の径は0.2～0.6mとかなり差があるが、深さは床面から大体0.4m前後にまとまる。柱痕跡から柱の径は0.2mほどといえる。

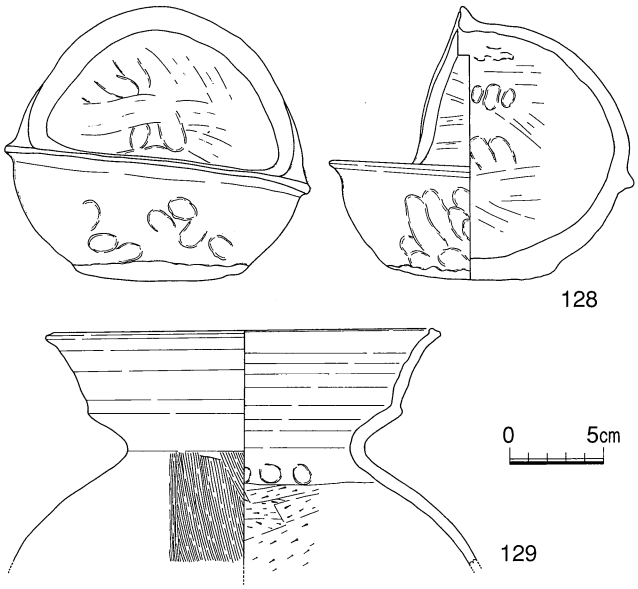



図39　竪穴住居３　出土遺物

遺物は埋土中や床面上からも若干出土したが、いずれも小片であった。ただし、柱穴であるＰＡの掘り方には、手あぶり形土器(128)の完形品が倒置した状態で埋められていた。また柱穴の掘り方、もしくは床面に掘られた浅い土壙状のピットであるＰＢからは、二重口縁の壺形土器(129)が出土した。これらから竪穴住居３は古墳時代前期中葉の時期といえる。

井戸５（図40・41）

調査区中央やや西寄りで検出された井戸である。径1.0mの円形の平面形で、南側と西側に若干段状の平坦面が認められる。遺構検出面は1.1m付近で、深さは検出面から2.0mである。遺物の出土状況や土層の堆積状況から上･下の２層に分けられる。

上層は１～５層で、各層が斜め方向に互層堆積をしており、細かい単位で埋没したことがうかがわれる。遺物は高杯形土器の脚部を打ち欠いたも

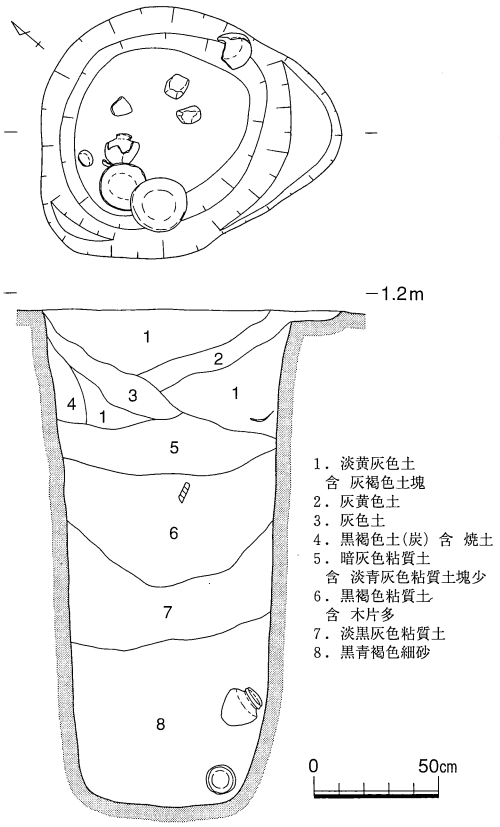



図40　井戸５　実測図

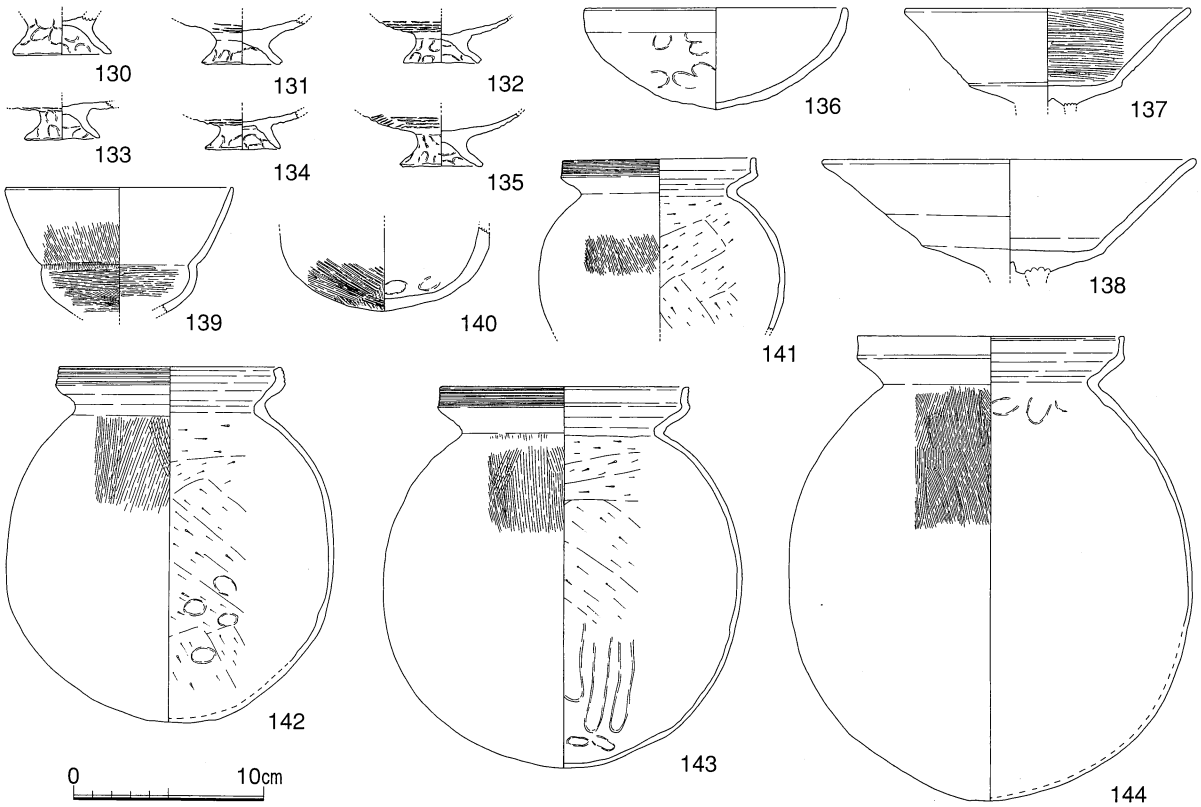



図41　井戸５　出土遺物

の(137・138)、鉢形土器(136)、製塩土器(130～135)で、高杯形土器と鉢形土器はほぼ同じレベルで検出されたことから、意識的に埋められた可能性が高い。

下層は6～8層で、6層もしくは7層から小型丸底壺形土器(139)、底部(140)、甕形土器(141)が出土したが、いずれも破片である。8層からはほぼ完形の甕形土器が3個体(142～144)出土した。

各層から出土した土器には明確な時期差は認められず、いずれも古墳時代前期中葉の時期と考えられる。

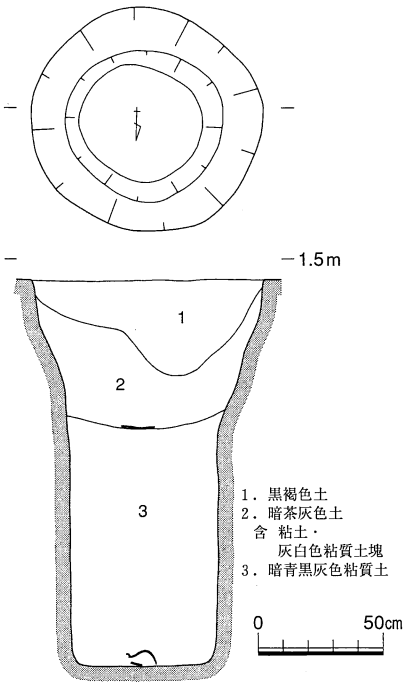



図42　井戸7　実測図

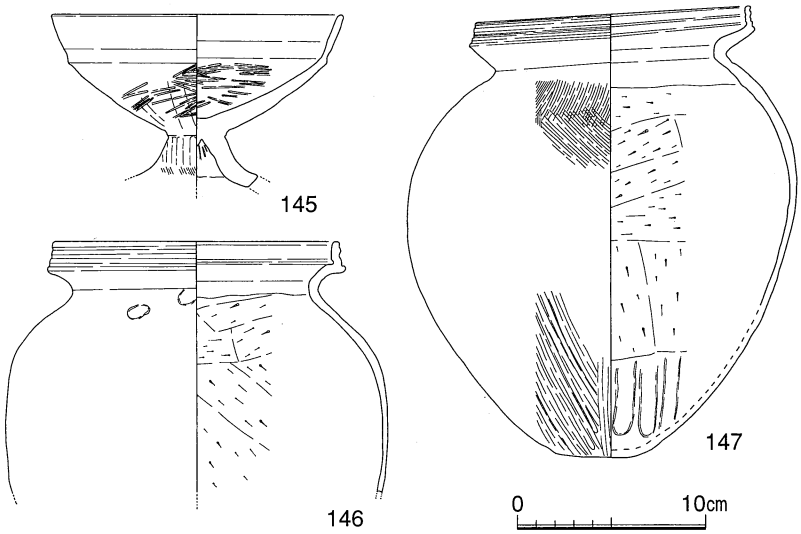



図43　井戸7　出土遺物

井戸7（図42・43）

竪穴住居2と竪穴住居3の間で検出された井戸である。ただし、この井戸と両住居には少なからず時期差があり、両者は無関係といえる。径0.9mの円形の平面形である。遺構検出面は1.4m付近で、検出面から−0.5mの所までやや窄まり、径は約0.6mとなる。そしてそのまま垂直に床面まで下降する。底までの深さは検出面から1.5mである。埋土は3層で1・2層が上層、3層が下層として捉えた。上層は井戸5の上層ほどではないが、やや細かい単位で埋まっており、土器片もその中に含まれている。下層は井戸底までは遺物が全く認められなかったが、井戸中央の底面で完形の甕形土器(147)、底部欠損の甕形土器(146)、脚端部欠損の高杯形土器(145)がまとまって出土した。これらから井戸7は弥生時代後期末の時期といえる。

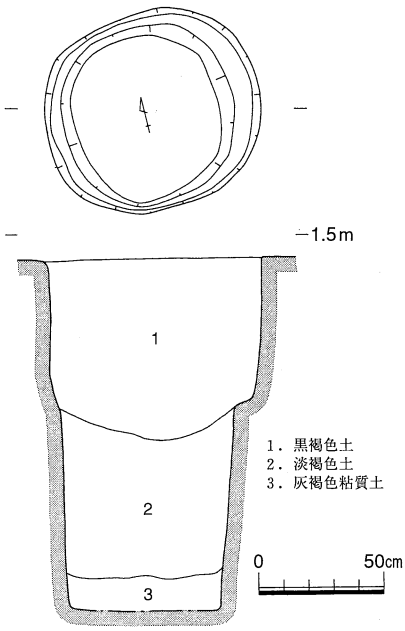



図44　井戸8　実測図

井戸８（図44）

調査区中央西端で検出された井戸で、竪穴住居３の北側を削平している。径0.8mの円形の平面形を呈する。遺構検出面は1.4m付近で、検出面から0.6m下がった位置で若干窄まり、径が0.7mほどになる。そのまま垂直に近い角度で下降する。検出面から1.4mの位置で周囲が崩落し、湧水も激しかったため、それ以上の掘り下げは中止した。崩落直前に一部掘り下げて、そこより約10cm弱のところで基盤層を確認した。おそらく、ほとんど井戸底付近までは掘り上げていると考えられる。

遺物は土器の小片が出土しただけであったが、それは古墳時代前期の範疇に含まれる甕形土器の胴部片で、この井戸も該期に相当すると思われる。

井戸９（図45・46）

調査区中央やや西寄りで検出された井戸である。一見井戸５と並んでいるようにみえるが、両井戸には明確な時期差がある。長径1.1m、短径0.9mの長楕円形気味の平

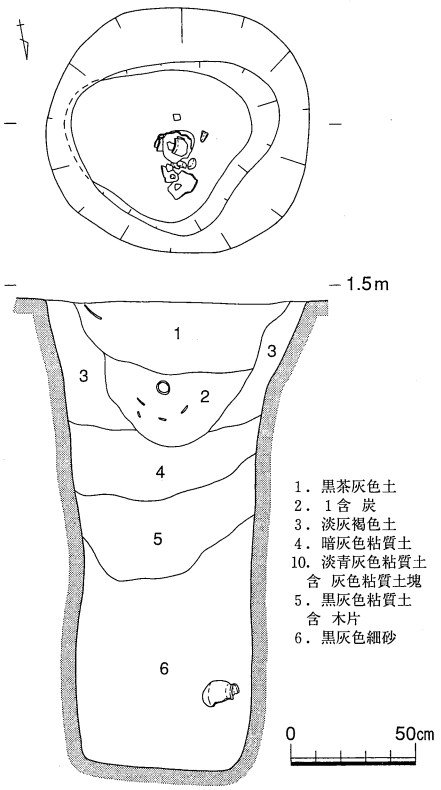



図45　井戸９　実測図

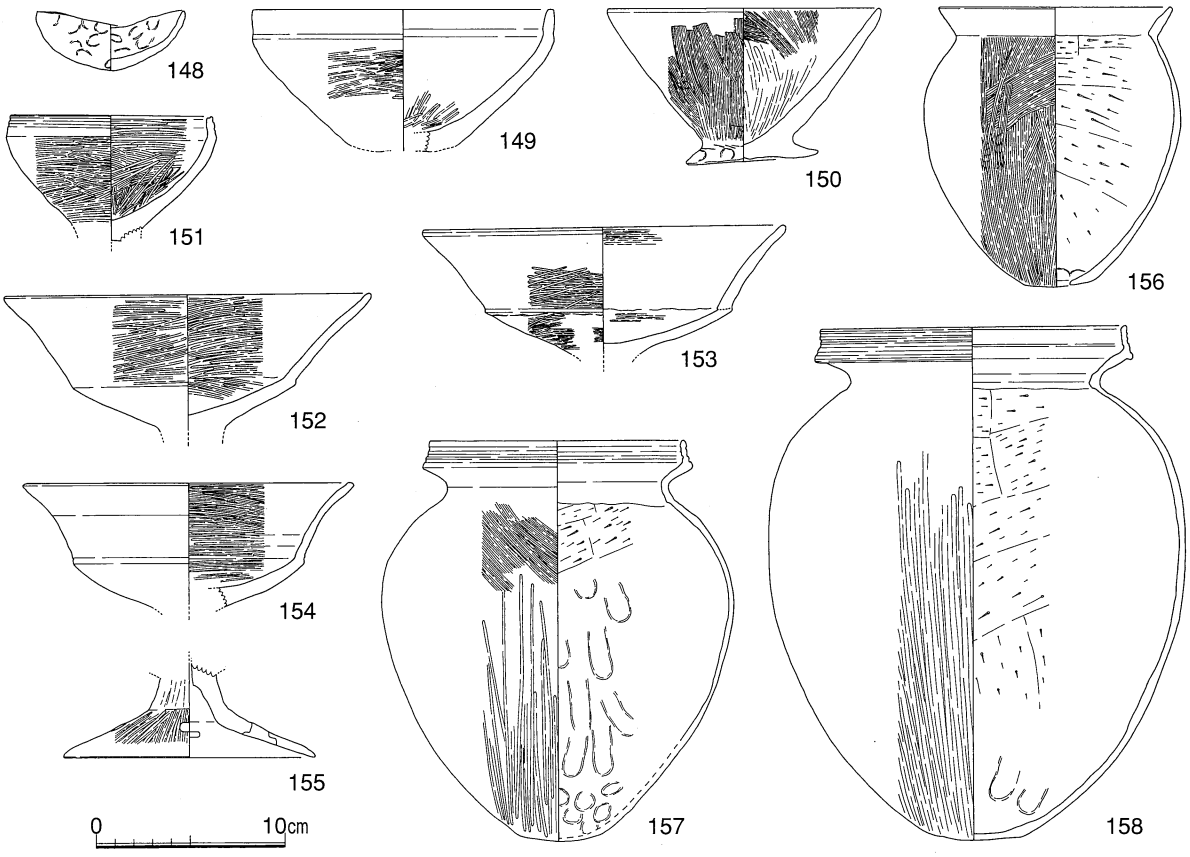
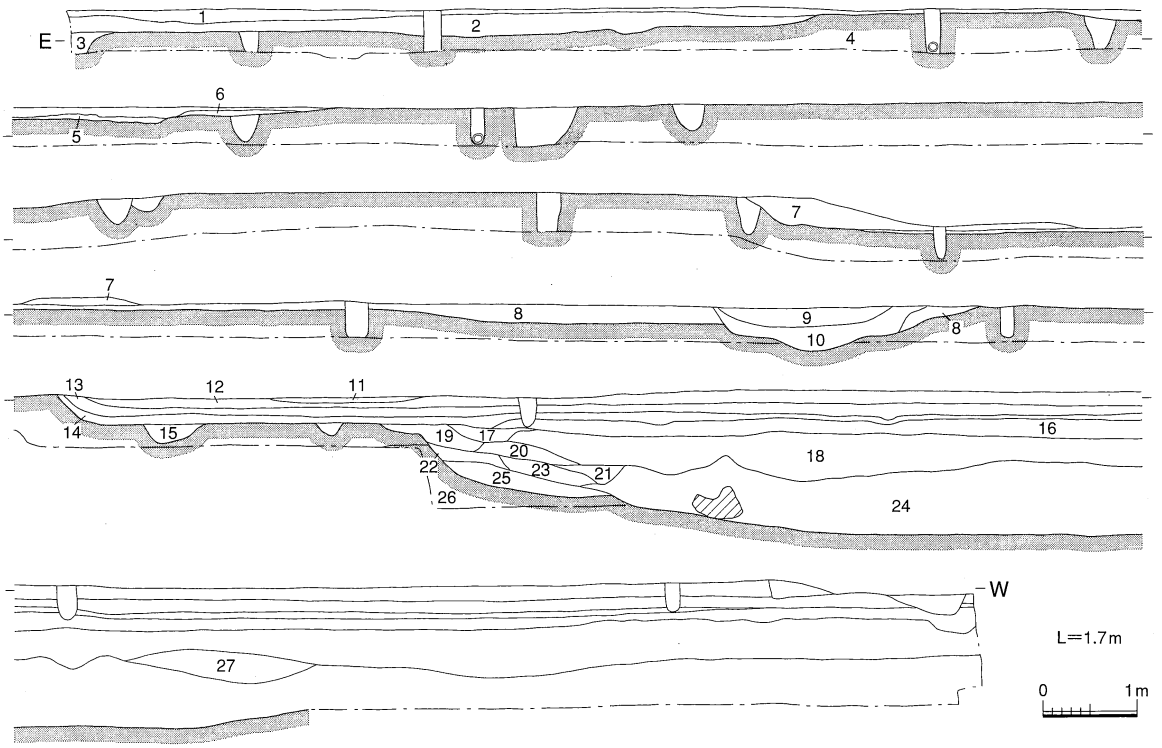



図46　井戸９　出土遺物

面形を呈する。遺構検出面は1.1m付近で、検出面から0.5mまでは若干窄まりながら下降し、そこから径0.7～0.8mのやや不整形な平面形となるが、そのまま垂直に降って井戸底になる。底までの深さは検出面から1.85mである。遺物の出土状況と土層観察から、1・2層を上層、3～5層を中層、6層を下層に大別できた。上層は井戸埋没の最終過程で生じた窪みといえ、炭とともに土器の小片が若干出土した。土器は廃棄、もしくは混入した性格が強いのではないかと思われる。中層にはほとんど遺物は含まれていなかった。下層と井戸底付近からは土器がまとまって出土した。完形品が含まれていることからも、意識的に投棄されたと考えられる。図化できたのは下層から出土したものばかりで、完形の鉢形土器（148・150）、ほぼ完形の鉢形土器（149）、脚部が欠損した高杯形土器（151～154）、高杯形土器の脚部（155）、完形の甕形土器（156～158）である。これらの土器から井戸9は弥生時代後期末の時期といえる。

## Ⅲ　大道西Ｂ区

現法万寺川の東岸に相当する。法万寺川に近い部分は、旧法万寺川の痕跡と考えられる水田区画が認められ、この部分は周囲の水田と比べると一段低くなっている。層序関係は比較的単純で、現水田耕土直下は微高地基盤層かもしくは河道堆積層となっている。ただし調査区の東側については、微高地を掘り下げた水田層（1・2・5・6層）が形成されており、近世前後の時期といえる。




1．淡灰色土
2．淡橙褐色土
3．暗褐色細砂
4．淡黄灰色土（基盤）
5．淡灰褐色土
6．淡褐色土
7．暗灰色土
8．淡灰黄色細砂（P205）
9．淡灰色細砂（P205）
10．淡灰褐色細砂（P205）
11．灰色土（近世水田）
12．淡灰色土（近世水田）
13．淡灰褐色土（中・近世水田）
14．灰褐色土（中世水田）
15．灰褐色土（中世水田の溝）
16．淡灰白色粘質土（河道最終埋土）
17．黄茶灰色土
18．暗青灰色粘質土
19．暗黒茶灰色土（炭混じり）
20．暗青灰色細砂
21．青灰色細砂
22．青灰色シルト　含19層塊
23．灰青色土
24．暗灰色粘質細砂
25．青灰褐色シルト
26．青黒灰色粘質土（基盤）
27．灰色細砂

断面図　位置

図47　大道西Ｂ区　断面図

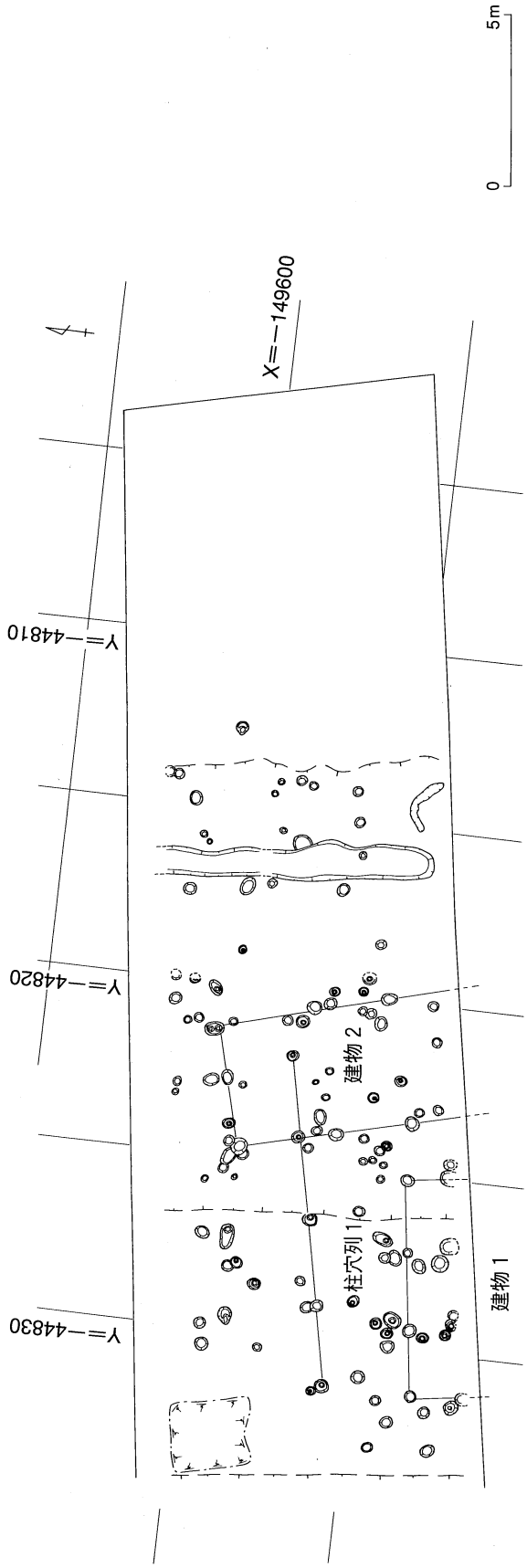



図48　大道西Ｂ区　中世遺構配置図

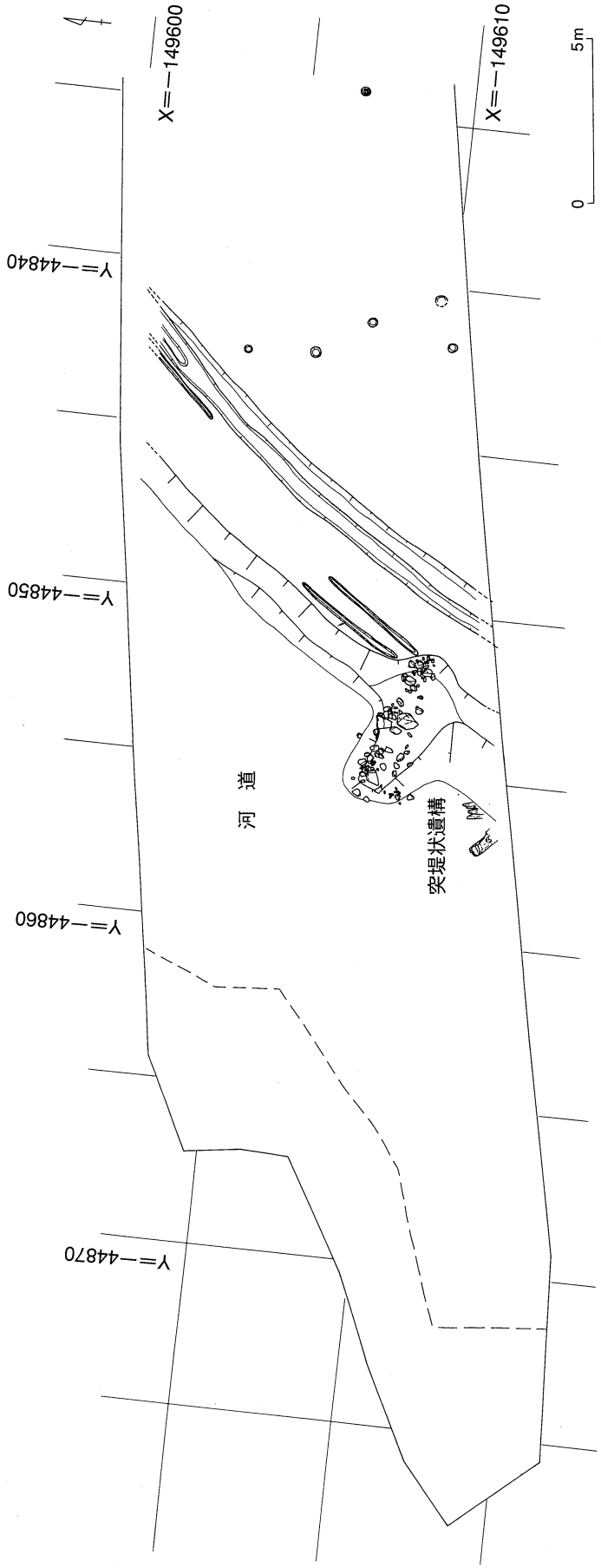



図49　大道西Ｂ区西半部　中世遺構配置図

## （1）中世

### 建物１（図50）

調査区東よりの南端で検出された側柱建物である。大半が調査区外へ出るため、全形は不明だが、桁行３間、梁間２間以上の柱構成と推測される。遺構検出面は、1.7m前後で、柱穴の径は0.2m前後、深さは検出面から0.15m前後である。柱穴埋土から微細な土師質土器片が出土した。

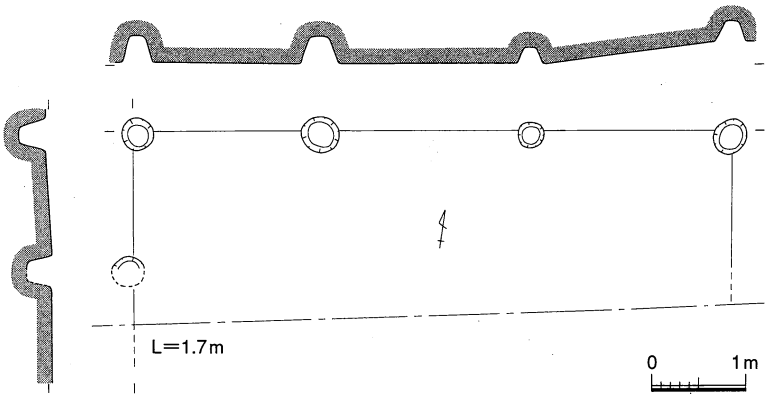



図50　建物１　実測図

### 建物２（図51）

調査区東よりの中央付近で検出された側柱建物である。南端が調査区外へ出るため、全形は不明であるが、桁行３間以上、梁間２間の柱構成と推測される。遺構検出面は1.5m前後で、柱穴の径は0.4m前後、深さは0.4～0.55mである。北東コーナー付近の柱穴には柱痕跡が２つあり、埋土掘り下げ時点でも２つの柱穴の切り合いは確認されなかったことから、添え柱である可能性が高い。柱の径は0.1mである。遺物は柱穴埋土から微細な土師質土器片が出土した。

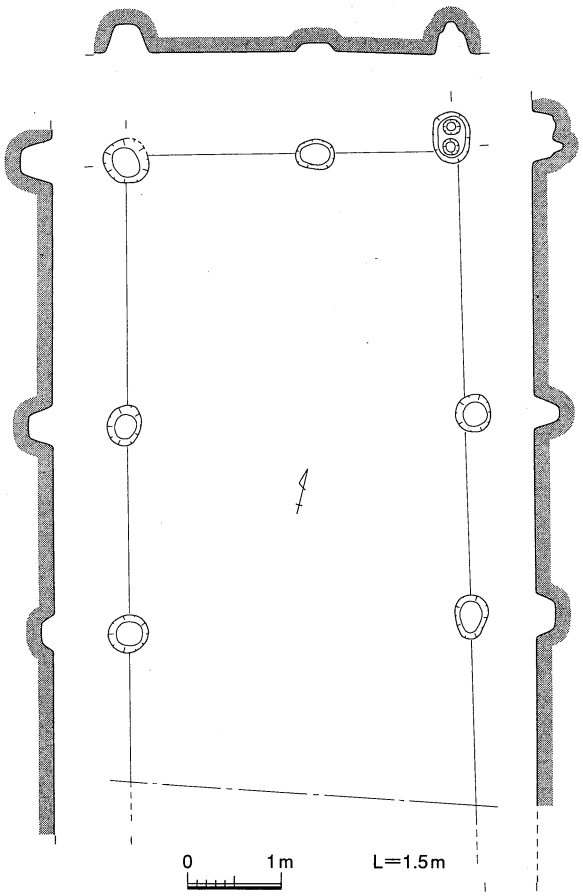



図51　建物２　実測図

### 柱穴列１（図52）

調査区東よりの中央付近で検出された柱穴列である。囲繞するのではなく、柱穴は５つ並んだもので、目隠し塀的な性格が推測される。南側に近接する建物との関係もうかがわれる。しかし両者にはわずかではあるが、軸方向にズレがある。遺構検出面は1.6m付近で、柱穴の径は0.2～0.4m前後、深さは検出面から0.2～0.3mである。柱穴埋土から微細な土師質土器片が出土した。

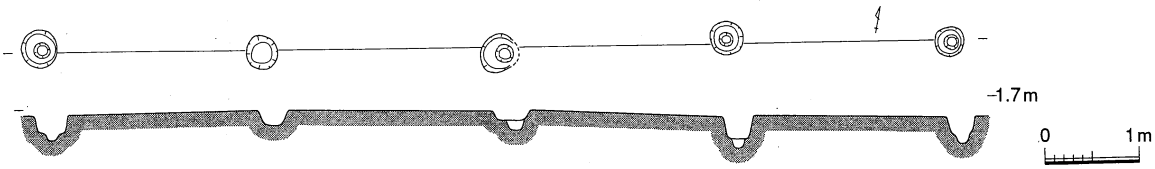



図52　柱穴列１　実測図

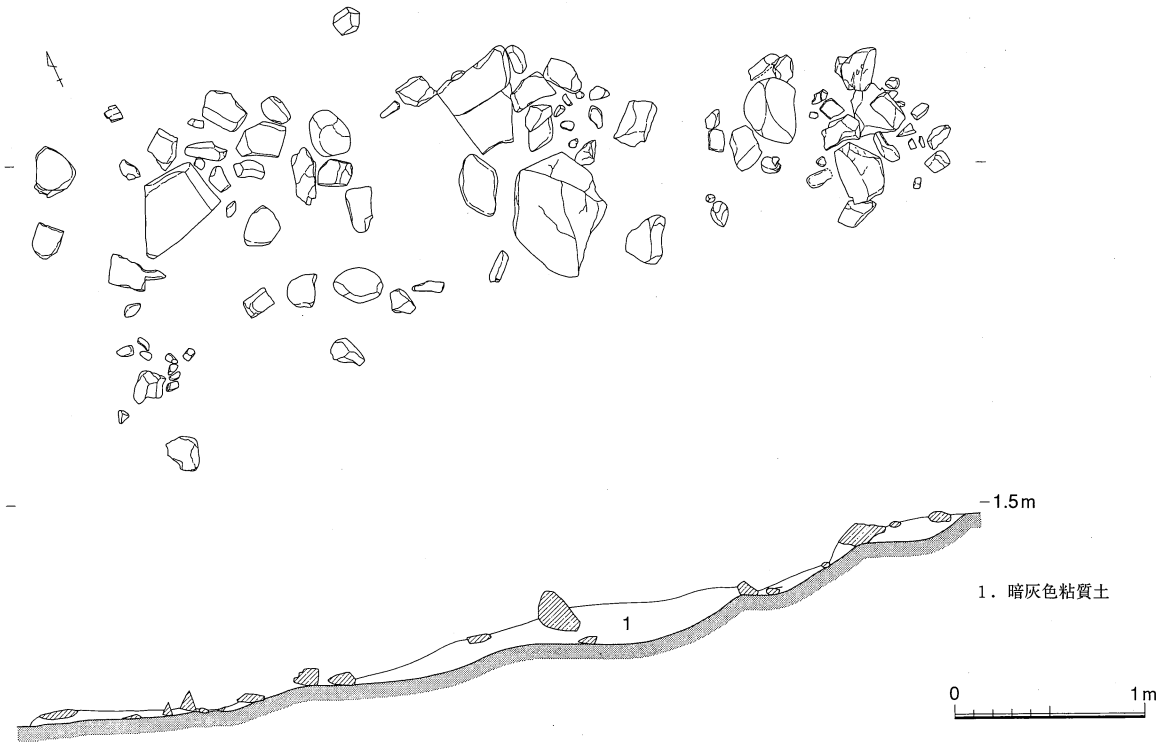



図53　突堤状遺構　実測図

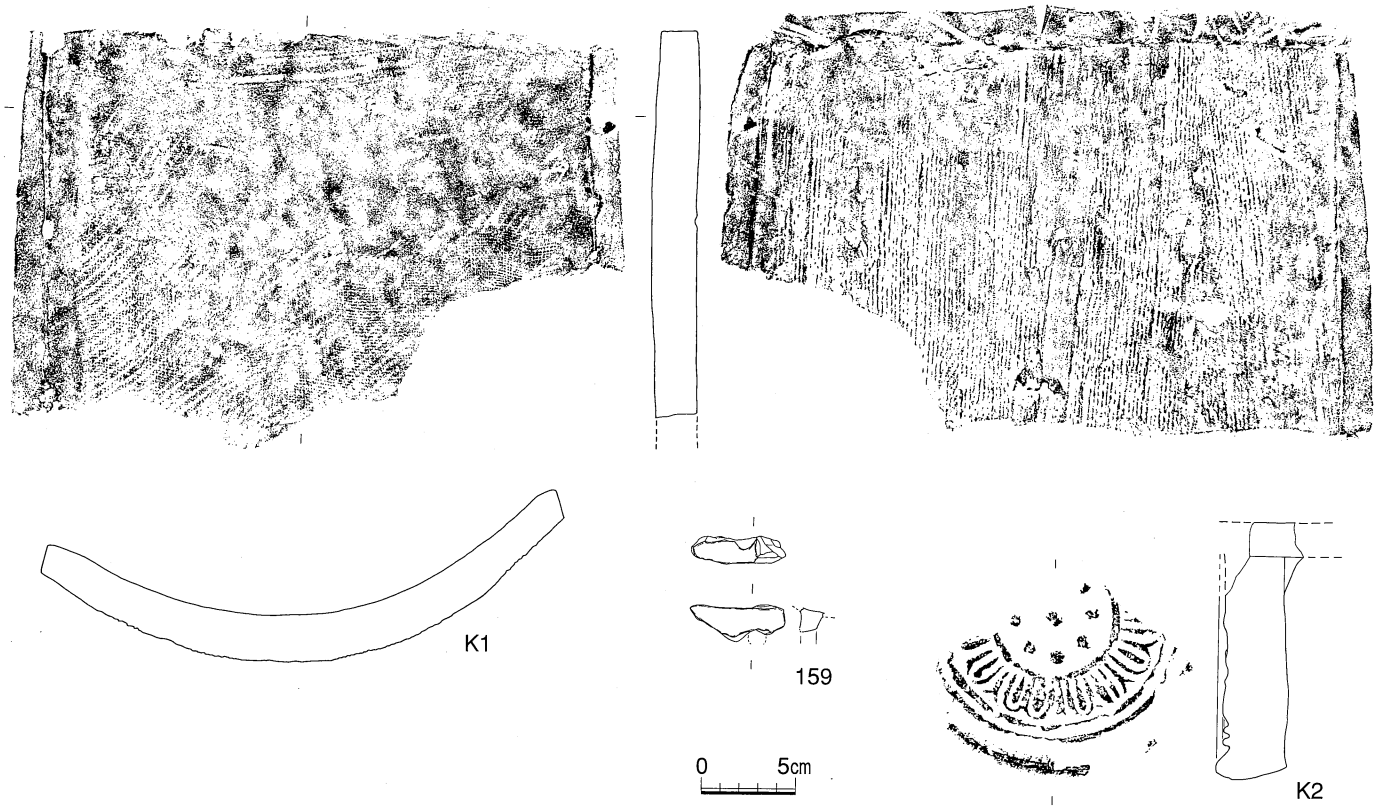



図54　河道　出土遺物

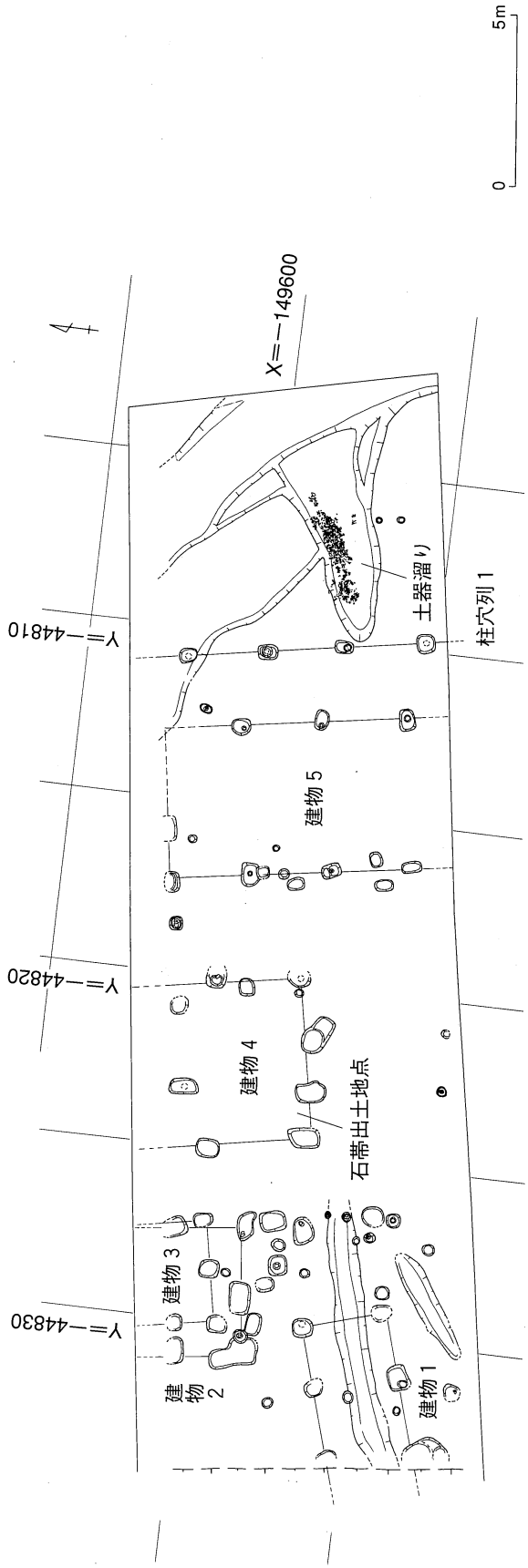



図55　大道西Ｂ区　古代遺構配置図

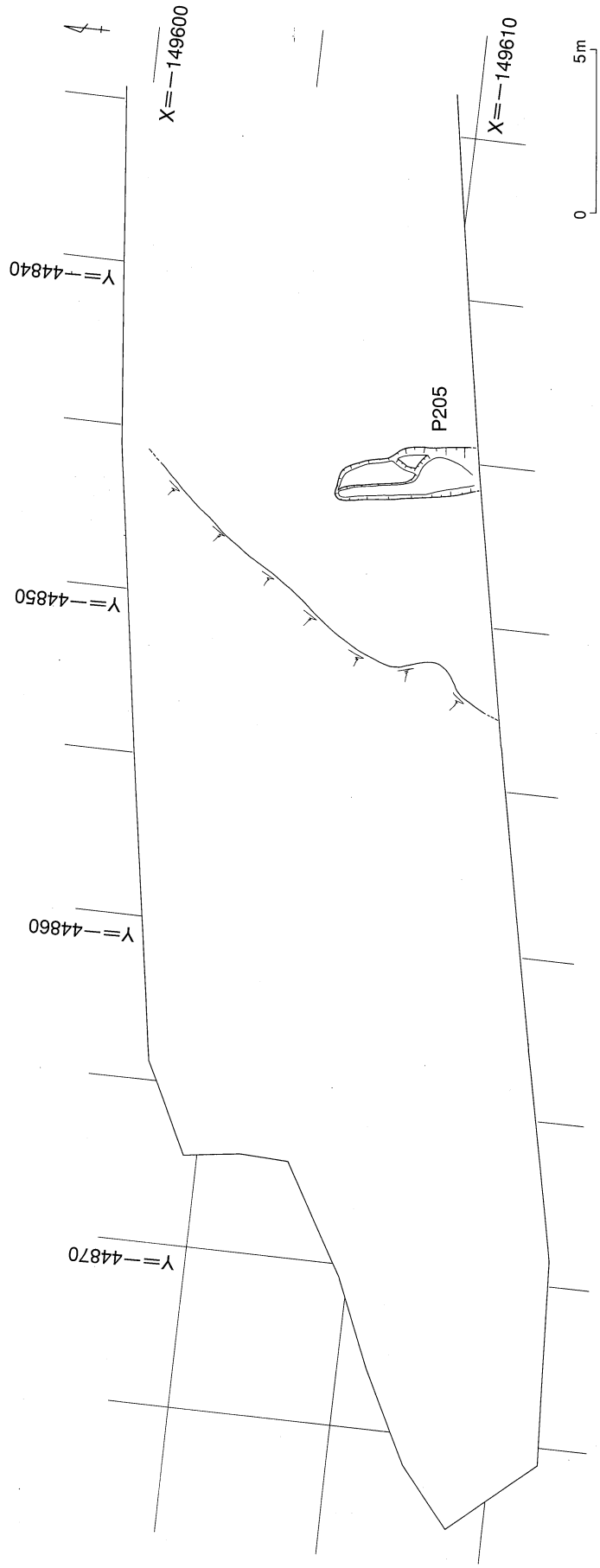



図56　大道西Ｂ区西半部　古代遺構配置図

河道（図49・53・54）

法万寺調査区で検出された旧法万寺川の東岸である。そうすると、旧法万寺川の川幅は、この部分で約40mほどであったということになる。東岸については西岸と異なり、上層・下層の区別が明確でなかった。また遺物の出土も、西岸と比べると極端に少なかった。旧法万寺川の両岸には中世の遺構が形成された微高地が存在するが、東岸の微高地は基盤層自体も砂質が顕著であるため、脆弱な微高地という印象も強く、西側と比べると遺構・遺物の量も少ない。東側と西側の河道内堆積上層の違いも、それらを反映させているように思われる。また大型の土錘についても、東岸からは全く出土しなかった。それは土錘の使用が西岸の微高地を中心におこなわれたことを示している。調査区南端と東岸の接点付近では、礫を並べた突堤が認められる。突堤は幅２m、長さ５mの範囲に大小様々な大きさの角礫や円礫を並べ、その両脇の基盤層を削りだして、結果として幅３m、長さ５mの突堤をつくり出している。また礫を固定するために若干の盛り土をおこなっている。突堤の存在する部分は、北東から南流してくる法万寺川が南東へ急激に流路方向を変更している部分であることから、その南側の微高地部分は常に流れによる浸食を受ける。そのため突堤を築いて浸食を防ごうとしたのであろう。

遺物は、河道埋土から土器の小片が出土した他は、突堤の礫の間から出土した。土器は大半が13世紀前半の土師質土器であったが、9世紀代の京都産の緑釉陶器で香炉の脚(159)が一点含まれていた。また、一枚つくりで凸面に縄目タタキのある平瓦(Ｋ１)や、軒丸瓦(Ｋ２)などの古代の瓦も出土した。ただし、瓦の出土は極めて数が少ない。

## （1）古代

建物１（図57）

調査区中央やや南寄りで検出された側柱建物である。西側は現況の水田面でも20cm以上の段差があり、おそらく旧法万寺川に対する水田開発の際に大きく切り崩されたために生じた段差であろう。その際に建物１の西側は削平されたといえる。遺構検出面は1.3m付近で、一辺、もしくは径0.5～0.8m前後の方形、あるいは円形の平面形を呈する柱穴である。柱の大きさは柱痕跡から径0.2m前後であ

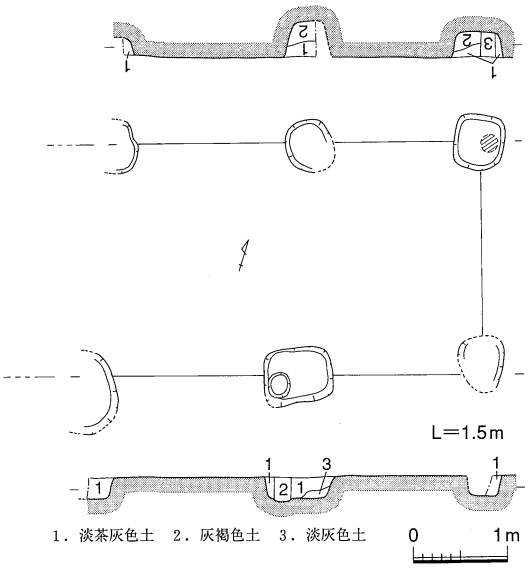



図57　建物１　実測図

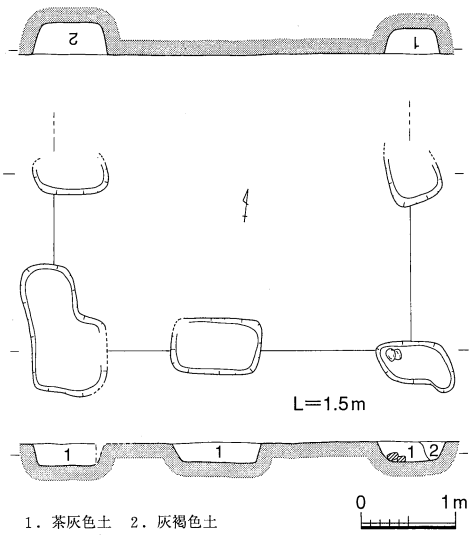



図58　建物２　実測図

る。棟方向はW-10°-Sである。柱穴埋土から微細な土師器片と須恵器片が出土した。土師器は回転台を使用しており、9世紀前後の時期が推測される。

建物2（図58）

調査区中央北端で検出された側柱建物である。北側は調査区外へ出るため、全形は不明である。現況で桁行2間、梁間2間の柱構成といえる。遺構検出面は1.4m前後、一辺1～1.5mのやや不整形な部分もあるが、全体として方形の平面形を呈する柱穴である。柱の大きさは柱痕跡が明確でないため不明だが、南東コーナー付近の柱穴掘り方には円礫があり、柱を支えるための添え石とも考えられる。棟方向はN-5°-Eである。柱穴埋土から須恵器と土師器の小片が出土したが、土師器には回転を用いたものがあり、9世紀～10世紀の時期が推測される。

建物3（図59）

建物2と重複して検出された側柱建物である。現況で桁行き2間以上、梁間2間の柱構成である。遺構検出面は1.4m前後、一辺0.5m前後の方形を呈する柱穴である。棟方向はN-6°-Eである。柱穴埋土から土師器の小片が出土した。

建物4（図60・61）

建物3と重なる位置関係で検出された側柱建物である。北側は調査区外へ出るため全形は不明である。現況で桁行2間以上、梁間3間の柱構成といえる。遺構検出面は1.5m前後、一辺0.4～0.5mの方形の平面形を呈する掘り方である。柱の大きさは柱痕跡から径0.2m前後といえる。棟方向はN-8°-Eである。柱穴埋土から須恵器と土師器の小片が出土したが、土師器には回転台を用いたものがあり、9世紀前後の時期が推測される。この建物に直接伴うかどうかはわからないが、南西コーナー付近の柱穴精査時に石帯が一点出土した（S1）。

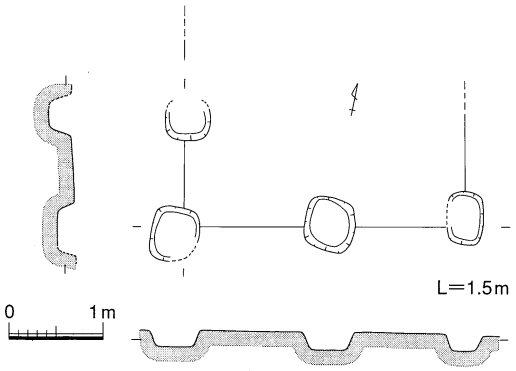



図59　建物3　実測図

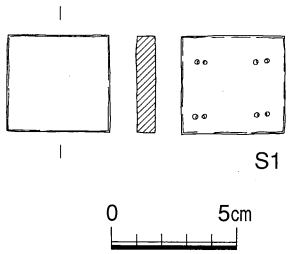



図61　建物4付近　出土遺物

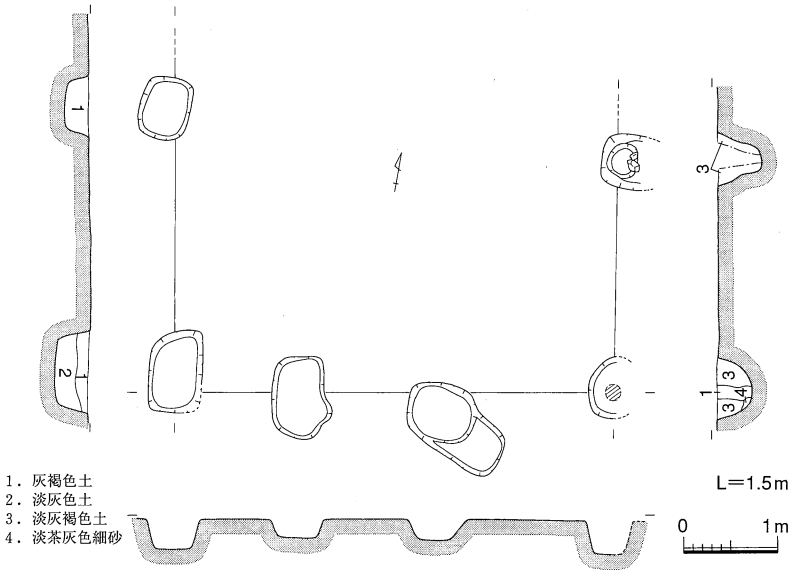



図60　建物4　実測図

建物５（図62）

調査区東端付近で検出された側柱建物である。南側は調査区外へ出て、北端も若干調査区外へ出るため、全形は不明である。現況で桁行３間以上、梁間２間以上の柱構成といえる。遺構検出面は1.2m前後である。この建物の東側は微高地端部となっており、傾斜変換点付近に位置する建物といえる。柱穴は、径もしくは一辺0.6m前後の方形あるいは円形の平面形を呈する掘り方である。柱の大きさは柱痕跡から径0.2m前後といえる。棟方向はN-11°-Wである。柱穴埋土から須恵器と土師器の小片が出土したが、土師器は丹塗りで回転台を用いたものがあることから、９世紀の時期が推測される。

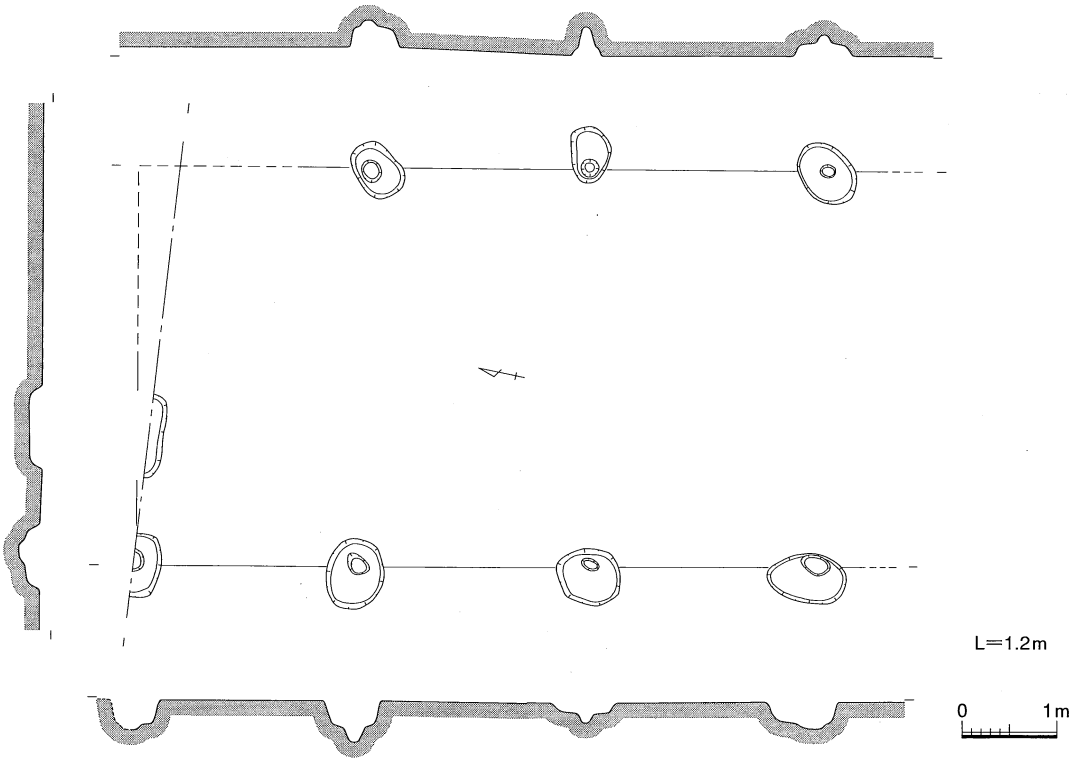



図62　建物５　実測図

柱穴列１（図63）

調査区東端で検出された柱穴列で、建物５の東２mの位置で建物５とほぼ平行して並んでいる。調査区の範囲に限定されて柱穴列の両端を明確にすることはできないが、建物５に伴う目隠し塀である可能性が推測される。遺構検出面は0.9m付近で、柱穴の掘り方は一辺0.5m前後の方形の平面形である。柱の大きさは柱痕跡から径0.1m前後である。

遺物は全く出土しなかったが、建物との位置関係から９世紀前後の時期が推測される。

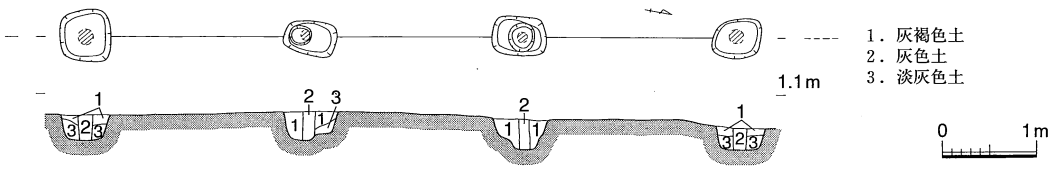



図63　柱穴列１　実測図

土器溜まり（図64・65）

調査区東端で検出された土器溜まりである。建物５や柱穴列１の東側は、微高地端部となるため急激に地形が低くなっている。また、その斜面にはいくつかの凹凸が認められ、人為的な溝であることを想定して精査したが、明確でなかった。全体としては微高地端部の自然地形である可能性が高い。底から建物５に向かって幅３ｍ、長さ６ｍの導水状のおちが伸びており、その最終埋土に土器溜まりが形成されている。精査したが遺構の掘り方等は検出されなかった。おそらく、斜面堆積の凹凸、特に微高地高所から低位部への自然発生的な流路状の窪みに投棄されたものと推測される。土器溜まりの範囲は長さ3.5m、幅0.5mで、東端が若干レベル高が低いものの、全体的には極めて緩やかな傾斜であり、この土器溜まりが形成されていった時点では微高地端部はかなり埋没していたといえる。

遺構検出面は1.5m付近で、土器溜まりの厚さは５㎝前後である。土器の堆積が単層であることや、平面的にみても連続していることから、長期間にわたって投棄されたというのではなさそうである。

遺物は土師器の杯・皿が主体で、若干、甕の胴部片や緑釉陶器、須恵器が含まれる。土師器の食膳

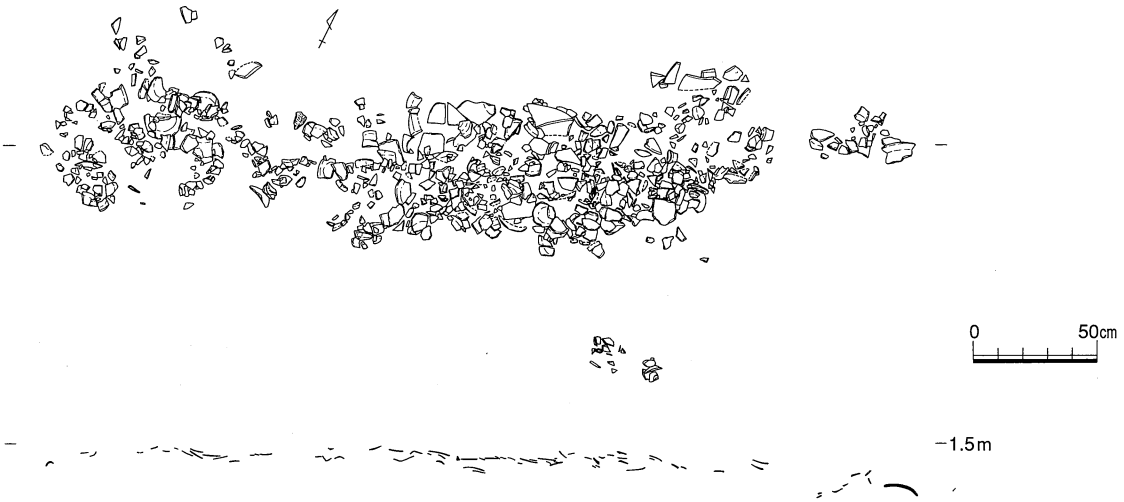



図64　大道西Ｂ地区　土器溜まり　実測図

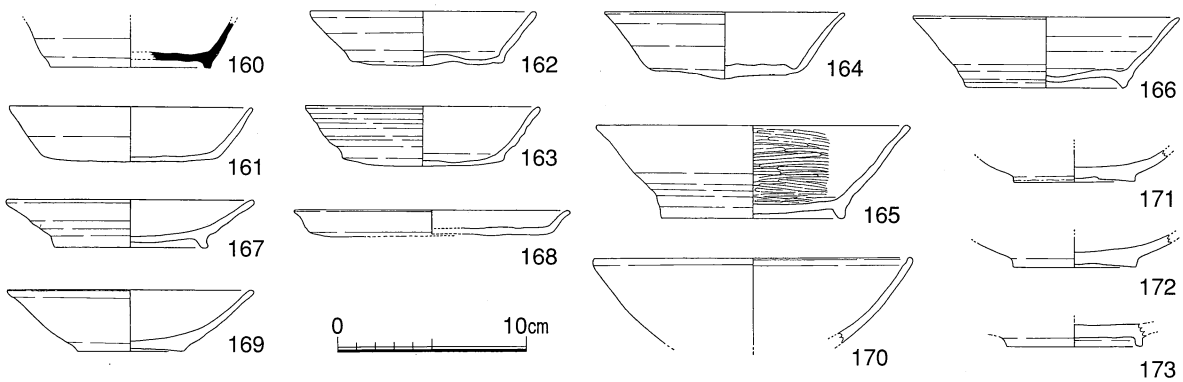



図65　土器溜まり　出土遺物

具主体の土器溜まりといえる。土師器は極めて薄手であり、残存状態が脆弱となっていた。そのため、同一個体でも断面の摩滅などのために接合が困難なものがかなりあった。この時期の土師器の食膳具は、法量が時期を決定するための大きな手掛かりとなるため、図化は口径ないし底径が１/２以上復元されるものだけに限定した。

土師器杯Ａ(161～164)は口径12.0～12.8、器高7.6～9.3cm、土師器杯Ｂ(165・166)は口径14～16.6cm、器高8.4～9.6cm、土師器皿Ａ(168)は口径14.4cm、器高1.2cm、土師器皿Ｂ(167)は口径13.0cm、器高2.5cmである。須恵器杯Ｂ(160)も一点だけ含まれていた。緑釉陶器は京都産(169～172)が主体で、一点だけ周防産(173)が含まれていた。これらの土器群は９世紀後半である。

Ｐ205（図66）

調査区西半の南側で、検出された土壙である。周囲には古代の遺構が全く検出されなかったが、建物1の西側には、現況の水田面でも0.2m以上の段差があり、建物１西半の柱穴は完全に削平されている。調査区西半には、水田開発に伴うかなりの規模の微高地の削平がおこなわれたといえる。したがってＰ205周囲に古代の遺構が認められないことについても、本来から同じ状況であったとはいえない。Ｐ205は長さが4.3m以上、幅が1.5mの長方形を呈する平面形をし、底面には凹凸が認められる。遺構検出面は1.0m付近で、最深部までの深さは検出面から0.3m前後である。ただし、現況は上面がかなり削平された結果の可能性が高く、本来は溝状の遺構であったかもしれない。そうすると、Ｐ205の長軸方向は柱穴列１と平行であり、両遺構とも微高地中央部に位置する古代の建物群の両端にあることから、これら建物群を囲繞する施設の一部である可能性も考えられなくもない。もしそうだとするならば、この区画は東西幅が35mということになる。Ｐ205からは微細な土師器片が出土しただけであるが、丹塗りを施した回転台成形の土師器片が認められることから、９世紀前後の時期と考えられる。

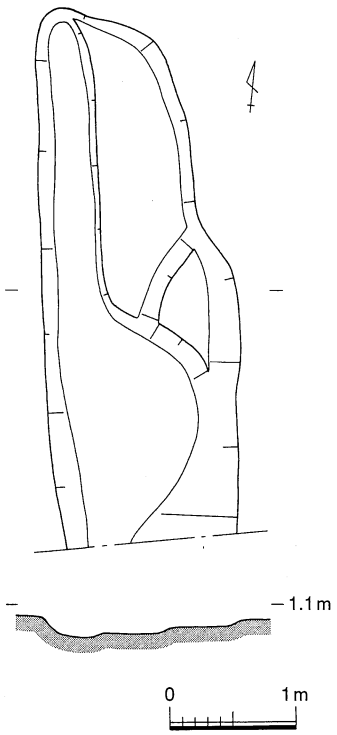



図66　P205　実測図

## Ⅳ　大道西Ａ区（図67・68）

大道西Ａ区は東西に並び、微高地と微高地の間の低位部に相当する。断面観察では微高地基盤層に対応すると考えられる土層(８層)が存在したため、その上面に堆積している中･近世の水田層(２～５層)、古代および古墳時代の時期と推測される水田層(６・７層)を掘り下げ、８層においても面的な精査をおこなった。その結果、調査区の西端では大道西Ｂ区の微高地に対応する端部が検出され、幅1.0m前後の溝がほぼ同じ位置で掘り直されていた。溝の検出面は1.2m前後で、深さは検出面から0.5m前後である。微細な土器片しか出土しなかったが、中世の土師質土器片が含まれていることから、

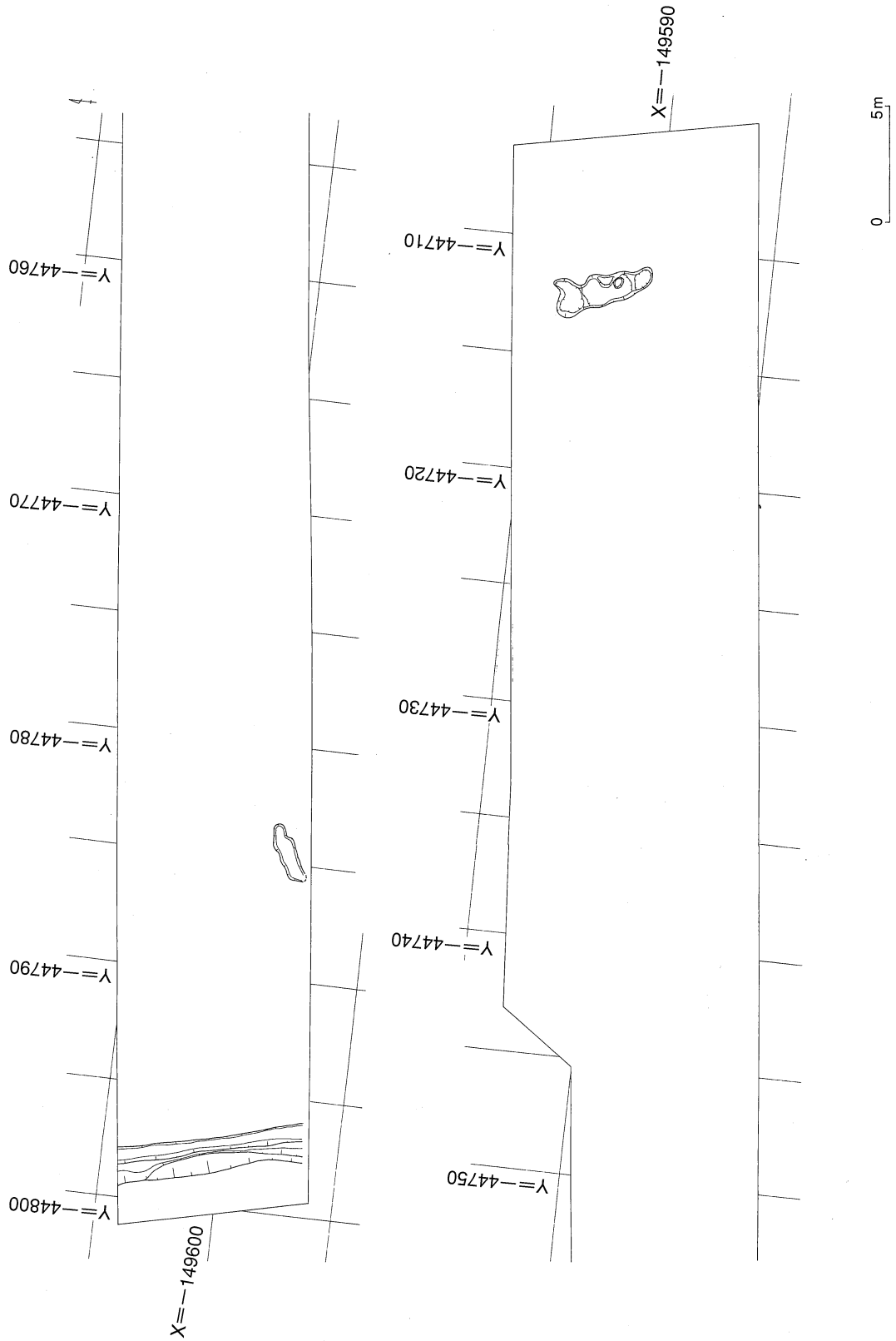
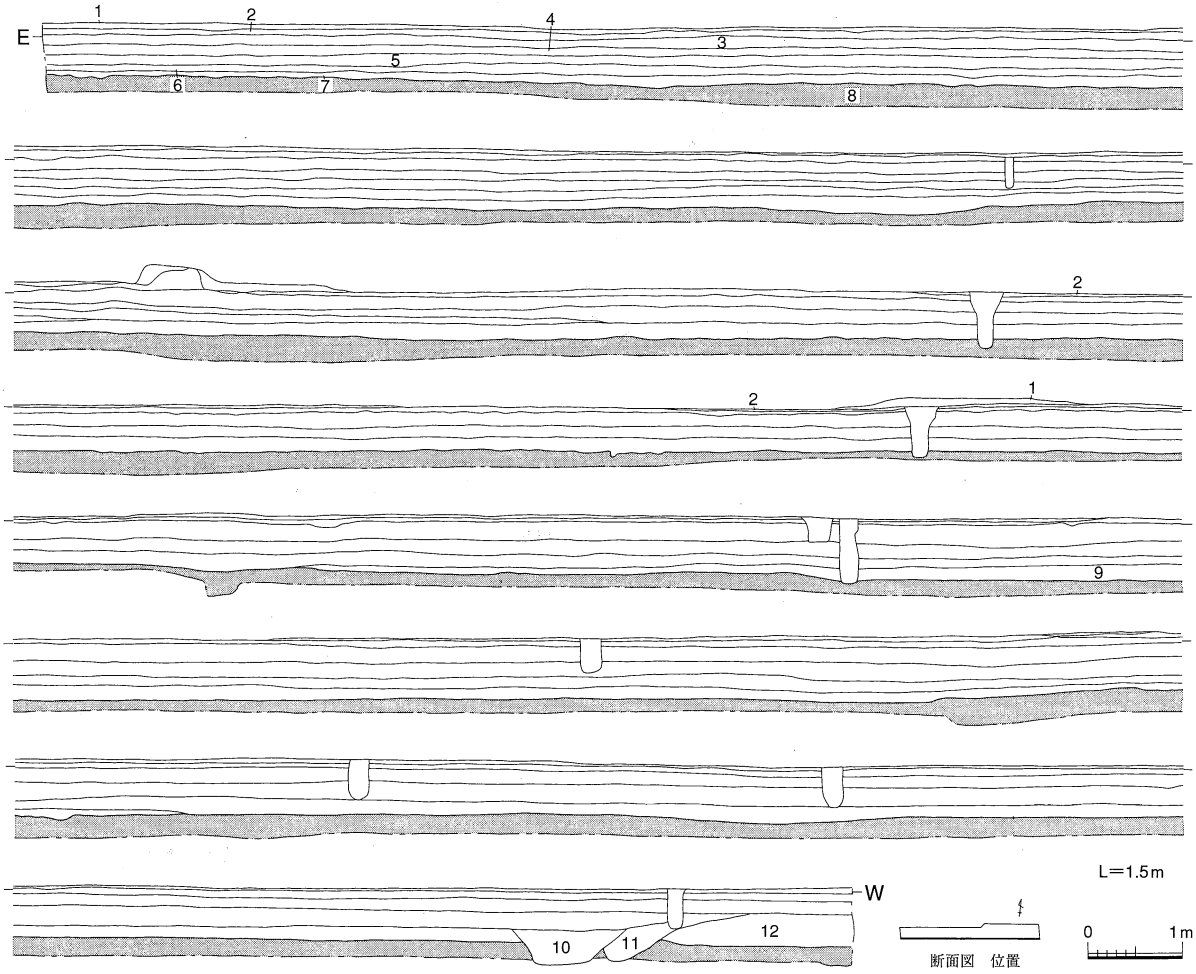



図67　大道西Ａ区　遺構配置図




1．現水田耕土　2．淡黄灰色土(近世)　2′．やや鉄分が多い　3．灰褐色土　4．淡灰褐色土　5．淡黄灰褐色土　6．暗灰色粘質土
7．暗灰褐色粘質土　8．淡黄灰白色土(基盤)　9．淡灰色細砂　10．淡褐色土　11．暗褐色粗～細砂　12．淡黄褐色土(包含層)

図68　大道西Ａ区　断面図

中世の時期の溝といえる。この溝以外は畦畔等の遺構も検出されなかった。また、８層上面での精査では、深さが２～３cmほどの土壙状の窪みが２基検出されたが、これらは遺構ではなく、いわゆる沈み込み状の窪みと判断された。最も広範囲に設定された調査区ではあったが、遺物の出土は極めて少なかった。

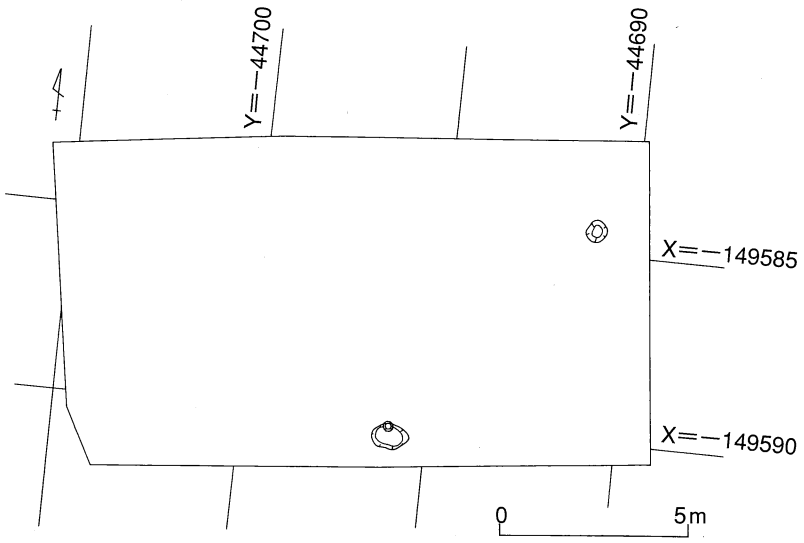



図69　大道Ｆ区　近世遺構配置図

## Ⅴ　大道西Ｆ区（図69・70）

大道西Ａ区と同様に、微高地間の低位部に相当する。大道西Ａ区と比べると、より微高地に近いことから、斜面堆積による遺物の出土が期待されたが、大道西Ａ区と同様に遺物は皆無に近かった。また面的な精査では検出できなかったが、断面観察では調査区の西端部において、中～近世水田層（２～５層）に不整合が認められる。現況の水田地割りも大道西Ａ区と大道西Ｆ区との間で畦畔が存在することから、この地割りは中世ぐらいまでは遡る可能性があるといえる。

大道西Ａ区の基盤層と推測した８層に対応するのは12層である。グライ化しているため、一見異なる土層にもみられるが、水田層との関係からも矛盾はないと考えられる。この上面には深さが２～３cmほどの浅い土壙状の窪みが２基検出されたが、遺物も含まれておらず、大道西Ａ区と同様に沈み込み状の窪みと判断された。

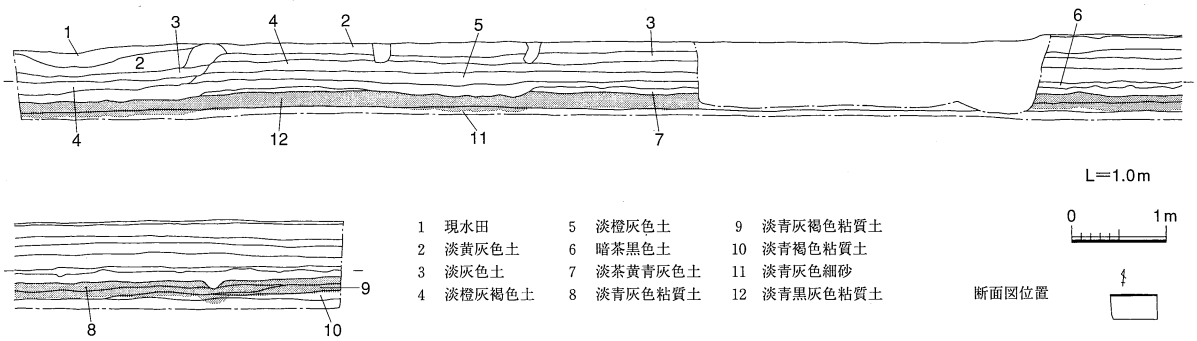



図70　大道西Ｆ区　断面図

## Ⅵ　大道西Ｇ区

第２微高地の端部に位置する。西側の低位部は古墳時代から近世まで水田として開発されていたと考えられ、水田開発に関わる溝等の検出が予想された。また、北に接する新幹線建設に伴う発掘調査では、弥生時代後期の湿田とそれに伴う水路が検出されており、いわゆる河田の遺構とされる（正岡1974）。今回の調査ではその水路の時期は古墳時代前期であり、該期以前の土層については基本的に無遺物層で、大道西Ｆ区の土層とも整合してみると、斜め方向に堆積していることから、古墳時代前期以前の河道堆積層であるといえる。しかも大道西Ｇ区における対応層は７・８層で、この土層は弥生時代後期の遺構が形成された微高地基盤層の下位層となることから、かなり古い時期の河道堆積

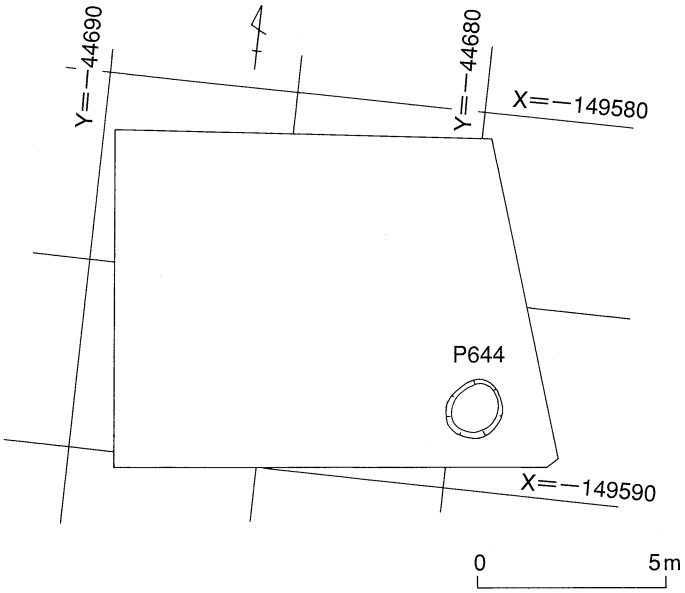



図71　大道西Ｇ区　中世遺構配置図

層ということになる。ただし、このことは微高地間の低位部に弥生時代の水田が存在しないことを意味しているのではない。低位部の向かう東西方向の水路が弥生時代後期に掘削されており、該期の水田開発は、このような溝を主軸におこなわれたと考えられる。おそらく、開発された水田は乾田であったと推測される。

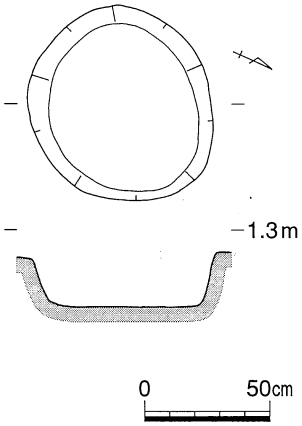



図72　P644　実測図

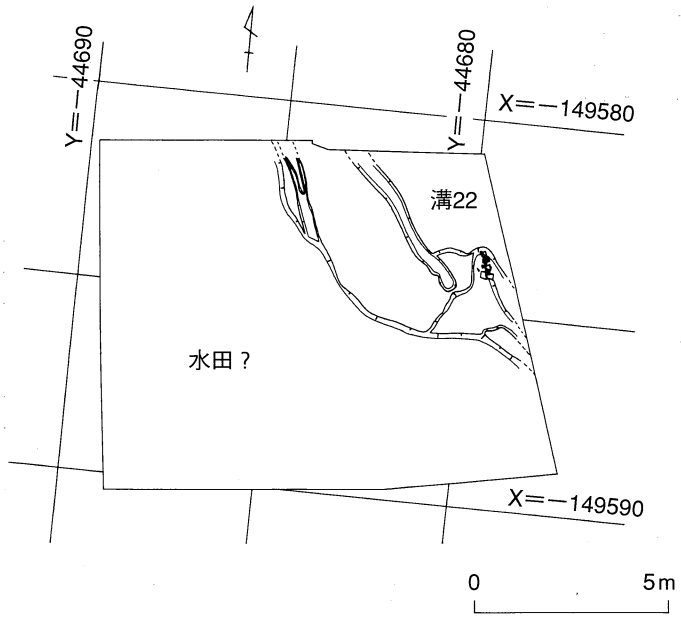



図73　大道西Ｇ区　古代遺構配置図

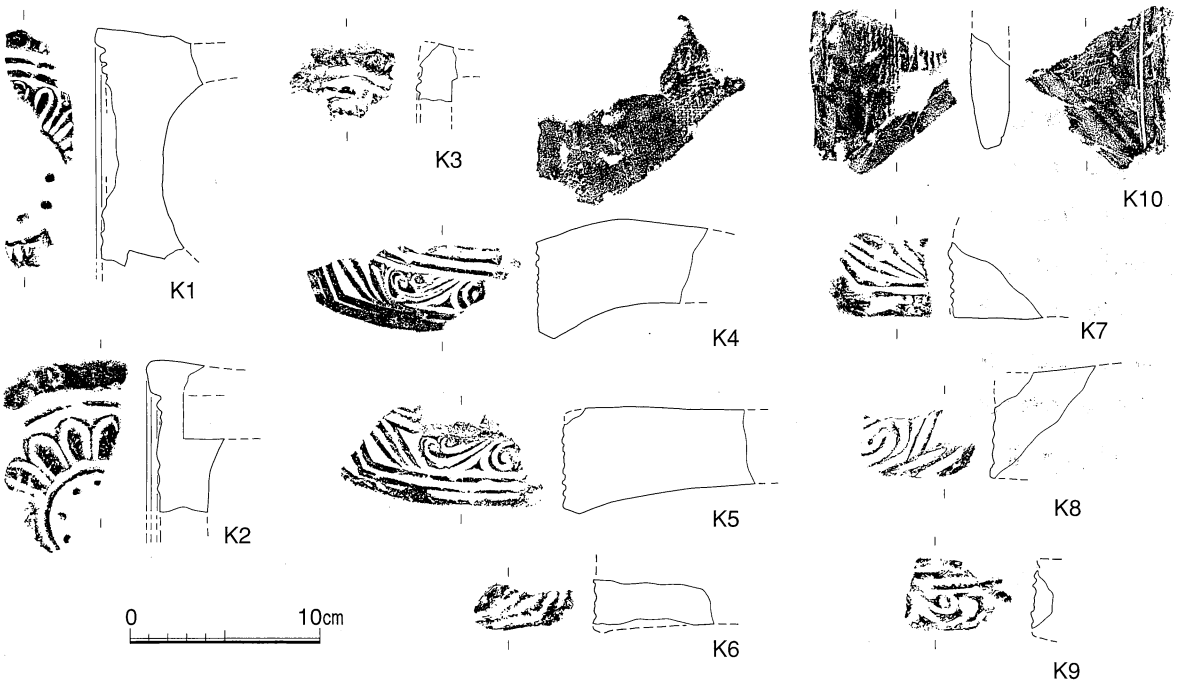



図74　大道西Ｇ区　出土遺物

## （1）中世（図71）

### P644（図72）

調査区南東コーナー付近で検出された土壙である。近世水田層（1層）を除去後に検出された土壙である。遺構検出面のレベル高は1.2m付近で、径0.8m程の円形の平面形を呈する。底面は平坦であり、深さは検出面から0.2mである。

遺物は中世から古墳時代にかけての微細な土器片が数点だけであった。遺構の性格はよくわからないが中世の時期の可能性が強く、中世の水田面上で掘削された土壙といえる。畦畔は検出できなかったが、一基しか認められないことから畦畔上の掘られた野壺的な土壙であったことが推測させられる。

## （2）古代（図73・74）

中世水田層（2層）を掘り下げると、調査区の北東コーナー付近は微高地基盤層（7層）が広がる。その部分には幅0.5mほどの溝22（B壁・1層）が自然地形に沿って検出され、調査区中央付近で途切れる。途切れた部分から低位部へ平面形が扇状に窪んでおり、低位部に広がる水田への水口とも考えられる。この部分の周囲には土師器の甕の胴部片がまとまって出土しており、隣接する大道西C区からはカマドが一個体出土している。甕とカマドがセットになって水口におかれていた可能性がある。甕は図化できなかったが、カマドとのセット関係考えると8世紀代といえる。水田面からは畦畔等は検出できなかったが、溝の形状や、水田層の広がりなどから、自然地形に即した地割りであったと推測される。

中世水田層および、古代水田層を掘り下げ時に古代の平瓦片とともに、軒瓦片もかなり出土した。軒丸瓦は2種で、いわゆる平城宮6225式系のものが2点（K1・K3）、単弁蓮華文（K2）が1点である。軒平瓦は6点（K4～K9）で、いずれも平城宮6663式系の文様の陰陽が逆転しているものである。隅瓦（K10）も1点出土している。

## （3）古墳時代・弥生時代（図75）

### P645（図76）

微高地上で検出された土壙である。遺構検出面は1.1m前後、遺構最深部は検出面から0.1mである。径約0.3mの円形の平面形を呈し、断面形は逆台形である。底面から若干浮いた位置で壺形土器の下半部の破片が出土した。弥生時代後期の時期といえる。

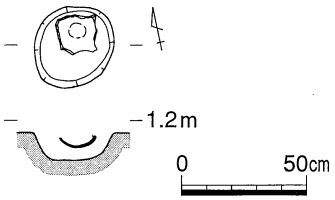



図76　P645　実測図

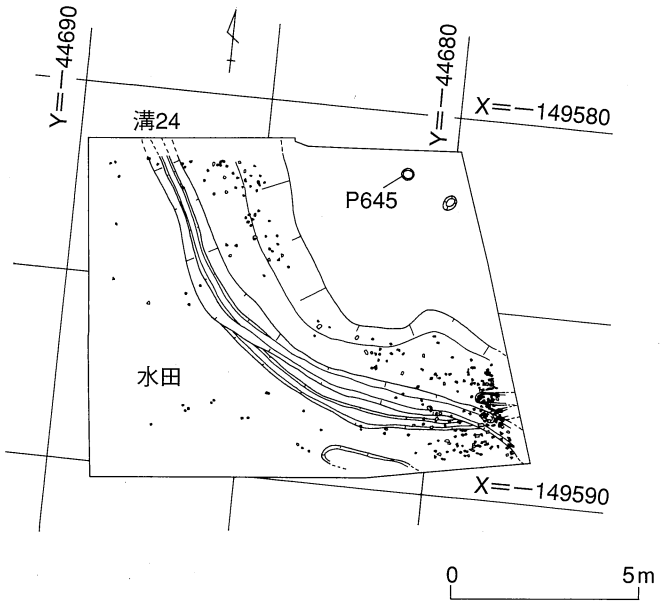



図75　大道西G区　古墳遺構配置図

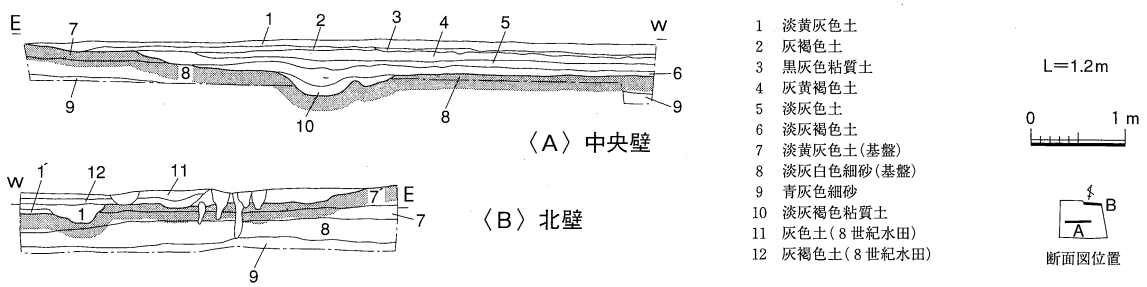



図77　大道西G区　断面図

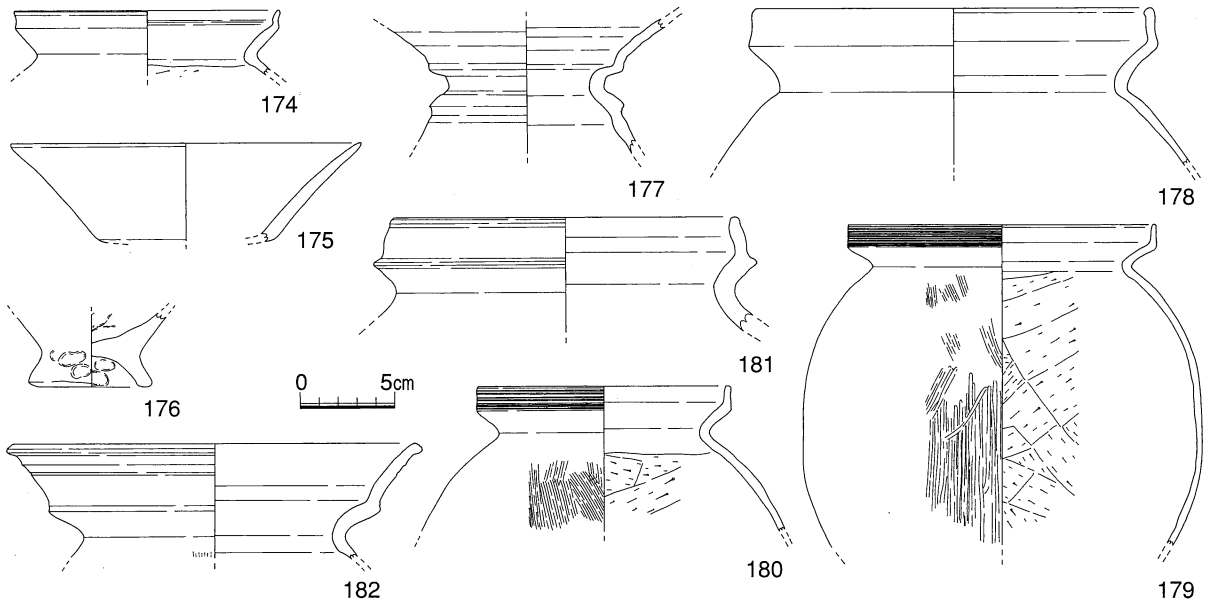



図78　大道西G区斜面堆積および溝24　出土遺物（1）

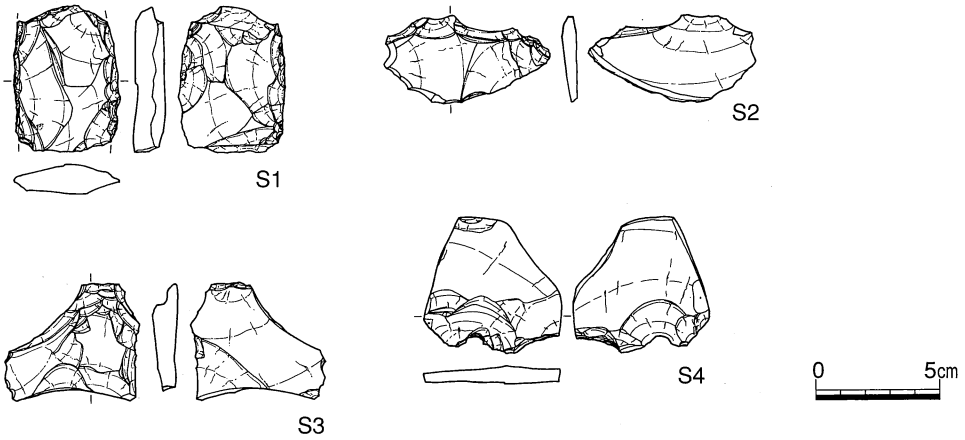



図79　大道西G区斜面堆積および溝24　出土遺物（2）

水田（図75・77～79）

微高地が現況で約0.2mほどの段差で削平され、水田層（６層）が広がる。段差が下底から0.8mほどの平坦面を経て、幅約１mの溝24が掘削されており、水田に伴う水路と考えられる。溝24は部分的に掘り直された痕跡が看取され、比較的長期間維持されたと推測される。

遺物は微高地斜面から溝24の上層にかけて多くの土器片が出土した。甕形土器（174・178～181）、高杯形土器（175）、鼓形器台（177）、壺形土器（182）、底部（176）などである。いずれも古墳時代前期の時期である。溝24の下層（10層）には土器が極めて少なかったが、古墳時代前期の甕の胴部片も出土しており、該期の時期といえる。このほかサヌカイト製の石包丁、あるいは石剣の破片（Ｓ１）、スクレイパー（Ｓ４）、剥片（Ｓ２・Ｓ３）も出土した。

## Ⅶ　大道西Ｃ区

調査区全体が微高地に相当し、中世・古代・古墳時代前期・弥生時代後期の遺構面が検出された。ただし、古墳時代前期・弥生時代後期については調査区の南西コーナー付近が微高地端部になっており、古代についても調査区の西端には微高地端部への傾斜変換点が認められる。

### （１）中世（図80）

包含層が全く残存していないこともあって、中世の遺物の出土は極めて少なかった。径0.2m前後の柱穴や、長さ0.4m前後の浅い土壙が散在的に認められた。

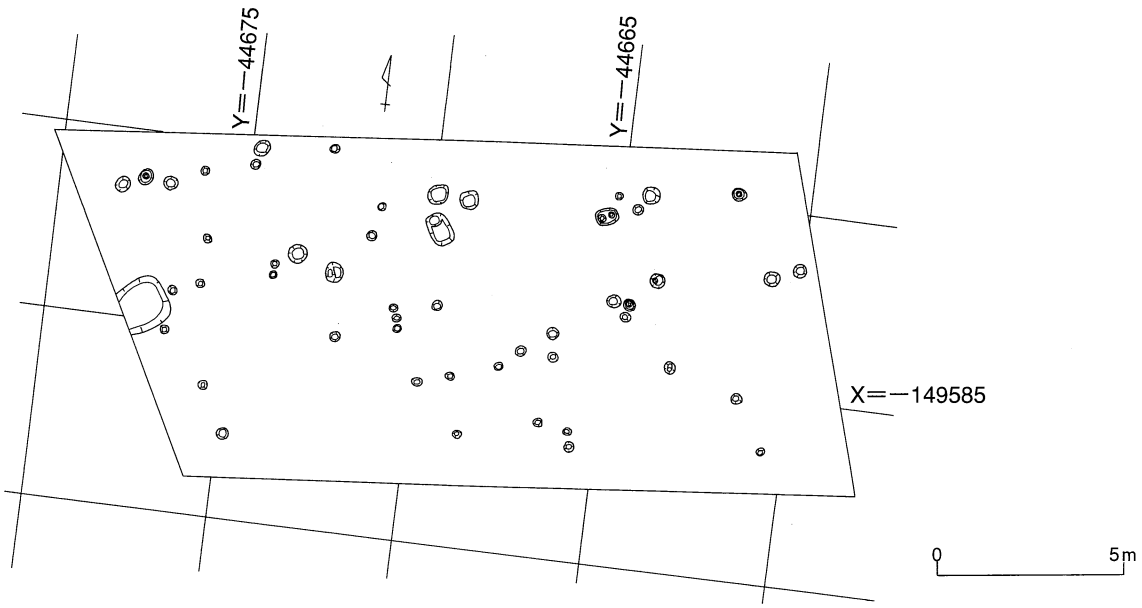



図80　大道西Ｃ区　中世遺構配置図

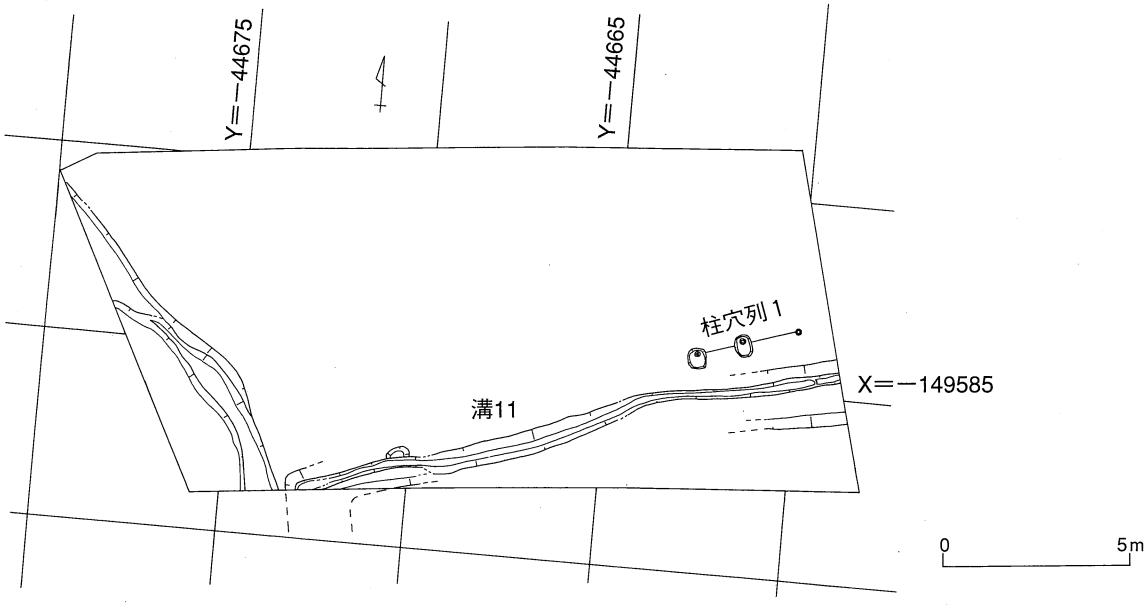



図81　大道西Ｃ区　古代遺構配置図

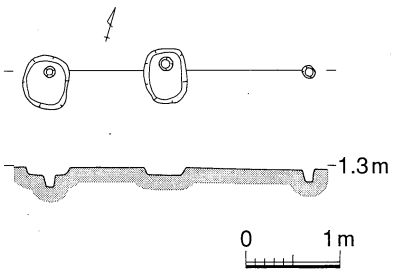



図82　柱穴列１　実測図

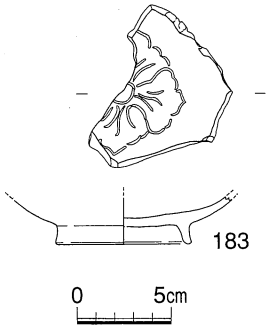



図83　溝11上面　出土遺物

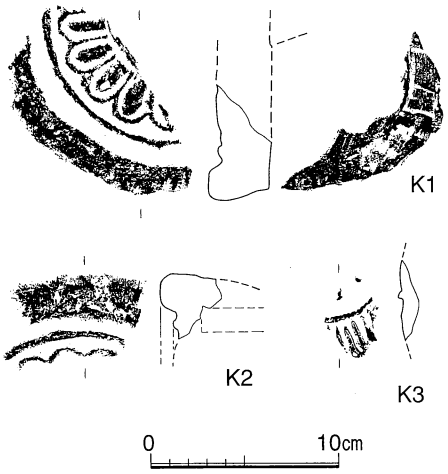



図84　溝11　出土遺物（１）

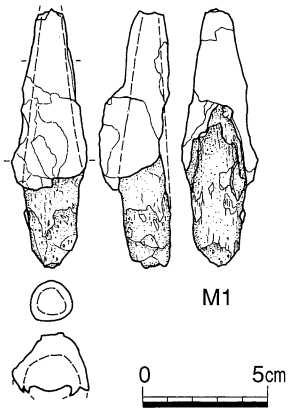
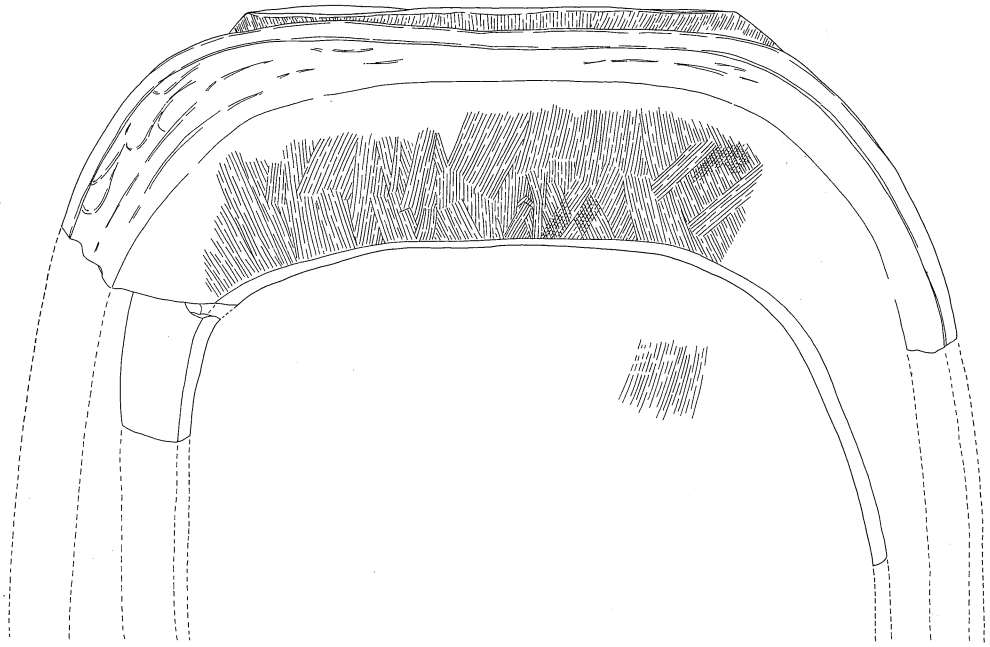



図85　溝11　出土遺物（２）

## （2）古代（図81）

### 柱穴列１（図82）

調査区南東コーナー付近で検出された柱穴列である。隣接する調査区である大道西Ｄ区ではこの柱穴列の延長となるような柱穴は検出されなかったことから、これで完結するものである。遺構検出面は1.3m前後で、一辺0.5m前後の方形の掘り方である。柱痕跡は径0.1m前後である。微細な土師器片しか出土しなかったが、溝11に平行していることや、掘り方の平面形が方形であることから古代の遺構と考えられる。



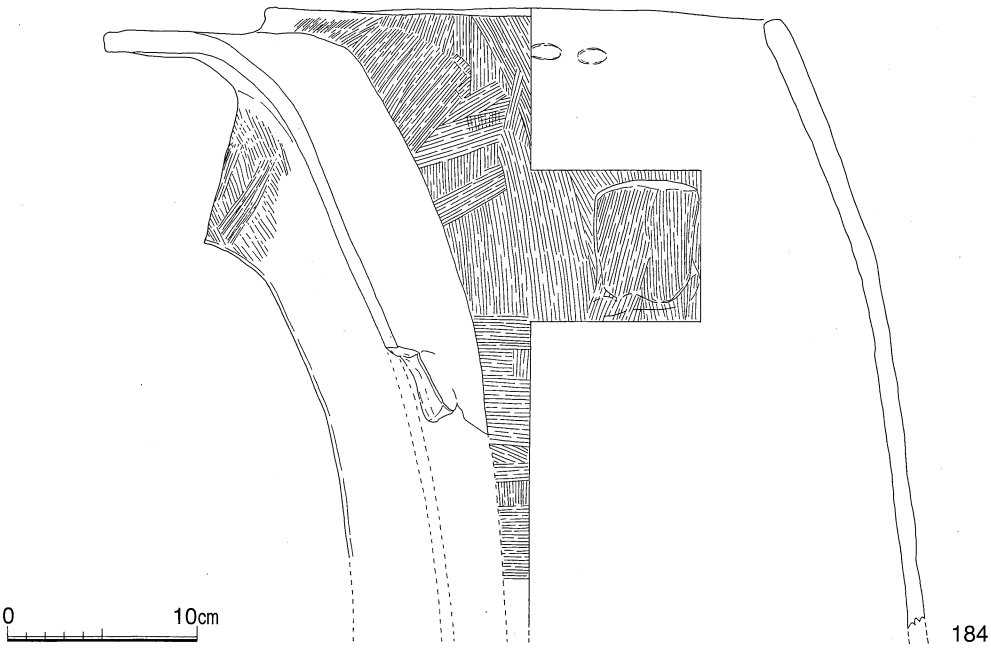



図86　大道西Ｃ区　古代斜面堆積　出土遺物

溝11（図83～85・88）

調査区南半で検出された。直線的な平面形であり、調査区の南西コーナー付近で直角に屈曲して南へのびるようである。幅約1.5mで、遺構検出面は1.5m前後である。検出面から0.4mの深さで平坦となり、さらに幅が0.4m、深さが0.1mほど掘り下げている。つまり２段掘りになっているといえる。さらに最下部の掘り下げられた部分は凹凸があり、巨視的にみると、長楕円形の土壙を連結させているようにもみえる。こういった特徴は通水を目的とする水路とは異なっており、直角に屈曲していることからも、囲繞、あるいは区画を目的とした溝であったことがうかがわれる。

遺物は平瓦が多く、土器などはほとんど認められなかった。その中に軒瓦が３点認められた。（Ｋ１）は単弁軒丸瓦で、丸瓦部が剥離している。そのため、丸瓦を瓦当裏面に接合する際にヘラ状工具などで若干削っていることが観察される。（Ｋ２）も同じく単弁の軒丸瓦である。（Ｋ３）は平城宮6225式系の軒丸瓦である。溝11の上面を精査している際に、陰刻花文を施した灰釉陶器椀（183）も出土した。９世紀代の時期であり、出土した軒瓦の時期観からも該期が溝11の下限を示すといえる。このほか白色の凝灰岩片も小片であるが多数出土しており、部分的に面取りが認められることから、本来はブロック状の形態であったことがうかがわれる。さらに、鉄鐸が一点（Ｍ１）出土している。鉄鐸はソケット上の鐸身に鹿角製の舌を入れ込んだ状態で出土した。ただし、舌は通常鉄製で、鹿角製のものはあまり認められない（行田1997）があるいは鐸身だけが出土している例の舌は、鹿角製などの腐朽しやすいものであったのかもしれない。

斜面堆積部（図86）

溝11が屈曲した西側は、微高地端部のはじまりといえる傾斜変換点が南北方向に認められる。19・23層がその堆積層で、平瓦片を主体とした遺物が多く含まれる。ほとんどが小片となっていたが、カマドが１個体比較的まとまって出土した（184）。出土位置は西壁中央付近の壁際で、側溝の掘り下げ時に遺物の大半が出土した。この位置は、大道西Ｇ区において水口状の遺構で、土師器甕の胴部片が

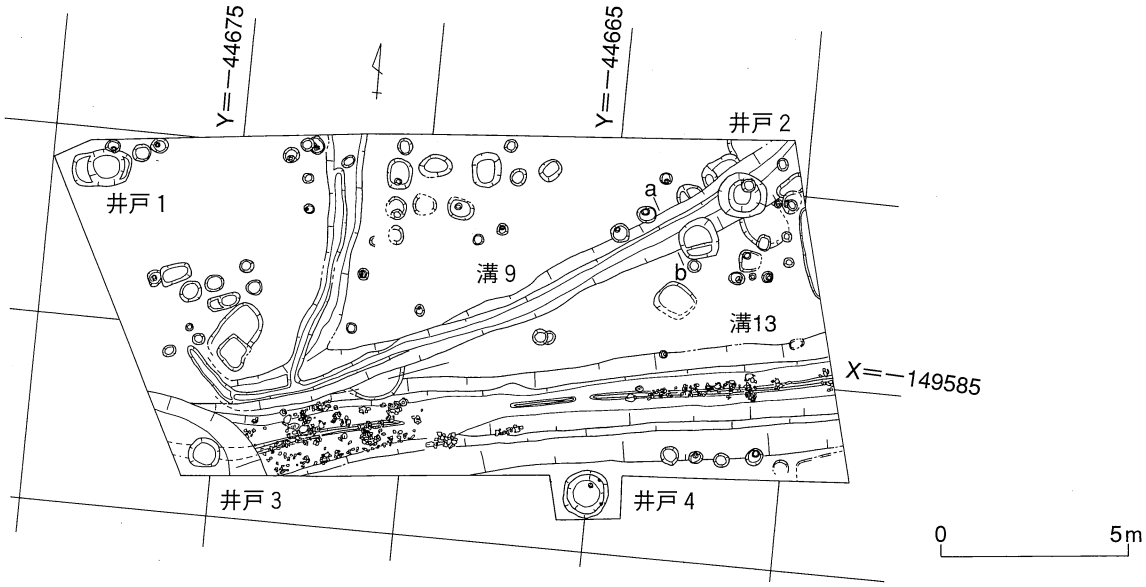



図87　大道西Ｃ区　古墳・弥生遺構配置図

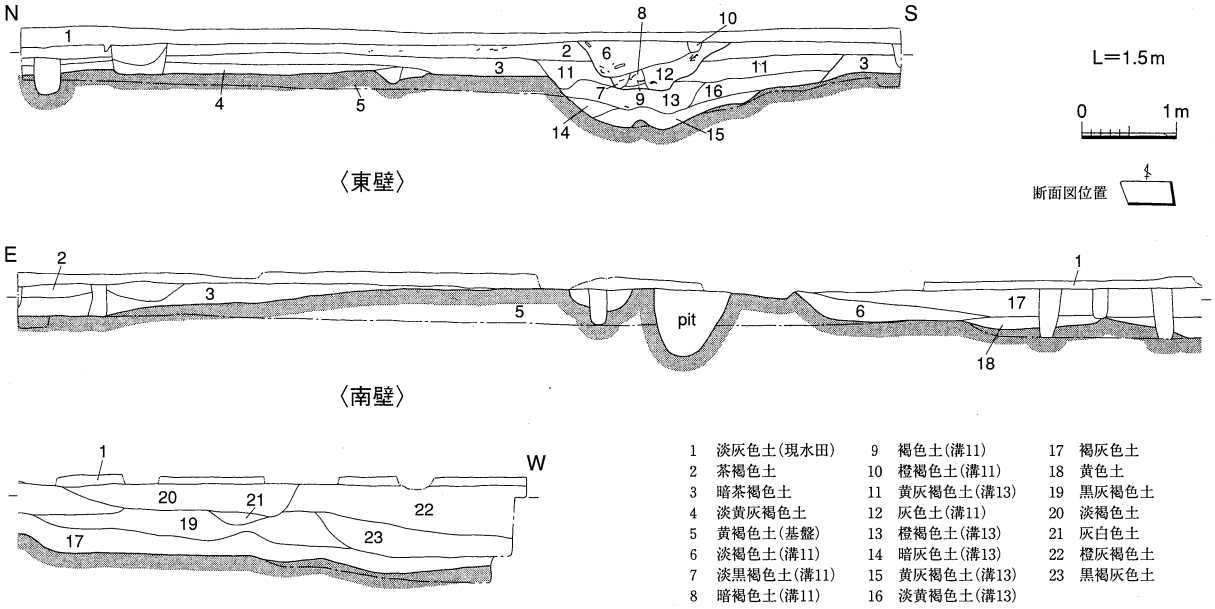



図88　大道西Ｃ区　断面図

まとまって出土した地点と隣接する。カマドと土師器の甕はセットであった可能性が高い。カマドは下端部が欠損しているが、上半は大体残存しており、本来は完形品が埋没していたと推測される。方形の把手が上向きに貼付されている。

## （３）古墳時代前期・弥生時代後期（図87）

井戸１（図89）

調査区北西コーナー付近で検出された井戸である。遺構検出面は1.4m付近で、最深部の深さは1.1mである。検出面での平面形は長さが1.5m、幅が1.0mの隅丸方形を呈し、その中央やや東よりが径約1.0mの円形に深くなっている。当初は井戸と土壙の重複の可能性を想定したが、土層断面を検討した結果、同じ遺構と判断された。つまり、径1.0mの円形の井戸の東西両側に段が付属する形態といえる。埋土は６層あるが、最下層の６層以外はブロック状に堆積しており、人為的に埋められたことが示唆される。遺物は６層から弥生時代後期の壺の小片が出土したのみであった。

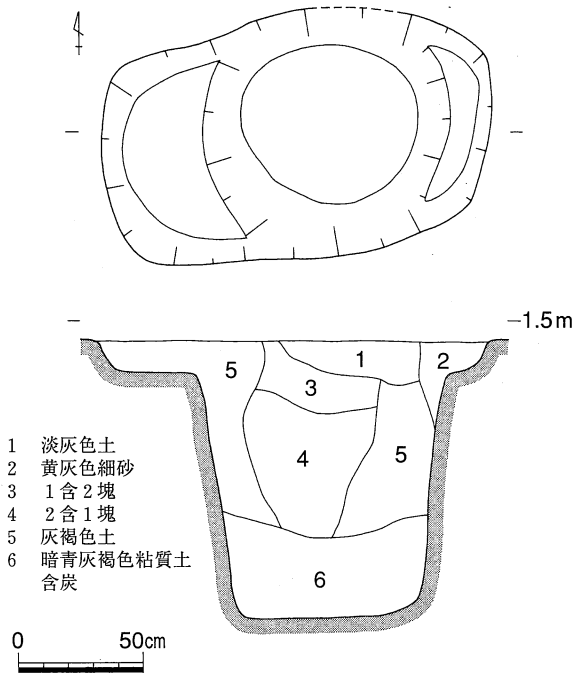



図89　井戸１　実測図

井戸２（図90）

調査区の北東コーナー付近で検出された井戸である。遺構検出面は1.4m付近で、最深部までの深さは1.8mである。径1.2mの円形の平面形を呈し、徐々に窄まり気味に深くなっていく。底面では径0.5mとなる。埋土は５層で、１・２層はブロック状の堆積であり、人為的に埋められたことを推測させる。遺物は少なく、３層から弥生時代後期に属すると推測される甕の小片が出土したのみである。

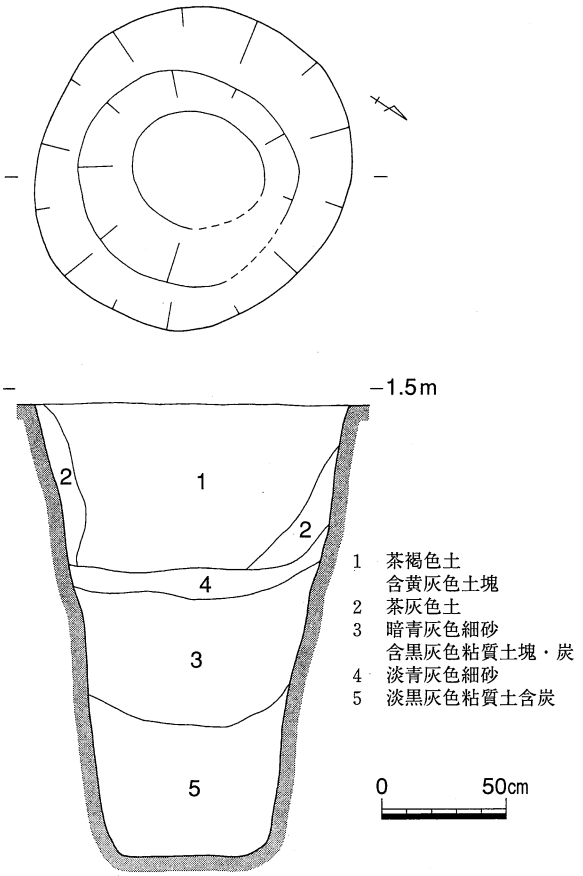



図90　井戸２　実測図

井戸３（図91・92）

調査区南西コーナー付近で検出された古墳時代前期の井戸である。井戸の東側が微高地端部になっており、大道西Ｇ区の遺構面と整合させると、微高地端部のカット面とその西側を流れる流路の間の平坦面に掘られたことになる。水田との関係から、水田への給水をも目的とした野井戸のような性格も推測される。遺構検出面は0.7m付近で、最深部までの深さは1.1mである。ほぼ垂直に底面まで掘られている。径0.8mの円形の平面形で、底面も平坦である。

遺物は土器の小片が主体で、各層に含まれていた。２層の下部からは板状の安山岩片が出土した。外見的には前期古墳の竪穴式石室の石材にも該当するようなものである。

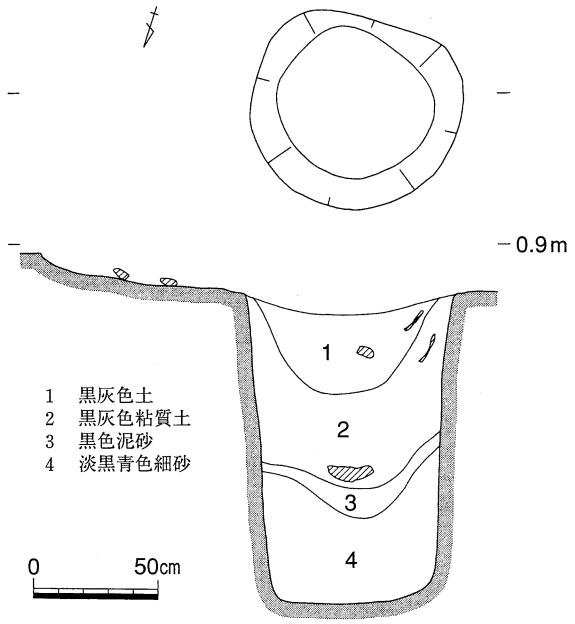



図91　井戸３　実測図

井戸４（図93〜95）

調査区中央南端で検出された井戸である。遺構検出面は1.4m付近で、最深部までの深さは検出面から2.4mである。径1.2mの円形の平面形を呈し、徐々に窄まり気味に深くなり、底面では径0.5mほどになる。埋土は10層あるが、１〜５層までの上層、６〜９層までの中層、10層の下層に大きく３層に

分けることができる。上層の最下層である５層は炭層であり、このレベル高全体に炭が広がっている。１～４層には土器の小片がかなり含まれており、炭を多量に投棄した後に土器の小片を投棄した可能性が強い。中層の上半である６層にはほとんど遺物が含まれていなかったが、下半である７・８層には完形に近い土器が井戸壁面に沿って出土した。甕形土器(197)、壺形土器(204)、高杯形土器(200)である。中層の形成はシジミの貝殻のみを含む層(９層)からはじまっており、９層には遺物が含まれていなかった。下層の西半からは完形の土器がまとまって出土した。出土した甕形土器(185～193)、壺形土器(194)の表面にはススの付着が顕著であった。時期は弥生時代後期末である。

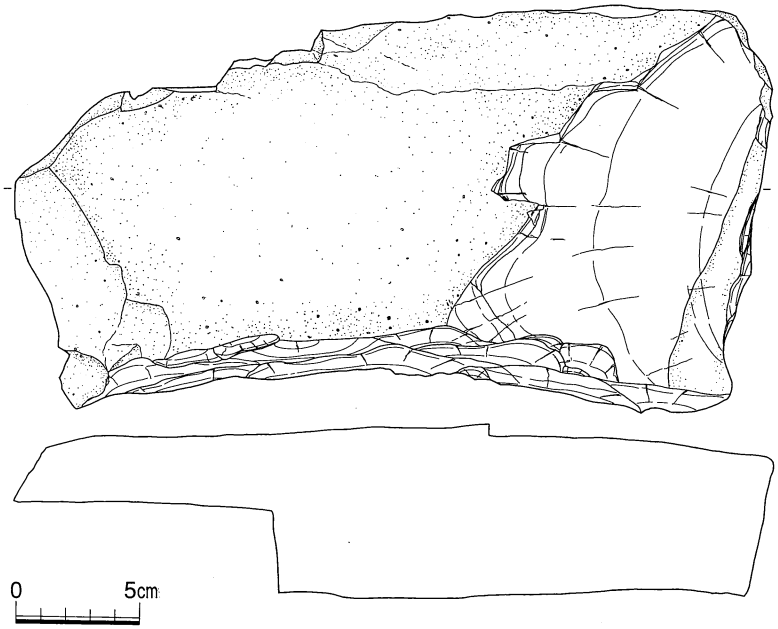
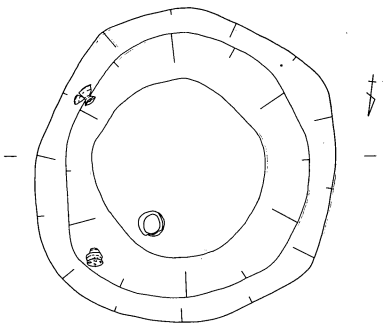



図92　井戸３　出土遺物



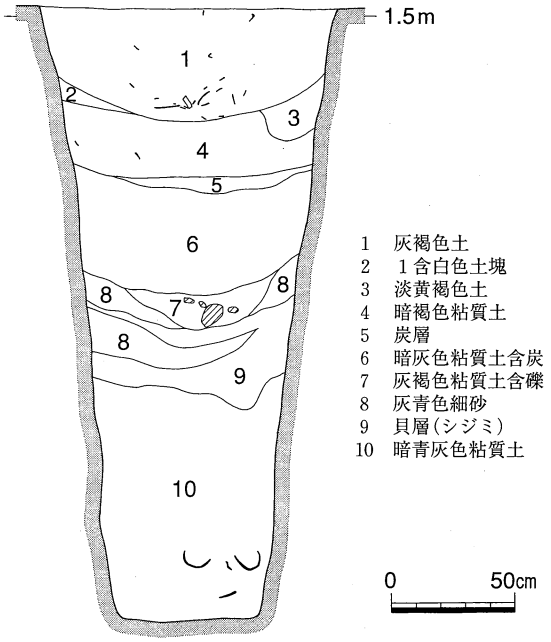



図93　井戸４　実測図

溝９（図96）

調査区北東コーナー付近から南西コーナーへ伸び、若干屈曲して完結する。さらに南西部では北から南へ流れる溝と合流している。溝13とは合流せずに接しているだけであるが、同時存在であった可能性が高い。遺構検出面は1.4m前後で、最深部の深さは検出面から0.3mである。検出面から緩やかに傾斜し、底部分は幅0.3mほど急に下がっている。検出面での幅は1.2m前後である。微細な土器片しか出土しなかったが、細部の特徴から弥生時代後期後半といえる。

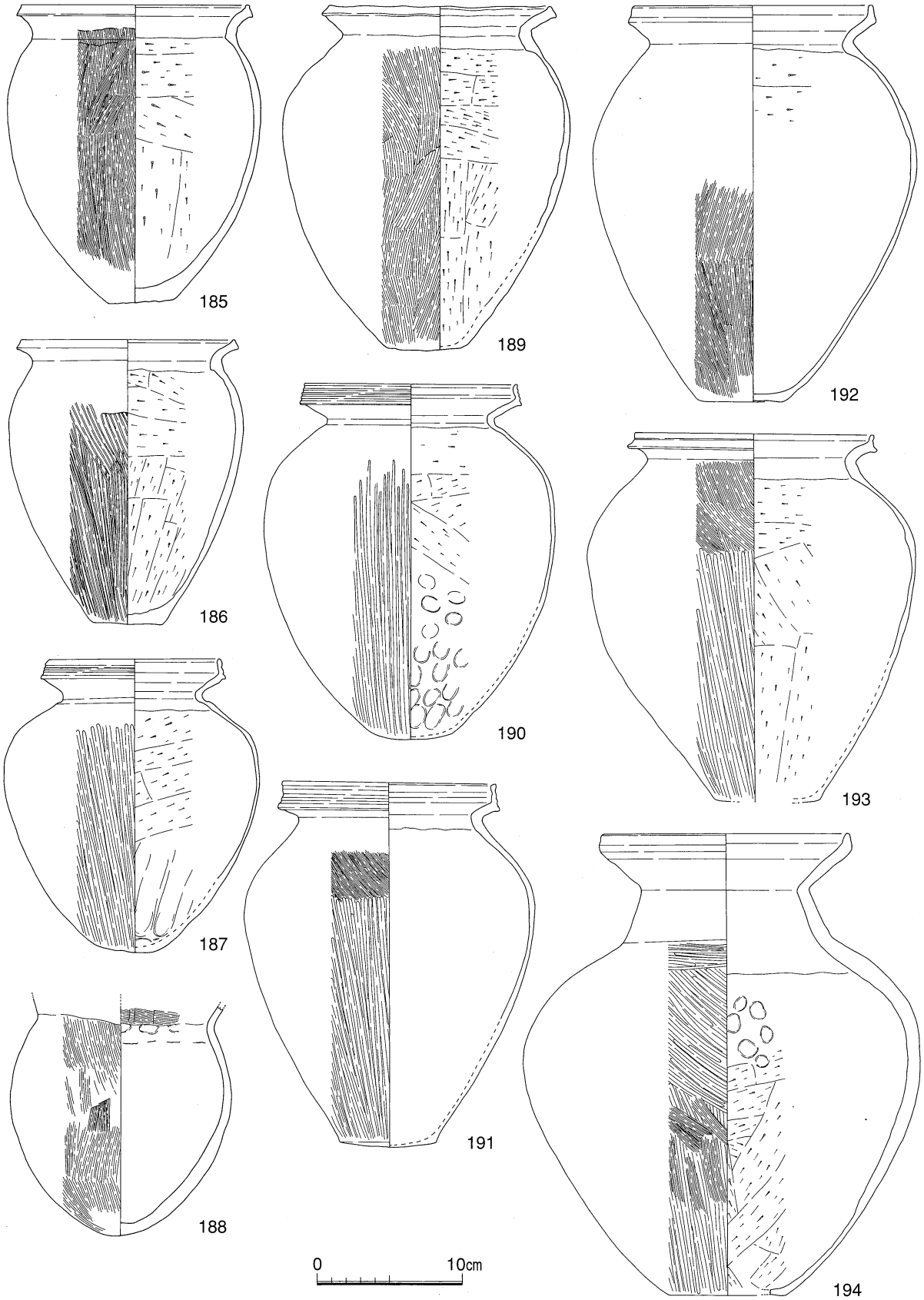



図94　井戸４　出土遺物（１）

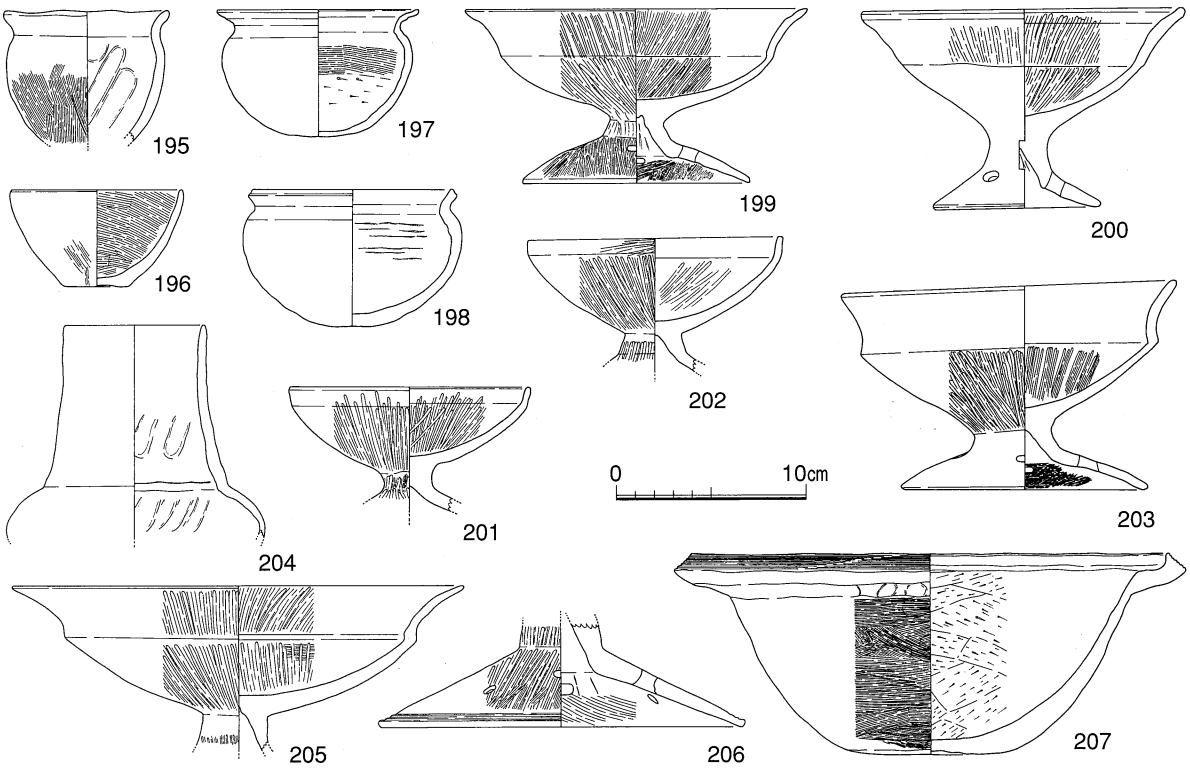



図95　井戸４　出土遺物（２）

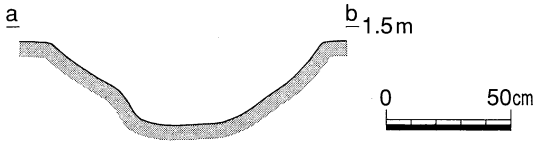



図96　溝９　断面図

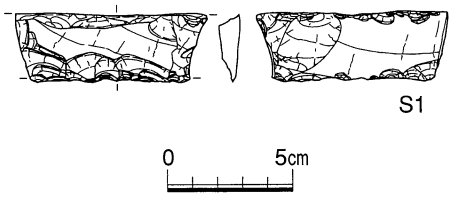



図97　溝13　出土遺物（１）

溝13（図88・97～101）

調査区の南半で検出された溝で、調査区の中で若干北へ方向を振りながら直線的な平面形で掘削されている。遺構検出面は1.5m付近で、最深部の深さは0.7mである。断面形はやや傾斜のあるU字形で、底面には少なくとも２回は掘り直されたことをうかがわせる若干深くなった部分が認められる。この点からも、この溝が水路を目的として掘削されたことが推測される。検出面での幅は3.1mである。埋土は５層あり、11･13層の上層と14～16層の下層に分けられる。下層からは遺物がほとんど出土しなかったが、上層からは完形の土器を中心に多量の土器が出土した。特に西端部では完形の壺形土器を並べたような状況にもみえるような出土状況であり、溝13廃絶後の最終埋土に意識的に土器を埋めたことが推測される。ただし、器種構成をみると壺・甕・鉢・高杯などの器種が全て揃っており、

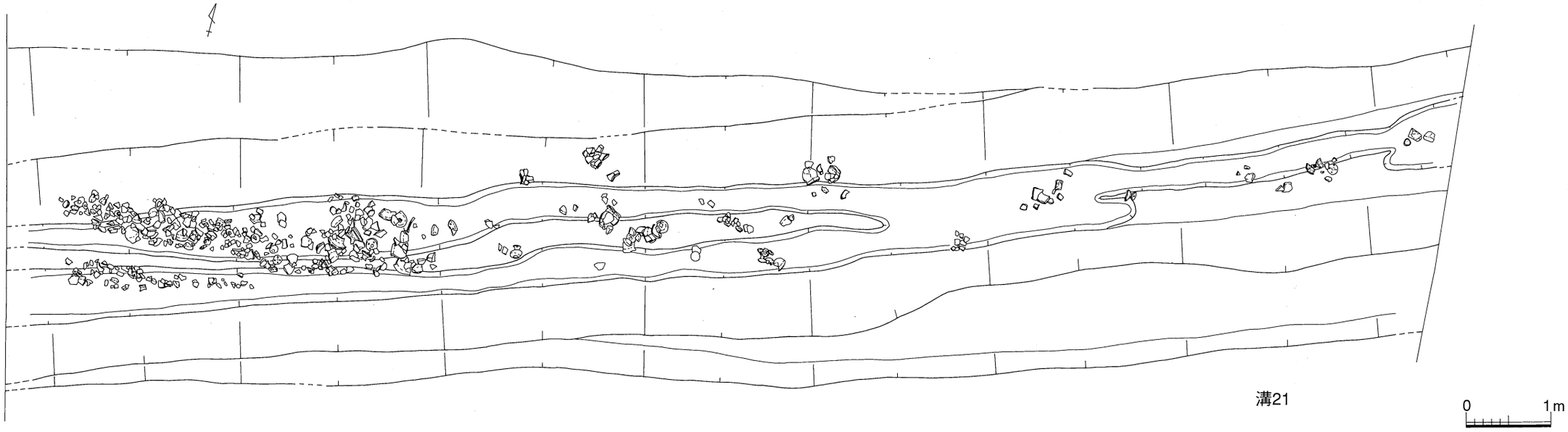



図98　溝13・溝21　遺物出土状況

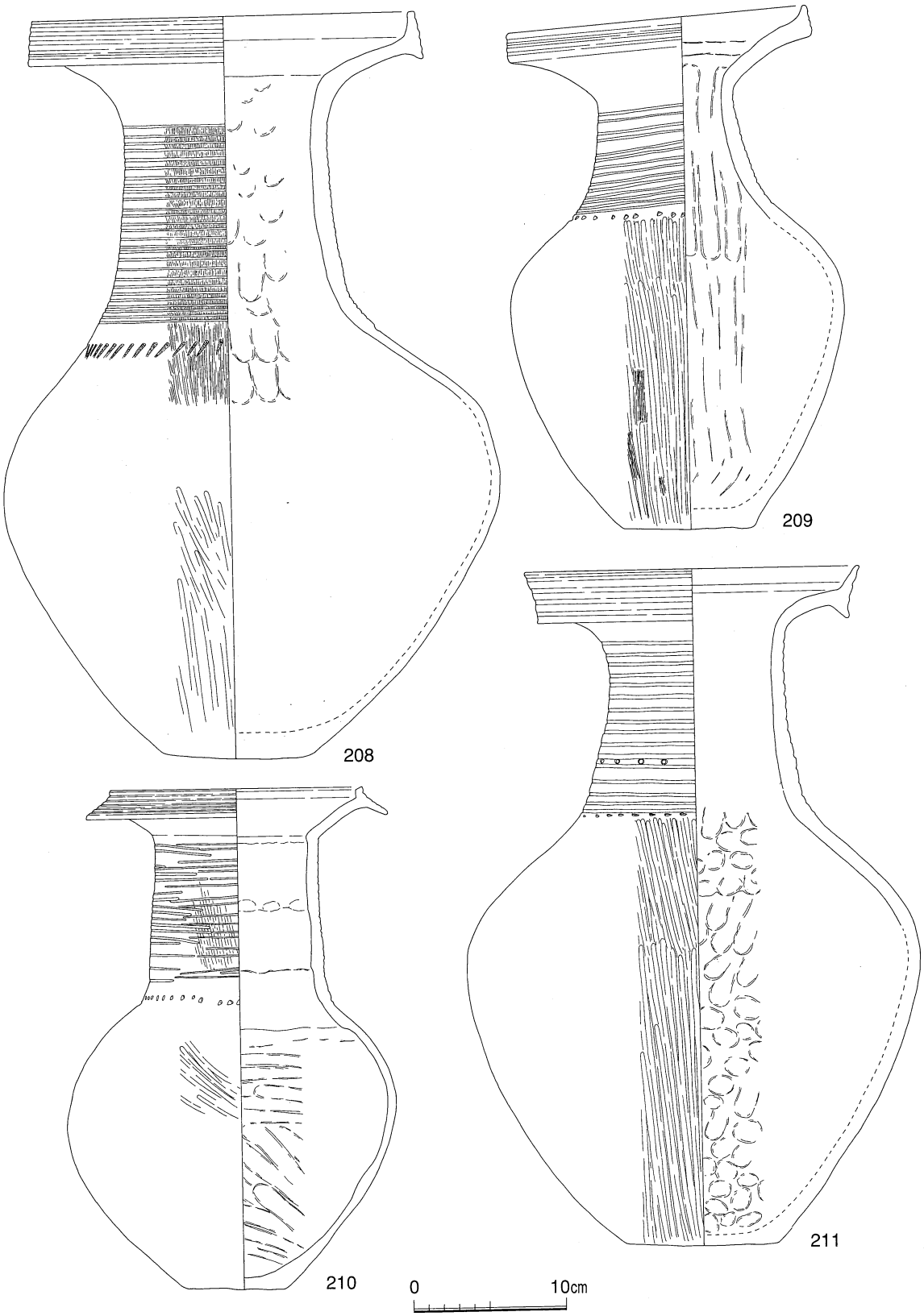



図99　溝13　出土遺物（2）

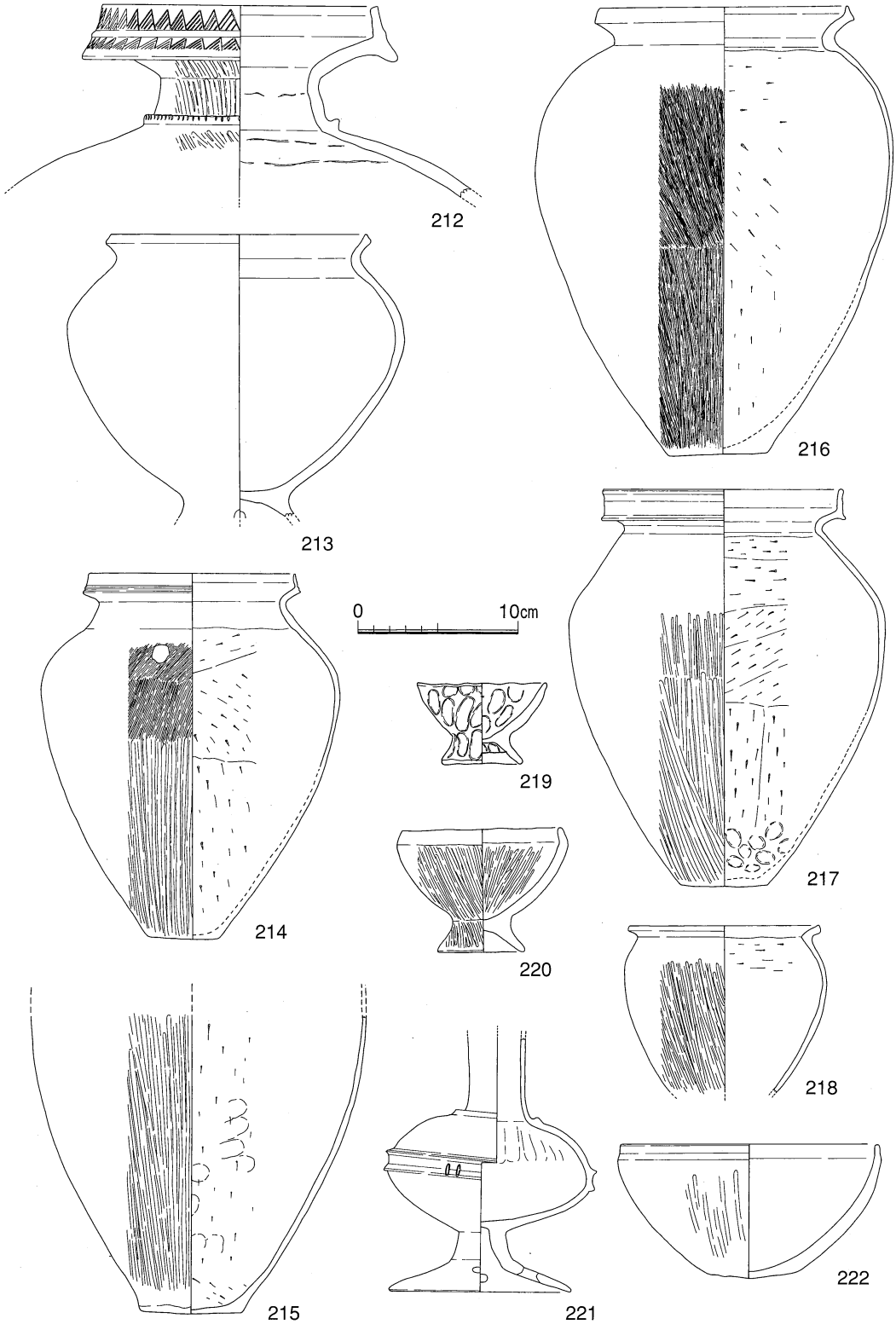



図100　溝13　出土遺物（3）

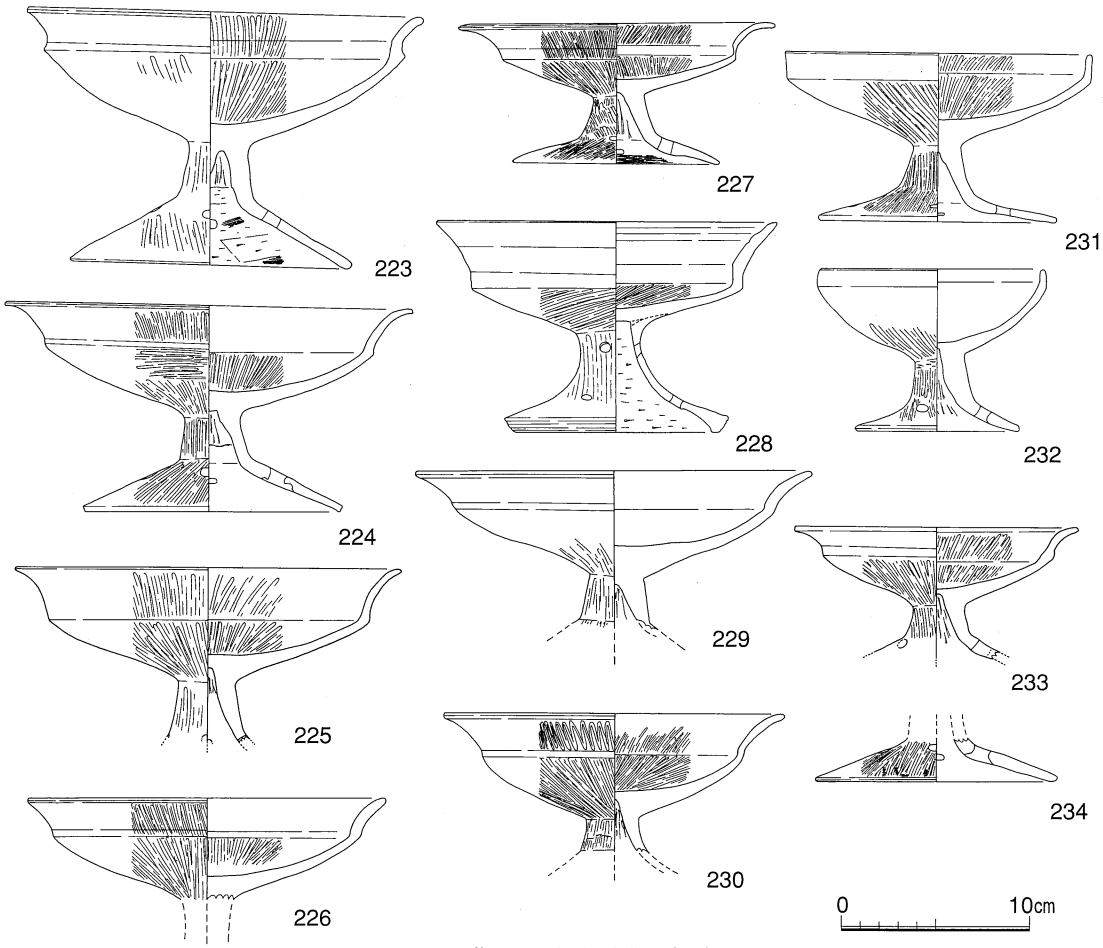



図101　溝13　出土遺物（４）

集落内で使用されていた土器をそのまま持ってきたようにみえる。壺形土器は橙色形の色調を呈するもの(208・209・211)が主体で、白色系の色調を呈するもの(210)が極めて少ない。後者は口縁端部の形状も異なり、しかも頸部が直立する古相の特徴を持っている。甕形土器は口縁端部の形状から受け口状のいわゆる吉備型甕と呼ばれるもの(214・217)と、口縁端部をわずかに拡張したもの（216)があり、後者の方が器壁も厚い。高杯形土器は二重口縁状の杯部を持つもの(223～230・233）と、椀状の杯部を持つもの(231・232)があり、前者には(228)のような備中西部の特徴を有するものもある。このほか破片数も含めて１点しか出土しなかったが、脚台付きの壺(221)もある。これらの土器群に伴うものかどうかは不明だが、石鎌（Ｓ１）も一点出土している。

## Ⅷ　大道西Ｄ区（図114）

現水田耕土上には厚さが0.4mほどの造成層がある。これは包含層の二次堆積土も含まれており、煉瓦とセメントの破片とともに細片ではあるが中世から弥生時代の遺物が比較的多く含まれていた。この調査区になると、中世から弥生時代後期の基盤層が包含層とよく似た茶褐色土（２層）になる。こ

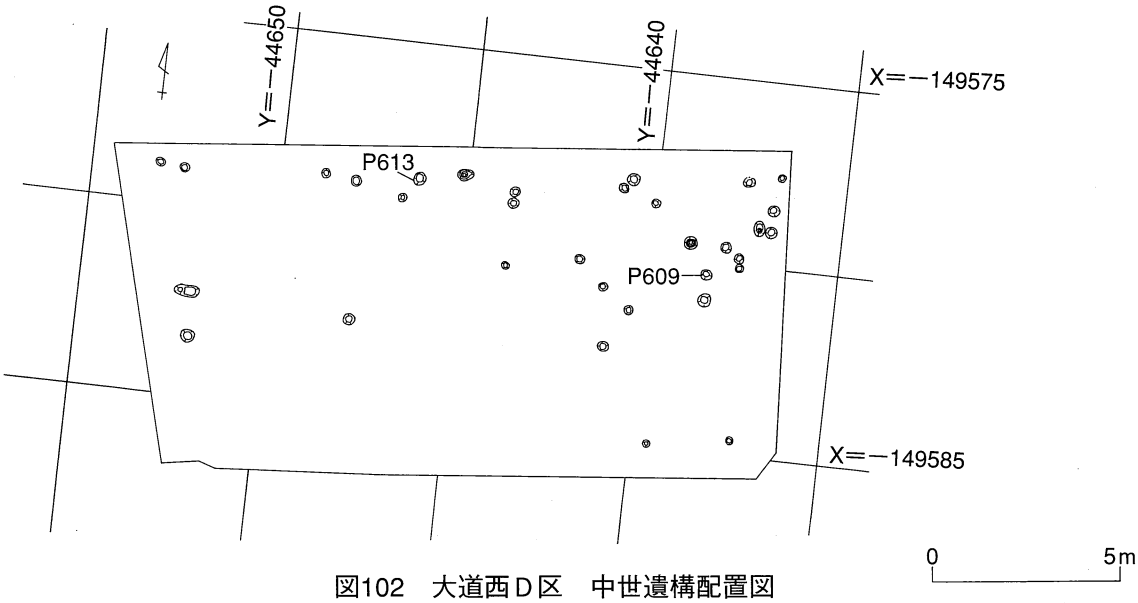



図102　大道西Ｄ区　中世遺構配置図

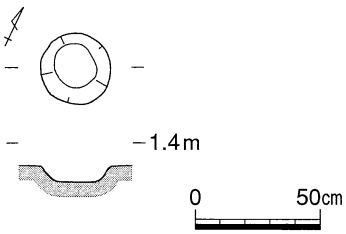



図103　P609　実測図

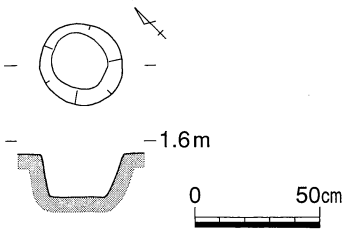



図104　P613　実測図

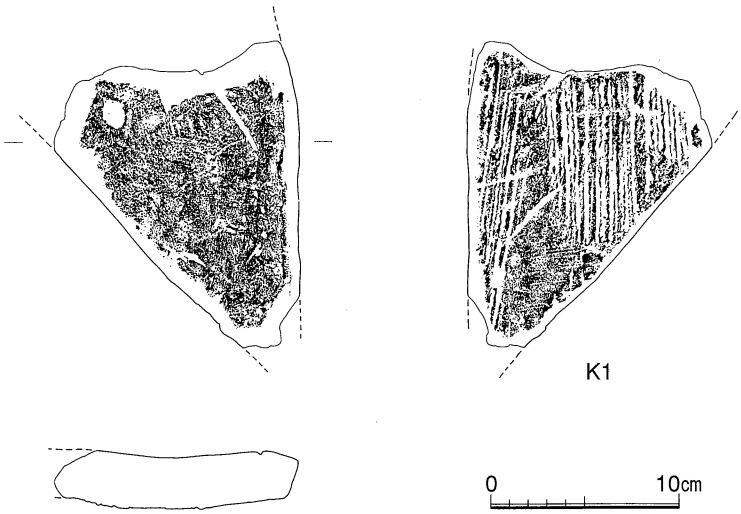



図105　P609　出土遺物

の土層はそれまでの基盤層であった黄灰褐色土層の下部層である。おそらく後世の削平により、包含層や基盤層の上部は残っていないのであろう。それは大道西Ｃ区と比べると、当調査区の微高地のレベル高が高かったことを示唆している。２・３層の下部には、別の時期の微高地基盤層である11層がある。この面では遺構は認められなかったが、２・３層を掘り下げ中に石鏃が１点出土した。縄文期に属すると推測され、該期の集落が周辺に存在する可能性を推測させられる。

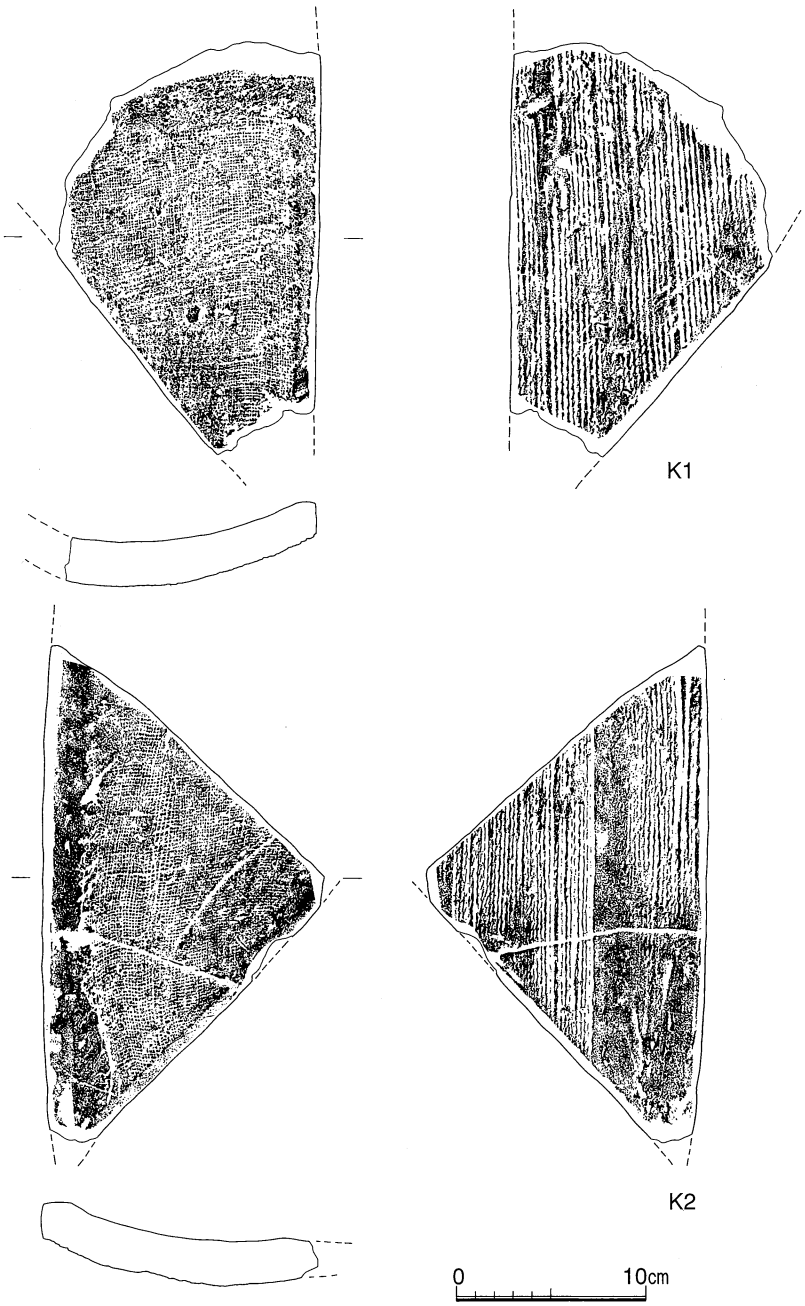



図106　P613　出土遺物

（1）中世（図102～107）

径0.2m前後の柱穴が散在的に認められた。出土した遺物も少なく、集落の末端部、それもそれ程大きくない集落の一部であると思われる。時期は微細な土器片ばかりであるが、大体13世紀前後の時期のようである。柱穴のうち、P609とP613からは中世に属すると考えられる土師質土器片とともに、隅切り瓦が出土した。いずれも凸面に縄目タタキ、凹面に布目が認められる。いずれも古代に属する時期と考えられる。出土状況は柱穴側面に沿うような状況であり、柱を固定するために柱穴掘り方に埋められたといえる。また厳密には中世の遺構面に属するのではないが、現水田上面の造成に用いられた包含層の二次堆積土層から、13世紀代と考えられる軒平瓦（K１）と平城宮6225式系と推測される軒丸瓦（K２・K３）の小片も出土した。

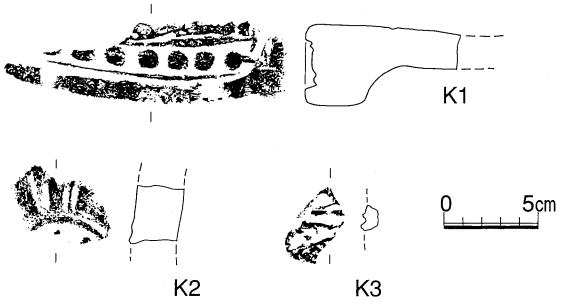


図107　包含層出土遺物

（2）古代（図108）

図108　大道西Ｄ区　古代遺構配置図

溝20（図109～112・114）

調査区中央付近で検出された溝である。大道西Ｃ区で検出された溝11と同じ溝である。遺構検出面は1.4m前後である。幅1.4～2.0mで、検出面から0.2mの深さで平坦となり、さらにその面では幅0.4m、深さ0.2mほど深くなっている。いわゆる２段堀りの断面形を呈する。

遺物は平瓦が主体で、若干土器や軒瓦などが出土した。注目されるのは溝20の上面で精査している際に出土した二彩陶器の破片である。出土時には溝20の輪郭はほとんど検出されていたことから、溝20の最終埋土に伴う遺物と考えてよい。小破片であることから、もう一色存在することは十分想定され、いわゆる三彩陶器である可能性もあるといえる。須恵器の杯(235)、皿(236)があるものの大半は

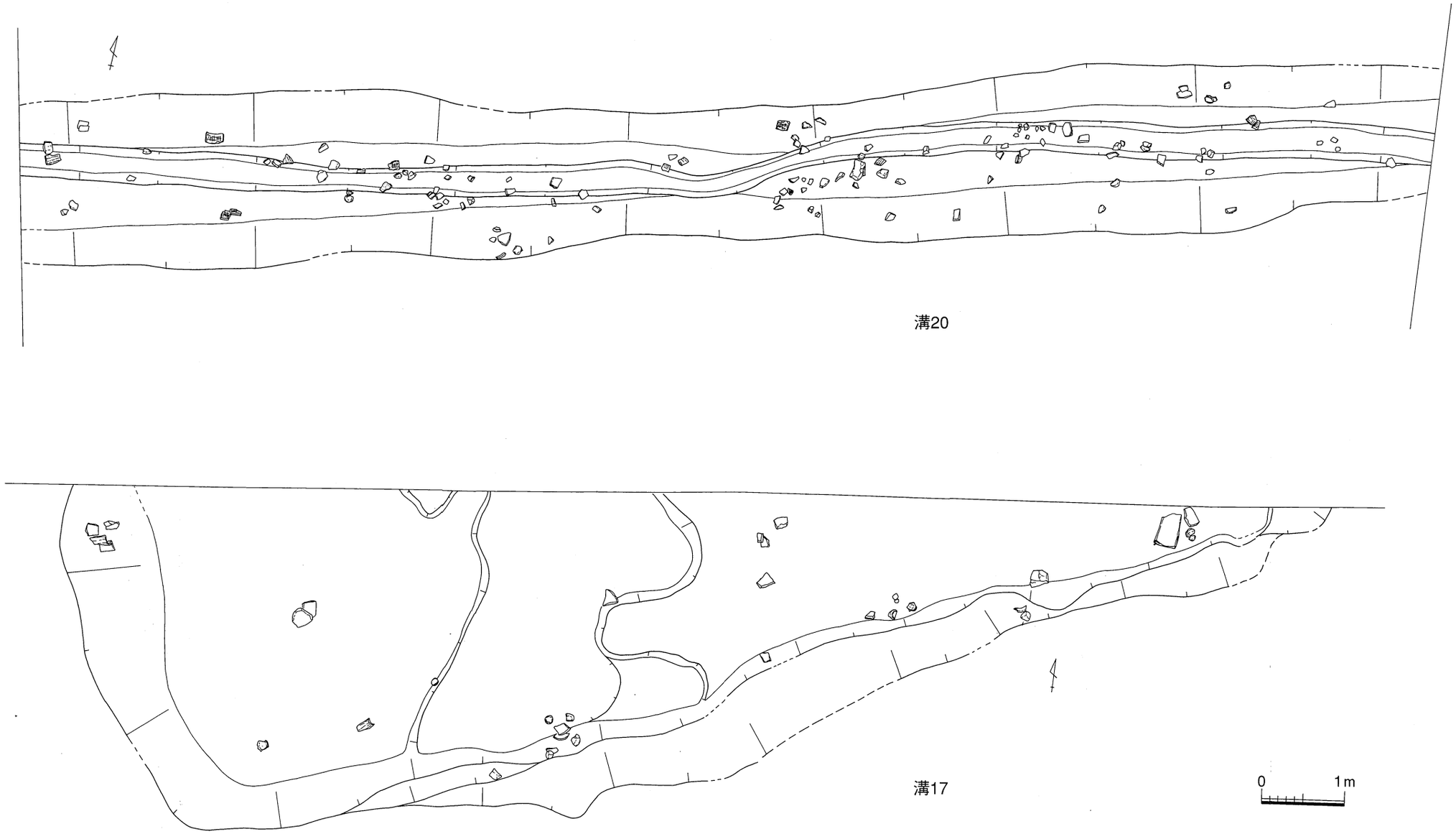



図109　溝20・溝17　遺物出土状況

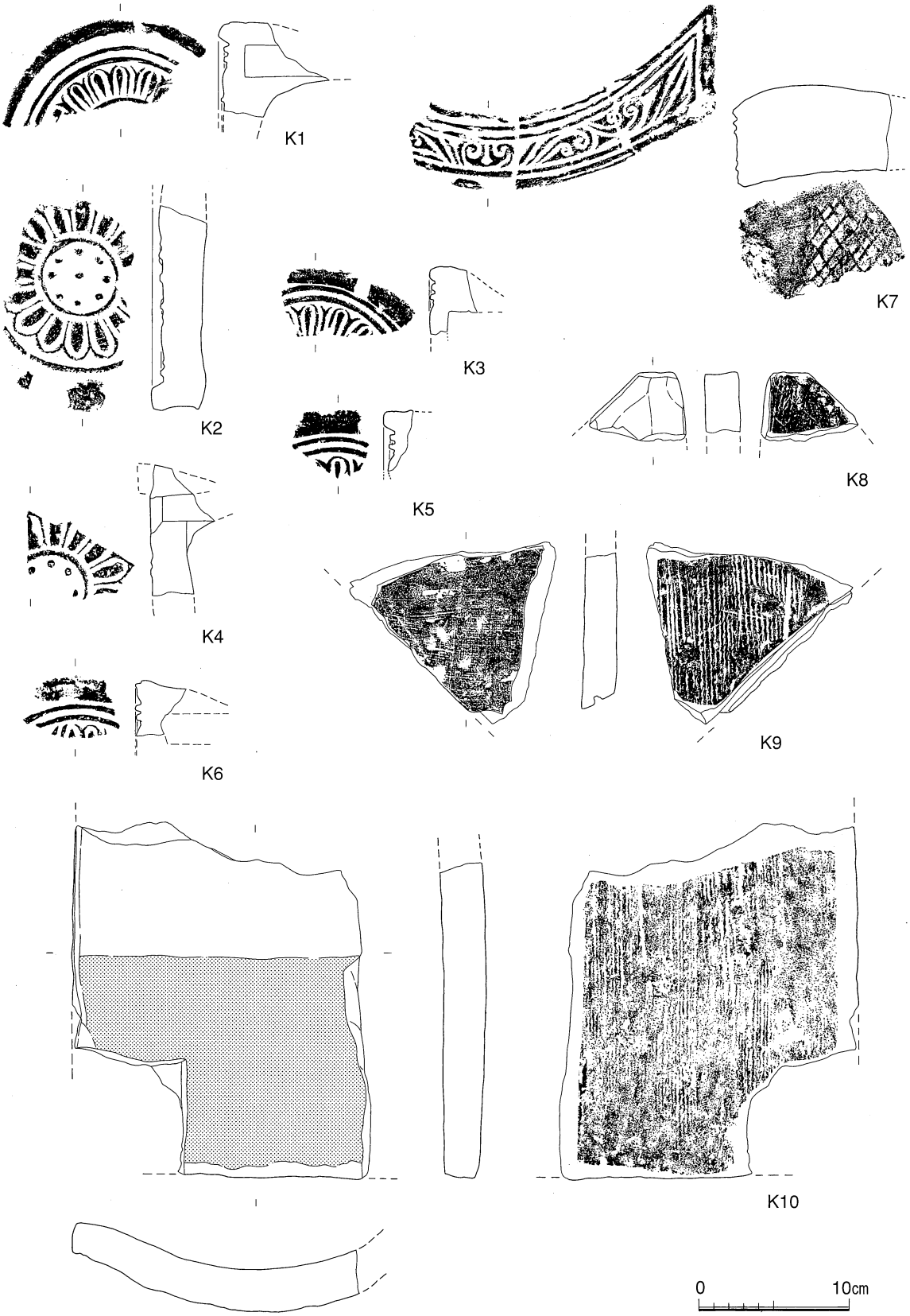



図110　溝20　出土遺物（1）

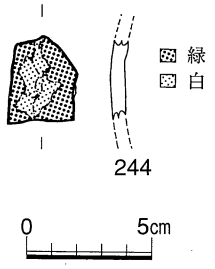



図111　溝20上面　出土遺物

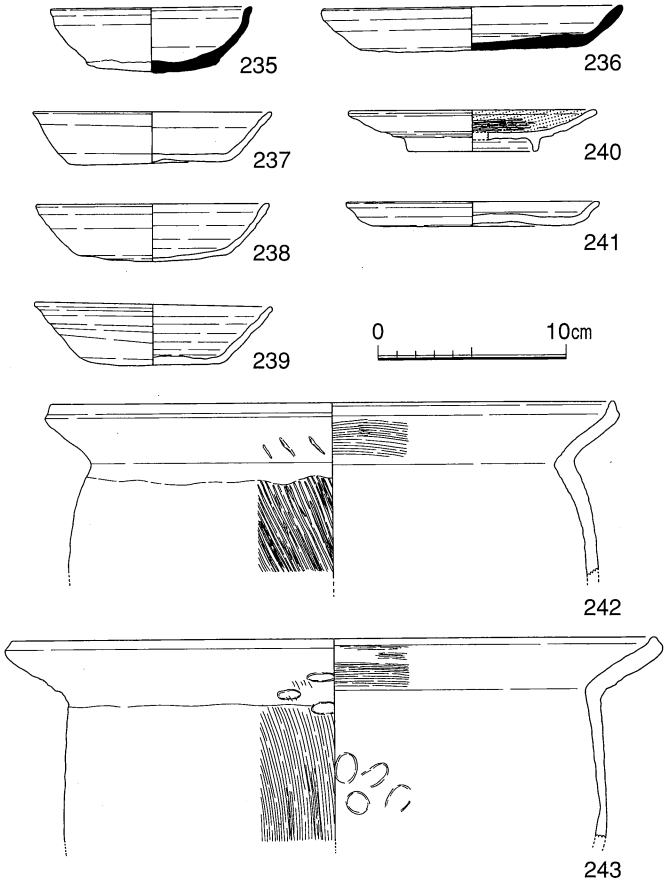



図112　溝20　出土遺物（２）

土師器である。土器の出土数は全体として少ないが、土師器主体の傾向がうかがわれる。杯(235)には内面に灯明痕を思わせるススの付着が認められる。杯(238)は外面に煤が付着しており、二次的な火を受けたことがうかがわれる。土師器の甕も２個体(242・243)が出土した。出土した瓦のうち(Ｋ１・Ｋ３・Ｋ５・Ｋ６)は平城宮6225式系の軒丸瓦で、(Ｋ２・Ｋ３)は間弁の省略化され、圏線も一本になった単弁の蓮華文軒丸瓦である。(Ｋ７)は平城宮6663式系の軒平瓦であるが、文様の陰陽が逆転している。凸部に格子状のタタキが認められる。(Ｋ８・Ｋ９)は隅切り瓦で、いずれも凸部には縄目タタキが認められる。(Ｋ10)は平瓦で、凹部には布目、凸部には縄目タタキが認められる。凹部には被熱痕跡が明瞭である。出土した平瓦片は同様に被熱痕のあるものが少なからず含まれているが、そのうち(Ｋ10)が最も大きい。図110のスクリーントーンで示した部分が被熱により赤化している。被熱痕のない部分は上面に平瓦が重なっていたと考えられる。つまりこの瓦が葺かれていた建物が火災を受けたことを示しているといえる。このほか、かなり脆くなっていたが、白色の凝灰岩片が出土しており、面取りしている部分の破片もあることから、ブロック状の形態であったことが推測される。石材自体がそれ程長期間安定するような性格でないことや、いずれも火を受けた痕跡があり、そのためにより脆弱な状態が加速されており、出土した石材の大半は取り上げ時および出土時に崩壊してしまった。ただし比較的全形の残存したものが隣接する大道西Ｅ区で出土した。溝20の時期は、軒瓦の傾向から８世紀代が上限で、下限は土器の年代観から９世紀後半前後といえる。

### （３）弥生時代後期（図113・114）

Ｐ633（図115・116）

調査区東南部で検出された土壙である。長さ1.8m、最大幅1.1m、最小幅0.9mの長楕円形、もしくはやや瓢箪形に近い平面形を呈する。遺構検出面は1.4m前後で、最深部の深さは検出面から0.3mで

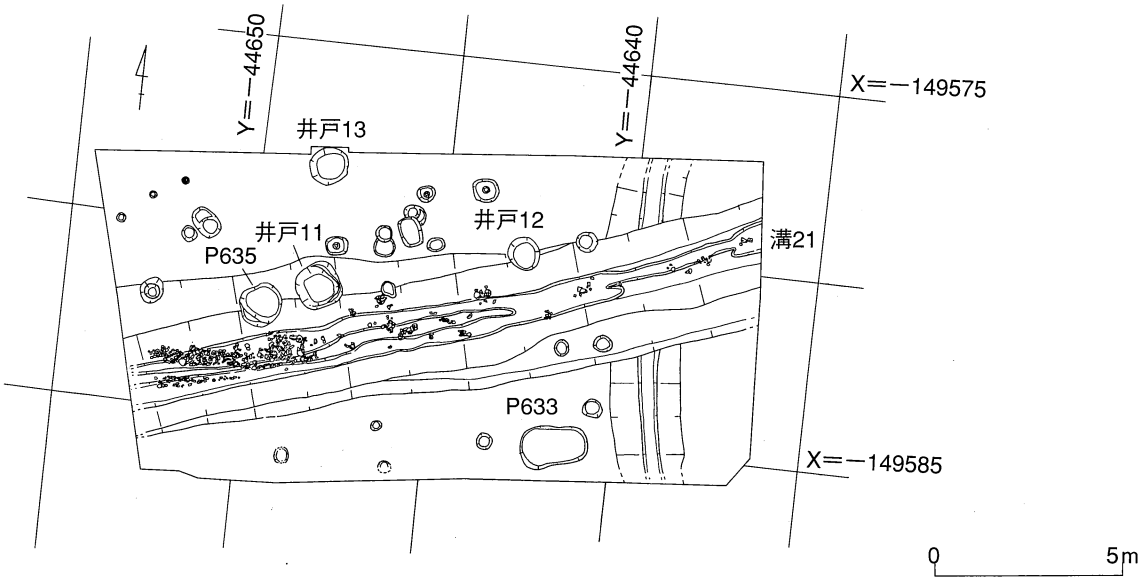



図113　大道西Ｄ区　弥生遺構配置図

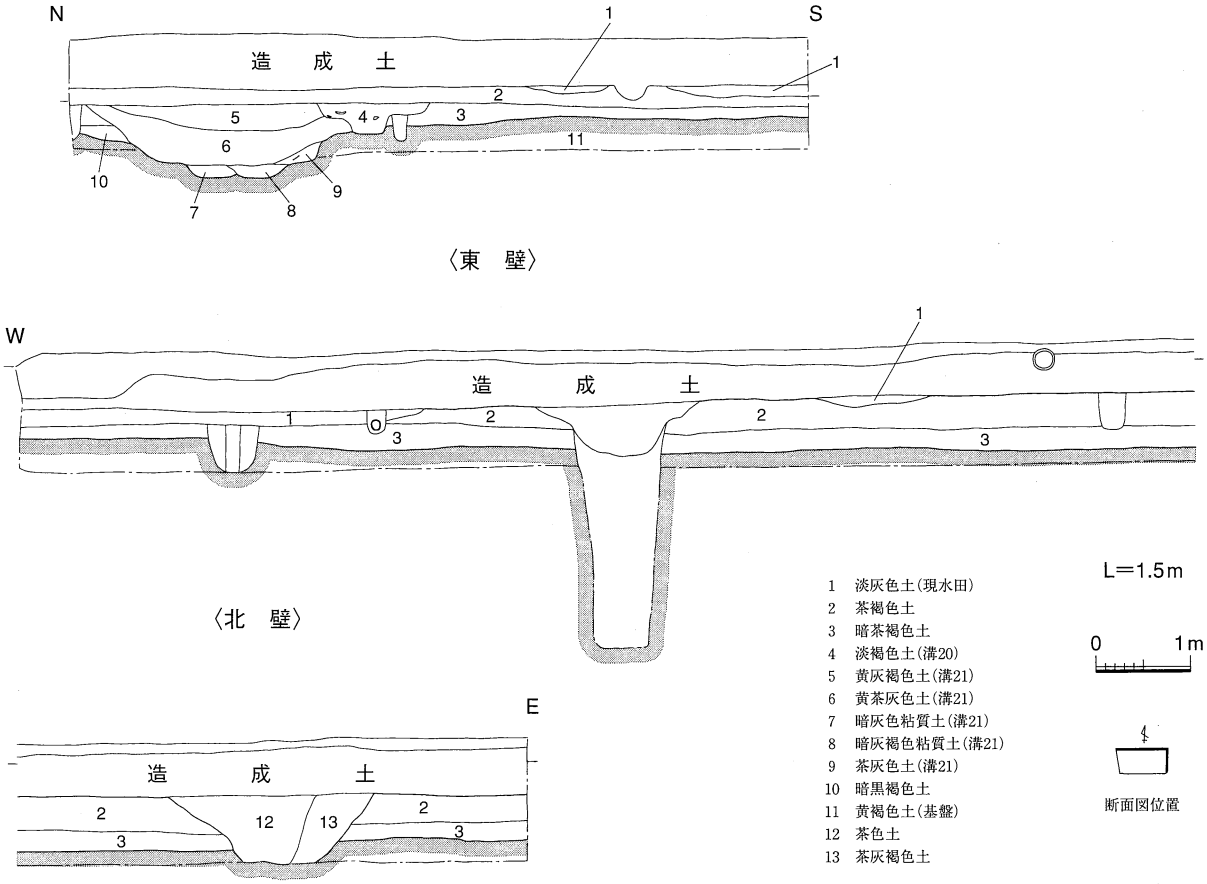



図114　大道西Ｄ区　断面図

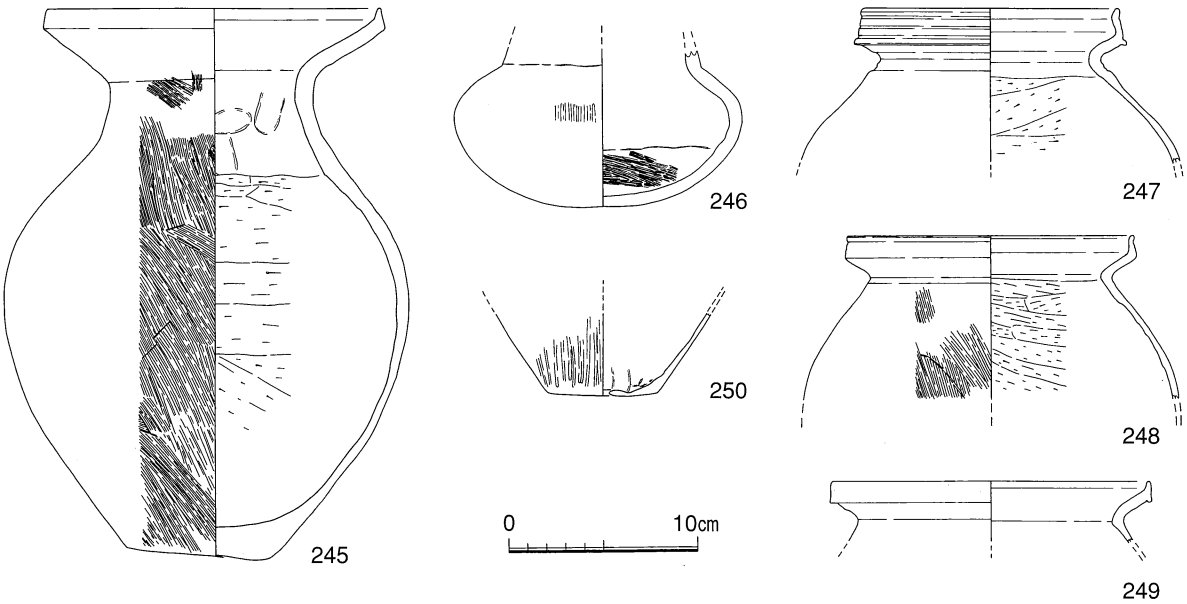



図115　P633　出土遺物

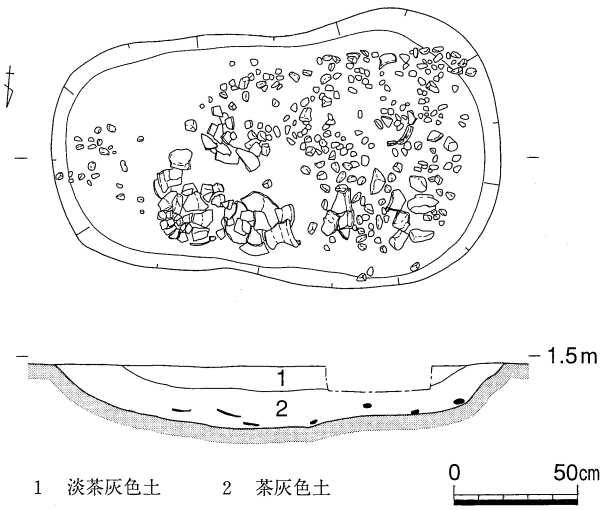



図116　P633　実測図

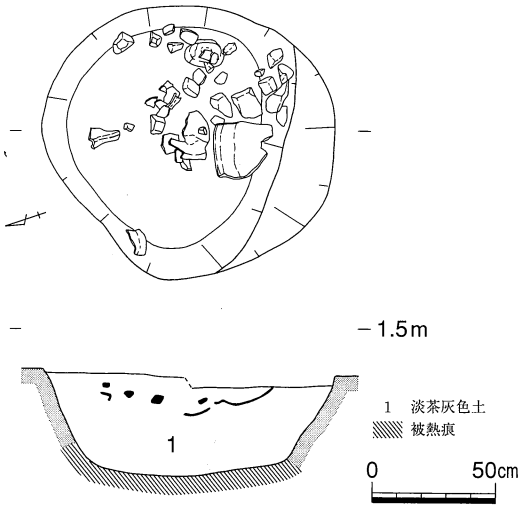



図117　P635　実測図

ある。断面形はU字形で、壁面は緩やかな傾斜である。埋土は上下2層で、下層である2層からのみ遺物が出土した。遺構中央から西半にかけて、長さ7～8cmの河原石が、検出され、それらは西側から流入した状態で出土している。おそらく河原石は南西コーナー付近から中央に向かって投棄されたのであろう。出土した土器のうち長頸壺形土器(245)はほぼ完形で、遺構中央の北端付近の底面に横倒しの状態で出土した。それに接して甕形土器(248)があり、下半は欠損しているが、上半はほぼ完形であった。そのほかの土器は河原石と混在して出土した。時期は弥生時代後期後半である。

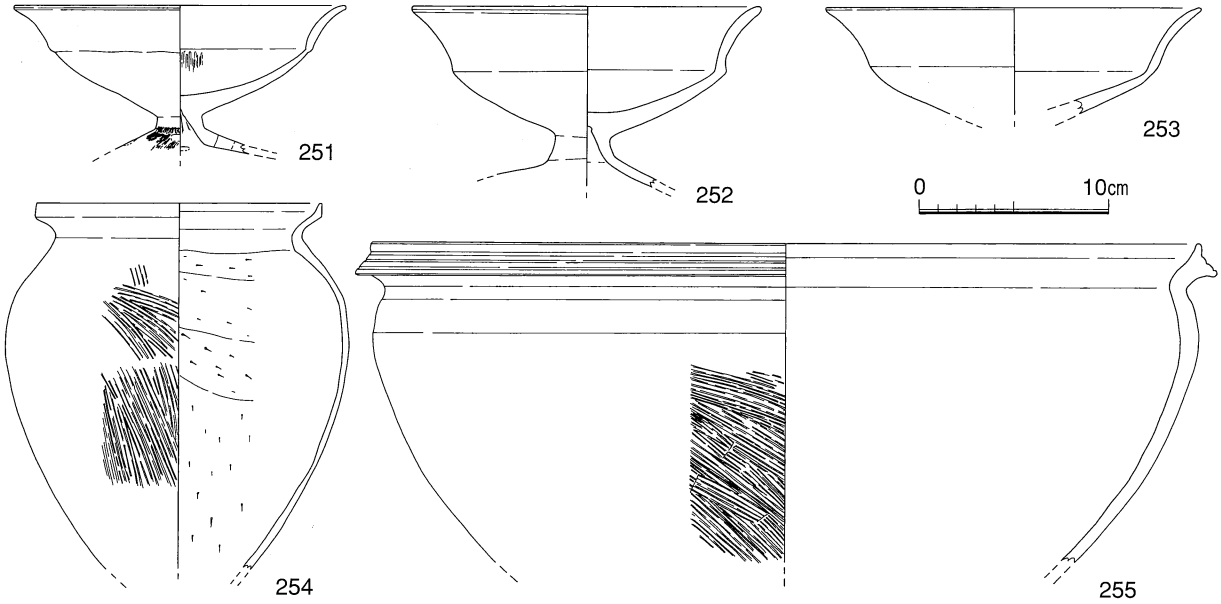



図118　P635　出土遺物

P635（図117・118）

調査区西側で検出された土壙で、溝21の上面から掘削している。切り合い関係的には溝21→P635ということになる。長径1.2m、短径1.1mのやや長楕円形気味の平面形を呈する。遺構検出面は1.4m付近で、最深部の深さは検出面から0.4mである。逆台形の断面形を呈し、底面はやや凹凸気味ではあるが、全体として平坦である。底面から壁の一部にかけて被熱によって赤化しており、炭などはほとんど出土しなかったが、火を焚いた可能性が強い。遺物は埋土の上半からまとまって出土した。土器とともに河原石が比較的多く含まれており、P633との親縁性もうかがわれる。また遺構南側から若干遺物のレベル高が下がる傾向があり、土器や河原石は南側から投棄された可能性が考えられる。土器はいずれも破片であり、図化できたのは高杯形土器(251～253)、甕形土器(254)、鉢形土器(255)である。弥生時代後期後半の時期である。

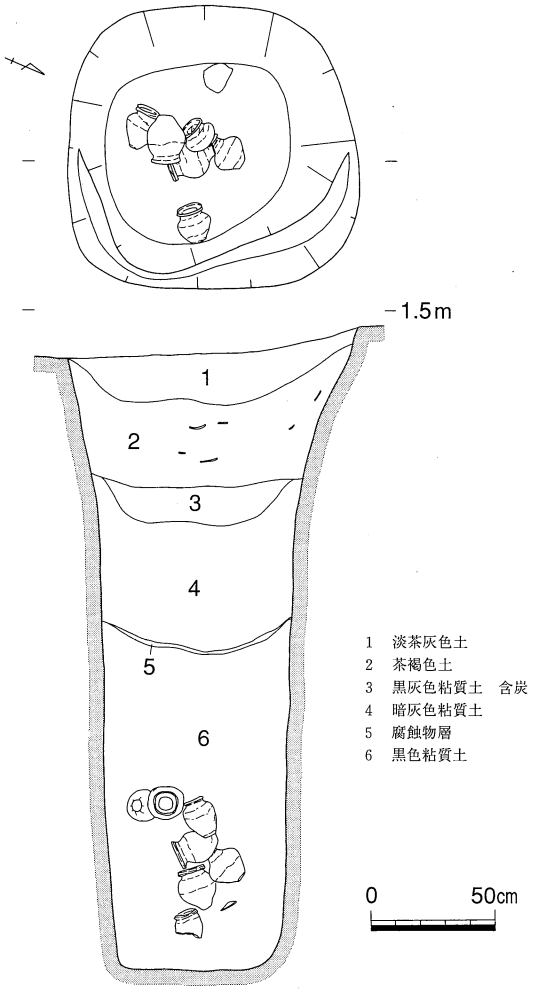



図119　井戸11　実測図

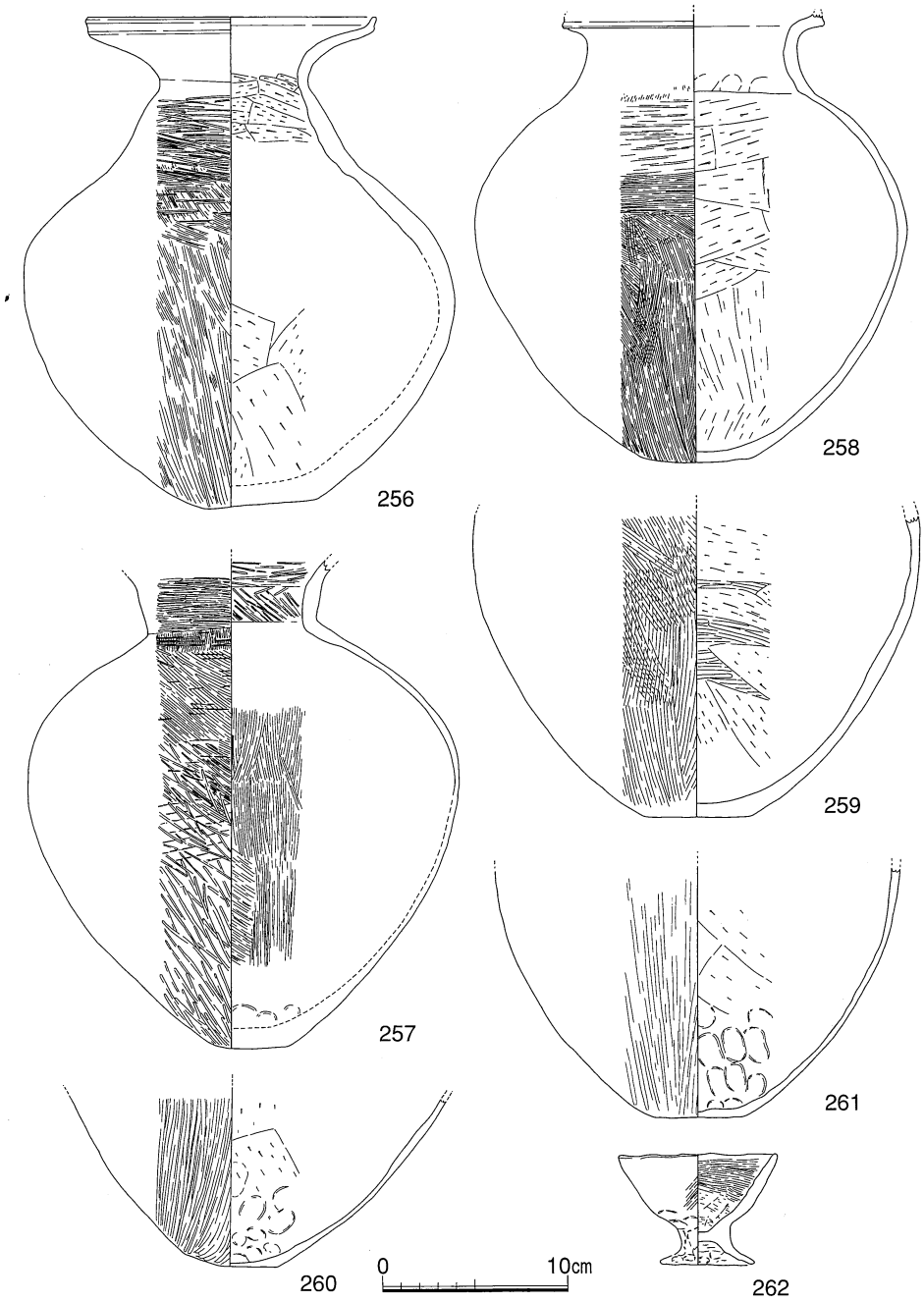



図120　井戸11　出土遺物（1）

井戸11（図119）

調査区中央やや西寄りで検出された井戸である。一辺1.1mの隅丸方形の平面形を呈する。遺構検出面は1.4m前後で、最深部の深さは検出面から2.4mである。断面形は検出面から0.6mの深さで窄まり、底から下はほぼ直線的底面まで掘られている。埋土は6層で、井戸廃絶後に自然に堆積したと考えられる5層の腐蝕物層を挟んで上･下の2層に分けられた。上層では主に2層から土器が出土したが、いずれも小片ばかりであった。下層の6層下半から底面にかけては、完形の土器を中心に数多くの土器が出土した。井戸廃絶時に意識的に投棄されたものと考えられる。壺形土器(256～258)、甕形土器（265～273)、底部(259～261・274)、高杯形土器(263・264)、鉢形土器(265～273)、台付鉢

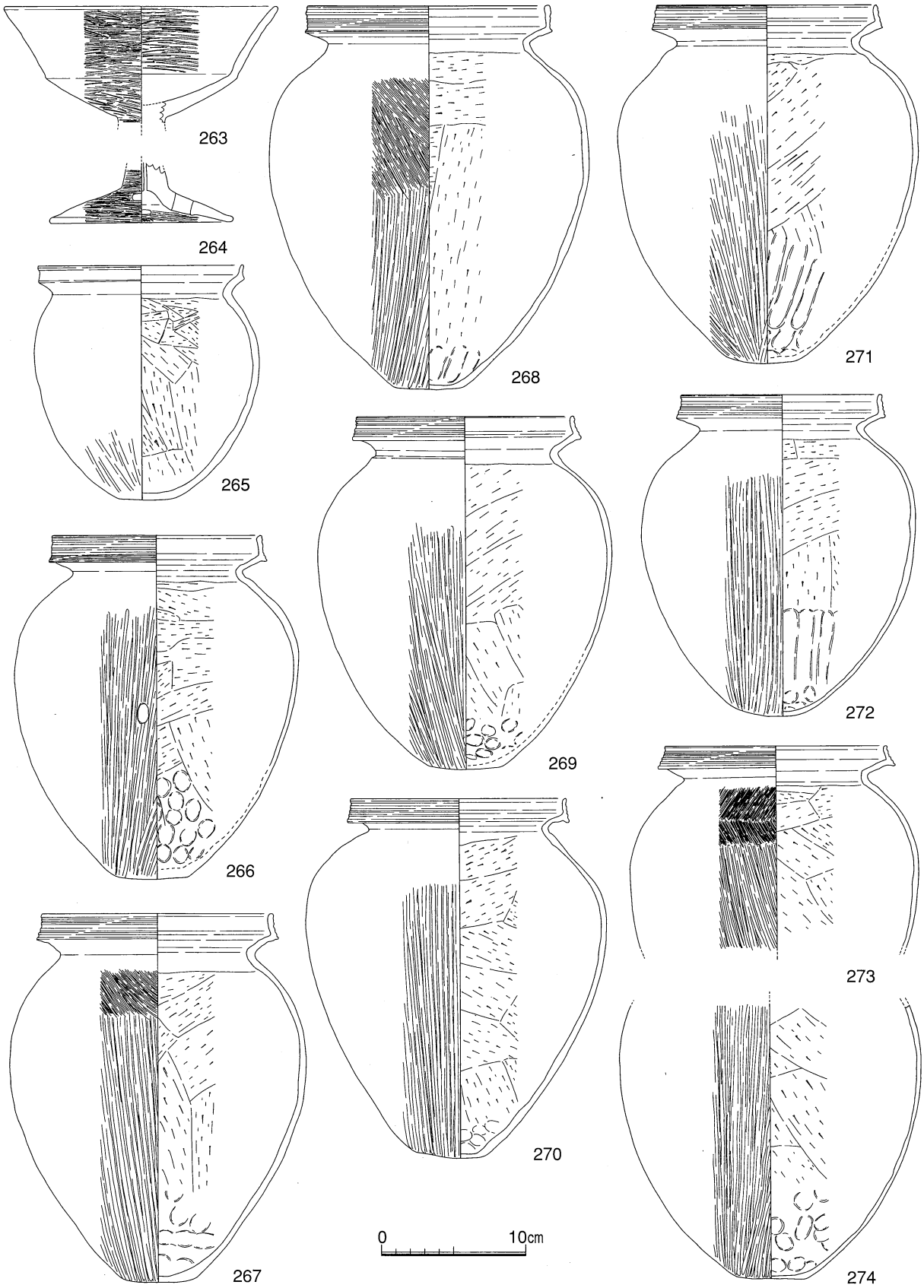



図121　井戸11　出土遺物（2）

(262) である。壺形土器は3個体あるが、いずれも異なった形態で、甕形土器はいわゆる吉備型甕といわれるものばかりである。壺(256)は讃岐西半地域からの搬入である(5)。

遺構の切り合い関係から溝21→井戸11の関係といえる。井戸11の時期は弥生時代後期末である。

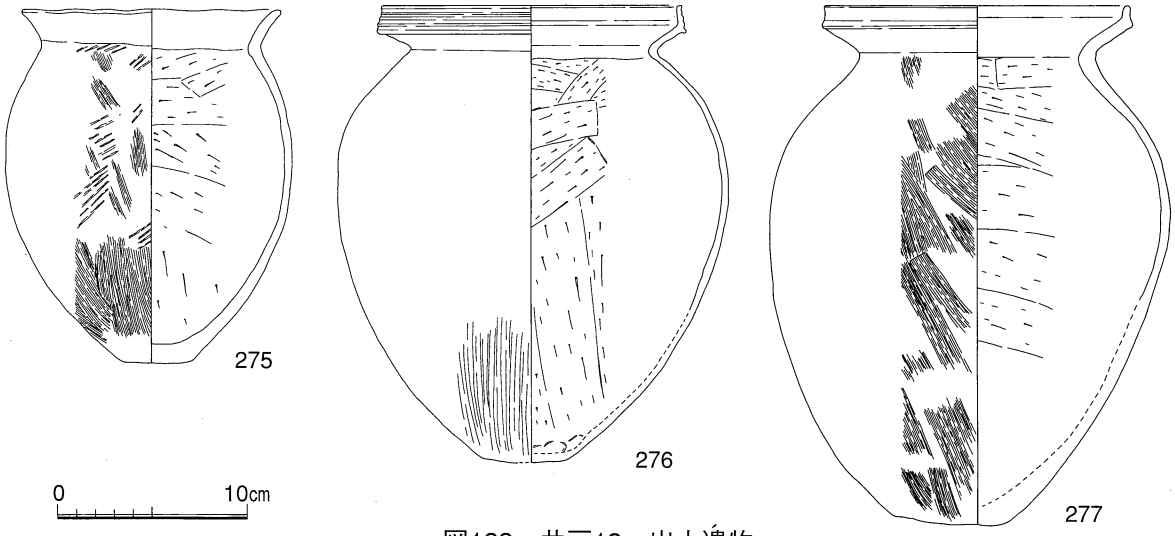



図122　井戸12　出土遺物

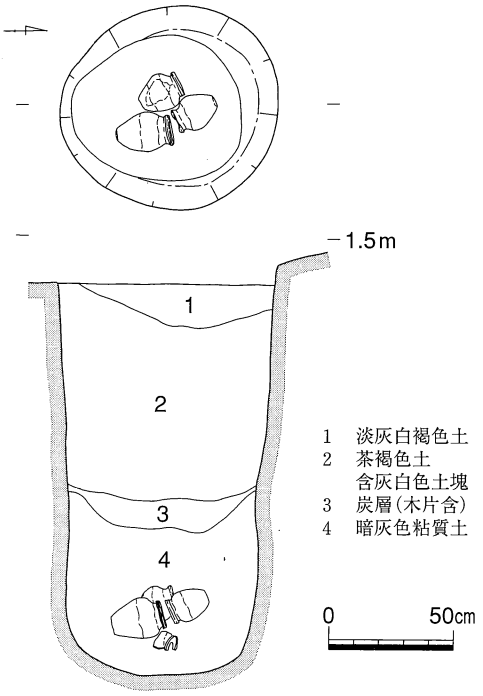



図123　井戸12　実測図

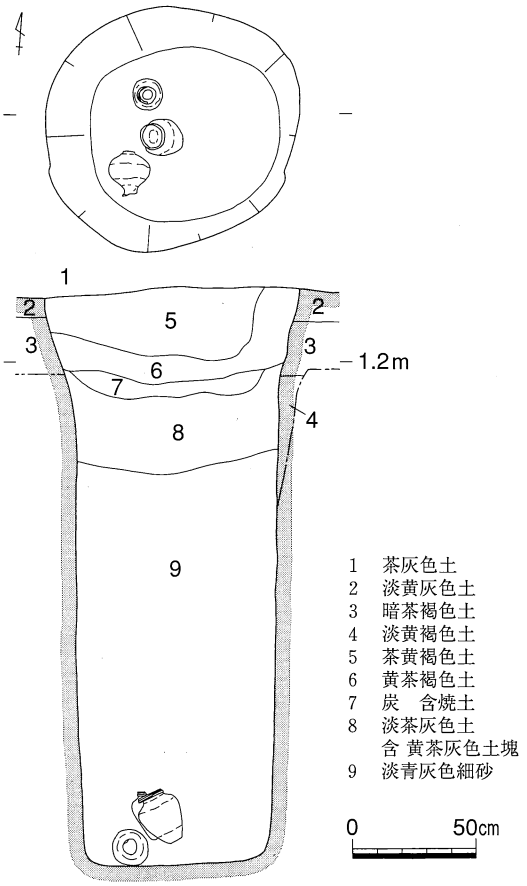



図124　井戸13　実測図

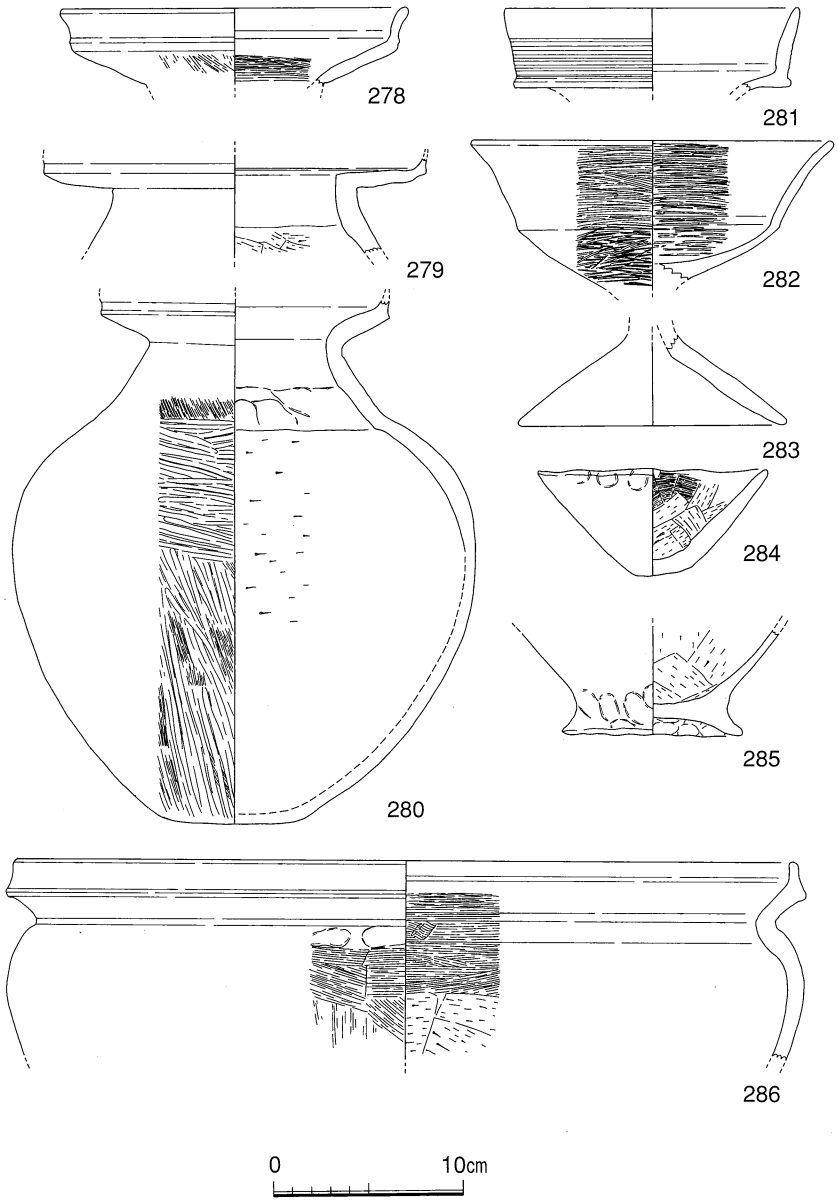



図125　井戸13　出土遺物（1）

井戸12（図122・123）

調査区中央やや東寄りで検出された井戸である。溝21の埋土上面から掘削している。径0.8m前後の円形の平面形を呈する。遺構検出面は1.4m前後で遺構最深部は検出面から1.54mである。検出面から0.8mまではほぼ垂直に下降し、底から若干ふくらみ気味に壁面を抉って底面となる。井戸は4層であるが、3層を境に上･下の2層に分離できる。上層にはほとんど遺物が含まれていなかった。4層の下半からは完形の甕形土器が3個体まとまって出土しており、意識的に投棄されたことがうかがわれる。炭層（3層）については全面に広がっていたが、焼土や壁面などに被熱痕が認められないことから、この場で火を用いたとは考えられず、土器を投棄した後に炭を井戸中に投棄したのであろう。出土した土器はいずれもいわゆる煮沸甕であり、表面には使用をうかがわせるススの付着が観察される。具体的な根拠はないが、4層の甕と3層の炭層との有機的な関係が推測される。出土した甕形土

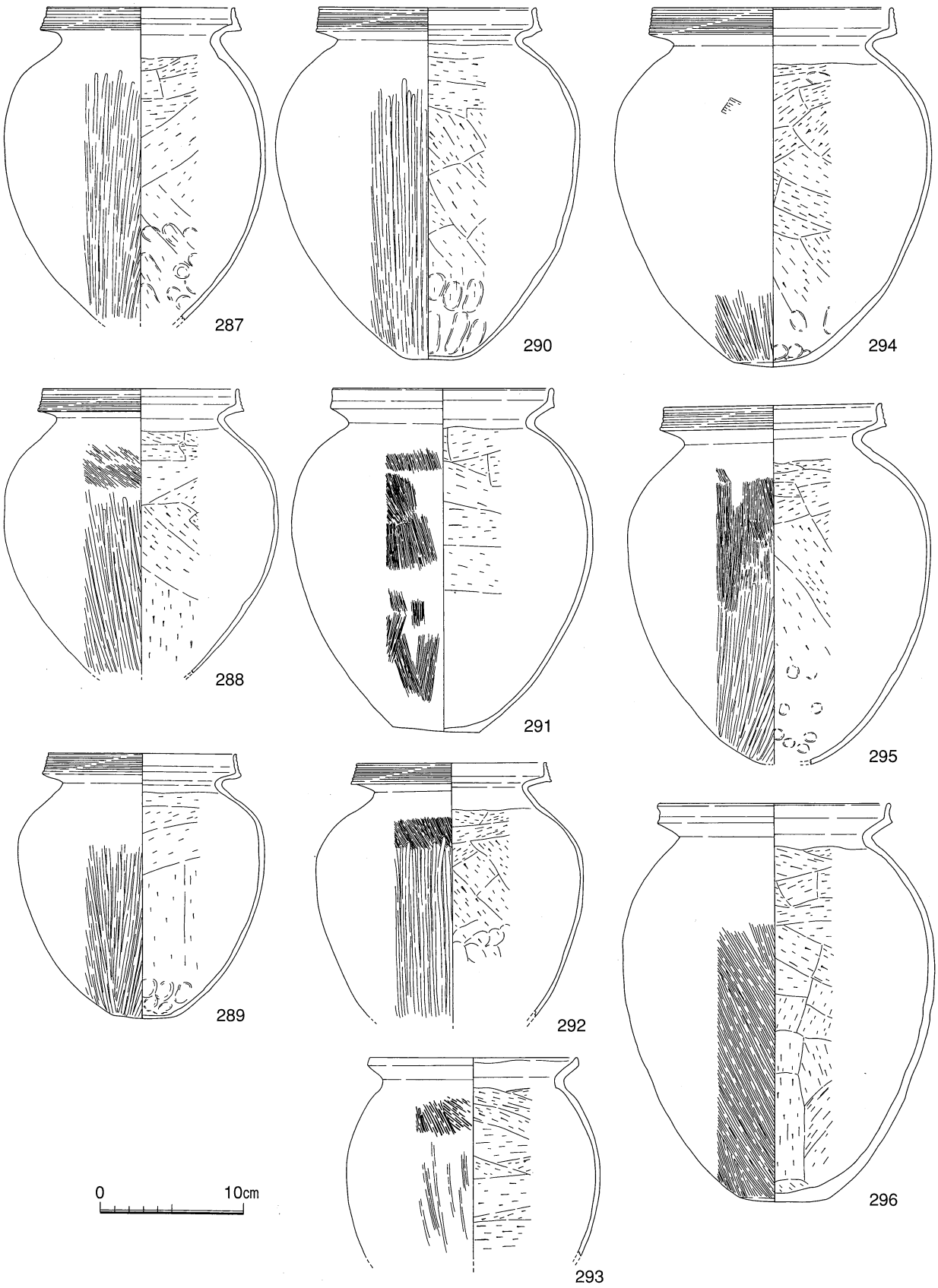



図126　井戸13　出土遺物（２）

器は3個体で、三者三様の特徴を有する。「く」の字形の口縁形態で外面にタタキを施すもの(275)、いわゆる吉備型甕といわれるもの(276)、若干口縁端部を上方に拡張するもの(277)である。これらの時期は弥生時代後期末といえる。

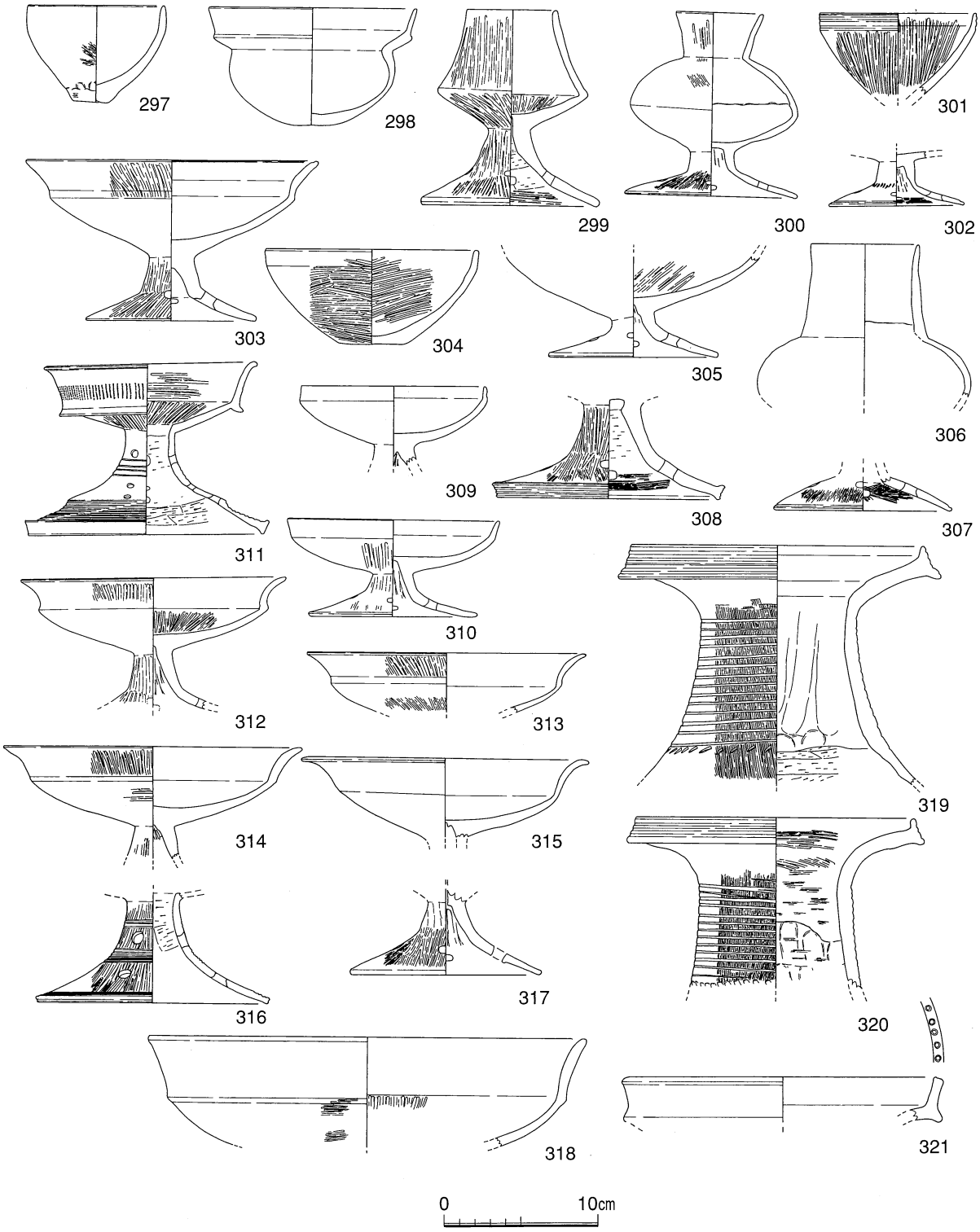



図127　溝21　出土遺物（1）

井戸13（図124～126）

調査区中央やや西よりの北端で検出された井戸である。径1.0mの円形の円面形を呈するが、底面では隅丸方形気味となる。遺構検出面は1.0m付近で、最深部までの深さは検出面から2.3mである。検出面から0.3mの位置で若干窄まり、そこからほぼ垂直に底面まで下降する。埋土は5層あり、9層までは一気に埋まり、それ以降は5～8層の4層に分かれていることからも、やや複雑な埋没過程がうかがわれる。その反面、5～8層中からは遺物がほとんど出土せず、大半が9層から出土した。9層出土の土器のうち、底面付近に完形の土器群があり、それらは甕形土器(287～296)が主体であったが、壺形土器(280)も一点含まれていた。ただし、壺形土器(280)の表面には煤が付着している。出土した甕形土器のほとんどが表面に煤が付着しており、壺形土器(280)も甕形土器と同様に煮沸に用いられたことがうかがわれる。9層上半部からは壺形土器の口縁部(278・279・281)、高杯形土器(282・283)、鉢形土器(284)、底部(285)、鉢形土器(286)の破片が出土している。同一層内からの出土ではあるが、底面付近の完形の土器群が人為的に投棄されたものと考えられる一方で、それらは混入した可能性が考えられる。注目されるのは壺形土器(281)である。これはいわゆる向木見型の特殊壺形土器の破片である。これらの土器群は弥生時代後期末の時期である。

溝21（図98・113・114・127・128）

調査区中央付近で検出された溝で、調査区の中で若干北へ方向を振りながら、直線的な平面形で掘削されている。大道西C区で検出された溝13と同じ溝である。遺構検出面は1.5m付近で、最深部の深さは0.8mである。溝13と比べると若干レベル高が深くなっており、西から東へ流れていた可能性が推測される。断面形も溝13と同様でU字形あるいは台形に一段掘り込まれ、中央付近で幅0.3m、深さ0.1mほどさらに一段深く掘り込まれている。下段は2回の掘り直しがうかがわれる。検出面での幅は3.0mである。埋土も溝13と同様で5層あり、5・6層の上層と7～9層の下層に分けられる。ただし溝13とは異なり、上層の下半である6層、特に東半部では遺物が極めて少なかった。したがって溝21の上層の土器群は溝に万遍なく分布するのではなく、いくつかのブロックに分かれている可能性が高い。溝21で出土した土器群と溝13で出土した土器群は同じブロックに属するといえる。器種構成をみると、集落から出土する器種はほとんど揃っている。ただ溝13の西半で完形の長頸壺がまとまって出土したのと比べると、溝21では完形品はなく、頸部以上の破片だけであった。長頸壺形土器の口頸部は意識的に打ち欠いて壺の器台として用いたという意見もあり(弘田1999)、当遺構からの出土状況はその点を考慮させられる。小型器台(311)は完形で、胎土的には一般の土器と同じである。溝の東端付近から出土し、近接して鉢形土器(297)が出土した。台付長頸壺(306・307)は同一個体と推測され、いずれも表面に丹が塗布されている。丹塗りの土器の出土は極めて少なく、溝21からはこの1点だけである。これらの土器群の時期は弥生時代後期中葉である。

3層出土遺物（図129）

弥生時代後期の基盤層である2層・3層・1層のうち、2層と3層については土質的には包含層とよく似ており、もしそうだとするとかなり古い時期であることが予想された。そのため、2層と3層は精査しながら面的に掘り下げた。その結果3層からサヌカイト製の石鏃(S1)が一点出土した。それ以外の遺物は全く出土しなかった。縄文期と推測されるが、明確な根拠はない。

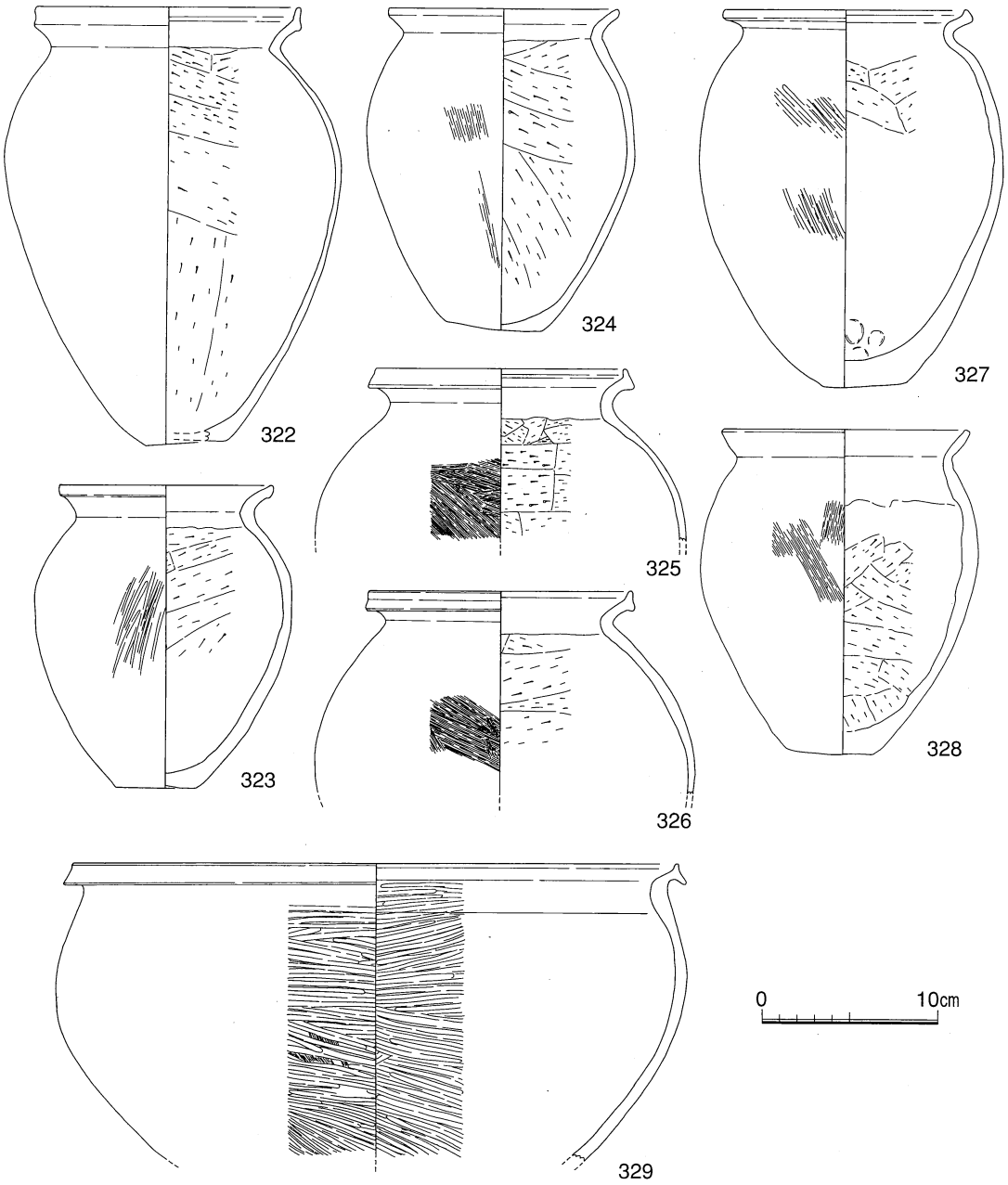



図128　溝21　出土遺物（2）

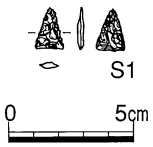



図129　大道西D区3層　出土遺物

## Ⅸ　大道西Ｅ区（図138）

中央ベルトの土層関係から概観すると、現在水田の耕土直下には古代後半～中･近世の水田層（１･２層）が広がる。しかし、調査区の南側では基盤層（13層）のレベル高が高くなっていることから、水田層は認められない。より基盤層の高い位置からの古代の斜面堆積層（３～７層）があり、この調査区の位置は地形の変換点に相当していると考えられる。また北壁にも示されているように調査区の西側でも、古代後半～中・近世の水田層の基盤層はレベル高が高くなっている。つまり東西方向からも地形の変換点に位置するといえる。遺構面は５面あり、このうち最も遺構が多いのが古代である。

### （１）近世（図130・138）

現在水田の耕土直下における近世水田層（北壁－１層）を除去後に検出された遺構面である。検出面から２～３cmほどの浅い素掘溝状の遺構ばかりで、水田耕作に関するものといえる。これらの方向性は調査区と周囲の現況の地割りとほぼ合致している。

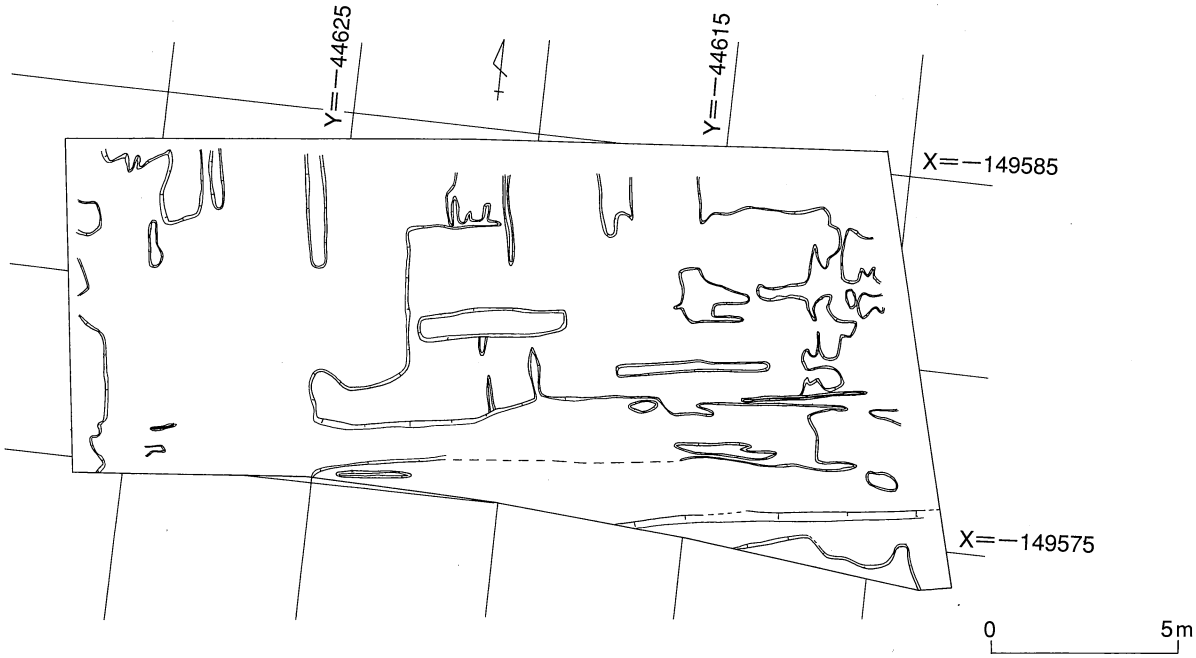



図130　大道西Ｅ区　近世遺構配置図

### （２）古代後半～中世（図131・138）

土器溜まり（図132・133）

調査区北半２/３ほどの範囲に古代後半の水田層（中央ベルト－１層、北壁－２層）が広がる。この水田層に対応して基盤層が掘削されていることから、この範囲が該期の水田域である可能性が高い。また12世紀～13世紀の時期と考えられる柱穴を主体とした遺構がこの水田層の上面で検出されたことから、古代後半期にややレベル高の低い部分を中心に水田開発がおこなわれたものの、中世には再び集落域になったといえる。土器溜まりは、水田と微高地の境付近に位置し遺構の輪郭もはっきりしないことから、斜面堆積の可能性も考えていたが、ほぼ完形の土器が同じレベルで並んでいることや、この位置が水田域の境に位置することから、人為的に形成された遺構と判断した。土器溜まりの範囲は東西1.7mで、線状に土器が並んでいる。検出面は1.4m前後である。椀は全て伏せられた状態で出土

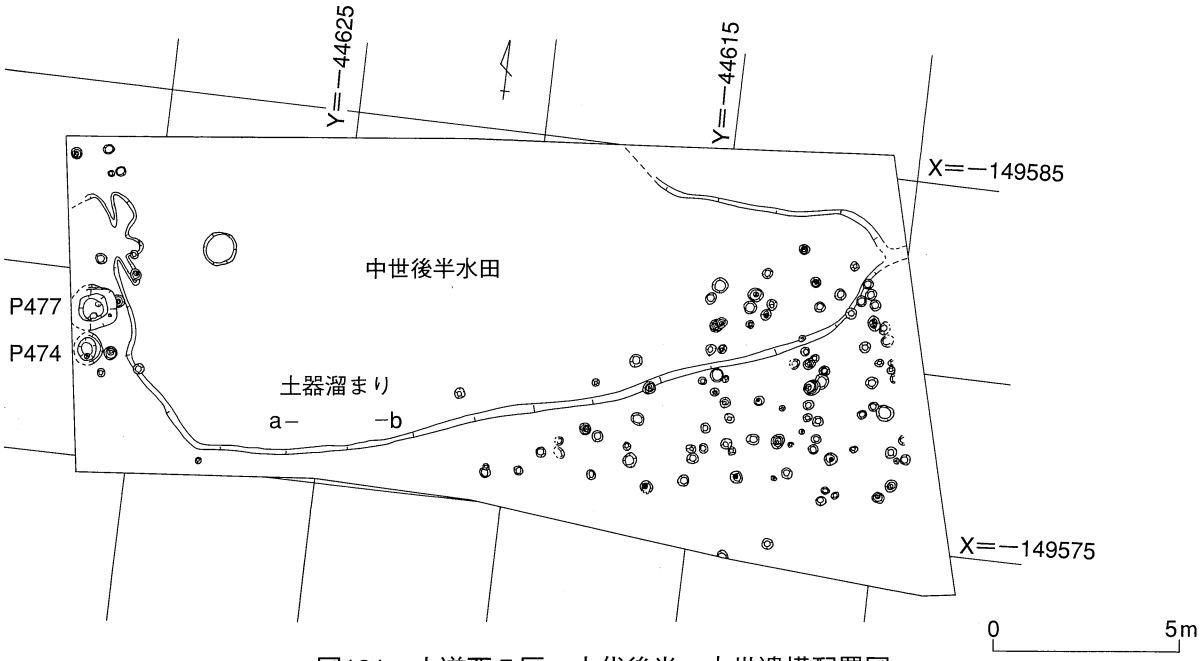



図131　大道西Ｅ区　古代後半〜中世遺構配置図

した。遺物の構成は、内面黒色処理された椀(330)、土師器椀(331〜335)、土師質杯(337・338)、土師器皿(336)である。時期は10世紀末と考えられる。

Ｐ474・Ｐ477（図134〜136）

調査区西端で検出された土壙である。

Ｐ474は径0.8m前後の円形の平面形を呈する。遺構検出面は1.4m前後、最深部は検出面から0.4mである。断面形はやや傾斜の急なＵ字形であるが、比較的凹凸が認められる。埋土は３層で、ブロック的な堆積であることから、人為的に埋められた可能性が高い。

遺物は完形の土師質土器椀(339)が底部南側から伏せられた状態で出土した。時期は12世紀後半といえる。

Ｐ477は遺構の西端が調査区外へ出るため、全形は明確でないが、検出できた部分から一辺1.2mほどの隅丸方形気味の平面形が推測される。遺構検出面は1.4m前後で、検出面から0.2mの深さで段が付き、中央付近が一辺0.7mほどの

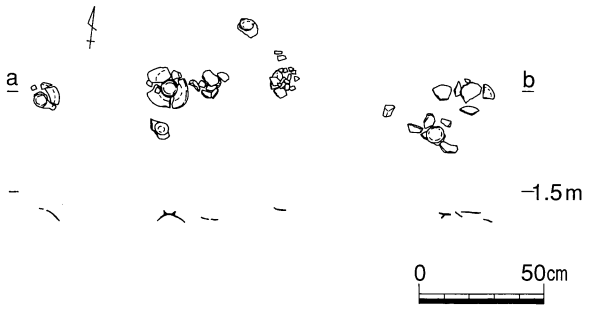



図132　土器溜まり　実測図

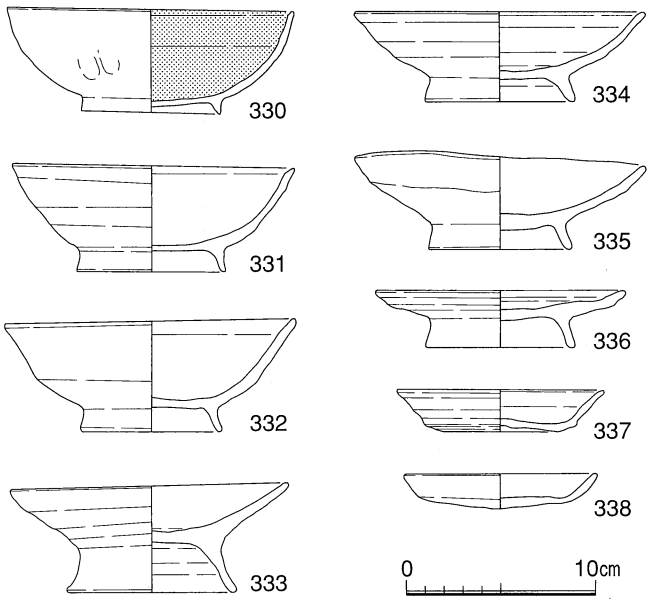



図133　土器溜まり　出土遺物

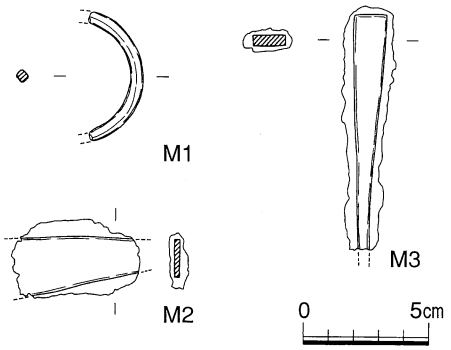
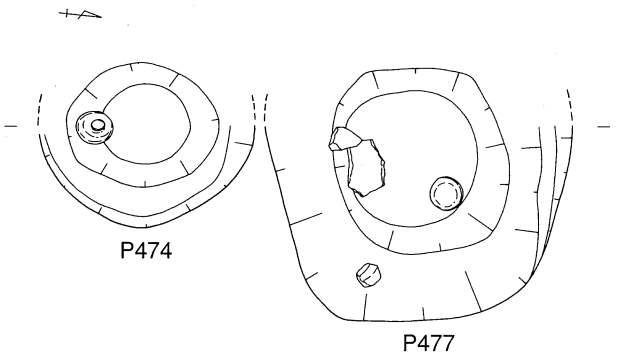



図134　P477・P479　出土遺物（1）



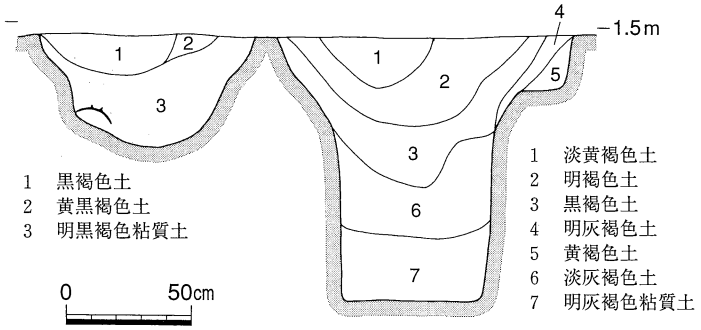




図135　P474・P477　実測図

隅丸方形の平面形で深くなっている。ほぼ垂直に底面まで下降することから、井戸の可能性が考えられる。最深部の深さは検出面から1.0m前後である。埋土は7層で各層から遺物は出土したが、完形の土師質土器椀(340)と皿(342)は7層から出土した。椀(340)の底部外面には「上」の墨書がある。意識的に投棄されたものと考えられる。図化できた白磁碗片(341)は2層から出土し、他に平瓦も出土した。平瓦は凸面に縄目タタキ、凹面に布目があり、古代の時期の属するものであろう。土器の他に輪状の銅製品(M1)、鏨状あるいは刀子状の鉄製品(M2・M3)も出土した。P447の時期は椀(340)から12世紀中葉といえる。

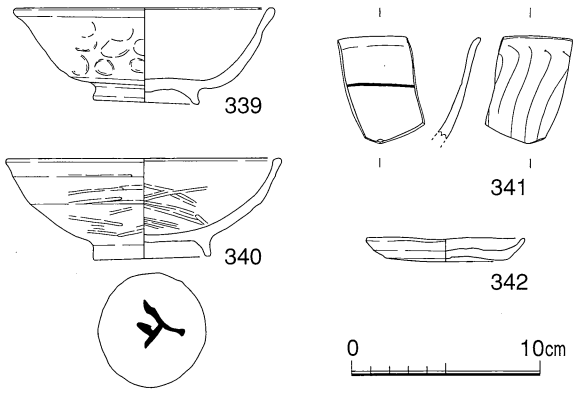



図136　P477・P479　出土遺物（2）

（3）古代（図137）

柱穴列1（図139）

いわゆる布掘り状の柱穴列である。柱穴掘り方は一辺0.6～0.7mの方形を呈し、その間を幅0.5m、長さ1.0mの溝で連結している。遺構検出面は1.5m付近で、西側の柱穴の底面は検出面から0.6m、東側の柱穴の床面は検出面から0.5mで、西側の方が若干深い。柱痕は認められなかったが、連結部分の底面から径8cmほどの枝打ちをおこなっただけの丸太材が出土し、柱の倒れ込み等を防止するための添え木と考えられる。柱穴列1は柱穴列2と軸方向が同一線上になることから、一体のものである可能性が高い。さらに柱穴列1の西側に柱穴が認められないことや、柱穴列1の西側にあるP554が巨視的にみるとL字形の平面形の溝にもみえることから、柱穴列1と2で構成される区画があり柱穴列1はその区画の北西コーナー付近に相当することも推測される。

図137　大道西Ｅ区　古代遺構配置図

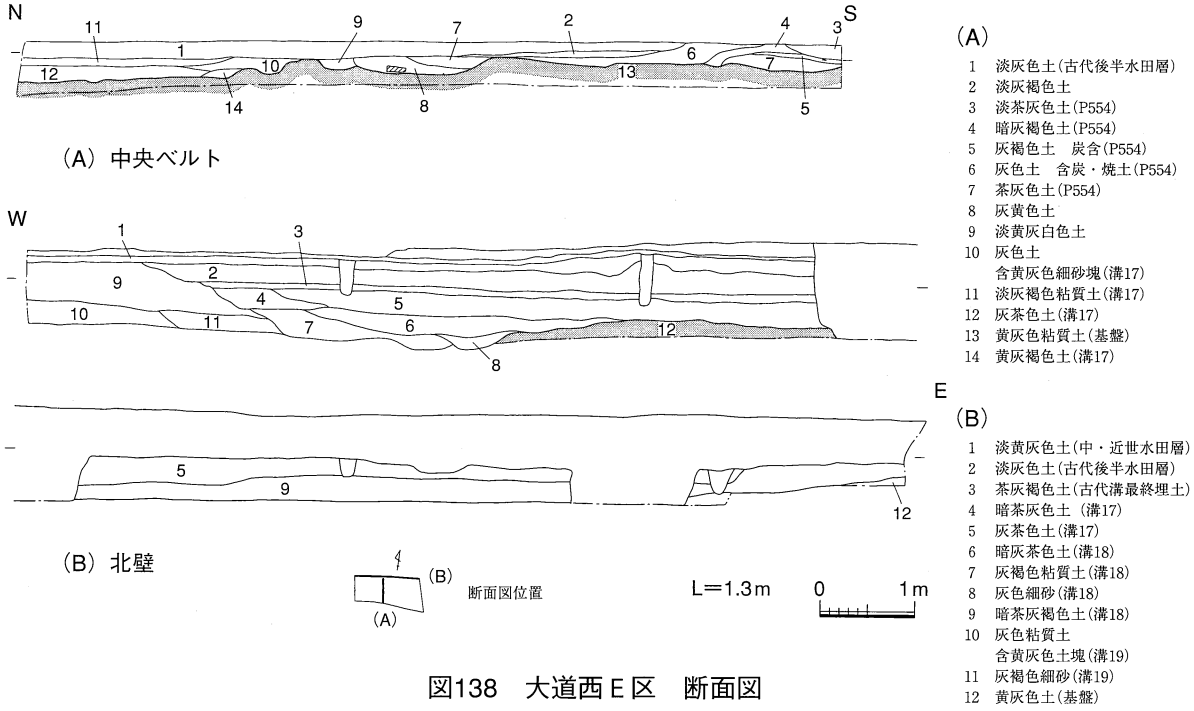



図138　大道西Ｅ区　断面図

柱穴列２（図140）

調査区東端で検出された柱穴列である。柱穴の掘り方は一辺0.4m前後の方形の平面形である。遺構検出面は1.4m前後で、最深部の深さは検出面から0.2mである。径0.15〜0.2mの柱痕跡が認められる。芯心間の距離は1.5mである。遺構底面でのレベル高は異なっているが、柱穴列１と軸方向が同一直線上になることから、一体のものである可能性が高い。さらに柱穴列１との間が4.2mある。
柱穴列１が区画の北西コーナー付近に相当すると推測されることから、柱穴列１と柱穴列２の間は区画への入り口的な性格が考えられる。

P554（図137・138・141・142）

調査区中央付近で検出された土壙であるが、柱穴列１と柱穴列２によって示される区画の北西コーナー付近を画する溝状の遺構である可能性も高い。遺構検出面は1.4m付近で、最深部は検出面から0.2mである。幅2.4m、長さ６m以上の規模で、輪郭が若干凹凸気味である。遺構北端部と溝17の間はかなり凹凸があり、浅い土壙が連続的に掘られたようにみえる。それらはP554と溝17の間で幅１m前後にのみ認められることから、P554であふれ出た水が流れ出た痕跡と考えるのが妥当であろう。土層断面は図138の中央ベルトに示された３～７層である。炭や焼土が顕著に含まれる土層が認められ、出土した遺物にも被熱痕の認められるものがあることから、南側の区画内にある建物が火災などの影響を受けた可能性が推測される。おそらく火災後に一気に埋められたのであろう。

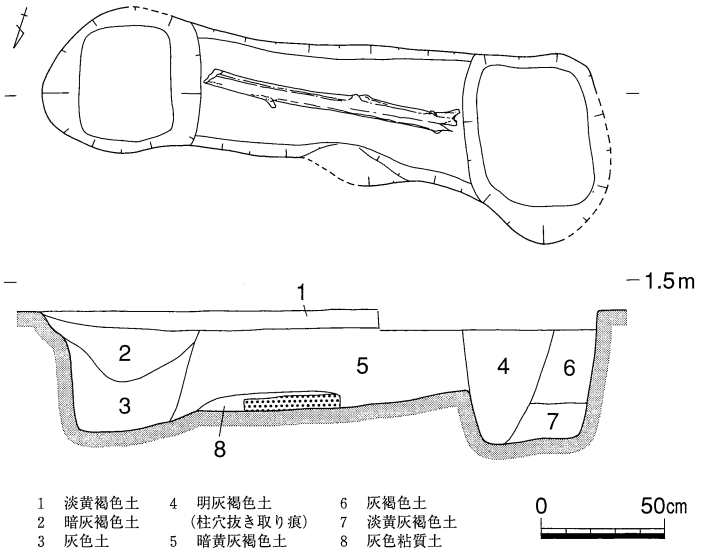



図139　柱穴列１　実測図

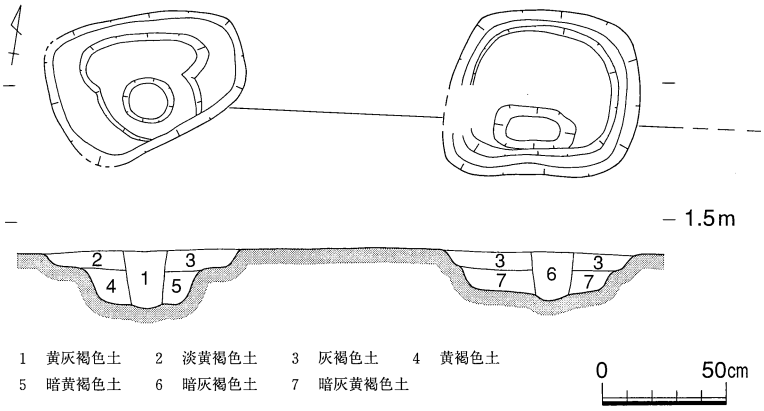



図140　柱穴列２　実測図

遺物は遺構埋土全体から出土したが、南端付近（図137・141）で、須恵器杯（343～350）、土師器杯（353・354）が重なった状態で出土した。周辺には土器の小片も南側から落ち込んだ状態で出土していることから、出土した杯についても杯を重ねて紐で縛った状態のままで投棄されたことがうかがわれる。杯には内側の口縁端部に煤が付着しているもの（343・351～354）がかなりあり、灯明皿として用いられた痕跡と考えられる。出土した遺物は図化したもの以外に平瓦片もかなり出土した。これらの時期は８世紀代といえる。

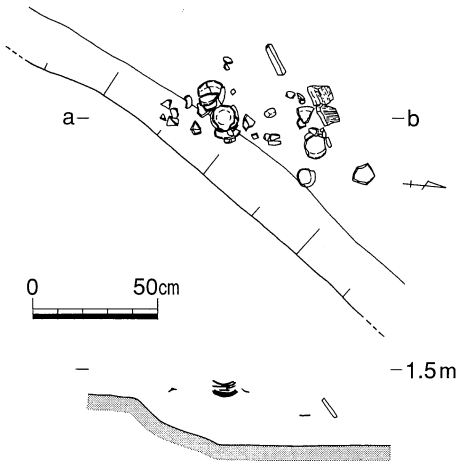



図141　P554土器溜まり　遺物出土状況

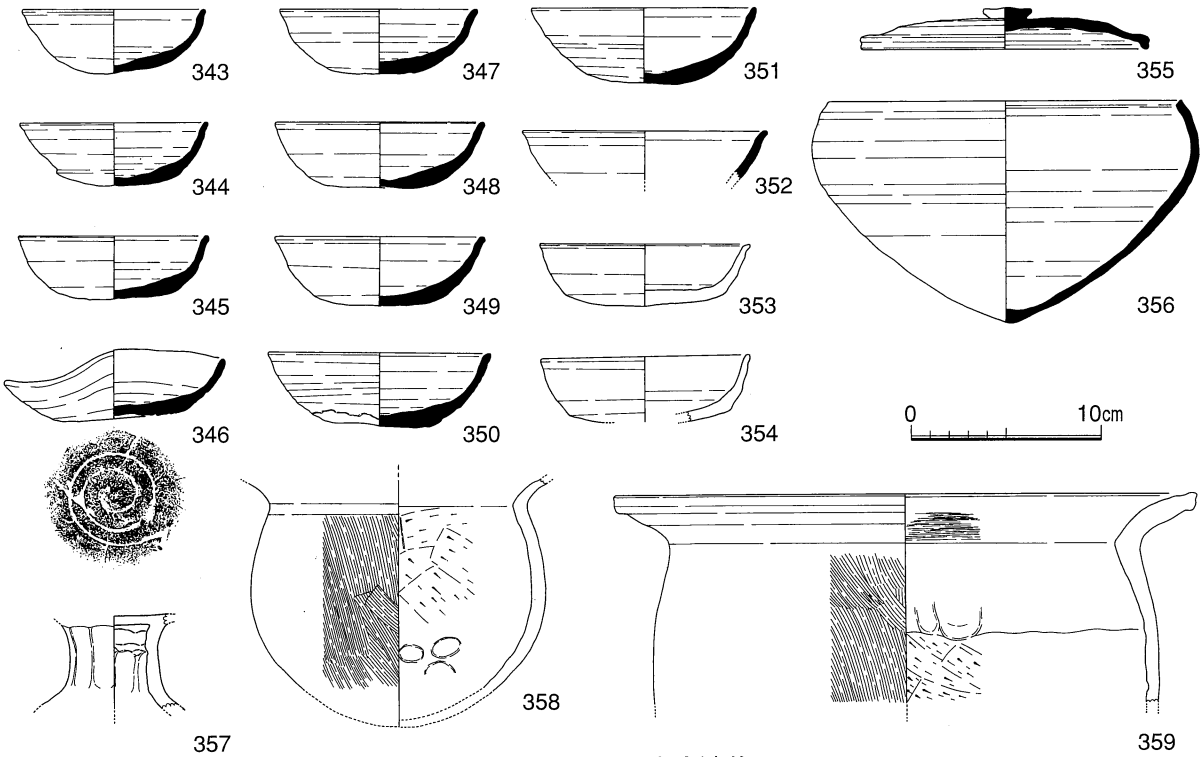



図142　P554　出土遺物

溝17（図109・137・138・143～146）

大道西Ｅ区に限ってみると、土壙状の形態であるが、大道西Ｃ区の溝11・大道西Ｄ区の溝20の延長線上に並ぶ位置関係であることから、それらと一連の溝と考えられた。そうすると、大道西Ｄ区の溝20との間に途切れる部分が存在することになるが、溝17の北西端部から幅0.3ｍの小溝が西へのびており、これによって連結されていたと推測させる。溝17の遺構検出面は1.3ｍ前後で、最深部の深さは検出面から0.3ｍであるが、底面は平坦でなく５㎝前後の凹凸、あるいは段が認められる。断面形は図138(中央ベルト－10～12･14層、北壁－４・５層)で示されているように逆台形気味の形状といえる。

遺物は遺構の底面付近で多くが出土した。大道西Ｃ区溝11・大道西Ｄ区溝20と比べると、８世紀代の遺物が目立つことと関係しているのかもしれない。上層(図138・中央ベルト－11層、北壁－５層)から出土して図化できたのは２点(372・374)で、そのうち須恵器杯身(372)は９世紀代であり、これは溝11や溝20の下限時期に相当する。他の下層(図138・中央ベルト－12層、北壁－４層)から出土した土器は８世紀代である。土器とともに瓦も多数出土した。(Ｋ１)は平城宮6225式系の軒丸瓦、(Ｋ２～Ｋ５・Ｋ９)は平城宮6663系で文様構成の陰陽が逆の軒平瓦である。(Ｋ９)はほぼ完形で凹面に布目、凸面は縄目タタキ後ヘラ工具によるナデとナデ調整がおこなわれている。角部を打ち欠いており、屋根の端部に合わせた措置と考えられる。(Ｋ６)は隅瓦で凹面布目、凸面縄目タタキが認められる。平瓦は多数出土したが、凸面への調整によって２種に分けられる。中程度の大きさの格子目タタキが認められるもの(Ｋ７)と縄目タタキが認められるもの(Ｋ８)である。縄目タタキについては縄目タタキだけのものと、その上からヘラ状工具によってナデた跡が筋状に認められるものに分けられる。量的には縄目タタキのものが圧倒的に多い。

また溝11・溝20と同様に白色の凝灰岩片がかなり出土したが、そのうち全形をかなり推測できるものも出土した。(Ｓ１)は柱状で一辺が13㎝、長さが20㎝以上である。(Ｓ２)は長さが24㎝、幅15㎝、

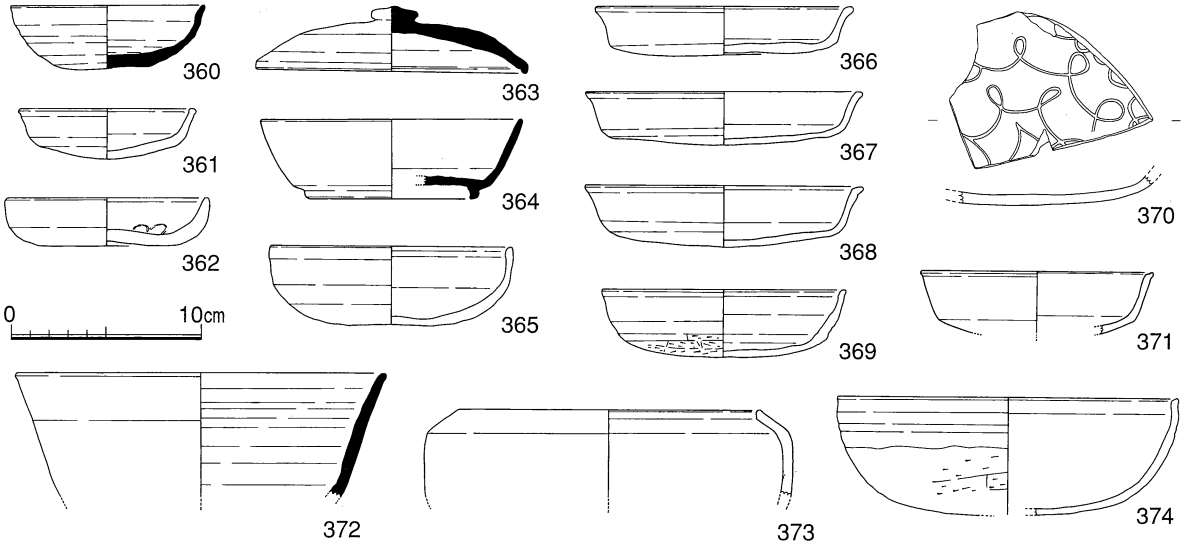



図143　溝17　出土遺物（1）

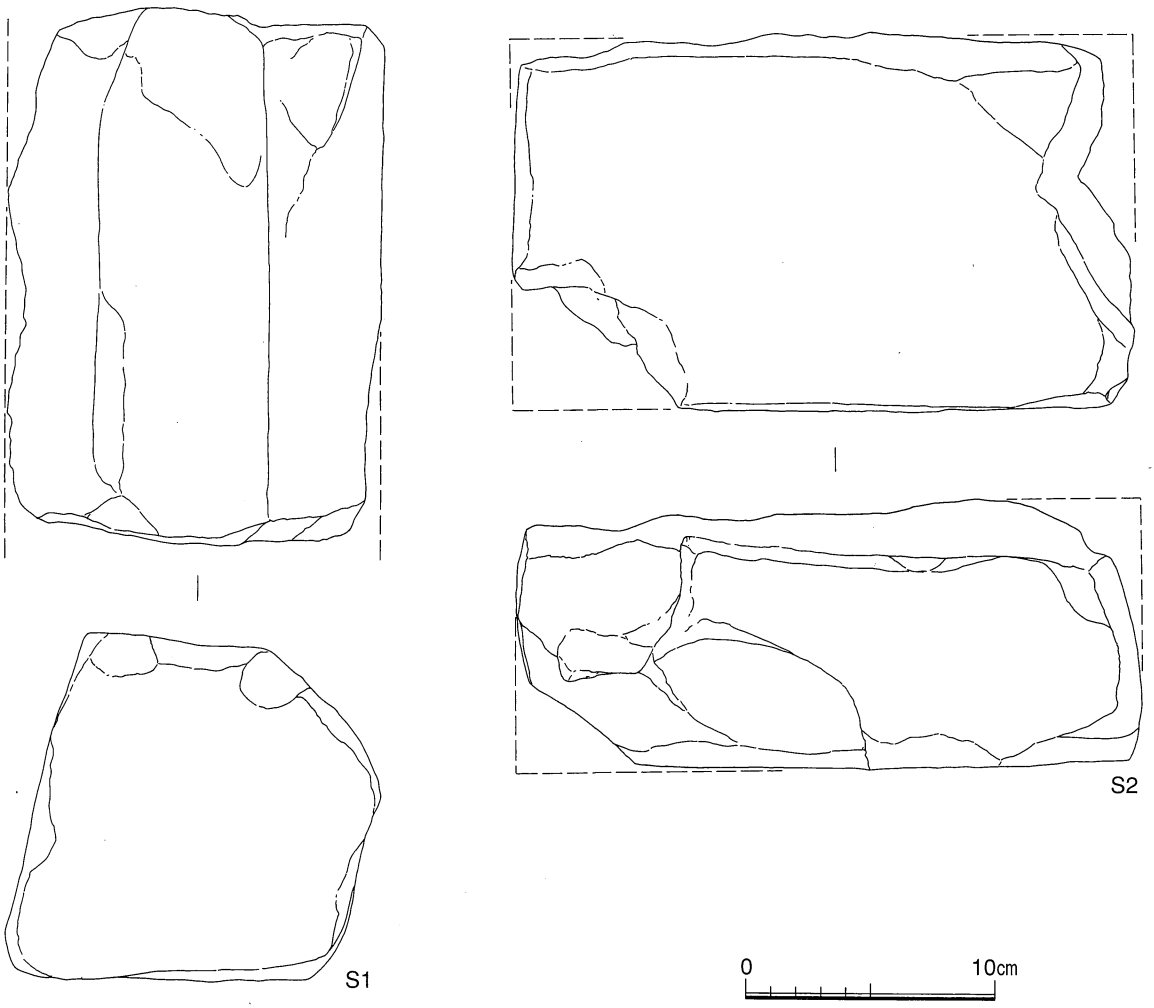



図144　溝17　出土遺物（2）

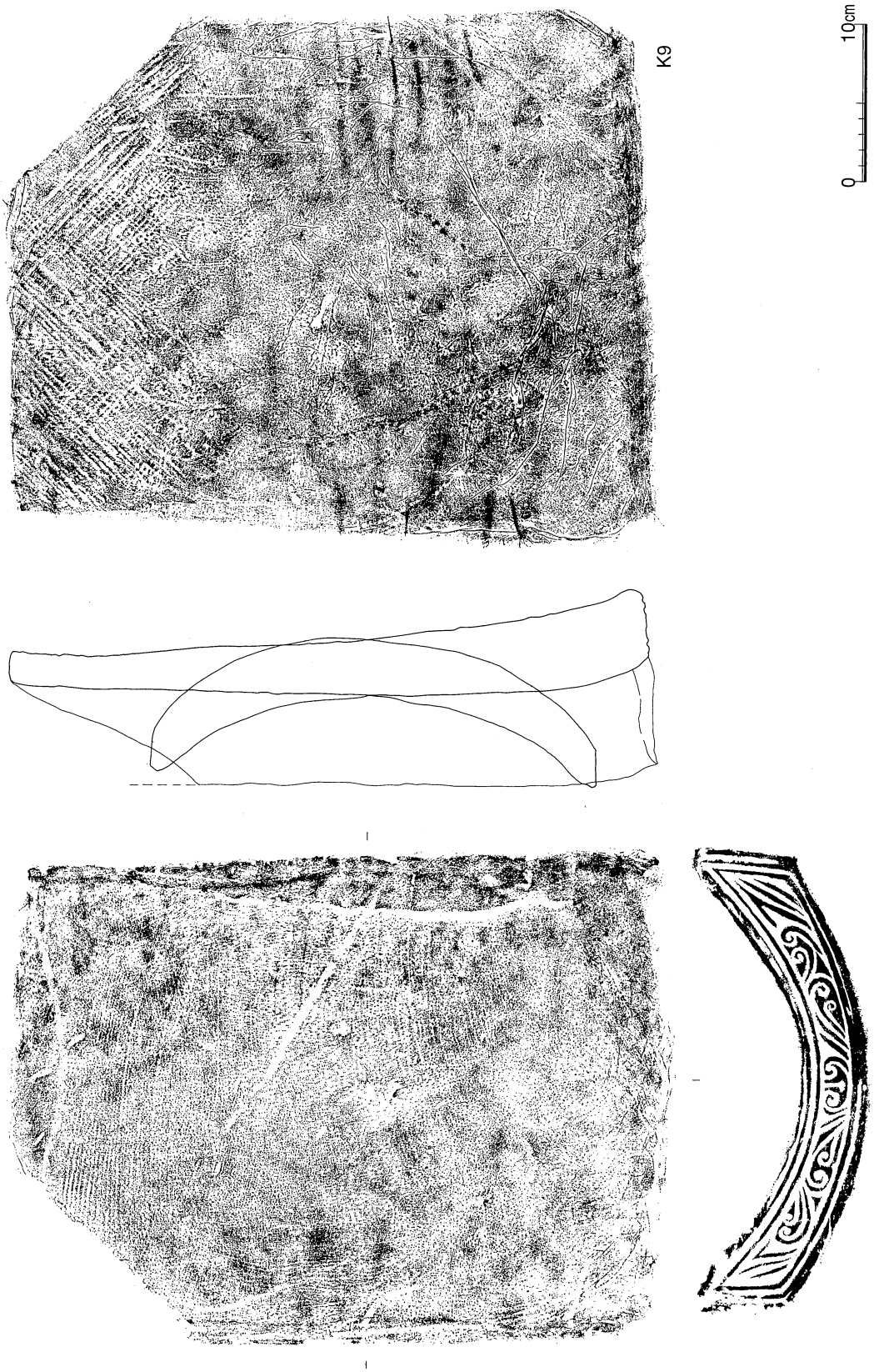



図145　溝17　出土遺物（3）

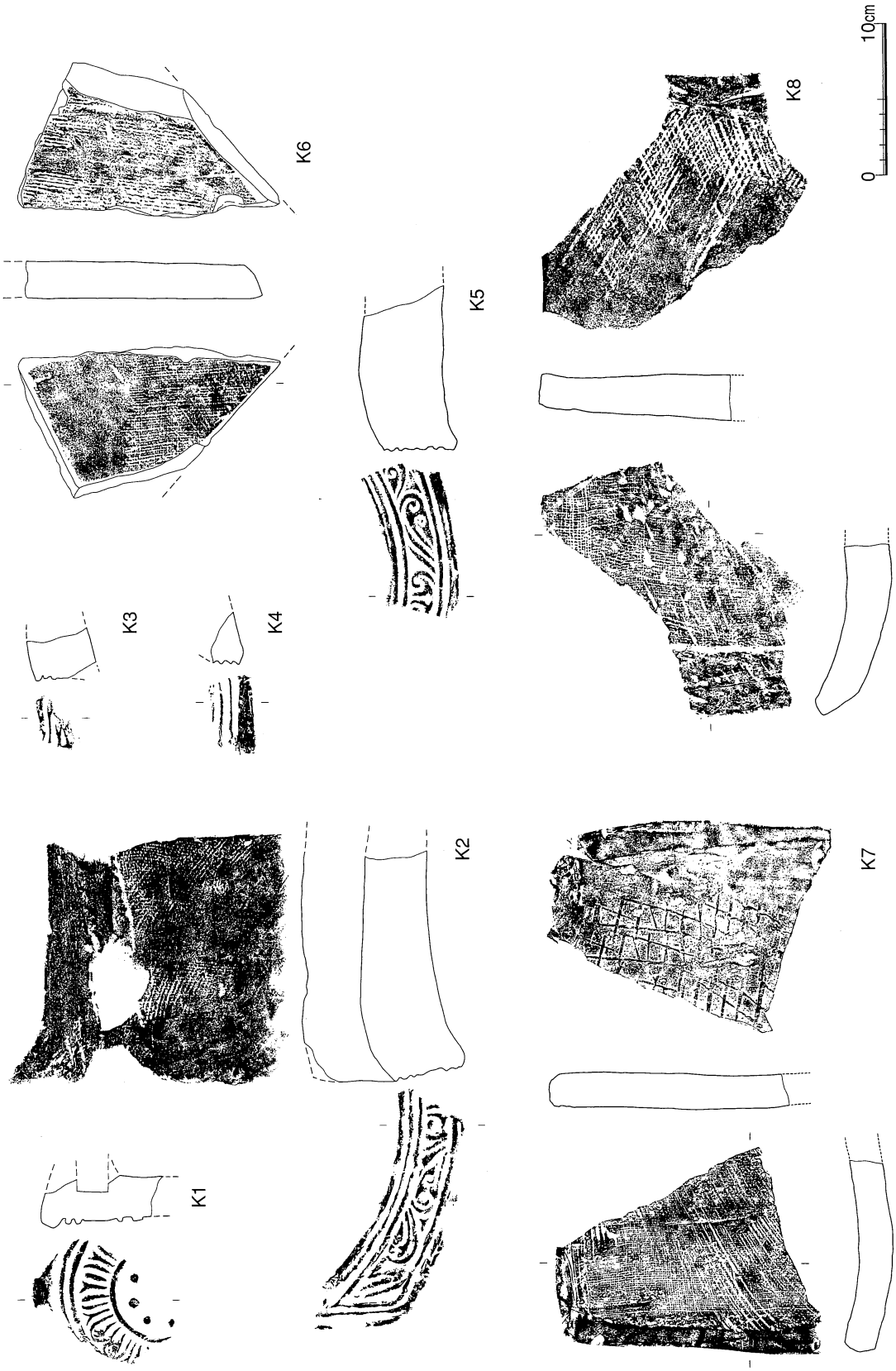



図146　溝17　出土遺物（4）

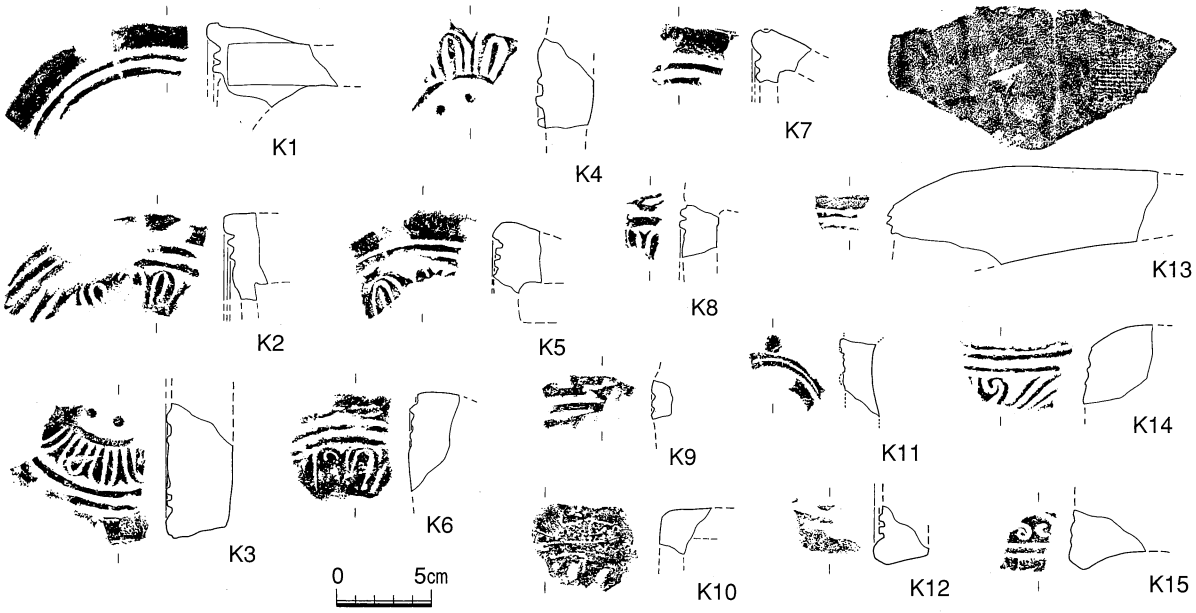



図147　古代遺構面精査時および水田層　出土遺物（１）

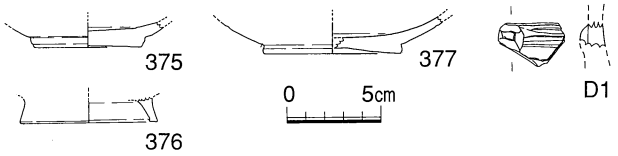



図148　古代遺構面精査時および水田層出土遺物（２）

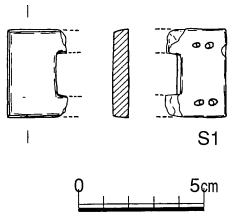



図149　古代遺構面精査時および水田層出土遺物（３）

厚さ10cmのレンガ状の形態をしている。白色の凝灰岩であることと、古代に属するという点からすると、いずれも壇上積基壇の一部の可能性が強く、（Ｓ１）が束石、（Ｓ２）が葛石と考えられる。瓦や灯明痕のある土器とともに遺跡の性格を類推する材料といえよう。

古代遺構面精査時および上面水田層出土遺物（図147～149）

古代遺構面を精査した際に多くの遺物が出土した。平瓦が主体であったが、軒瓦も若干含まれていた。また、古代遺構面を掘削している古代後半や中世以降の水田層からも軒瓦が出土した。（Ｋ１～Ｋ９・Ｋ11・Ｋ12）は平城宮6223式系の軒丸瓦、（Ｋ10）は小片のため文様が明確でないが、おそらく軒丸瓦と考えられるものである。（Ｋ13～Ｋ15）は平城宮6663式系で、いわゆる文様の陰陽の逆転したものである。このほか緑釉陶器が３点（375～377）、円面硯（Ｄ１）も出土した。また石帯（Ｓ１）も出土している。

## （４）古墳時代前期（図150）

溝18（図138・150・151）

調査区西側で、検出された南北方向の溝である。遺構検出面は1.3m付近で、下半は古代の遺構により上半を削平されている。幅は3.3m前後で、検出面から0.3mの深さまで断面形は台形に深くなっ

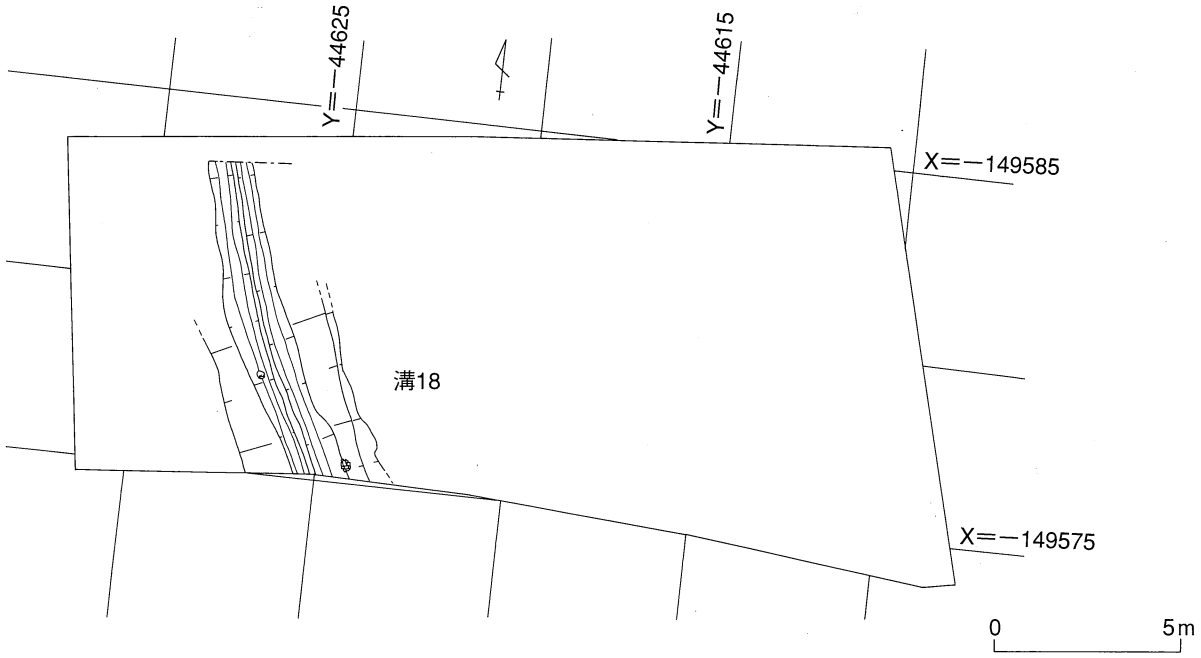



図150　大道西Ｅ区　古墳遺構配置図

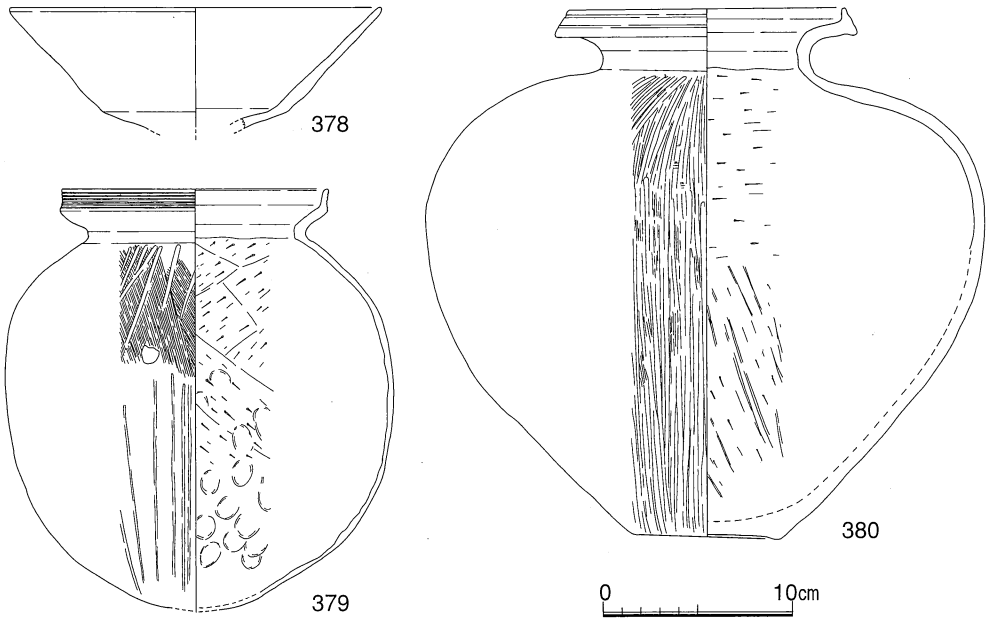



図151　溝18　出土遺物

ている。そして幅1.3mのところで、幅0.5m前後、深さ0.3mに深くなった部分が２条あり、溝18が２回掘り直された結果と考えられる。北壁の土層断面(図138)で検討した結果、最初に西側が掘られ、その後掘り直されたのが東側といえる。北に隣接する新幹線建設の際の調査でも、ほぼ同地点で南北方向の溝が検出されており、この溝が北へ延びていることが確認できる。出土した遺物は極めて少なかった。壺形土器(380)が南端部の検出面で出土し、甕形土器(379)はほぼ完形であるが、埋没過程に混入されたと考えられ、この溝の時期は甕形土器(379)と高杯形土器(378)から古墳時代前期といえる。

図152　大道西Ｅ区　弥生遺構配置図

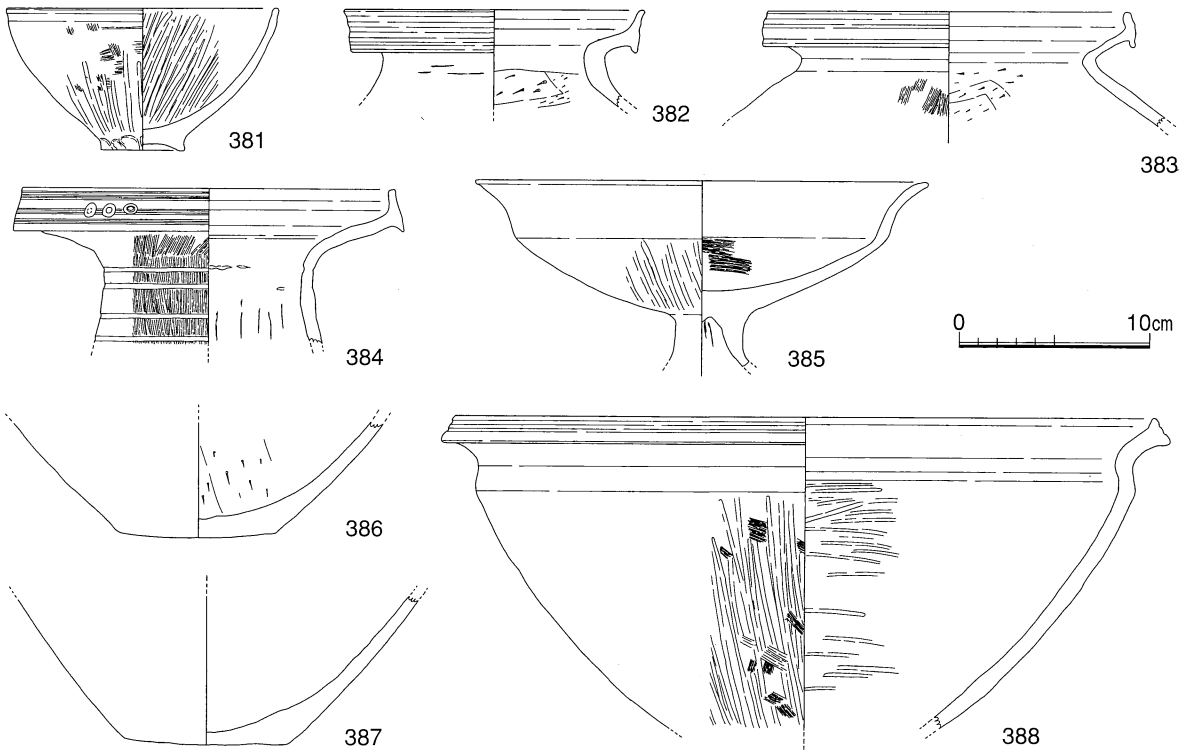



図153　溝19　出土遺物

### （5）弥生時代（図152）

**溝19**（図138・152・153）

調査区北西コーナー付近でわずかに南端の一部を検出した。方向的にみても大道西D区の溝21と同一の溝と考えられる。遺構検出面は1.3mで、深さが検出面から0.4mまでであった。極めてわずかな部分しか掘り下げれなかったが、埋土よりも土器の方が多いといった状況であった。おそらく溝21と同様に、多量の土器が投棄されていると推測される。遺物は、壺形土器(382～384)、鉢形土器(381・388)、高杯形土器(385)、底部(386・387)である。

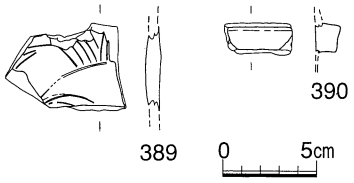



図154　古墳・弥生遺構面
精査時　出土遺物

**遺構精査時出土遺物**（図154）

古墳時代前期および、弥生時代の遺構を精査した際にも該期の遺物が若干出土した。そのうち2点が特筆されるものである。(389)は高杯形土器、もしくは壺形土器の破片で精製された胎土である。その片面に極めて細いタッチで文様が描かれている。小片のため、全体の文様構成などは明らかにし得ないが、いわゆる撥形文で斜線によって体内充鎮されたものとされないものが描かれているようにみえる。(390)はタガ状の突帯部であるが、胎土がいわゆる特殊器台の胎土であることや、丹塗りが施されていることから、特殊器台の一部である可能性が高い。

## X　大道西H区

最も東端に位置する調査区である。調査区の西には用水路があり、微地形に沿った流路の形状であることから、この用水路以東は微高地の低位部が広がっていくと認識されていた。ところが調査の結果、全体としては微高地から低位部へ向かっているものの、基本的には微高地であることが確認された。しかしながら、中世や古代の集落は形成されていなかった。

### （1）近世（図155）

**礎石建物**（図156・157）

調査区南西部で検出された礎石建物である。18世紀代の陶磁器片が含まれている水田層(図156－4層)の上面に厚さが0.1m前後の造成(図156－1層)をおこない、礎石を据えている。造成の範囲については、近・現代水田層(図156－1層)の上面の造成作業に伴う工事によって、遺構面がかなり削平を受けており、明確にすることはできなかったが、調査区の西半の範囲ではないかと思われる。長さが0.2m前後の角礫を径1.0mほどの範囲に並べ、その中央に長さが0.5m、幅0.4m前後の礎石を据えている。平面的な精査をおこなっても、礎石の周囲には掘り方が検出されなかったことや、土層断面の観察でも同様であったことから、根石と礎石の設置を平行して造成をおこなったものと考えられる。礎石上面でのレベル高は1.7～1.8mである。礎石は東西方向には軸線が共有するものの、柱間は異なっている。中心から西側は2.9m、東側は2.1mである。南側については調査区外となるため不明である。この建物の時期については18世紀以降で、この地点が再び水田化される以前ということになる。この調査区は調査直前まで民家が存在しており、この民家の住人の方の御教示によると、昭和初期に

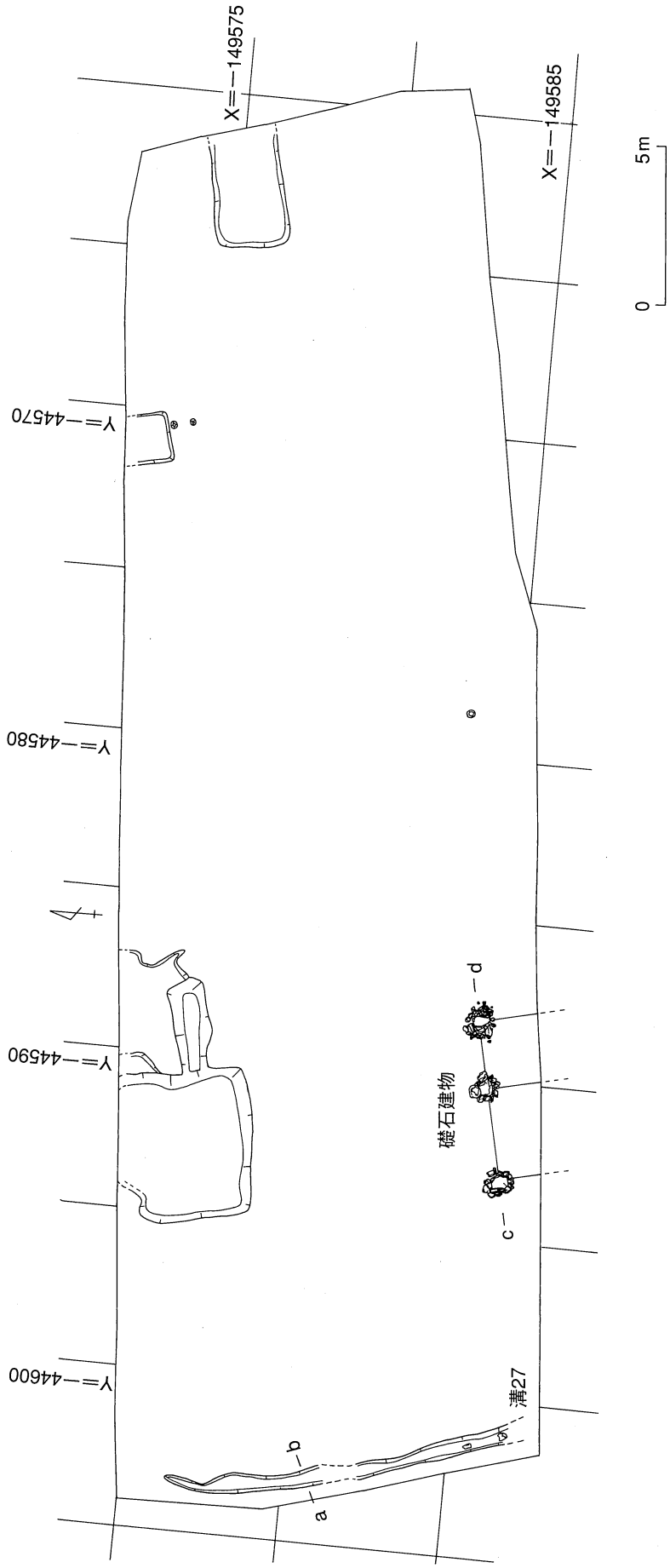



図155　大道西Ｈ区　近世遺構配置図

は建てられていたとのことである。そうすると水田化はそれ以前ということになる。水田化の時期を明治期から大正期とすると、建物の時期は18世紀～19世紀にかけての時期に大体限定することができる。この建物の方向はN-70°-Eである。この方向性は大道西C区から大道西E区にかけて検出された古代の遺構と極めて近く、かつ大道西H区の南西50mの位置にある三十番神社の本殿の方向とほぼ一致する。三十番神社の本殿についてはその設計図が現存している。それによると、現本殿は明治三十九年に建てられたとのことである。三十番神社が当地にいつから存在したのかという明確な資料はないが、今回検出された礎石建物が一般的な建物の礎石にしてはかなり規模が大きい点を考慮すると、現三十番神社は以前に当調査区の位置にあり、その本殿が礎石建物に相当する可能性が想定されてくる。現三十番神社の本殿の平面図(図158)と礎石建物の平面図をみても、柱の位置や柱間などは重ならない。ただし、本殿の建物とそれに付属する階段先端の向柱までの長さは、検出された礎石建物の東西の長さとほぼ一致する。このことは礎石建物の西側、柱間の長い部分が本殿の建物で、東側の柱間の短い部分が本殿に付属する階段の可能性を示している。そうなると、現三十番神社も礎石建物の正面方向も一致するということになる。方向性や建物の構造も一致することから礎石建物は三十番神社の本殿であった可能性も高く、このことは現神社の社地が明治三十九年に現位置へ移動したという

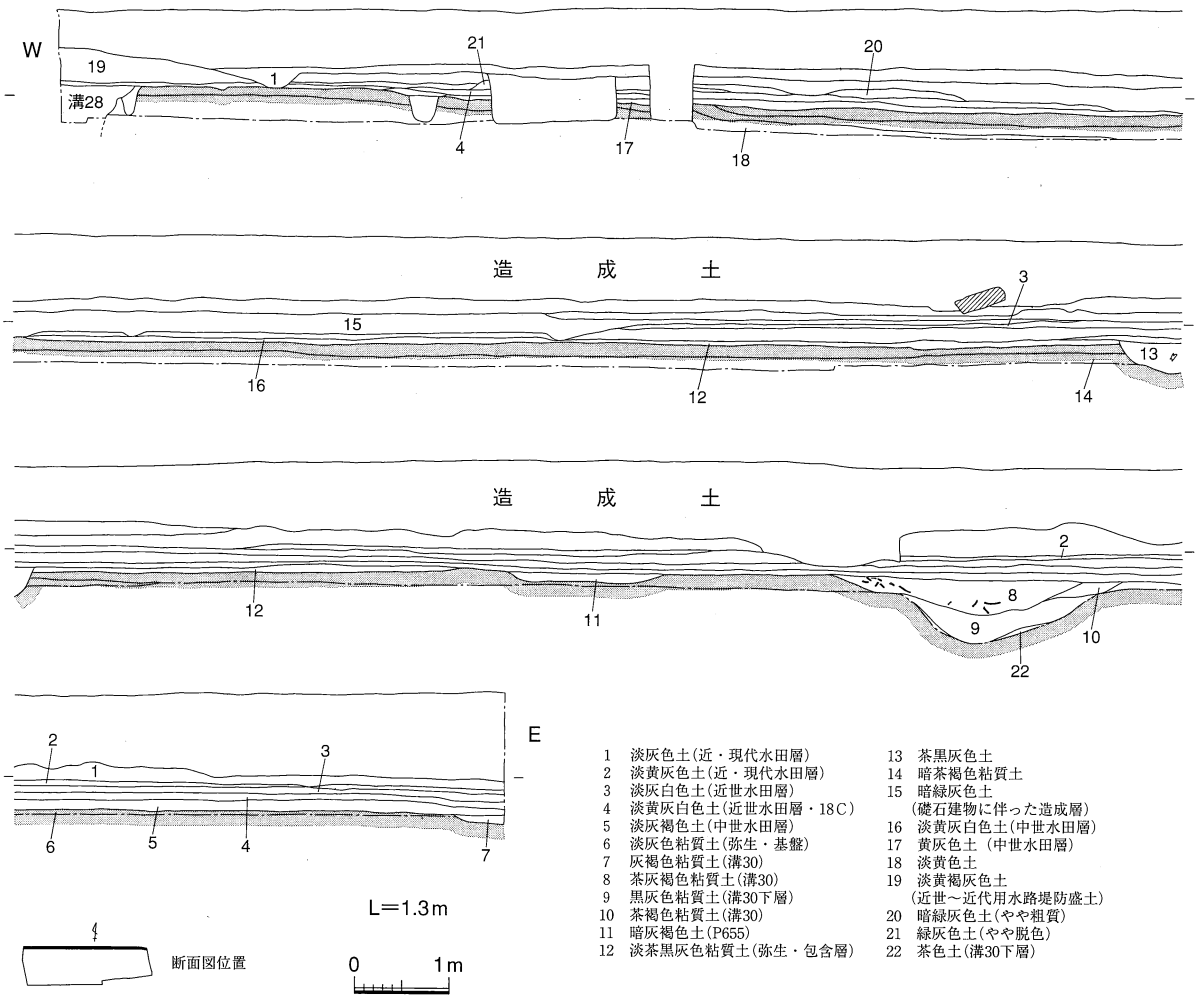



図156　大道西H区　断面図

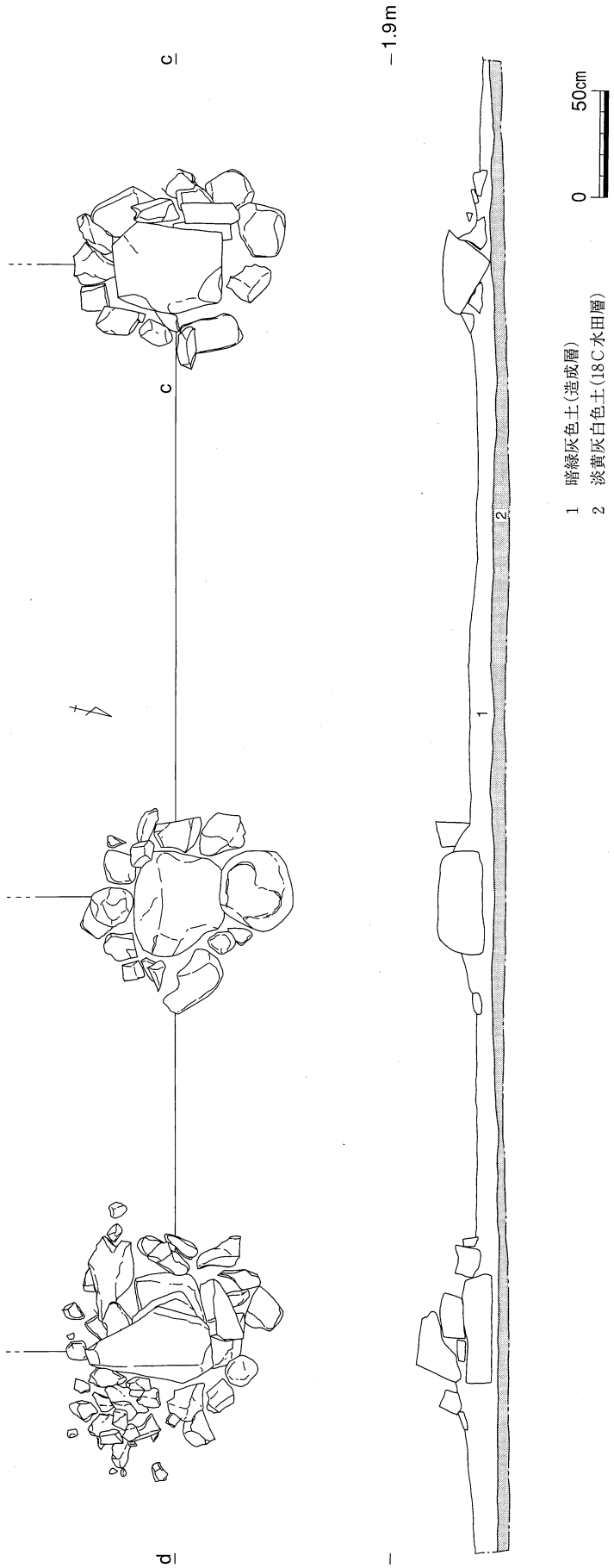



図157　礎石建物　実測図

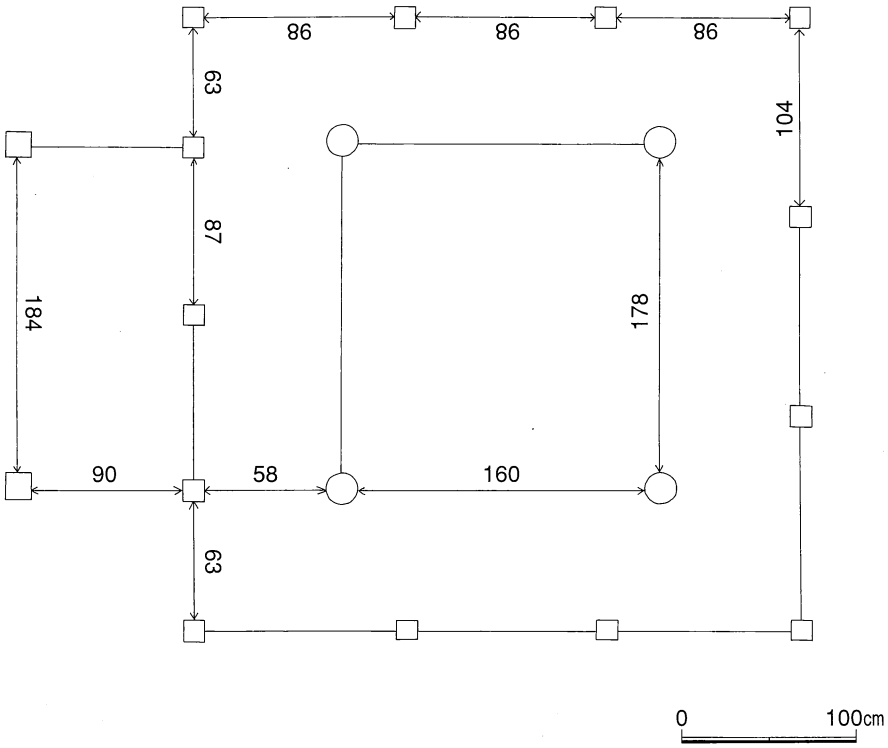



図158　三十番神社本殿　平面図

ことも示している。また、ともに古代の遺構の方向性を踏襲していることから、両者の関係に系譜的なつながりが存在していることも推測される。具体的には極めて脆弱な根拠ではあるが、大道西Ｄ区で出土した13世紀代の軒平瓦を付近に同期の寺院が存在していたことを示しているとすると、古代の遺構が廃絶した後も部分的にその跡地を利用していることが想定され、それが近世の礎石建物、そして現三十番神社へとつながっていくとするのである。

溝27（図155・159）

調査区の西端で検出された溝である。幅0.5m、南端から約10mの位置で途切れている。遺構検出面は1.3m前後で、深さは検出面から0.1mである。埋土には角礫が若干含まれているだけで、遺物は全く出土しなかったが、礎石建物に伴う造成層を切っていることから、礎石建物に伴う溝である可能性も推測される。西に隣接する大道西Ｅ区では礎石建物に伴う造成層は確認されなかったことから、この溝が礎石建物の西限を画する溝である可能性が高い。

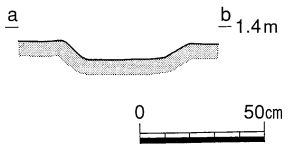



図159　溝27　断面図

土壙（図155・156）

近・現代の水田耕土を除去後に方形の土壙を３基検出した。ただし、上面の造成に伴ってかなり遺構面が荒らされており、近現代の水田耕土の下から確実に掘られたものかどうかは明確でない。いずれも遺構検出面から0.3m前後の深さで、遺物は含まれてなかった。壁土などの採集に用いた土取り穴の可能性が高い。

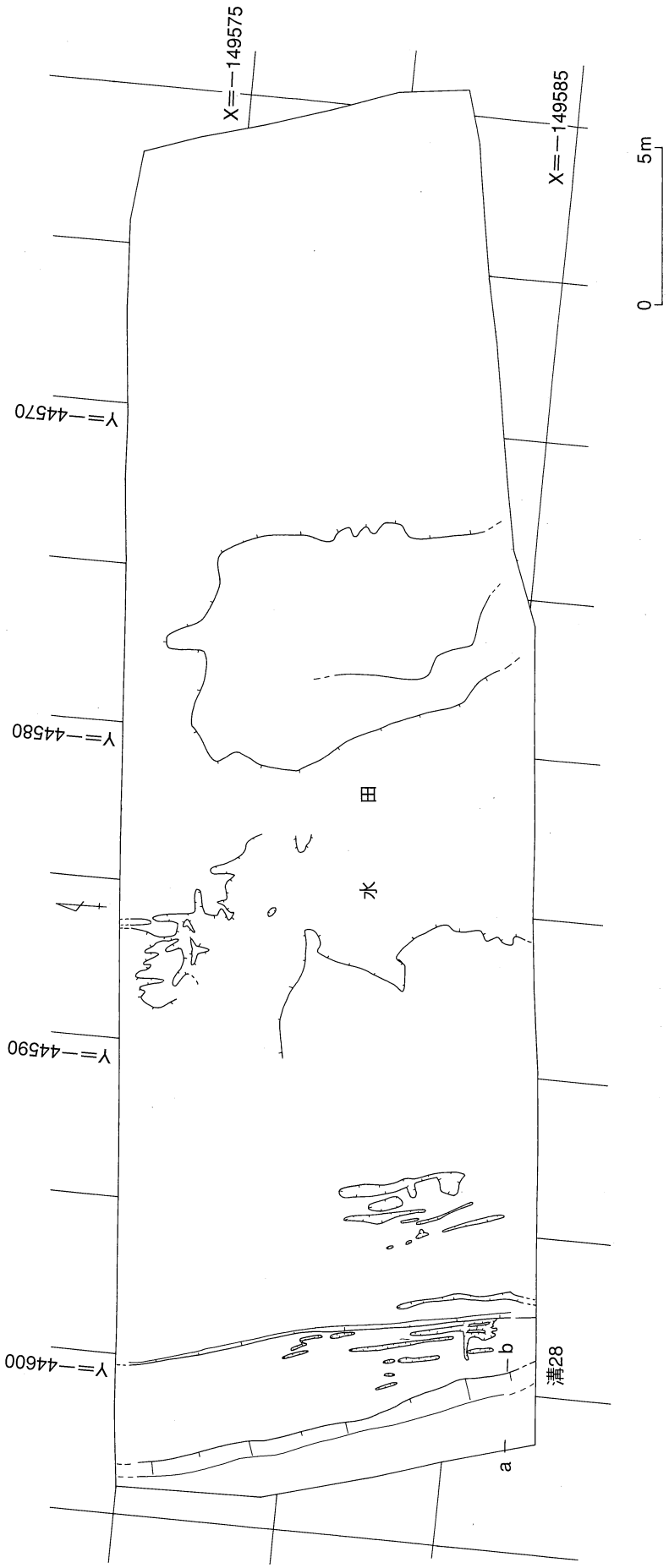



図160　大道西H区　中世遺構配置図

（２）中世（図160）

溝28（図160～162）

調査区西端で検出された溝である。全形は不明であるが、調査区西側にある南流する用水路の旧流路である可能性が高い。遺構検出面は1.4m前後で、幅は２ｍまで確認された。現況での断面形は逆台形で、最深部の深さは検出面から0.8mである。埋土は５層が確認された。１～３層はブロック的な堆積状況であり、人為的に埋められた可能性がうかがわれる。

遺物はほとんど含まれていなかったが、角礫などが比較的多く認められた。図化できたのは備前焼擂鉢(398)、青磁碗(396)だけである。備前焼の擂鉢は15世紀代である。４層は滞水層であり、埋められる以前に堆積した土層であることから、用水路の使用時期を示す遺物が含まれているといえる。土師質土器椀(391・392)、皿(393～395)、白磁碗(397)、軒平瓦(Ｋ１・Ｋ２)である。いずれも13世紀代である。

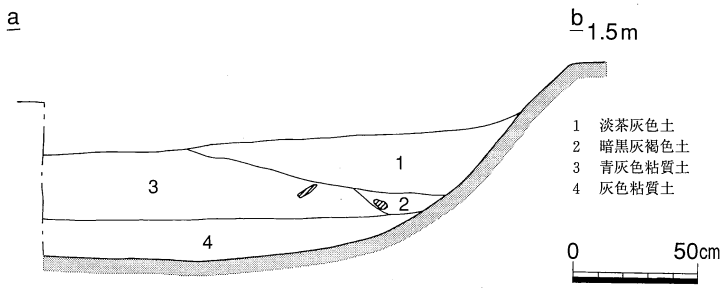



図161　溝28　断面図

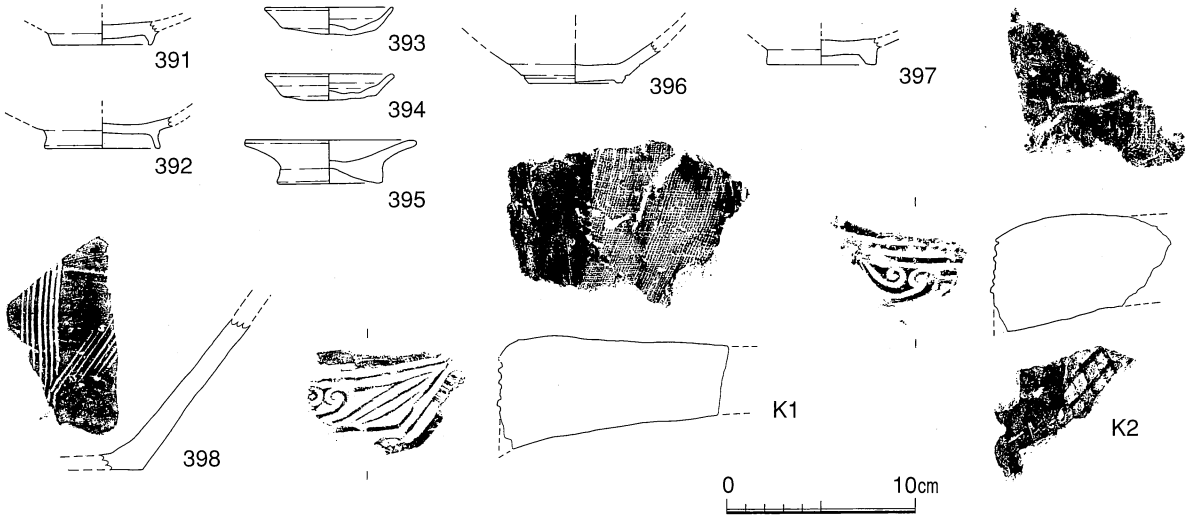



図162　溝28　出土遺物

水田（図160・163）

溝28の東岸には、幅が1.5～3.0mの畦畔状の高まりがある。その畦畔状の高まり上面にも幅５cmほどの素堀り溝があり、東側に広がる水田層直下でも、素堀り溝あるいは水田の沈み込みを示す凹凸が検出された。いずれも検出面から２～３cmほどの深さである。

遺物はいくつかあったが、最も新しいのは極めて小片となった土師質土器の小片であった。素堀り溝の方向性や土師質土器の小片が示す年代観から、溝28と同時期の水田と考えられる。水田の時期とは異なるが緑釉陶器（399～402)、軒平瓦(Ｋ１・Ｋ２)、土製勾玉(Ｄ１)なども出土した。

## （3）古墳時代（図164）

竪穴住居4（図165・166）

調査区の南西コーナー付近で検出した竪穴住居である。南半は調査区外へでるため全形は不明であるが一辺3.6m前後の方形の平面形が推測される。この住居以東には古墳時代に属する遺構が全く検出されなかったことや、遺物もほとんど出土しなかったこと、地形的にも低位部へ向かって下降していることから、該期における集落域の東端に位置した住居である可能性が高い。遺構検出面は1.2m付近で、床面までの深さは検出面から0.2mである。幅0.1～0.17mの壁帯溝が北東部で途切れるものの、周囲をめぐっている。床面には高低差が0.1mほどの窪みがあり、中央付近は幅0.1mほどの方形の平面形で深くなっている。またその北側も長さ1.0m、幅1.0mほどの舌状に低くなっており、住居への出入り口との関連がうかがわれる。柱穴は中央部に2つあり、径0.5～0.6mの円形、もしくは長楕円形の平面形で、中央やや内側寄りに径約0.1mの柱痕跡が認められる。

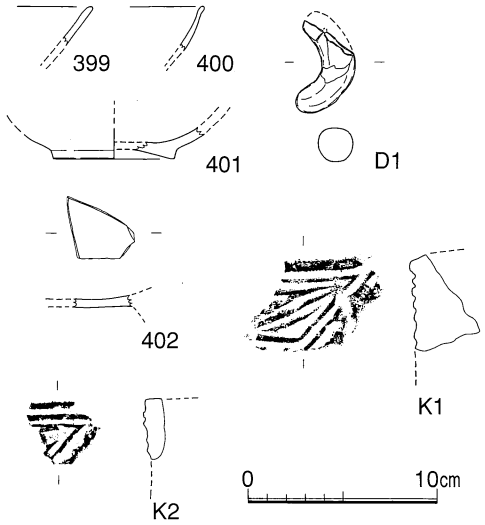


図163　大道西H区水田層　出土遺物

遺物は住居埋土からは、ほとんど出土しなかったが、西側の柱穴埋土から手あぶり形土器(403)の完形品が出土した。法万寺調査区の竪穴住居3からも、柱穴堀り方埋土から手あぶり形土器が出土しており、共通する事例といえる。時期は古墳時代前期中葉である。

溝31（図164・167・168）

調査区西側で検出された溝である。幅0.7m前後で中央付近に長さ1.0m前後、幅0.7m前後の張り出し状の部分が東側に付属する。水田層そのものは残存していなかったが、おそらく溝31の東側には水田が広がっていたと考えられ、張り出し状の部分は、そこへの給水のための水口である可能性が高いといえる。遺構検出面は1.1m付近で、最深部の深さは検出面から0.1mである。

遺物はほとんど出土しなかったが、須恵器の杯蓋の小片(404)が出土したことから6世紀後半代の時期といえる。

## （4）弥生時代（図169）

P656（図170・171）

調査区南西コーナー付近で検出された土壙である、長さ1.6m、幅1.2m前後の長楕円形の平面形である。遺構検出面は1.3m前後、最深部までの深さは検出面から0.1mである。逆台形の断面形を呈する。南端付近の底面より若干浮いた位置で壺形土器(405)が出土した。時期は弥生時代前期である。

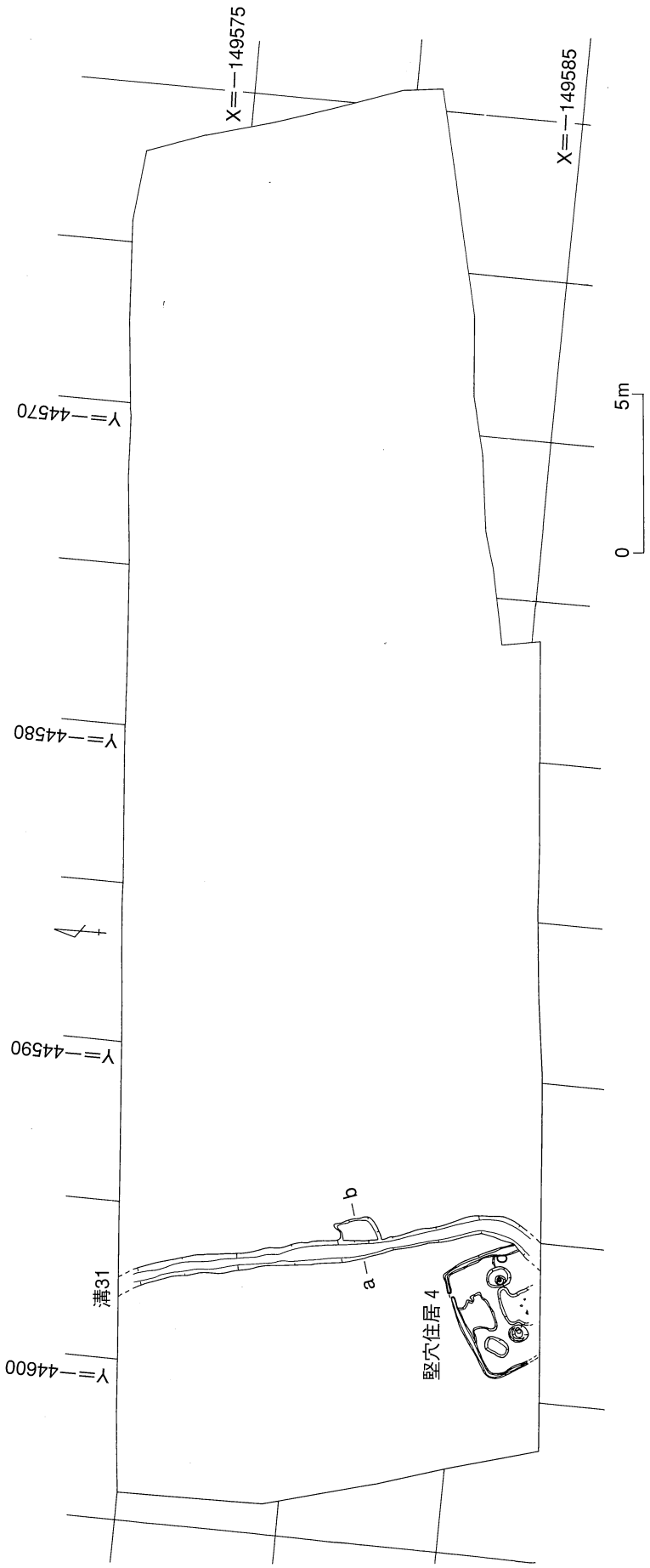



図164　大道西Ｈ区　古墳遺構配置図

P658（図172・173）

調査区中央南西部で検出された不整形の土壙である。長軸方向での長さは4.6m、最大幅は1.7mである。遺構検出面は1.1m付近で、検出面から4cmほど掘り下げ、さらに6cmほど部分的に掘り下げている。内側を掘り下げた平面形も不整形で、東側が長さ1.7m、最大幅1.0m、西側が長さ3.0m、最大幅1.0mである。埋土に遺物はほとんど含まれず、弥生時代後期と推測される土器の小片が若干出土しただけである。この周辺には不整形な土壙が集中しており、粘土を採掘した粘土取り穴の可能性が考えられた。粘土取り穴だとすると、何層目の粘土を採集した可能性が高いかということを示したのが図173である。遺構検出面の下部には3層の粘質土層があり、そのうち最も上層である1層（淡黄灰色粘質土）のみ掘り下げている。他の不整形土壙についても同様で、2層（暗茶褐色粘質土）が露出すると掘り下げるのをやめていることから、1層を採集するために掘られたのではないかと推測される。粘土の質については、焼成された土器の器表面の色調にも関係することであり、足守川流域で出土する土器が橙色系を主体とすることと関わっていることを推測させられる。

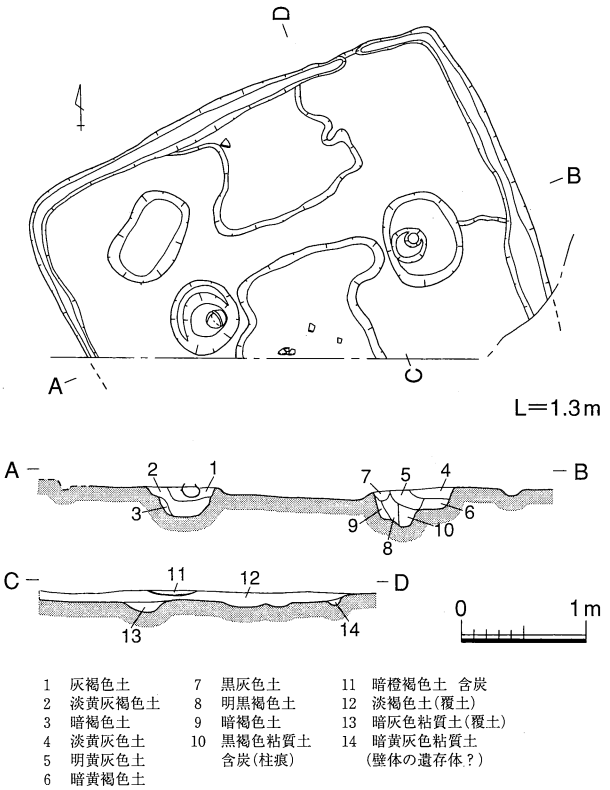



図165　竪穴住居4　実測図

P659（図174）

大半が調査区外へでるため、全形は不明であるが、現況の長さが10m以上を測るかなり大きなものである。遺構検出面は1.1m付近で、最深部までの深さは検出面から0.15mである。この土壙もP658と同様に、

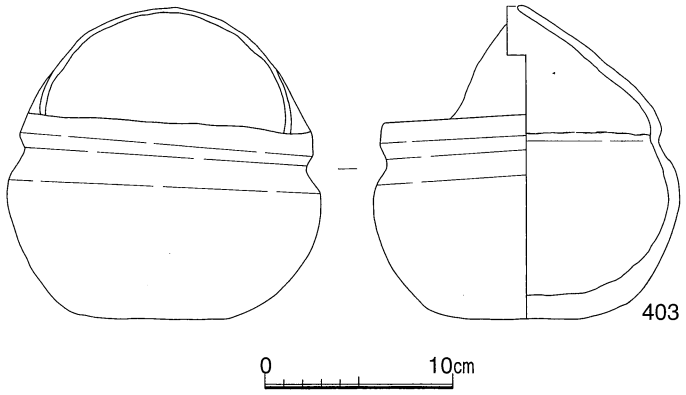



図166　竪穴住居4　出土遺物

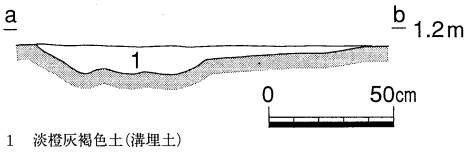



図167　溝31　実測図

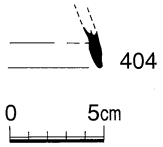



図168　溝31　出土遺物

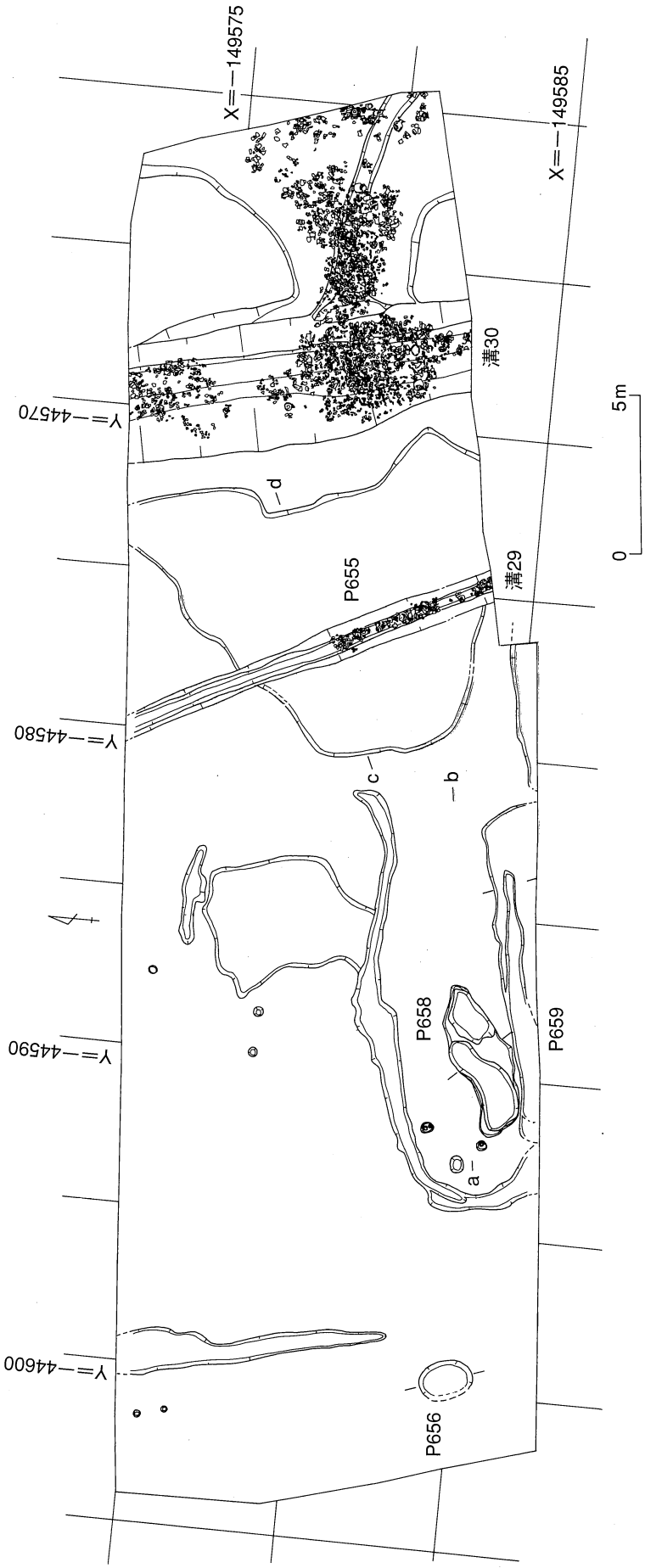



図169　大道西Ｈ区　弥生遺構配置図

検出面から4cmほど掘り下げ、さらにもう一段掘り下げている。P658と比べるとわずかに遺構底面が低いが、これらは図173の1層のレベル高が低くなっていることに起因し、P659の底面は図173の2層の上面で掘り下げをやめている。

遺物は弥生時代後期と推測される土器の小片が1点出土したのみである。

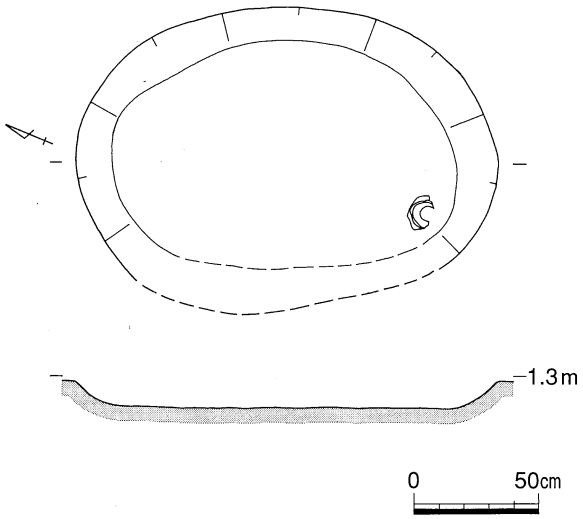



図170　P656　実測図

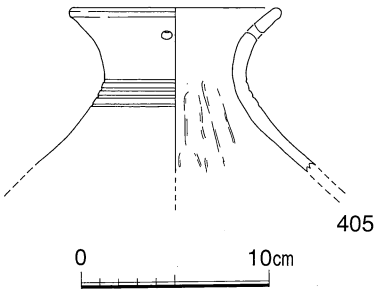



図171　P656　出土遺物

P655（図169・177）

調査区中央やや東寄りで検出された不整形土壙である。溝29に切られていることから、少なくとも溝29の時期である弥生時代後期末は遡るといえる。長さは10m以上、最大幅は8.0mで、「ロ」の字形の平面形を呈する。遺構検出面は1.2m付近で、最深部の深さは検出面から0.1mである。P655も図173の2層の上面で掘り下げをやめており、P658やP659と同様に粘土採掘した粘土取り穴の可能性が高いといえよう。

遺物は弥生時代後期と推測される土器の小片が若干出土したのみである。

溝29（図175～177）

調査区やや東寄りを南北に横切る溝である。幅約1.0mで遺構検出面は1.2m付近である。最深部までの深さは検出面から0.4mで、断面形は底面付近の傾斜変換点が丸みを帯びた逆台形になる。埋土は2層（図177－3・4層）で、上層のいわゆる最終埋土に多量の土器が含まれていた。ただしそれは調査区中央から南側だけで、極めて人為的な理由で土器が廃棄されたことをうかがわせる。

遺物は壺形土器（406・407・414）、甕形土器（410～412・415）、高杯形土器（408・409）、鉢形土器（413・416）、蒲鉾状の土製品の端部焼成前穿孔を2孔おこなったもの（D1）などである。鉢形土器（416）は検出面より下半部が完形品であり、本来は完形品が埋没したが、後の水田開発等により削平されたものと推測される。時期は弥生時代後期中葉である。

溝30（図178～184）

調査区東端で検出された溝で、調査区を南北に横切る。幅3～4mで、調査区の中央付近から南東方向に幅0.6mの小溝が派生する。遺構検出面は0.9m付近で、遺構最深部は検出面から0.6mである。派生している小溝の最深部は検出面から0.1mで、断面形は山型である。遺物の出土状況や溝の規模、および方向性が大道西C区の溝13、大道西D区の溝21、そしてそれらの溝の延長と考えられる溝19と

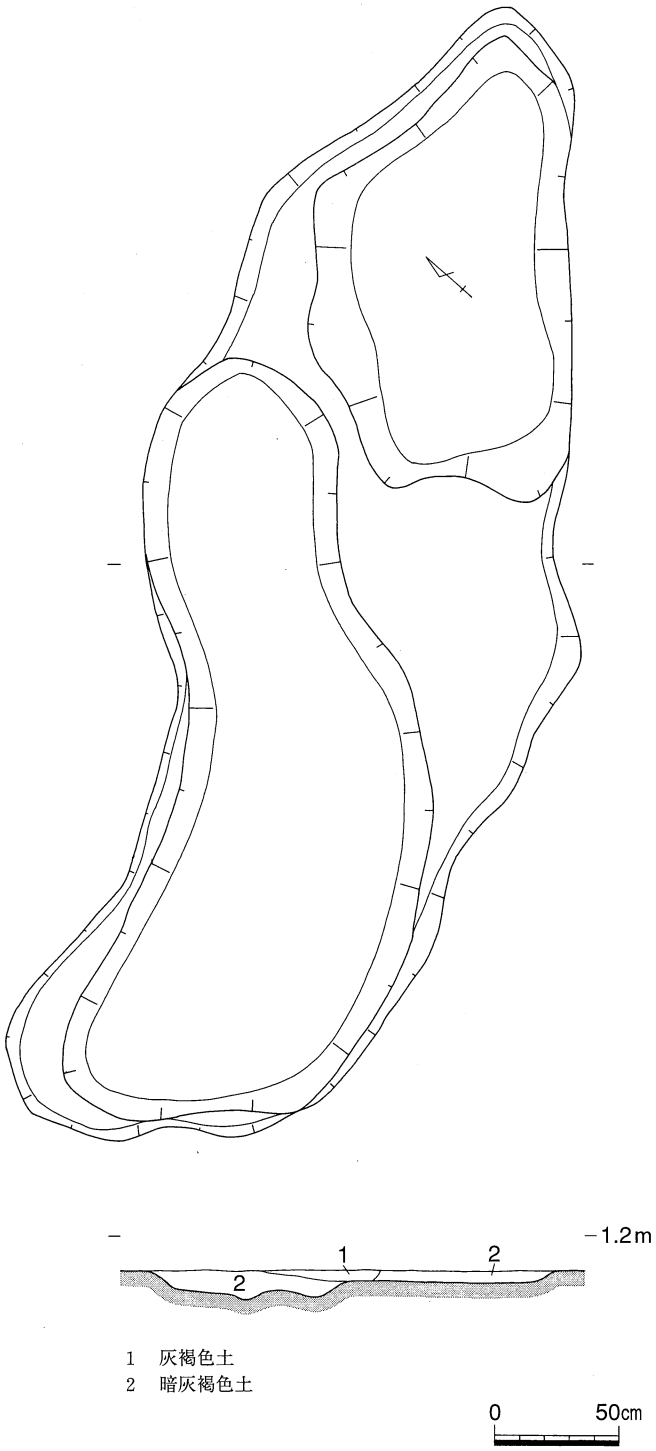



図172　P658　実測図

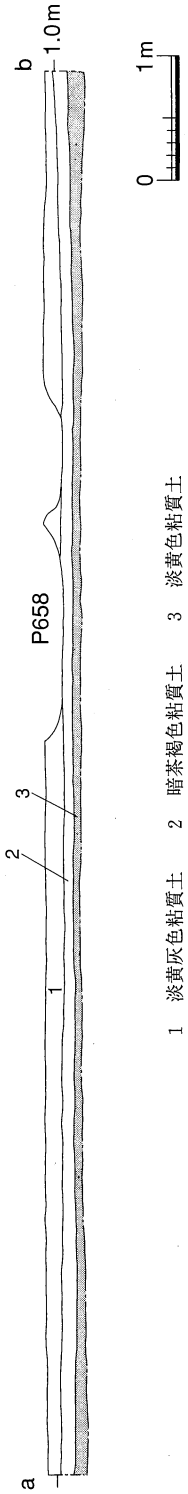



図173　P658サブトレンチ4
断面図（図169対応）

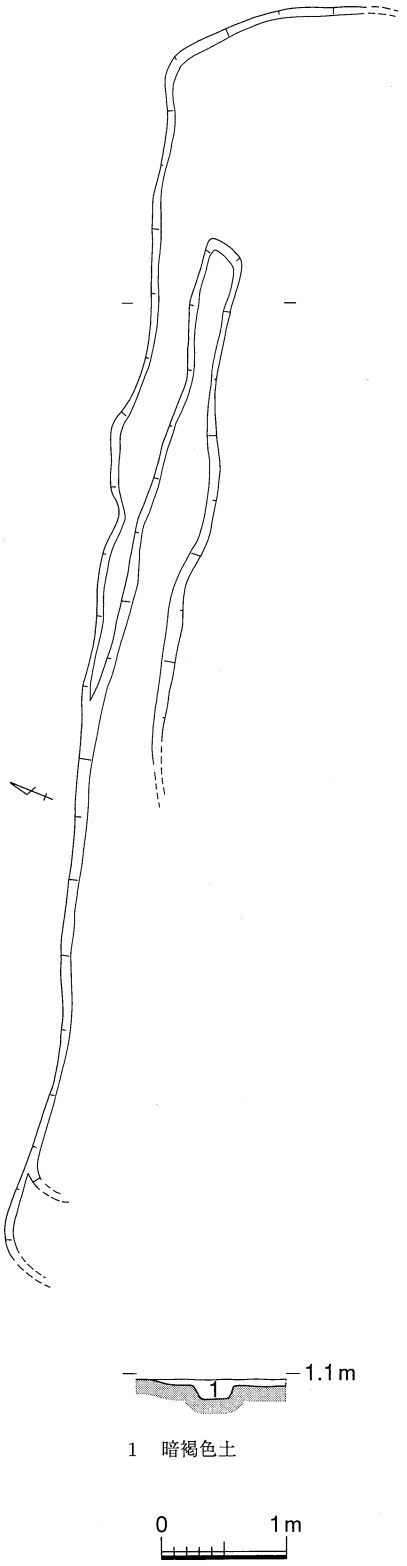



図174　P659　実測図

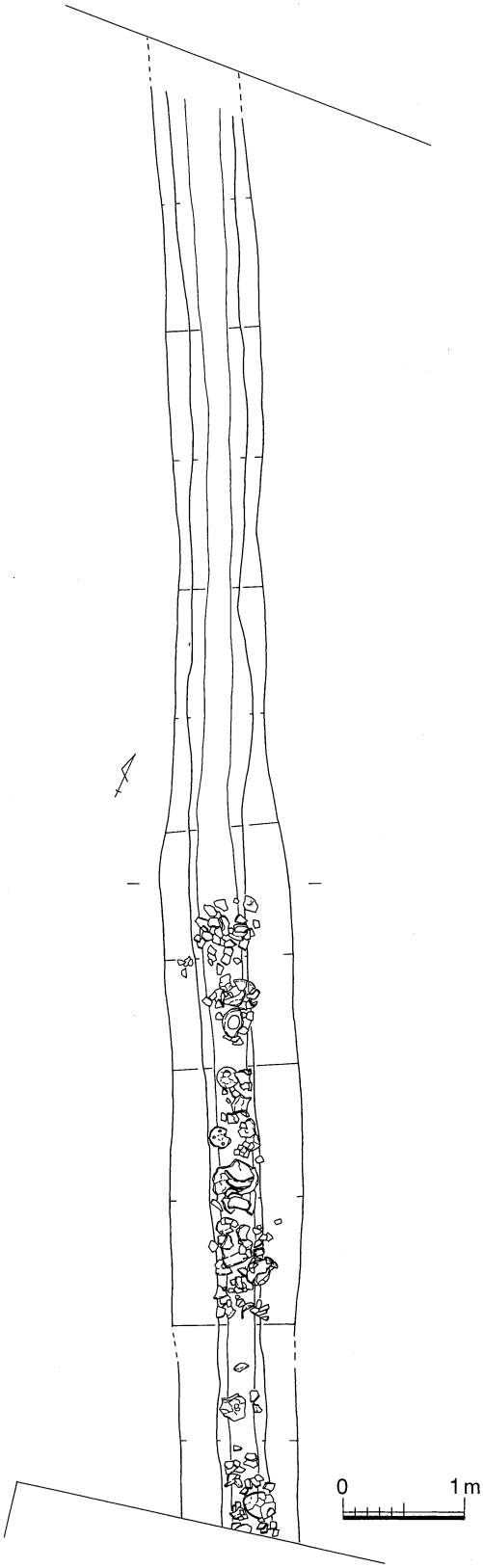



図175　溝29　遺物出土状況

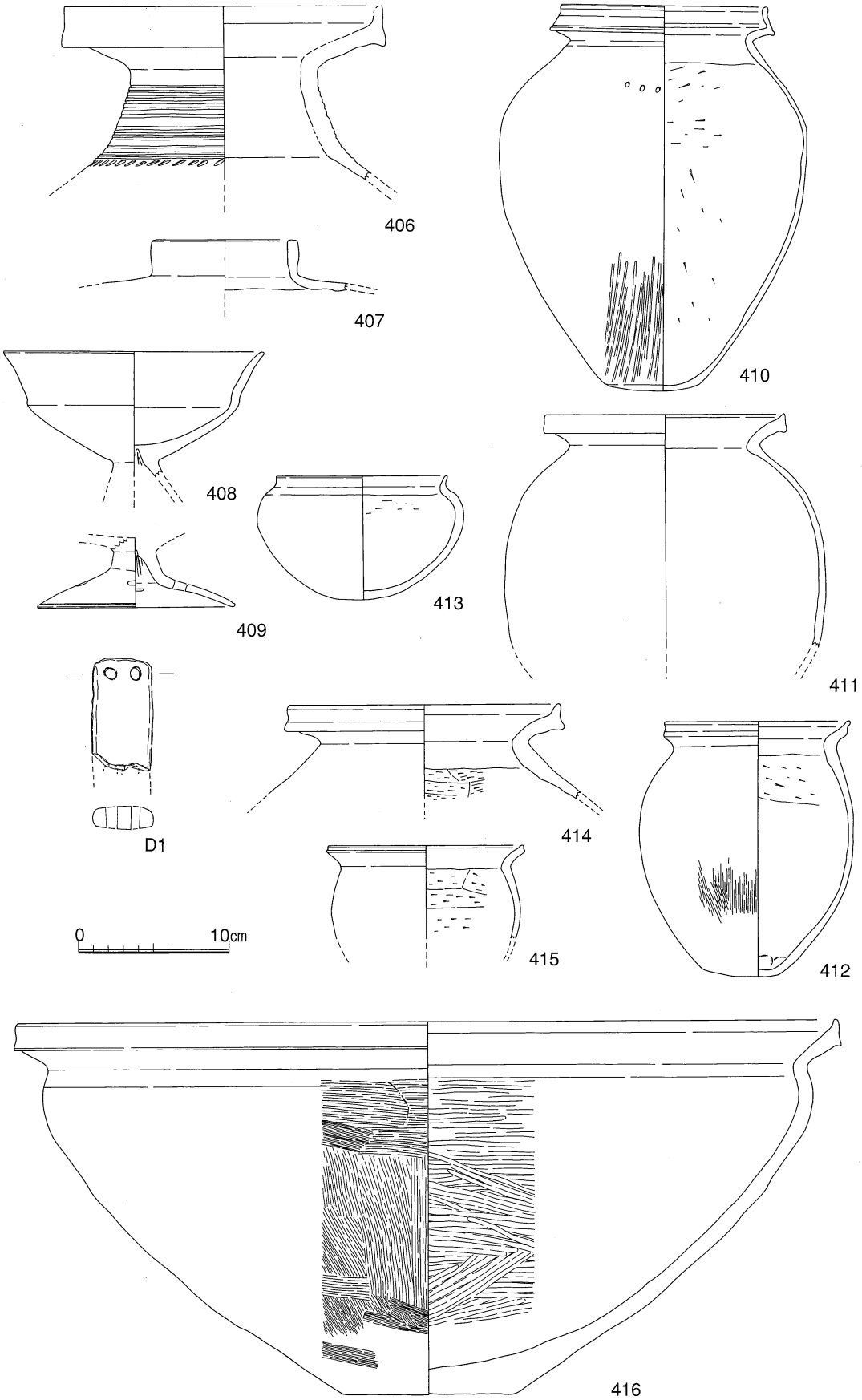
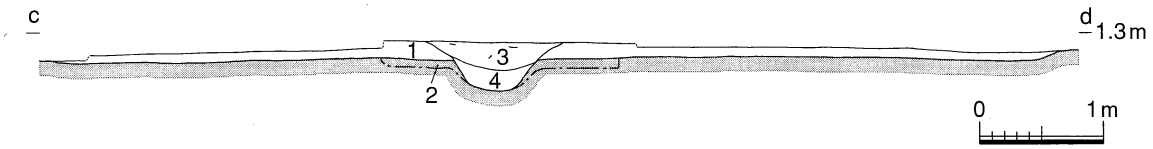



図176　溝29　出土遺物




1　暗灰褐色土(P655)　　3　暗黄灰褐色土(土器片含)(溝29埋土)
2　暗茶褐色粘質土　　4　暗橙灰褐色土(溝29埋土)

図177　P655・溝29　断面図

似ていることから、これら東西方向の溝が大道西H区で直交方向に曲がるか、もしくは、同規模の溝が南へ派生したのかのいずれかの可能性が推測される。また派生した小溝の周囲が溝に接するところでは、扇状に開く平面形で5cmほど低くなっている。また、溝30に沿って帯状に高い部分があるようにもみられることから、畦畔の可能性も推測される。そうすると派生する溝は、溝30以東に広がる微高地低位部上に開発された水田への水口である可能性が高いように思われる。埋土は大きく上層(図156－8・10層)と下層(図156－9・22層)に分けられ、遺物の出土状況も全く異なっている。上層には多量の土器が含まれており、一見土器溜まり状である。さらに土器の分布状況を見てみると、大道西C区の溝13や、大道西D区の溝21と同様にブロック状にまとまる傾向が看取される。溝30では北壁周辺で径2m前後の範囲と、それより南の一群である。ただし、土器の検出レベルがほとんど変わらないことや、異なるブロック間にも若干ではあるが、土器が検出されることから、投棄する時期が異なっていたり、厳密に単位を変えることを意識して形成されたものではなさそうである。またブロック間に器種構成の差などもなさそうである。土器は溝30の最終埋土、つまり溝30が廃絶した後の窪み状の部分に一気に土器を投棄していると考えられるが、その際にいくつかのブロックに対応するような単位に分かれて投棄したのか、もしくは溝30の埋没状況が均一でなかったために、投棄された土器の分布が結果としてブロック的になったというのではなかろうか。溝埋土を掘り下げながら精査をおこなったものの、土質あるいは土層的な違いを識別することはできなかったが、ブロック間に土器構成土の顕著な相違が認められないことからすると、後者の可能性が高いように思われる。

遺物は多いものの、すぐ直上が中世水田層(図156－5層)であることから、水田開発や耕作の際にかなりの土器が削平を受けていた。また器表面の残りもあまり良好とはいえなかった。壺形土器(417～446・449～452・455)、甕形土器(456～458)、鉢形土器(447)、高杯形土器(460・461・467～472)、器台形土器(462～466)などがある。壺形土器(455)はほぼ完形品で、いわゆる特殊器台・壺と共通する胎土を持ち、丹塗りも認められる。器台(465)や器台(464)などは表面に焼成剥離が顕著であり、そのほかの土器にも部分的に焼成剥離の認められるものがある。この点を強調すると、溝の最終埋土に投棄された土器は焼成不良品であることが考えられるが、甕形土器などは表面にススが付着しているものもあることから実際に使用されていたことは明らかである。どの程度までの焼成不良品を実際に使用していたのかという問題とも絡んでくるが、基本的には一般生活に用いられていた土器を投棄したという見方が妥当のようである。図化した土器のうち、甕と比べると壺の方が多いが、これは出土土器の比率を反映しているわけではない。器種組成比率については小片のものも多数あることから、明確なカウントは困難であるが、特に甕が少ないという状況ではなかった。むしろ器壁が薄いため小片化しており、図化に適さないものが多数であったということである。

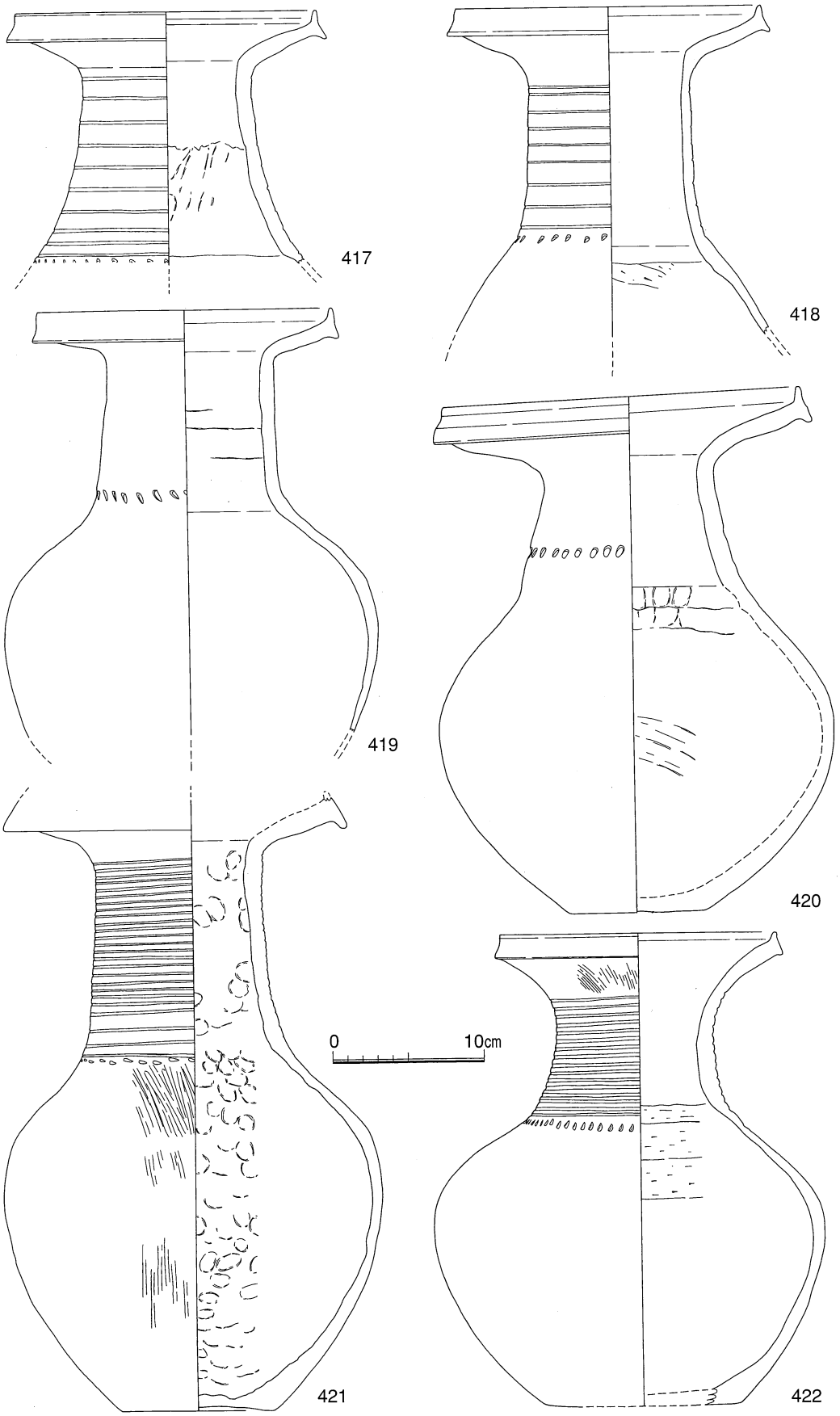



図178　溝30　出土遺物（1）

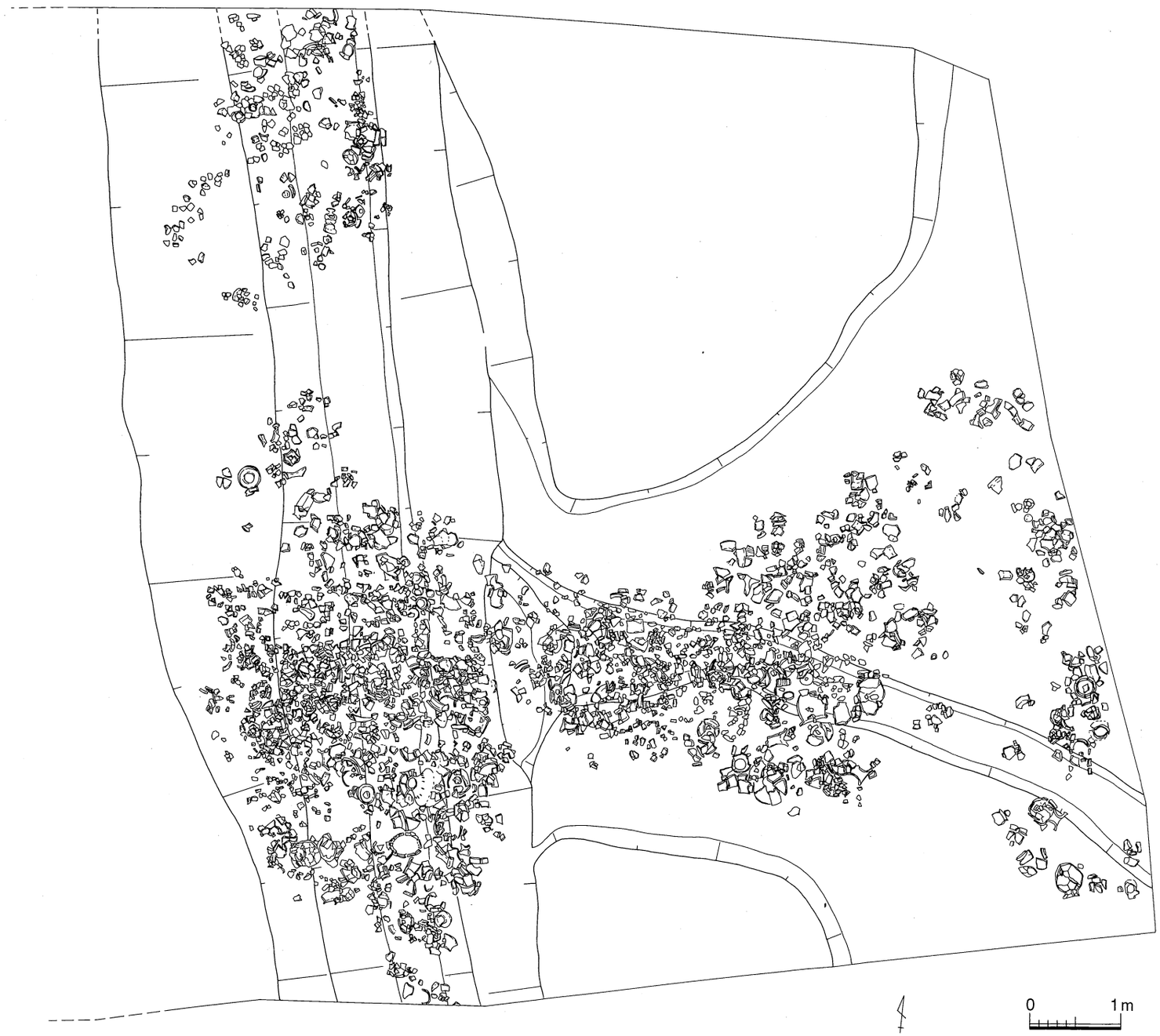



図179　溝30　遺物出土状況

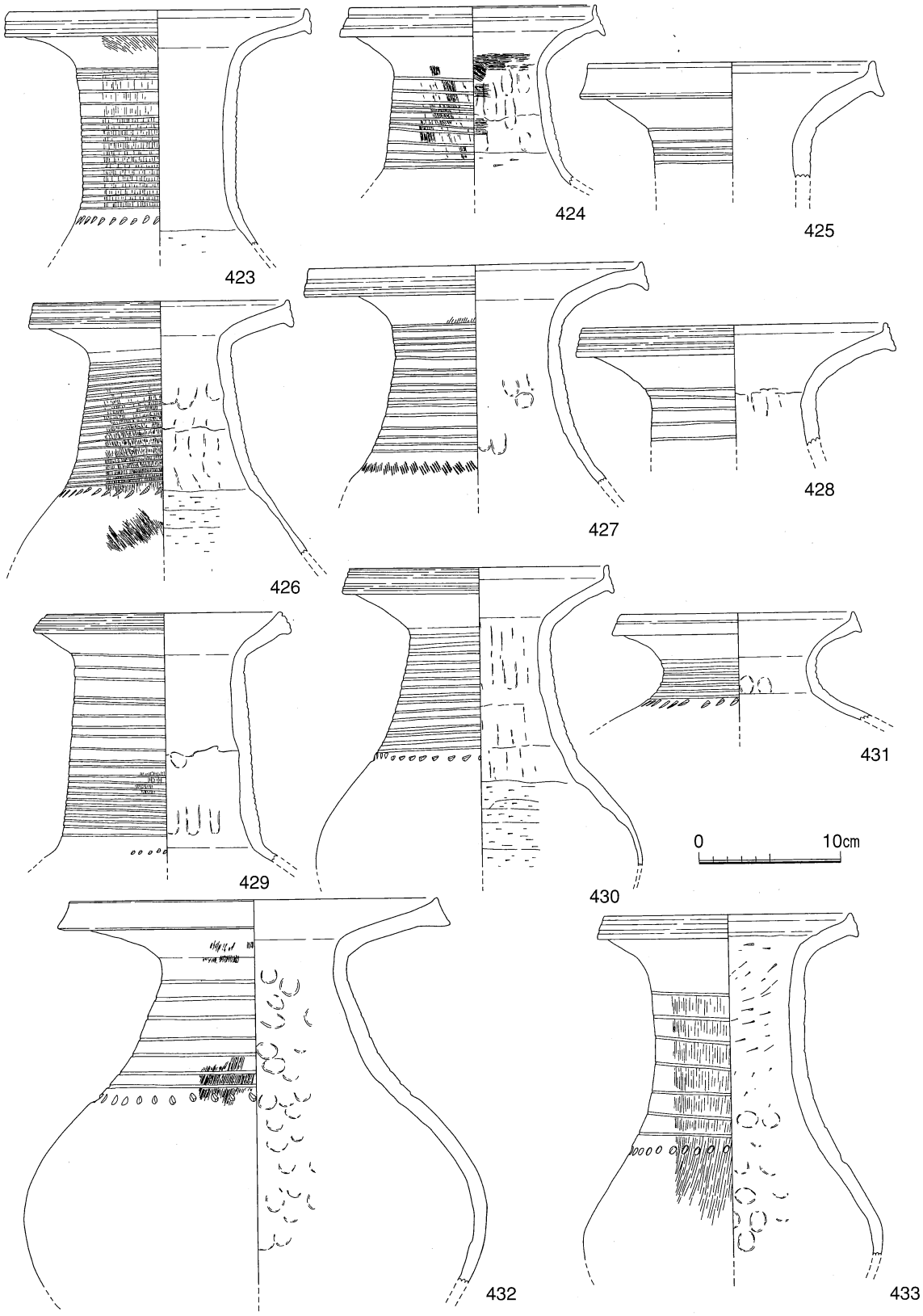



図180　溝30　出土遺物（2）

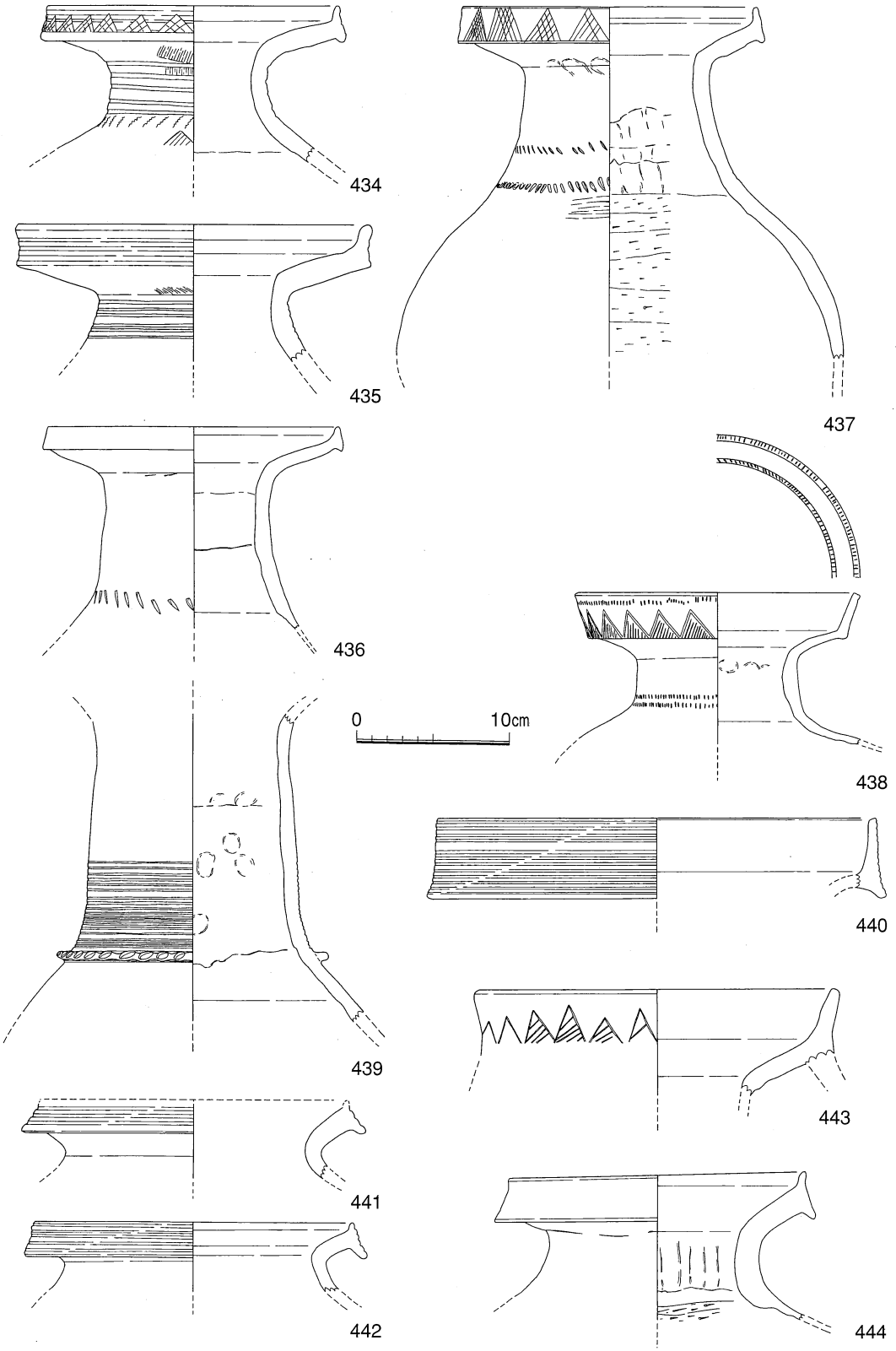



図181　溝30　出土遺物（3）

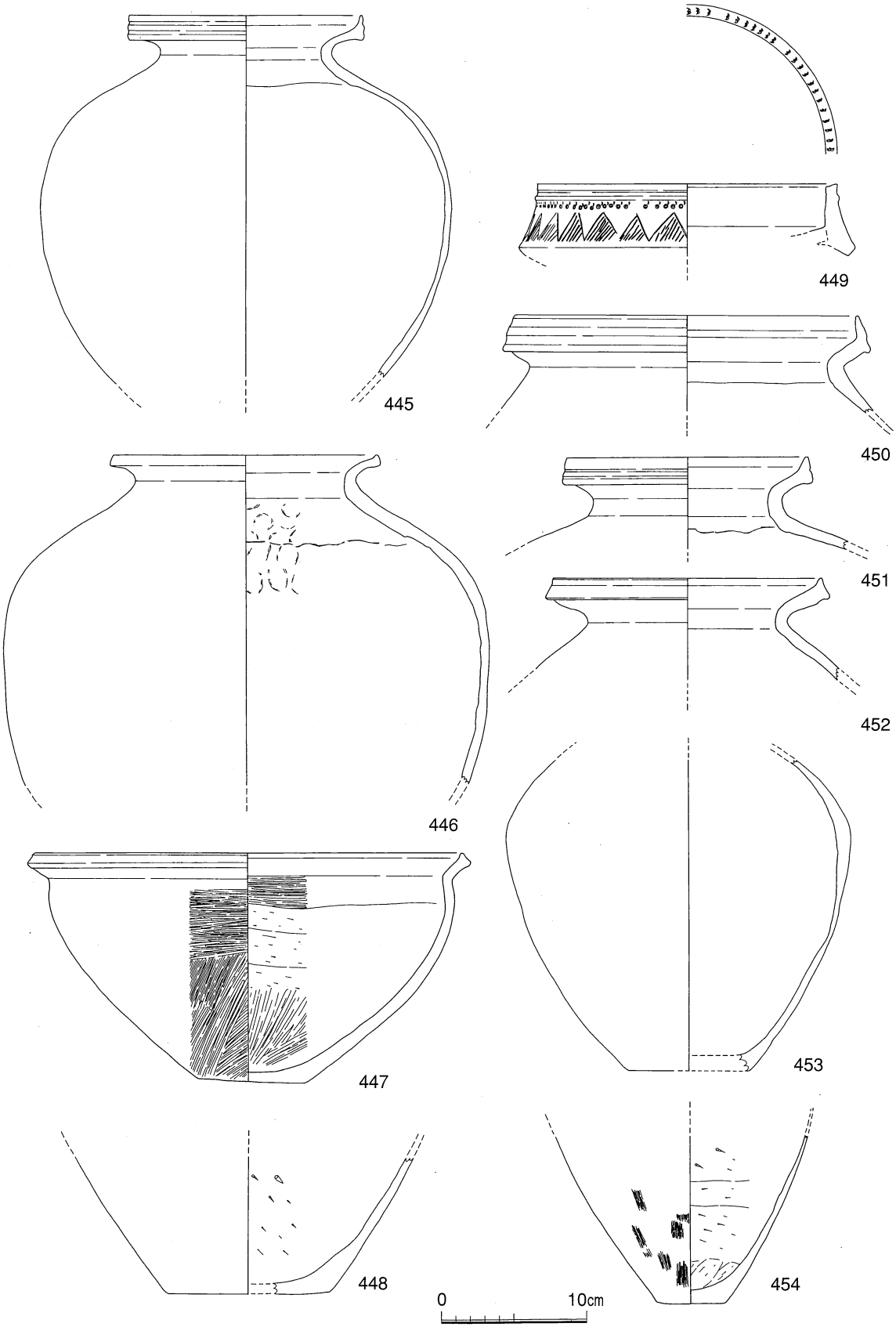



図182　溝30　出土遺物（4）

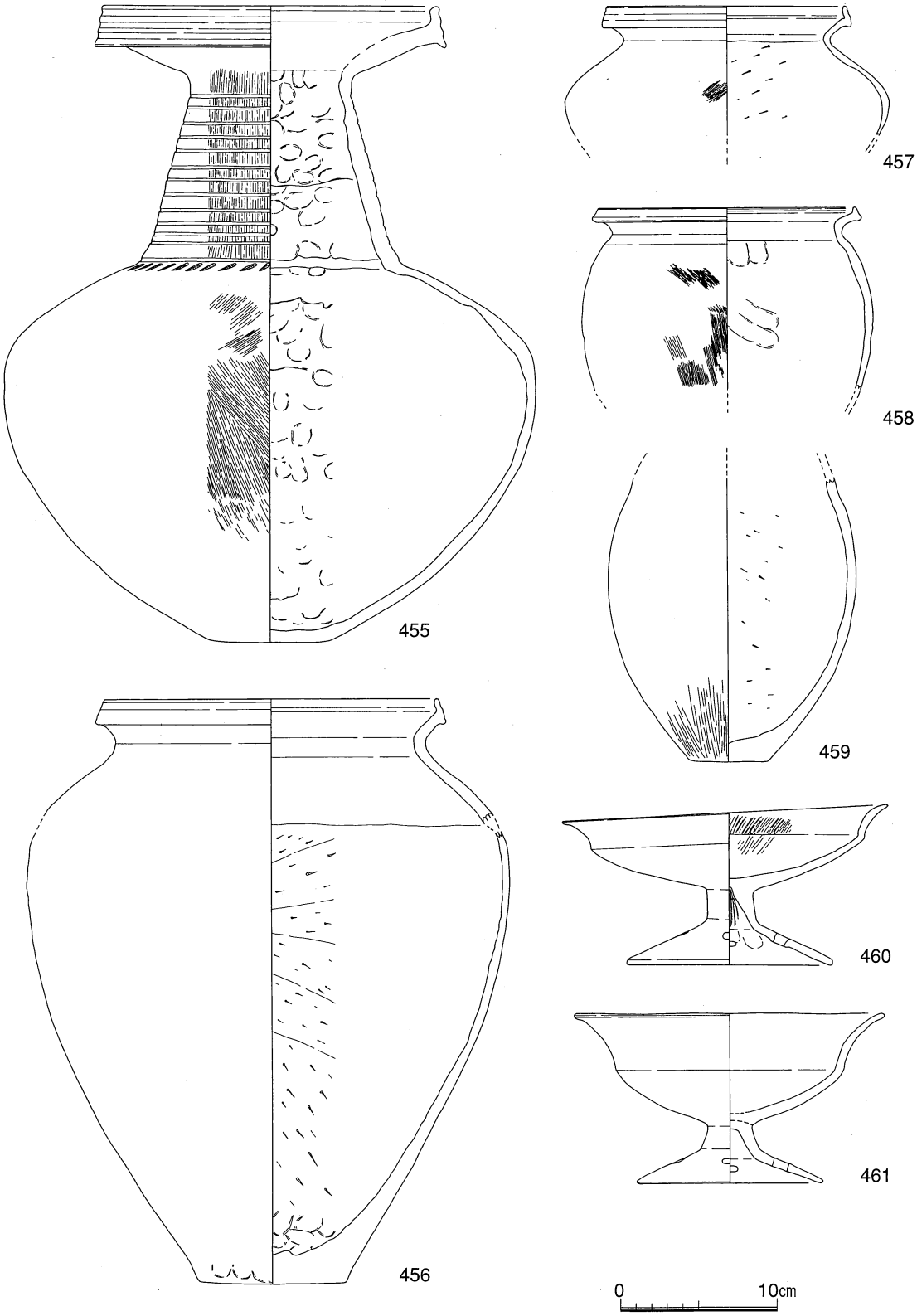



図183　溝30　出土遺物（5）

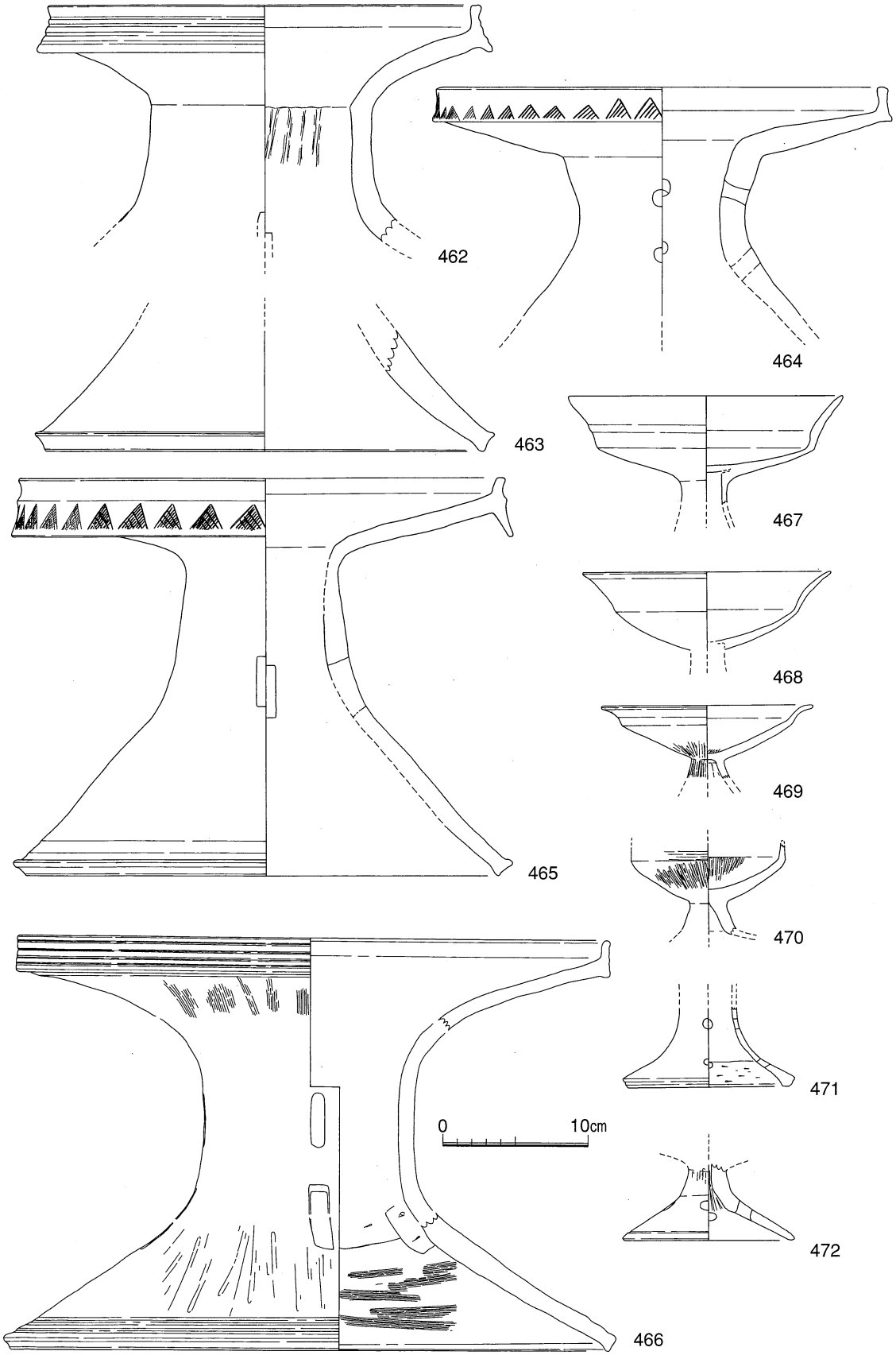



図184　溝30　出土遺物（6）

遺構面精査時出土遺物（図185）

弥生時代の遺構面を精査している際に石器が3点出土した。いずれも調査区東半で、P658の周囲からである。（S 1）は砂岩製の石包丁、（S 2）は安山岩製石包丁、（S 3）はサヌカイト製の石鏃である。

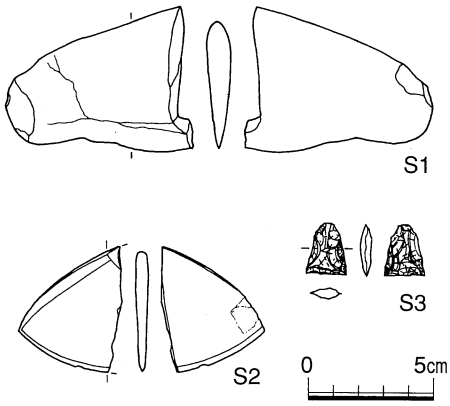



図185　弥生遺構面精査時出土遺物

註

(1) 鈴木康之氏からご教示を得た。
(2) 橋本久和氏からご教示を得た。
(3) 山元敏裕氏よりご教示を得た。
(4) 富岡直人氏よりご教示を得た。
(5) 山元敏裕氏よりご教示を得た。

引用文献

草原孝典『吉野口遺跡』岡山市教育委員会　1997
真鍋篤行「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第7号　1994
行田裕美「鉄鐸について」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集　1997
正岡睦夫ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2　1974
弘田和司「立田遺跡土壙3について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　1999

# XI　出土土器観察表

| 器　形 | 土器番号 | 法量(cm) | | | 形態・調整手法の特徴 | 胎　土 | 色　調 | 遺　構 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 手ずくね土器 | 1 | 4.1 | − | 3.0 | 内外面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝4 |
| 手ずくね土器 | 2 | 6.1 | − | 2.9 | 内外面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝4 |
| 手ずくね土器 | 3 | 5.9 | − | 3.8 | 内外面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝4 |
| 手ずくね土器 | 4 | 8.5 | 3.6 | 4.7 | 内外面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝4 |
| 壺形土器 | 5 | 7.2 | − | 8.8 | 内外面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 溝4 |
| 鉢形土器 | 6 | 10.3 | 4.0 | 7.9 | 外面ヘラミガキ、内面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝4 |
| 製塩土器 | 7 | − | 5.3 | − | 外面タタキ、ほかはナデ。 | 含長石・石英 | 赤橙色 | 溝4 |
| 手あぶり形土器 | 8 | 14.1 | 7.2 | 18.2 | 外面下半タテハケ、ほかはヨコナデ、内面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 溝4 |
| 高杯形土器 | 9 | 18.8 | − | − | 不明。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝4 |
| 甕形土器 | 10 | 14.4 | − | − | 外面上半ハケ、後下半ヘラミガキ、内面下半ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶灰色 | 溝4 |
| 甕形土器 | 11 | 17.1 | − | 25.4 | 外面タテ・ナナメハケ、内面ヨコ・タテヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 茶灰色 | 溝4 |
| 甕形土器 | 12 | 14.4 | 6.0 | 21.6 | 外面タテ・ヨコハケ、内面ヨコ・タテケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝4 |
| 甕形土器 | 13 | 13.9 | − | − | 外面タテハケ後、タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 溝4 |
| 鉢形土器 | 14 | 18.8 | − | 7.4 | 不明。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝4 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師質土器椀 | 15 | 8.8 | 3.9 | 3.4 | 外面口縁部付近ヨコナデ、ほかはナデ。 | 含含長石･石英 | 橙灰色 | 河道1上層 |
| 土師質土器皿 | 16 | 6.2 | 5.3 | 1.25 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。 | 含長石･石英 | 橙灰色 | 河道1上層 |
| 土師質土器皿 | 17 | 3.05 | 5.25 | 1.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。 | 含長石･石英 | 橙褐色 | 河道1上層 |
| 青磁皿 | 18 | 9.8 | 5.1 | 1.9 | 内面はヘラによる片彫りとクシによるジグザグ文様を有する。底部外面に墨書あり。 | － | － | 河道1上層 |
| 青磁碗 | 19 | 17.3 | － | － | 釉色は青味を帯びた緑色で、ヘラによる片彫りが内面にある。 | － | － | 河道1上層 |
| 青磁碗 | 20 | 14.9 | － | － | 釉色は青味を帯びた緑色で、ヘラによる片彫りが内面にある。 | － | － | 河道1上層 |
| 青磁皿 | 21 | 9.8 | 4.8 | 2.2 | 釉色は黄色気味の飴色ガラス質で、内面はヘラによる片彫りとクシによるジグザグ文様を有する。 | － | － | 河道1上層 |
| 白磁蓋 | 22 | 3.9 | － | － | 上面には花弁状の施文がある。 | － | － | 河道1上層 |
| 緑釉陶器壺 | 23 | － | － | － | 外面には線刻による施文があり、緑色の施釉をおこなう。内面は無釉でヨコナデ。 | － | － | 河道1上層 |
| 白磁皿 | 24 | 10.7 | － | － | 内面に雷文状の施文がめぐり、その下には魚鱗状の施文がある。枢府窯系。 | － | － | 河道1上層 |
| 備前焼甕 | 25 | － | － | － | 内外面ヨコナデ。 | － | 茶褐色 | 河道1上層 |
| 東播系壺 | 26 | － | － | － | 胴部外面平行タタキ、ほかはヨコナデ。 | 含長石･石英 | 赤灰色 | 河道1上層 |
| 備前焼擂鉢 | 27 | － | － | － | 内面ヨコナデ。 | 含長石･石英 | 茶褐色 | 河道1上層 |
| 土師質土器椀 | 28 | 13.7 | 6.7 | 4.85 | 内面ナデ、口縁部外面ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 29 | 12.4 | 5.5 | 4.15 | 内面ナデ、口縁部外面ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 30 | 13.85 | 5.8 | 4.25 | 内面ナデ、口縁部外面ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 31 | 13.15 | 5.4 | 4.8 | 内面ナデ、口縁部外面ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 32 | 13.65 | 5.7 | 4.4 | 内面タテハケ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 33 | 12.6 | 5.6 | 4.4 | 内面ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 34 | 13.45 | 5.7 | 4.35 | 内面ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 35 | 12.4 | 5.5 | 4.15 | 内面ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 36 | 10.7 | 4.3 | 3.45 | 内面ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 37 | 13.8 | 6.1 | 4.7 | 内面部分的なヘラミガキ、ほかはナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 38 | 14.2 | 6.4 | 4.6 | 内面板ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 39 | 13.45 | 6.4 | 4.9 | 内面板ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 40 | 13.8 | 4.75 | 6.0 | 内面ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 41 | 14.1 | 6.8 | 4.0 | 内面ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 42 | 13.5 | 5.95 | 4.7 | 内面ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 43 | 12.7 | 5.0 | 4.0 | 内面板ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 44 | 13.4 | 6.3 | 4.7 | 内面ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器椀 | 45 | 13.55 | 6.2 | 4.4 | 内面板ナデ、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器杯 | 46 | 12.1 | 7.6 | 2.9 | 内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り後板目、内面底部ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器杯 | 47 | 13.3 | 10.1 | 2.5 | 内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り後板目、内面底部ナデ。 | 含長石･石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 須恵質土器椀 | 48 | 14.9 | 5.6 | 5.2 | 内面ナデ、外面ヨコナデ、下半一部ハケ。 | 含長石･石英 | 淡灰色 | 河道1下層 |
| 須恵質土器椀 | 49 | 14.15 | 5.8 | 5.3 | 内面ナデ、外面ヨコナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 須恵質土器椀 | 50 | 15.6 | 5.9 | 5.4 | 内面ナデ、外面ヨコナデ。 | 含長石･石英 | 淡灰色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 51 | 7.6 | 6.2 | 1.25 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 52 | 7.5 | 6.2 | 1.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 53 | 6.9 | 5.5 | 1.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 54 | 7.25 | 6.2 | 1.0 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 55 | 7.0 | 5.65 | 1.5 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。、 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 56 | 7.2 | 6.0 | 1.45 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 57 | 7.5 | 5.2 | 1.15 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 58 | 7.5 | 5.7 | 1.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 59 | 7.3 | 5.85 | 1,2 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 60 | 7.4 | 5.9 | 1,5 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 61 | 7.1 | 5.5 | 1.05 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石･石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師質土器皿 | 62 | 8.05 | 6.3 | 1.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 63 | 7.3 | 5.65 | 1.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 64 | 8.0 | 3.5 | 1.15 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 65 | 7.85 | 5.6 | 1.55 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 66 | 7.85 | 6.4 | 1.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 67 | 8.0 | 5.8 | 1.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 68 | 7.4 | 5.9 | 1.5 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 69 | 7.25 | 5.4 | 1.25 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 70 | 7.4 | 6.1 | 1.15 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 71 | 7.25 | 5.4 | 1.25 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 72 | 7.5 | 4.5 | 1.55 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 73 | 7.2 | 5.4 | 1.35 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 74 | 8.05 | 6.2 | 1.45 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 75 | － | － | － | 内面に墨書あり。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器皿 | 76 | 6.8 | 5.6 | 1.5 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り、底部外面に墨書あり、習書か。 | 含長石・石英 | 黄灰白色 | 河道1下層 |
| 土師質土器台 | 77 | 10.5 | 9.25 | 7.55 | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰白色 | 河道1下層 |
| 瓦器椀 | 78 | 14.7 | 4.5 | 5.0 | 内面ヨコナデ、暗文、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 瓦器椀 | 79 | 15.7 | 4.4 | 5.25 | 内面ヨコナデ、暗文、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 瓦器椀 | 80 | 14.0 | 4.4 | 3.7 | 内面ヨコナデ、暗文、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 瓦器椀 | 81 | 15.8 | 4.5 | 4.35 | 内面ヨコナデ、暗文、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 瓦器椀 | 82 | 14.0 | 6.2 | 3.85 | 内面ヨコナデ、暗文、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 瓦器椀 | 83 | 13.2 | 5.0 | 4.4 | 内面ヨコナデ、暗文、外面口縁部ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 瓦器皿 | 84 | 4.3 | 6.6 | 1.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、内面暗文。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 瓦器羽釜 | 85 | 5.3 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ、ほかはナデ、脚部欠損。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 青磁碗 | 86 | 16.7 | 6.0 | 6.45 | 釉色は黄色気味の飴色ガラス質で、内面はヘラによる片彫り施文。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁碗 | 87 | 15.6 | － | － | 釉色は青味を帯びた緑色を主体とする。内面ヘラによる片彫り施文。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁碗 | 88 | 15.9 | － | － | 釉色は青味を帯びた緑色を主体とする。内面ヘラによる片彫り施文。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁碗 | 89 | 14.0 | － | － | 釉色は青味を帯びた緑色を主体とする。内面ヘラによる片彫り施文。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁碗 | 90 | － | 6.25 | － | 釉色は青味を帯びた緑色を主体とする。内面ヘラによる片彫り施文。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁碗 | 91 | － | 6.9 | － | 釉色は黄色気味の飴色ガラス質である。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁碗 | 92 | 15.8 | 4.8 | 6.5 | 釉色は黄色気味の飴色ガラス質である。内面はヘラにより片彫りとクシによりジグザグ文様、外面はクシ。 | － | － | 河道1下層 |
| 白磁碗 | 93 | － | － | － | 釉は若干厚めに施釉され、灰色を帯び、白色を呈する。 | － | － | 河道1下層 |
| 白磁碗 | 94 | － | － | － | 内面には、ヘラによる片彫り、クシによる施文がある。 | － | － | 河道1下層 |
| 白磁碗 | 95 | － | 6.85 | － | 釉は若干厚めに施釉され、灰色を帯び、白色を呈する。底部外面に墨書がある。 | － | － | 河道1下層 |
| 白磁碗 | 96 | 15.9 | － | － | 釉は若干厚めに施釉され、灰色および白色を呈する。 | － | － | 河道1下層 |
| 白磁碗 | 97 | 16.9 | 5.9 | 6.65 | 釉が若干厚めに施釉され、灰色および白色を呈する。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁皿 | 98 | － | 4.5 | － | 釉色は青味を帯びた緑色を主体とする。内面ヘラによる片彫り施文。 | － | － | 河道1下層 |
| 白磁皿 | 99 | 9.5 | 4.8 | 2.25 | 釉は若干厚めに施釉され、灰色および白色を呈する。 | － | － | 河道1下層 |
| 白磁皿 | 100 | 11.1 | － | － | 釉は若干厚めに施釉され、灰色および白色を呈する。 | － | － | 河道1下層 |
| 白磁壺 | 101 | 15.0 | － | － | 口縁部内側から外面にかけて灰色気味の薄目の釉が施釉される。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁皿 | 102 | 10.4 | 4.5 | 2.0 | 釉色は黄色気味の飴色ガラス質の釉である。内面ヘラによる片彫りとクシによるジグザグ文様、墨書あり。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁皿 | 103 | 9.65 | 3.4 | 2.4 | 釉色は黄色気味の飴色ガラス質、内面はヘラによる片彫りとクシ施文、墨書あり。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁皿 | 104 | 10.4 | 4.8 | 2.1 | 釉色は黄色気味の飴色ガラス質、内面はクシによるジグザグ文様。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁皿 | 105 | 10.95 | 5.05 | 1.95 | 釉色は黄色気味の飴色ガラス質の釉である。内面ヘラによる片彫りとクシによるジグザグ文様、墨書あり。 | － | － | 河道1下層 |
| 青磁皿 | 106 | 10.1 | 5.1 | 2.3 | 釉色は黄色気味の飴色ガラス質の釉である。内面ヘラによる片彫りとクシによるジグザグ文様、墨書あり。 | － | － | 河道1下層 |
| 亀山焼こね鉢 | 107 | 32.9 | 12.4 | 12.25 | 内面から口縁部外面にかけてヨコナデ、内面下半および外面下半ナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 河道1下層 |
| 亀山焼こね鉢 | 108 | 32.6 | － | － | 内面から口縁部外面にかけてヨコナデ、内面下半および外面下半ナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 河道1下層 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東播系こね鉢 | 109 | － | 10.3 | － | 内外面ヨコナデ、底部外面糸切り。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 土師質土器鍋 | 110 | 35.8 | － | － | 外面頸部以下タテハケ、下半ヨコハケ、内面頸部以下ヨコハケ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶灰色 | 河道1下層 |
| 備前焼甕 | 111 | 30.4 | － | － | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 黄灰色 | 河道1下層 |
| 亀山焼甕 | 112 | 28.5 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面同心円タタキ、外面格子目タタキ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 東播系こね鉢 | 113 | － | － | － | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 河道1下層 |
| 坩堝 | 114 | 6.6 | － | － | 内外面ナデ。 | 含長石・石英 | 赤灰色 | 河道1下層 |
| 須恵器杯蓋 | 115 | 16.7 | － | 3.5 | 外面天井部ケズリ、ほかはヨコナデ。 | 含長石・石英 | 淡灰色 | 井戸6 |
| 土師器杯 | 116 | 12.4 | 8.8 | 3.0 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸6 |
| 土師器杯 | 117 | 13.8 | 9.8 | 3.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 井戸6 |
| 土師器杯 | 118 | 13.5 | 9.8 | 2.8 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸6 |
| 土師器杯 | 119 | 13.0 | 8.4 | 3.2 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸6 |
| 土師器杯 | 120 | 13.2 | 9.5 | 3.2 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸6 |
| 土師器杯 | 121 | 13.6 | 9.9 | 3.1 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸6 |
| 土師器杯 | 122 | 13.0 | 9.6 | 2.9 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 井戸6 |
| 土師器杯 | 123 | 14.7 | 6.8 | 4.5 | 内外面ヨコナデ、底部外面指押さえ。 | 含長石・石英 | 赤橙色 | 井戸6 |
| 土師器皿 | 124 | 13.8 | 11.6 | 1.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸6 |
| 土師器皿 | 125 | 14.2 | 11.9 | 1.8 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸6 |
| 土師器皿 | 126 | 17.8 | 15.4 | 1.7 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸6 |
| 緑釉陶器碗 | 127 | － | 5.4 | － | 内外面全体に明緑色の釉が認められる。京都産。 | － | － | 井戸6 |
| 手あぶり形土器 | 128 | 16.2 | 9.8 | 14.5 | 外面上半ヘラナデ、下半指ナデ、内面指ナデ後ヘラナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 竪穴住居3 |
| 壺形土器 | 129 | 20.0 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテハケ、内面頸部指押さえ、下半はヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙灰色 | 竪穴住居3 |
| 製塩土器 | 130 | － | 5.2 | － | 内外面指ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 赤橙色 | 井戸5 |
| 製塩土器 | 131 | － | 4.0 | － | 外面平行タタキ、内面ナデ、脚部内外面指ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 赤橙色 | 井戸5 |
| 製塩土器 | 132 | － | 4.0 | － | 外面平行タタキ、内面ナデ、脚部内外面指ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 赤橙色 | 井戸5 |
| 製塩土器 | 133 | － | 4.0 | － | 外面平行タタキ、内面ナデ、脚部内外面指ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 赤橙色 | 井戸5 |
| 製塩土器 | 134 | － | 4.0 | － | 外面平行タタキ、内面ナデ、脚部内外面指ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 赤橙色 | 井戸5 |
| 製塩土器 | 135 | － | 4.1 | － | 外面平行タタキ、内面ナデ、脚部内外面指ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 赤橙色 | 井戸5 |
| 鉢形土器 | 136 | 13.8 | － | 5.4 | 口縁部内外面ヨコナデ、下半ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 井戸5 |
| 高杯形土器 | 137 | 14.9 | － | － | 内面ヘラミガキ、外面不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 赤橙色 | 井戸5 |
| 高杯形土器 | 138 | 19.5 | － | － | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 赤橙色 | 井戸5 |
| 小型丸底壺形土器 | 139 | 12.0 | － | － | 外面タテハケ、下半ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 茶褐色 | 井戸5 |
| 底部(鉢形土器?)甕形土器 | 140 | － | － | － | 外面タテハケ、内面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 茶灰色 | 井戸5 |
| 甕形土器 | 141 | 10.0 | － | － | 外面上半タテハケ、下半ヘラミガキ、内面胴部下半ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 井戸5 |
| 甕形土器 | 142 | 11.6 | － | 18.8 | 外面上半タテハケ、内面ヘラケズリ、下半に指頭圧痕、口縁部ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 茶灰色 | 井戸5 |
| 甕形土器 | 143 | 13.0 | － | 20.2 | 外面上半タテハケ、内面ヘラケズリ、下半に指頭圧痕、口縁部ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 茶灰色 | 井戸5 |
| 甕形土器 | 144 | 14.0 | － | 24.6 | 外面上半タテハケ、下半ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 茶灰色 | 井戸5 |
| 高杯形土器 | 145 | 15.4 | － | － | 内外面下半ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、脚部外面ヘラミガキ、下半ハケ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸7 |
| 甕形土器 | 146 | 15.0 | － | － | 外面不明、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 茶灰色 | 井戸7 |
| 甕形土器 | 147 | 14.5 | 4.0 | 23.6 | 外面上半タテハケ、下半ヘラミガキ、内面上半ヘラケズリ、下半指頭圧痕、口縁部外面は4条の凹線。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 淡茶灰色 | 井戸7 |
| 鉢形土器 | 148 | 7.8 | － | 2.4 | 内外面指ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 淡茶灰色 | 井戸9 |
| 鉢形土器 | 149 | 15.9 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ、下半内外面ヘラミガキ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸9 |
| 高杯形土器 | 150 | 14.3 | 6.9 | 8.1 | 外面タテハケ後一部ヘラミガキ、内面ハケ後ヘラミガキ、底部指ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸9 |
| 高杯形土器 | 151 | 10.6 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ、下半内外面ハケ後ヘラミガキ。 | 含長石・石英 | 橙茶色 | 井戸9 |
| 高杯形土器 | 152 | 19.2 | － | － | 内外面ヘラミガキ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸9 |
| 高杯形土器 | 153 | 19.1 | － | － | 内外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸9 |
| 高杯形土器 | 154 | 17.0 | － | － | 内面ヘラミガキ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 赤橙色 | 井戸9 |
| 高杯形土器 | 155 | － | 13.2 | － | 外面ヘラミガキ、端部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 赤橙色 | 井戸9 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 甕形土器 | 156 | 12.2 | 3.6 | 14.8 | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、底部内面指頭圧痕、焼成後穿孔。 | 含長石・石英・角閃石 | 茶灰色 | 井戸９ |
| 甕形土器 | 157 | 13.4 | 4.0 | 21.2 | 外面ハケ、下半からヘラミガキ、内面ヘラケズリ、指頭圧痕、口縁部外端に3条の凹線。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 井戸９ |
| 甕形土器 | 158 | 16.1 | 3.5 | 27.2 | 外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、底部指頭圧痕、口縁部外端部４条の凹線。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶灰色 | 井戸９ |
| 緑釉陶器香炉 | 159 | － | － | － | 京都産。 | － | － | 河道 |
| 須恵器杯 | 160 | － | 8.4 | － | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 淡灰色 | 土器溜まり |
| 土師器杯 | 161 | 12.8 | 9.3 | 2.9 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 土器溜まり |
| 土師器杯 | 162 | 12.0 | 8.0 | 2.9 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 土器溜まり |
| 土師器杯 | 163 | 12.4 | 8.6 | 3.2 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 土器溜まり |
| 土師器杯 | 164 | 12.6 | 7.6 | 3.5 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指押さえ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 土器溜まり |
| 土師器杯 | 165 | 16.6 | 9.6 | 4.9 | 内面横ヘラミガキ、外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 土器溜まり |
| 土師器杯 | 166 | 14.0 | 8.4 | 3.7 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 土器溜まり |
| 土師器皿 | 167 | 13.0 | 8.0 | 2.5 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙灰色 | 土器溜まり |
| 土師器皿 | 168 | 14.4 | 12.9 | 1.2 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ、内面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙灰色 | 土器溜まり |
| 緑釉陶器皿 | 169 | 13.0 | 5.6 | 3.2 | 京都産。 | － | － | 土器溜まり |
| 緑釉陶器碗 | 170 | 16.8 | － | － | 京都産。 | － | － | 土器溜まり |
| 緑釉陶器底部 | 171 | － | 6.4 | － | 京都産。内外面に釉。 | － | － | 土器溜まり |
| 緑釉陶器底部 | 172 | － | 6.5 | － | 京都産。内外面に釉。 | － | － | 土器溜まり |
| 緑釉陶器底部 | 173 | － | 7.2 | － | 周防産。 | － | － | 土器溜まり |
| 甕形土器 | 174 | 13.8 | － | － | 内外面ヨコナデ、胴部下半ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 斜面堆積及び溝24 |
| 高杯形土器 | 175 | 18.2 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 赤橙色 | 斜面堆積及び溝24 |
| 底部 | 176 | － | 6.5 | － | 内外面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 赤橙色 | 斜面堆積及び溝24 |
| 鼓形器台 | 177 | － | － | － | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶灰色 | 斜面堆積及び溝24 |
| 甕形土器 | 178 | 20.8 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・赤色粒 | 茶灰色 | 斜面堆積及び溝24 |
| 甕形土器 | 179 | 16.0 | － | － | 外面タテハケ後タテミガキ、内面ヘラケズリ、口縁外端部クシ沈線。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶灰色 | 斜面堆積及び溝24 |
| 甕形土器 | 180 | 13.2 | － | － | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部外端部クシ沈線。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶灰色 | 斜面堆積及び溝24 |
| 甕形土器 | 181 | 18.0 | － | － | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 斜面堆積及び溝24 |
| 壺形土器 | 182 | 21.0 | － | － | 内外面ヨコナデ、外面タテハケ、内面胴部ヘラケズリ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 茶灰色 | 斜面堆積及び溝24 |
| 灰釉陶器椀 | 183 | － | 7.0 | － | － | － | － | 溝11上面 |
| カマド | 184 | 27.0 | － | － | 外面タテハケ、縁部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 斜面堆積 |
| 甕形土器 | 185 | 15.6 | 4.5 | 20.5 | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 186 | 14.7 | 4.7 | 19.6 | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 187 | 11.7 | － | 20.2 | 外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、下半ユビ押さえ、口縁外端部3条の凹線。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 188 | － | － | － | 外面タテハケ、内面ナデ、口縁部内面ヨコハケ。 | 含長石・石英・角閃石 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 189 | 15.2 | 5.0 | 23.7 | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 190 | 14.6 | － | 24.5 | 外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、下半指頭圧痕、口縁外端部４条の凹線。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 191 | 14.6 | 6.6 | 25.0 | 外面タテハケ後下半からヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部外端部3条の凹線。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 192 | 16.4 | 5.7 | 27.2 | 外面下半タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 193 | 16.4 | － | 25.4 | 外面タテハケ後下半からヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 壺形土器 | 194 | 16.6 | 8.0 | 31.7 | 外面ハケ後、ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口径部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 195 | 8.6 | － | － | 外面ハケ、内面および口縁部ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 鉢形土器 | 196 | 9.0 | 3.4 | 5.2 | 外面ハケ後ナデ、内面ハケ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 197 | 10.6 | － | 6.7 | 外面不明、内面上半ハケ、下半ケズリ、口縁部内外面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 灰褐色 | 井戸4下層 |
| 甕形土器 | 198 | 10.6 | 7.3 | － | 口縁部内外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 井戸4下層 |
| 高杯形土器 | 199 | 18.0 | 9.2 | 12.0 | 外面タテヘラミガキ、脚部内面ハケ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸4下層 |
| 高杯形土器 | 200 | 16.9 | 8.6 | 10.5 | 外面タテヘラミガキ、杯部内面ヘラミガキ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 井戸4下層 |
| 高杯形土器 | 201 | 12.6 | － | － | 外面タテヘラミガキ、杯部内面タテヘラミガキ、脚部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸4下層 |
| 高杯形土器 | 202 | 13.4 | － | － | 外面タテヘラミガキ、杯部内面タテヘラミガキ、脚部内面ナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸4下層 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 高杯形土器 | 203 | 17.6 | 13.0 | 10.8 | 脚部下半内外面タテヘラミガキ、上半内外面ヨコナデ、脚部内面ハケ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸4下層 |
| 壺形土器 | 204 | 7.4 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・赤色粒 | 赤橙色 | 井戸4下層 |
| 高杯形土器 | 205 | 23.8 | － | － | 外面タテヘラミガキ、内面ハケ後タテヘラミガキ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 井戸4下層 |
| 高杯形土器 | 206 | － | － | － | 外面タテヘラミガキ後一部ハケ、内面ハケ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 井戸4下層 |
| 鉢形土器 | 207 | 25.2 | 9.0 | 10.6 | 外面ハケ、頸部付近ユビ押さえ、内面ヘラケズリ、口縁部外端部6条の凹線。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 井戸4下層 |
| 壺形土器 | 208 | 25.0 | 9.4 | 49.0 | 外面タテハケ後頸部27条の沈線、刺突、下半部タテヘラミガキ、内面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝13 |
| 壺形土器 | 209 | 19.4 | 8.5 | 34.4 | 口径部ヨコナデ後14条の沈線、刺突、下半部ヘラミガキ後一部タテハケ、内面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙灰色 | 溝13 |
| 壺形土器 | 210 | 16.4 | 6.4 | 33.0 | 頸部外面タテハケ後20条の沈線、刺突、下半ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、以下ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 灰白色 | 溝13 |
| 壺形土器 | 211 | 21.8 | 10.0 | 44.5 | 口径部ヨコナデ後17条の沈線、刺突、竹管文、下半ヘラミガキ、内面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 溝13 |
| 壺形土器 | 212 | 17.0 | － | － | 外面タテヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 溝13 |
| 台付鉢形土器 | 213 | 15.8 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝13 |
| 甕形土器 | 214 | 12.8 | 4.5 | 22.7 | 外面タテハケ後下半からヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 橙茶色 | 溝13 |
| 甕形土器 | 215 | － | 6.2 | － | 外面ヘラミガキ、内面ケズリ、指頭圧痕。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 溝13 |
| 甕形土器 | 216 | 15.4 | 6.2 | 27.8 | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 茶灰色 | 溝13 |
| 甕形土器 | 217 | 14.8 | 5.5 | 24.7 | 外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、指頭圧痕、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 赤橙色 | 溝13 |
| 甕形土器 | 218 | 11.8 | － | － | 外面ヘラミガキ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 灰褐色 | 溝13 |
| 鉢形土器 | 219 | 8.0 | 4.9 | 5.0 | 内外面ナデ。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 溝13 |
| 鉢形土器 | 220 | 9.8 | 5.3 | 7.7 | 外面タテヘラミガキ、内面タテヘラミガキ、脚部内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 溝13 |
| 壺形土器 | 221 | － | 11.0 | － | 不明。 | 含長石・石英・赤色粒 | 赤橙色 | 溝13 |
| 鉢形土器 | 222 | 15.9 | 5.5 | 8.3 | 外面タテヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙茶色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 223 | 20.7 | 14.5 | 13.4 | 外面タテヘラミガキ、杯部内面タテヘラミガキ、脚部ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 224 | 21.4 | 13.5 | 10.9 | 外面タテヘラミガキ、杯部内面タテヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 225 | 20.3 | － | － | 外面タテヘラミガキ、杯部内面タテヘラミガキ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 226 | 18.5 | － | － | 外面タテヘラミガキ、内面タテヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 227 | 16.0 | 10.7 | 7.4 | 杯部内外面タテヘラミガキ、脚部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ。 | 含長石・石英 | 橙茶色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 228 | 17.8 | 10.7 | 11.2 | 口縁部内外面ヨコナデ、杯部ヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 229 | 21.0 | － | － | 外面タテヘラミガキ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 230 | 18.0 | － | － | 内外面タテヘラミガキ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 231 | 16.2 | 12.5 | 8.9 | 内外面タテヘラミガキ、口縁部外面ヨコナデ、脚部内面不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 232 | 11.7 | 8.4 | 8.6 | 外面タテヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、脚部外面一部ハケ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 233 | 14.9 | － | － | 外面タテヘラミガキ後口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヨコナデ後タテヘラミガキ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝13 |
| 高杯形土器 | 234 | － | 12.8 | － | 外面ハケ後ヘラミガキ、内面不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝13 |
| 須恵器杯 | 235 | 10.6 | 6.6 | 3.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 灰色 | 溝20 |
| 須恵器皿 | 236 | 15.8 | 12.2 | 2.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 溝20 |
| 土師器杯 | 237 | 12.5 | 8.6 | 2.7 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指頭圧痕。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝20 |
| 土師器杯 | 238 | 12.2 | 7.9 | 3.0 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後指頭圧痕。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝20 |
| 土師器杯 | 239 | 12.6 | 7.8 | 3.2 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後、指頭圧痕。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝20 |
| 黒色土器皿 | 240 | 13.1 | 6.8 | 2.2 | 内面ヘラミガキ、外面ヨコナデ、内面黒色処理。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝20 |
| 土師器皿 | 241 | 13.3 | 10.7 | 1.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後、指頭圧痕。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝20 |
| 土師器甕 | 242 | 29.8 | － | － | 外面タテハケ、内面ハケ後、口縁部内外面ヨコナデ、内面下半ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶褐色 | 溝20 |
| 土師器甕 | 243 | 34.2 | － | － | 外面タテハケ、内面ハケ後、口縁部内外面ヨコナデ、内面下半ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶褐色 | 溝20 |
| 二彩陶器壺 | 244 | － | － | － | 壺あるいはそれに近似した器形の胴部片。 | － | － | 溝20 |
| 壺形土器 | 245 | 15.5 | 7.5 | 28.8 | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口径部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | P633 |
| 壺形土器 | 246 | － | － | － | 外面ヘラミガキ、内面上半ナデ、下半ハケ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | P633 |
| 甕形土器 | 247 | 13.4 | － | － | 内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁外端部に3条の凹線。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶灰色 | P633 |
| 甕形土器 | 248 | 15.0 | － | － | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶灰色 | P633 |
| 甕形土器 | 249 | 16.6 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | P633 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 底部 | 250 | － | 5.8 | － | 外面ヘラミガキ、内面指頭圧痕。 | 含長石･石英･角閃石 | 橙茶色 | P 633 |
| 高杯形土器 | 251 | 17.4 | － | － | 背部内面ヘラミガキ、脚部外面タテハケ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | P 635 |
| 高杯形土器 | 252 | 18.2 | － | － | 不明。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙灰色 | P 635 |
| 高杯形土器 | 253 | 19.6 | － | － | 不明。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙灰色 | P 635 |
| 甕形土器 | 254 | 14.9 | － | － | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙茶色 | P 635 |
| 鉢形土器 | 255 | 43.6 | － | － | 外面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙灰色 | P 635 |
| 壺形土器 | 256 | 15.5 | 6.3 | 26.4 | 外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 茶灰色 | 井戸11 |
| 壺形土器 | 257 | － | － | － | 外面タタキ後上半ハケ、下半ヘラミガキ、頸部ヘラミガキ、内面ハケ、頸部ヨコミガキ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 茶灰色 | 井戸11 |
| 壺形土器 | 258 | － | － | － | 外面ハケ、内面ケズリ、口径部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙茶色 | 井戸11 |
| 底部 | 259 | － | 5.4 | － | 外面ハケ、内面ヘラミガキ後ヘラケズリ。 | 含長石･石英･赤色粒 | 灰褐色 | 井戸11 |
| 底部 | 260 | － | 3.0 | － | 外面ヘラミガキ、内面ケズリ後指頭圧痕。 | 含長石･石英･角閃石 | 灰褐色 | 井戸11 |
| 底部 | 261 | － | 4.9 | － | 外面ヘラミガキ、内面ケズリ後指頭圧痕。 | 含長石･石英･角閃石 | 灰褐色 | 井戸11 |
| 台付鉢形土器 | 262 | 8.4 | 5.0 | 6.0 | 外面ハケ、内面ハケ、脚部内外面ユビナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙茶色 | 井戸11 |
| 高杯形土器 | 263 | 18.0 | － | － | 内外面ヘラミガキ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸11 |
| 高杯形土器 | 264 | 12.5 | － | － | 外面ヘラミガキ内面ハケ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 265 | 14.2 | 3.9 | 16.2 | 外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 橙茶色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 266 | 14.5 | 5.0 | 23.9 | 外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、6条の凹線。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 茶灰色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 267 | 16.0 | 5.1 | 25.6 | 外面ハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、後下半指頭圧痕、口縁外端部に5条の凹線。 | 含長石･石英･赤色粒 | 茶灰色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 268 | 16.8 | 4.8 | 26.6 | 外面ハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、後下半指頭圧痕、口縁外端部に5条の凹線。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 茶灰色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 269 | 15.0 | 4.6 | 24.4 | 外面ハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、後下半指頭圧痕、口縁外端部に５条の凹線。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 茶灰色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 270 | 14.9 | 4.5 | 25.0 | 外面ハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、後下半指頭圧痕、口縁外端部に4条の凹線。 | 含長石･石英･角閃石 | 茶灰色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 271 | 15.3 | 3.5 | 24.6 | 外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、底部付近ユビ押さえ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石 | 茶灰色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 272 | 13.8 | 1.5 | 22.4 | 外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、底部付近ユビ押さえ、口縁部外端部に４条の凹線。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙茶色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 273 | 15.3 | － | － | 外面ハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、外端部5条の凹線。 | 含長石･石英･角閃石 | 橙茶色 | 井戸11 |
| 底部 | 274 | － | 4.5 | － | 外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、下半指頭圧痕。 | 含長石･石英･角閃石 | 橙茶色 | 井戸11 |
| 甕形土器 | 275 | 13.5 | 3.6 | 18.8 | 外面タタキ後タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 橙茶色 | 井戸12 |
| 甕形土器 | 276 | 15.5 | 3.4 | 24.0 | 外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙茶色 | 井戸12 |
| 甕形土器 | 277 | 15.8 | 5.7 | 27.4 | 外面ハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石 | 橙灰色 | 井戸12 |
| 壺形土器 | 278 | 18.2 | － | － | 内外面ハケ後ヨコナデ。 | 含長石･石英･赤色粒 | 茶褐色 | 井戸13 |
| 壺形土器 | 279 | － | － | － | 外面ヨコナデ、内面口縁部ヨコミガキ、下半ヘラケズリ。 | 含長石･石英･角閃石 | 茶褐色 | 井戸13 |
| 壺形土器 | 280 | － | 7.4 | － | 外面タテハケ後ヘラミガキ、内面下半ヘラケズリ、口径部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙茶色 | 井戸13 |
| 特殊壺形土器 | 281 | 15.4 | － | － | 内外面ヨコナデ、丹塗り。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 茶褐色 | 井戸13 |
| 高杯形土器 | 282 | 18.8 | － | － | 内外面ヘラミガキ。 | 含長石・石英 | 赤橙色 | 井戸13 |
| 高杯形土器 | 283 | － | 14.1 | － | 不明。 | 含長石・石英 | 赤橙色 | 井戸13 |
| 鉢形土器 | 284 | 12.0 | 3.0 | 5.6 | 外面ナデ、内面ハケ後ケズリ。 | 含長石･石英･角閃石 | 茶灰色 | 井戸13 |
| 底部 | 285 | 9.2 | － | － | 外面ナデ、内面ケズリ。 | 含長石・石英 | 茶灰色 | 井戸13 |
| 鉢形土器 | 286 | 40.8 | － | － | 外面ハケ、内面ハケ後ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙灰色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 287 | 13.0 | － | － | 外面原ミガキ、内面ケズリ、下半指頭圧痕。口縁部内外面ヨコナデ、外端部4条の凹線文。 | 含長石･石英･赤色粒 | 茶灰色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 288 | 13.5 | － | － | 外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、外端部4条の凹線文。 | 含長石･石英･赤色粒 | 茶灰色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 289 | 13.0 | 4.3 | 18.4 | 外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、下半指頭圧痕、口縁部内外面ヨコナデ、外端部5条の凹線文。 | 含長石･石英･赤色粒 | 灰褐色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 290 | 15.0 | 4.5 | 24.3 | 外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、下半指頭圧痕、口縁部内外面ヨコナデ、外端部5条の凹線文。 | 含長石･石英･赤色粒 | 灰褐色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 291 | 15.2 | 6.0 | 23.8 | 外面タテハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 292 | 13.0 | － | － | 外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、外端部に5条の凹線文。 | 含長石･石英･角閃石 | 茶灰色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 293 | 14.4 | － | － | 外面タテハケ、下半ヘラミガキ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 赤橙色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 294 | 16.6 | 5.3 | 24.9 | 外面ハケ、下半ヘラミガキ、内面ケズリ、下半指頭圧痕、口縁部内外面ヨコナデ、外端部6条の凹線文。 | 含長石・石英 | 赤灰色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 295 | 15.0 | － | － | 外面ハケ、下半ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、下半指頭圧痕、口縁部内外面ヨコナデ、外端部4条の凹線文。 | 含長石･石英･角閃石 | 灰褐色 | 井戸13 |
| 甕形土器 | 296 | 16.0 | 6.2 | 27.6 | 外面ハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石 | 橙茶色 | 井戸13 |

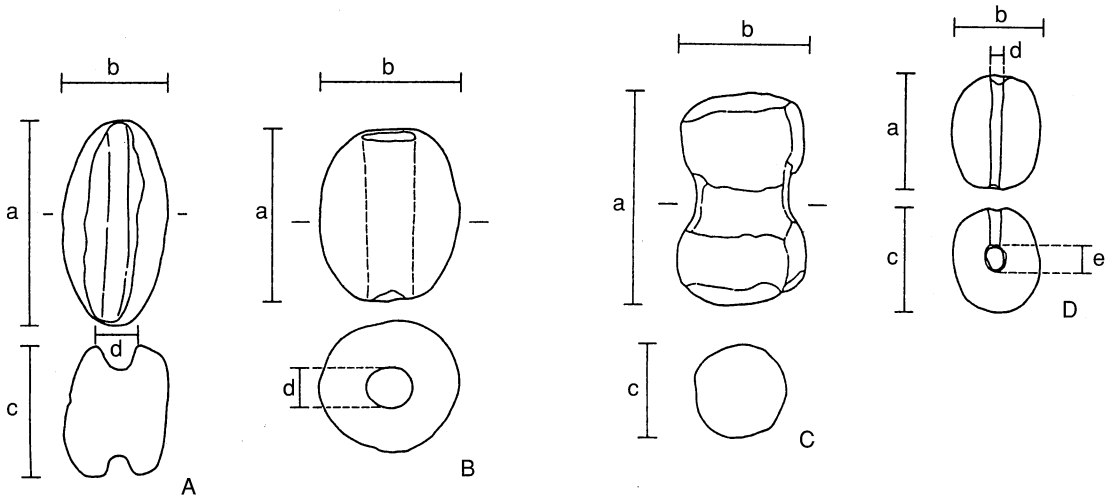
| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 鉢形土器 | 297 | 9.0 | 2.5 | 6.2 | 外面ハケ、内面ナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 鉢形土器 | 298 | 13.0 | 2.0 | 7.5 | 不明。 | 含長石・石英 | 橙色 | 溝21 |
| 台付鉢形土器 | 299 | 5.9 | 11.5 | 12.5 | 外面ヘラミガキ、杯部内面ヘラミガキ、脚部内面ケズリ後ハケ。 | 含長石・石英 | 淡橙灰色 | 溝21 |
| 台付壺形土器 | 300 | 5.5 | 11.0 | 11.6 | 外面ヘラミガキ及び吐け、内面ナデ。 | 含長石・石英 | 淡橙灰色 | 溝21 |
| 鉢形土器 | 301 | 10.0 | － | － | 内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 脚部 | 302 | － | 8.5 | － | 外面ヨコナデ、内面一部ハケ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 高杯形土器 | 303 | 19.0 | 11.0 | 10.5 | 外面ヘラミガキ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 鉢形土器 | 304 | 13.8 | 4.0 | 6.0 | 内外面ヘラミガキ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 脚部 | 305 | 11.0 | － | － | 内面一部ヘラミガキ。 | 含長石・石英 | 淡橙褐色 | 溝21 |
| 壺形土器 | 306 | 7.0 | － | － | 不明。 | 含長石・石英 | 橙褐色 | 溝21 |
| 脚部 | 307 | 11.4 | － | － | 内外面ハケ、端部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 淡橙色 | 溝21 |
| 脚部 | 308 | 14.0 | － | － | 外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後一部ハケ。 | 含長石・石英 | 淡橙色 | 溝21 |
| 高杯形土器 | 309 | 11.6 | － | － | 不明。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 高杯形土器 | 310 | 13.0 | 11.0 | 6.2 | 外面ヘラミガキ、内面不明。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 器台形土器 | 311 | 13.5 | 15.0 | 11.0 | 外面ヘラミガキ後施文、内面上半ヘラミガキ、下半ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 淡橙色 | 溝21 |
| 高杯形土器 | 312 | 17.0 | － | － | 外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。 | 含長石・石英 | 淡橙灰色 | 溝21 |
| 高杯形土器 | 313 | 18.0 | － | － | 外面ヘラミガキ、内面不明。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 高杯形土器 | 314 | 19.2 | － | － | 外面ヘラミガキ、内面不明。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 高杯形土器 | 315 | 18.6 | － | － | 不明。 | 含長石・石英 | 淡橙色 | 溝21 |
| 脚部 | 316 | － | 15.0 | － | 外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 淡橙色 | 溝21 |
| 脚部 | 317 | － | 12.5 | － | 外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 淡橙色 | 溝21 |
| 高杯形土器 | 318 | 28.0 | － | － | 外面一部ハケ、内面ヘラミガキ。 | 含長石・石英 | 淡橙色 | 溝21 |
| 壺形土器 | 319 | 19.0 | － | － | 外面タテハケ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 橙褐色 | 溝21 |
| 壺形土器 | 320 | 18.0 | － | － | 外面タテハケ、内面ナデ後一部ハケ。 | 含長石・石英 | 橙褐色 | 溝21 |
| 壺形土器 | 321 | 20.5 | － | － | 口縁部上端に施文。 | 含長石・石英 | 橙褐色 | 溝21 |
| 甕形土器 | 322 | 15.0 | 5.0 | 24.5 | 外面不明、胴部内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 溝21 |
| 甕形土器 | 323 | 11.9 | 4.5 | 17.3 | 外面下半ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 灰橙色 | 溝21 |
| 甕形土器 | 324 | 13.0 | 4.8 | 18.0 | 外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 灰茶色 | 溝21 |
| 甕形土器 | 325 | 14.0 | － | － | 外面ナナメハケ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 灰茶色 | 溝21 |
| 甕形土器 | 326 | 15.0 | － | － | 外面ハケ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 灰茶色 | 溝21 |
| 甕形土器 | 327 | 14.0 | 4.8 | 21.2 | 外面一部ヘラミガキ、内面ケズリ、底部押圧。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 溝21 |
| 甕形土器 | 328 | 14.0 | 5.0 | 18.5 | 外面ハケ、内面下半ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 溝21 |
| 鉢形土器 | 329 | 34.1 | － | － | 内外面ハケ後ヘラミガキ、口縁端部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝21 |
| 黒色土器椀 | 330 | 15.0 | 7.3 | 5.5 | 内外面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、底部外面指頭圧痕。内面および外面の口縁外端部黒色処理。 | 含長石・石英 | 橙茶色 | 土器溜まり |
| 土師器椀 | 331 | 15.0 | 7.8 | 5.6 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 土器溜まり |
| 土師器椀 | 332 | 15.4 | 7.4 | 5.9 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 土器溜まり |
| 土師器椀 | 333 | 14.6 | 8.8 | 5.6 | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 土器溜まり |
| 土師器椀 | 334 | 15.2 | 7.8 | 4.9 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 土器溜まり |
| 土師器椀 | 335 | 15.3 | 7.4 | 5.2 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 土器溜まり |
| 土師器皿 | 336 | 13.0 | 7.9 | 3.0 | 内外面ヨコナデ、底部内面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 赤橙色 | 土器溜まり |
| 土師器杯 | 337 | 10.9 | 8.0 | 2.2 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 土器溜まり |
| 土師器杯 | 338 | 10.2 | 6.0 | 1.8 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙茶色 | 土器溜まり |
| 土師質土器椀 | 339 | 13.6 | 5.6 | 5.0 | 内外面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 灰褐色 | P 477 |
| 土師質土器椀 | 340 | 14.4 | 6.2 | 5.3 | 内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | P 477 |
| 白磁碗 | 341 | － | － | － | 釉は若干厚めに施釉され、灰色および白色を呈する。 | － | － | P 477 |
| 土師質土器皿 | 342 | 8.3 | 6.5 | 1.2 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | P 477 |
| 須恵器杯 | 343 | 9.6 | － | 3.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英 | 淡灰色 | P 554 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器杯 | 344 | 9.8 | − | 3.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英 | 淡灰色 | P 554 |
| 須恵器杯 | 345 | 10.0 | − | 3.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英 | 淡灰色 | P 554 |
| 須恵器杯 | 346 | 11.7 | − | 3.6 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | P 554 |
| 須恵器杯 | 347 | 10.4 | − | 3.4 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | P 554 |
| 須恵器杯 | 348 | 10.9 | − | 3.5 | 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | P 554 |
| 須恵器杯 | 349 | 11.0 | − | 3.7 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | P 554 |
| 須恵器杯 | 350 | 11.6 | − | 3.8 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | P 554 |
| 須恵器杯 | 351 | 11.8 | − | 4.0 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英 | 灰色 | P 554 |
| 須恵器杯 | 352 | 12.9 | − | − | 内外面ヨコナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英 | 灰色 | P 554 |
| 土師器杯 | 353 | 11.0 | 7.0 | 3.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | P 554 |
| 土師器杯 | 354 | 10.9 | − | − | 内外面ヨコナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | P 554 |
| 須恵器蓋 | 355 | 15.0 | − | 2.2 | 天井部1／2ヘラケズリ、他はヨコナデ。 | 含長石・石英 | 淡灰色 | P 554 |
| 須恵器鉢 | 356 | 18.6 | − | 11.8 | 外面下半ヘラケズリ、他はヨコナデ。 | 含長石・石英 | 淡灰色 | P 554 |
| 土師器高杯 | 357 | − | − | − | 内外面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 赤橙色 | P 554 |
| 土師器甕 | 358 | − | − | − | 外面タテハケ、内面ヘラケズリ、下半指頭圧痕、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 橙茶色 | P 554 |
| 土師器甕 | 359 | 30.6 | − | − | 外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内面ハケ後内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 茶灰色 | P 554 |
| 須恵器杯 | 360 | 10.2 | − | 3.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 溝17 |
| 土師器杯 | 361 | 9.2 | − | 2.7 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝17 |
| 土師器杯 | 362 | 10.6 | − | 2.5 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、灯明痕あり。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝17 |
| 須恵器蓋 | 363 | 14.2 | − | 3.4 | 外面天井部1／2ヘラケズリ、内面天井部ナデ。他はヨコナデ。 | 含長石・石英 | 淡灰色 | 溝17 |
| 須恵器杯 | 364 | 13.6 | 8.3 | 4.2 | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 淡灰色 | 溝17 |
| 土師器鉢 | 365 | 12.6 | − | 4.1 | 内外面下半ナデ、他はヨコナデ。 | 含長石・石英 | 橙茶色 | 溝17 |
| 土師器杯 | 366 | 13.4 | 11.9 | 2.6 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、丹塗り。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙茶色 | 溝17 |
| 土師器杯 | 367 | 14.5 | 12.0 | 2.8 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、丹塗り。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙茶色 | 溝17 |
| 土師器杯 | 368 | 14.6 | 12.0 | 3.3 | 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、丹塗り。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙茶色 | 溝17 |
| 土師器鉢 | 369 | 12.8 | − | 3.6 | 内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、外面下半ヘラケズリ、丹塗り。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝17 |
| 土師器皿 | 370 | − | − | − | 外面ヘラケズリ、内面に暗文がある。畿内産。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝17 |
| 土師器杯 | 371 | 12.2 | − | − | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝17 |
| 須恵器杯 | 372 | 19.4 | − | − | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 溝17 |
| 土師器鉢 | 373 | 15.8 | − | − | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝17 |
| 土師器鉢 | 374 | 17.8 | − | − | 内外面ヨコナデ。外面下半ケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝17 |
| 緑釉陶器底部 | 375 | − | 5.5 | − | 京都産。 | − | − | 包含層および水田層 |
| 緑釉陶器底部 | 376 | − | 7.4 | − | ? | − | − | 包含層および水田層 |
| 緑釉陶器底部 | 377 | − | 7.3 | − | 京都産。 | − | − | 包含層および水田層 |
| 高杯形土器 | 378 | 19.4 | − | − | 不明。 | 含長石・石英 | 橙褐色 | 溝18 |
| 甕形土器 | 379 | 14.0 | − | − | 外面タテハケ後ヘラミガキ、内面はヘラケズリ、下半指頭圧痕、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 灰褐色 | 溝18 |
| 壺形土器 | 380 | 14.6 | 7.7 | 28.0 | 外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙灰色 | 溝18 |
| 鉢形土器 | 381 | 14.2 | 4.4 | 7.5 | 外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝19 |
| 壺形土器 | 382 | 15.6 | − | − | 内外面ヨコナデ、内面下半ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝19 |
| 甕形土器 | 383 | 19.0 | − | − | 口縁部内外面ヨコナデ。外面ハケ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝19 |
| 壺形土器 | 384 | 19.6 | − | − | 外面ハケ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 溝19 |
| 高杯形土器 | 385 | 23.8 | − | − | 外面ヘラミガキ、内面ハケ後ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 赤橙色 | 溝19 |
| 底部 | 386 | − | 8.2 | − | 内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝19 |
| 底部 | 387 | − | 8.5 | − | 不明。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝19 |
| 鉢形土器 | 388 | 36.8 | − | − | 外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 溝19 |
| 器種不明 | 389 | − | − | − | 線刻文あり。 | 含長石・石英 | 橙褐色 | 溝19 |
| 特殊器台 | 390 | − | − | − | ヨコナデ、丹塗り。 | 含長石・石英・角閃石 | 赤灰色 | 溝19 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師質土器椀 | 391 | － | 5.2 | － | 内外面ナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 溝28 |
| 土師質土器椀 | 392 | － | 6.0 | － | 内外面ナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 溝28 |
| 土師質土器皿 | 393 | 6.7 | 5.0 | 1.4 | 内外面ナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 溝28 |
| 土師質土器皿 | 394 | 6.7 | 4.9 | 1.4 | 内外面ナデ。 | 含長石・石英 | 灰褐色 | 溝28 |
| 土師質土器皿 | 395 | 8.9 | 5.5 | 2.4 | 内外面ナデ。 | 含長石・石英 | 橙灰色 | 溝28 |
| 青磁碗 | 396 | － | 5.0 | － | 釉色は青みを帯びた緑色である。 | － | － | 溝28 |
| 白磁碗 | 397 | － | 5.8 | － | 釉は若干厚めに施釉され、灰色および白色を呈する。 | － | － | 溝28 |
| 備前焼擂鉢 | 398 | － | － | － | － | － | － | 溝28 |
| 緑釉陶器椀 | 399 | － | － | － | 京都産。 | － | － | 水田層 |
| 緑釉陶器椀 | 400 | － | － | － | 京都産。 | － | － | 水田層 |
| 緑釉陶器椀 | 401 | － | － | － | 京都産。 | － | － | 水田層 |
| 緑釉陶器椀 | 402 | － | － | － | 京都産。 | － | － | 水田層 |
| 手あぶり形土器 | 403 | 14.2 | 6.00 | 16.70 | 不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 竪穴住居4 |
| 須恵器杯 | 404 | － | － | － | 内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英 | 灰色 | 溝31 |
| 壺形土器 | 405 | 11.0 | － | － | 不明。 | 含長石・石英 | 灰茶色 | P656 |
| 壺形土器 | 406 | 20.8 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝29 |
| 壺形土器 | 407 | 9.6 | － | － | 内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝29 |
| 高杯形土器 | 408 | 17.0 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・赤色粒 | 赤橙色 | 溝29 |
| 高杯形土器 | 409 | － | 12.9 | － | 不明。 | 含長石・石英・赤色粒 | 赤橙色 | 溝29 |
| 甕形土器 | 410 | 13.4 | 6.2 | 25.4 | 外面下半ヘラミガキ、上半刺突文、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝29 |
| 甕形土器 | 411 | 15.7 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝29 |
| 甕形土器 | 412 | 12.1 | 4.9 | 16.9 | 外面ハケ、内面ヘラケズリ、底部付近指頭圧痕、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝29 |
| 鉢形土器 | 413 | 11.2 | － | 8.1 | 内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝29 |
| 壺形土器 | 414 | 17.9 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石 | 橙褐色 | 溝29 |
| 甕形土器 | 415 | 12.8 | － | － | 内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝29 |
| 鉢形土器 | 416 | 54.0 | 11.3 | 25.5 | 外面ハケ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝29 |
| 壺形土器 | 417 | 19.6 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 418 | 20.0 | － | － | 胴部内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 419 | 19.2 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 420 | 23.2 | 9.0 | 33.8 | 口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 421 | － | 9.8 | － | 胴部外面ヘラミガキ、内面ナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙茶色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 422 | 18.0 | 12.8 | 30.9 | 口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 423 | 20.8 | － | － | 外面ハケ後沈線、内面一部ハケ、口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、胴部内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 424 | 17.1 | － | － | 外面ハケ後沈線、内面一部ハケ、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 425 | 20.0 | － | － | 不明。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 426 | 17.8 | － | － | 外面ハケ後沈線、刺突、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 427 | 23.1 | － | － | 外面ハケ後沈線、圧痕文。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 428 | 21.1 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 429 | 16.4 | － | － | 外面ハケ後沈線、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 430 | 18.0 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 431 | 16.2 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 432 | 25.6 | － | － | 外面ハケ後沈線、刺突、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 433 | 17.3 | － | － | 外面ハケ後、刺突、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 434 | 18.9 | － | － | 外面タテハケ後沈線、貝殻復縁文、鋸歯文、内面ナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 435 | 22.8 | － | － | 外面ハケ後、沈線、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 436 | 18.8 | － | － | 口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石・石英・赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 437 | 19.0 | － | － | 外面胴部下半ヘラミガキ、内面ナデ、胴部内面ヘラケズリ。 | 含長石・石英・角閃石・赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 壺形土器 | 438 | 17.8 | − | − | 口縁端部、頸部に刻み目、内面口縁部に刻み目、口縁外端部に鋸歯文。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 439 | − | − | − | 内面ナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 440 | 28.4 | − | − | 不明。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 441 | − | − | − | 不明。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 442 | 20.6 | − | − | 不明。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 443 | 23.0 | − | − | ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 444 | 19.2 | − | − | 口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 445 | 15.8 | − | − | 口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 446 | 18.0 | − | − | 不明。 | 含長石･石英 | 橙褐色 | 溝30 |
| 鉢形土器 | 447 | 29.0 | 7.2 | 15.5 | 外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ後一部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙茶色 | 溝30 |
| 底部 | 448 | - | 11.0 | − | 内面ヘラケズリ。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 449 | 20.4 | − | − | ヨコナデ後、竹管文、半載竹管文、鋸歯文。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 甕形土器 | 450 | 23.4 | − | − | 内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 茶灰色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 451 | 16.4 | − | − | 内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 452 | 18.2 | − | − | 内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 甕形土器(？) | 453 | − | 8.2 | − | 不明、外面にスス付着。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 底部 | 454 | − | 4.6 | − | 外面ハケ、内面ヘラケズリ、外面にスス付着。 | 含長石･石英･角閃石 | 橙褐色 | 溝30 |
| 壺形土器 | 455 | 21.2 | 7.5 | 40.4 | 外面ハケ後沈線、刺突、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、特殊器台の胎土と共通。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 茶灰色 | 溝30 |
| 甕形土器 | 456 | 21.2 | 9.2 | 37.1 | 口縁部内外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 甕形土器 | 457 | 15.2 | − | − | 外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 甕形土器 | 458 | 16.2 | − | − | 外面ハケ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、外面にスス付着。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 甕形土器(？) | 459 | - | 5.0 | − | 外面ハケ、内面ヘラケズリ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 高杯形土器 | 460 | 20.7 | 13.0 | 9.7 | 内面ヘラミガキ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 赤橙色 | 溝30 |
| 高杯形土器 | 461 | 19.4 | 11.6 | 10.7 | 不明。 | 含長石･石英 | 赤橙色 | 溝30 |
| 器台形土器 | 462 | 29.2 | − | − | 口縁部内外面ヨコナデ、内面下半ナデ。 | 含長石･石英 | 茶灰色 | 溝30 |
| 器台形土器 | 463 | − | 29.8 | − | 不明。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 淡茶灰色 | 溝30 |
| 器台形土器 | 464 | 30.7 | − | − | 口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙茶色 | 溝30 |
| 器台形土器 | 465 | 33.4 | 31.6 | 27.0 | 口縁部内外面ヨコナデ後鋸歯文。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙灰色 | 溝30 |
| 器台形土器 | 466 | 39.9 | 40.5 | − | 外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面下半ヘラケズリ、ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 高杯形土器 | 467 | 18.6 | − | − | 内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石 | 橙灰色 | 溝30 |
| 高杯形土器 | 468 | 16.7 | − | − | 不明。 | 含長石･石英･赤色粒 | 灰赤橙色 | 溝30 |
| 高杯形土器 | 469 | 14.2 | − | − | 内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 高杯形土器 | 470 | − | − | − | 内外面ヘラミガキ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 橙褐色 | 溝30 |
| 高杯形土器 | 471 | − | 10.9 | − | 内外面ヘラケズリ。 | 含長石･石英･角閃石 | 橙灰色 | 溝30 |
| 高杯形土器 | 472 | − | 11.4 | − | 外面ヘラミガキ。 | 含長石･石英･角閃石･赤色粒 | 赤橙色 | 溝30 |

## 凡例




ヘラ記号

1：○　2：○○　3：∴　4：＼　5：×

## ⅩⅡ　河道出土土錘計測値

| No | a(cm) | b(cm) | c(cm) | d【e】(cm) | 重量(g) | ヘラ記号 | 形態 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 10.4 | 5.6 | 6.7 | 1.8 | 409.4 | 1 | A |
| 2 | 11.8 | 5.5 | 6.5 | 2.0 | 413.8 | － | A |
| 3 | 10.2 | 6.6 | 6.1 | 1.7 | 375.8 | － | A |
| 4 | 11.7 | 5.7 | 7.7 | 1.6 | 564.3 | － | A |
| 5 | 10.5 | 7.3 | 8.0 | 2.0 | 589.0 | 2 | A |
| 6 | 10.0 | 5.8 | 5.7 | 2.0 | 330.3 | 2 | A |
| 7 | 10.1 | 5.3 | 5.5 | 1.7 | 367.6 | 1 | A |
| 8 | 10.3 | 6.7 | 7.7 | 1.8 | 467.8 | 2 | A |
| 9 | 10.7 | 6.0 | 7.2 | 1.6 | 399.5 | 2 | A |
| 10 | 11.7 | 4.5 | 5.8 | 1.5 | 285.7 | － | A |
| 11 | 11.2 | 5.5 | 6.2 | 1.9 | 362.7 | 3 | A |
| 12 | 11.6 | 5.7 | 7.1 | 1.8 | 476.0 | － | A |
| 13 | 10.6 | 7.0 | 7.2 | 2.0 | 514.2 | － | A |
| 14 | 11.8 | 5.2 | 6.6 | 1.8 | 427.4 | － | A |
| 15 | 9.8 | 6.4 | 6.4 | 1.6 | 379.4 | － | A |
| 16 | 12.7 | 5.4 | 6.8 | 1.9 | 486.4 | － | A |
| 17 | 9.4 | 6.0 | 7.0 | 1.5 | 345.9 | － | A |
| 18 | 10.4 | 5.5 | 5.5 | 1.6 | 334.6 | － | A |
| 19 | 11.0 | 4.8 | 5.8 | 1.5 | 317.4 | 2 | A |
| 20 | 11.0 | 5.9 | 5.7 | 1.5 | 371.6 | 1 | A |
| 21 | 10.7 | 6.1 | 6.7 | 1.5 | 418.5 | 2 | A |
| 22 | 10.4 | 6.0 | 5.5 | 1.6 | 319.7 | － | A |
| 23 | 9.8 | 5.7 | 6.2 | 1.4 | 334.3 | － | A |
| 24 | 11.0 | 6.4 | 7.2 | 1.9 | 482.8 | － | A |
| 25 | 10.9 | 5.7 | 7.2 | 1.6 | 462.4 | － | A |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 26 | 10.5 | 5.8 | 7.4 | 1.8 | 459.3 | − | A |
| 27 | 10.0 | 7.4 | 6.0 | 1.1 | 455.1 | 2 | A |
| 28 | 10.2 | 5.5 | 6.2 | 1.5 | 354.6 | − | A |
| 29 | 10.3 | 5.7 | 7.3 | 1.9 | 382.6 | − | A |
| 30 | 9.3 | 6.1 | 6.7 | 1.7 | 372.6 | − | A |
| 31 | 9.2 | 6.0 | 6.2 | 1.5 | 290.2 | − | A |
| 32 | 11.0 | 6.5 | 5.4 | 1.7 | 391.9 | − | A |
| 33 | 10.1 | 6.7 | 7.0 | 1.5 | 509.8 | 1 | A |
| 34 | 10.1 | 5.7 | 7.7 | 1.7 | 496.1 | − | A |
| 35 | 10.1 | 7.2 | 6.4 | 2.1 | 501.2 | − | A |
| 36 | 10.2 | 5.5 | 6.4 | 2.2 | 401.0 | 2 | A |
| 37 | 10.2 | 5.1 | 6.3 | 1.9 | 334.0 | − | A |
| 38 | 10.3 | 6.1 | 7.0 | 1.3 | 430.9 | − | A |
| 39 | 9.1 | 4.7 | 7.4 | 1.5 | 365.6 | − | A |
| 40 | 10.4 | 5.7 | 7.2 | 1.9 | 411.5 | 1 | A |
| 41 | 9.9 | 6.0 | 7.0 | 1.6 | 382.1 | − | A |
| 42 | 9.3 | 6.7 | 6.6 | 1.4 | 428.9 | − | A |
| 43 | 9.7 | 6.6 | 6.3 | 2.3 | 398.6 | − | A |
| 44 | 10.8 | 7.4 | 7.1 | 2.0 | 519.4 | 4 | A |
| 45 | 10.7 | 5.5 | 6.0 | 1.5 | 336.1 | − | A |
| 46 | 10.4 | 6.1 | 5.5 | 2.1 | 342.4 | − | A |
| 47 | 10.0 | 6.0 | 6.8 | 1.8 | 362.2 | − | A |
| 48 | 11.0 | 4.7 | 6.5 | 1.7 | 317.8 | − | A |
| 49 | 10.3 | 6.6 | 6.9 | 1.5 | 491.6 | − | A |
| 50 | 11.1 | 5.4 | 7.3 | 2.0 | 406.5 | − | A |
| 51 | 10.0 | 6.4 | 7.2 | 2.2 | 473.3 | − | A |
| 52 | 9.3 | 7.0 | 5.4 | 1.3 | 363.2 | − | A |
| 53 | 9.8 | 6.3 | 6.8 | 1.7 | 413.7 | − | A |
| 54 | 11.2 | 6.2 | 7.4 | 2.0 | 517.4 | 2 | A |
| 55 | 9.0 | 6.0 | 6.0 | 1.6 | 326.0 | − | A |
| 56 | 11.5 | 5.0 | 6.7 | 1.8 | 374.9 | − | A |
| 57 | 11.1 | 6.4 | 7.0 | 1.6 | 470.5 | 1 | A |
| 58 | 10.6 | 6.0 | 6.0 | 1.3 | 395.0 | 2 | A |
| 59 | 9.1 | 6.0 | 6.9 | 2.2 | 352.9 | − | A |
| 60 | 10.6 | 5.5 | 6.8 | 1.9 | 383.1 | − | A |
| 61 | 10.4 | 6.8 | 6.0 | 1.6 | 440.8 | − | A |
| 62 | 9.6 | 5.2 | 6.6 | 1.6 | 364.1 | − | A |
| 63 | 9.7 | 5.1 | 6.7 | 2.0 | 311.7 | − | A |
| 64 | 11.0 | 6.0 | 7.1 | 1.7 | 431.7 | − | A |
| 65 | 10.7 | 5.6 | 5.8 | 1.2 | 352.1 | 1 | A |
| 66 | 10.2 | 7.0 | 6.6 | 1.6 | 375.5 | 2 | A |
| 67 | 10.0 | 6.5 | 6.8 | 1.5 | 497.5 | − | A |
| 68 | 10.5 | 6.0 | 6.8 | 1.3 | 376.1 | − | A |
| 69 | 10.5 | 6.8 | 6.4 | 1.4 | 350.4 | − | A |
| 70 | 8.1 | 6.0 | 6.6 | 1.5 | 354.1 | − | A |
| 71 | 10.3 | 6.1 | 5.3 | 1.3 | 346.2 | − | A |
| 72 | 10.4 | 5.4 | 6.8 | 1.2 | 422.1 | − | A |
| 73 | 11.0 | 5.2 | 6.0 | 2.0 | 322.3 | 5 | A |
| 74 | 8.9 | 5.6 | 5.5 | 1.5 | 271.5 | − | A |
| 75 | 9.9 | 5.7 | 6.4 | 1.5 | 352.0 | − | A |
| 76 | 10.7 | 5.7 | 6.6 | 1.6 | 391.4 | 2 | A |
| 77 | 11.4 | 6.0 | 7.4 | 1.8 | 454.8 | − | A |
| 78 | 9.6 | 5.6 | 6.5 | 1.6 | 352.2 | 3 | A |
| 79 | 10.8 | 5.2 | 7.1 | 1.8 | 461.8 | − | A |
| 80 | 11.0 | 5.8 | 6.8 | 1.8 | 381.6 | − | A |
| 81 | 8.3 | 5.2 | 6.4 | 1.6 | 302.5 | − | A |
| 82 | 9.9 | 5.0 | 5.9 | 1.5 | 296.3 | − | A |
| 83 | 9.6 | 6.3 | 5.6 | 1.4 | 289.0 | − | A |
| 84 | 9.5 | 6.2 | 6.9 | 1.7 | 399.8 | − | A |
| 85 | 9.6 | 7.4 | 6.9 | 1.5 | 388.3 | − | A |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 86 | 10.6 | 6.0 | 7.5 | 1.7 | 570.3 | 2 | A |
| 87 | 13.9 | 6.0 | 7.4 | 1.7 | 570.7 | − | A |
| 88 | 11.0 | 6.0 | 8.2 | 1.8 | 554.4 | 3 | A |
| 89 | 10.2 | 6.1 | 6.6 | 1.2 | 353.2 | − | A |
| 90 | 10.4 | 5.9 | 6.3 | 1.3 | 403.9 | 5 | A |
| 91 | 9.1 | 7.0 | 6.0 | 1.6 | 356.2 | − | A |
| 92 | 10.6 | 5.3 | 7.1 | 1.7 | 438.2 | − | A |
| 93 | 9.4 | 6.4 | 6.0 | 1.3 | 355.2 | 2 | A |
| 94 | 11.0 | 5.7 | 6.8 | 1.8 | 444.0 | − | A |
| 95 | 8.6 | 6.0 | 6.0 | 1.0 | 281.7 | − | A |
| 96 | 9.3 | 5.7 | 5.3 | 1.5 | 318.5 | − | A |
| 97 | 10.0 | 5.6 | 7.0 | 1.5 | 357.3 | − | A |
| 98 | 10.7 | 5.3 | 6.0 | 1.5 | 359.8 | − | A |
| 99 | 8.5 | 5.2 | 6.4 | 1.2 | 289.6 | − | A |
| 100 | 9.3 | 5.6 | 6.2 | 1.3 | 353.9 | − | A |
| 101 | 9.6 | 6.0 | 6.8 | 1.5 | 365.7 | − | A |
| 102 | 9.1 | 5.5 | 6.2 | 1.4 | 306.1 | − | A |
| 103 | 9.0 | 5.2 | 6.7 | 1.5 | 335.8 | − | A |
| 104 | 10.1 | 6.0 | 6.8 | 1.6 | 391.3 | − | A |
| 105 | 8.1 | 3.5 | 3.0 | 0.6 | 81.7 | − | A |
| 106 | 6.6 | 2.7 | 2.9 | 0.7 | 51.8 | − | A |
| 107 | 10.7 | 6.5 | 7.7 | 1.6 | 499.2 | − | B |
| 108 | 7.5 | 6.0 | − | 1.9 | 257.6 | − | B |
| 109 | 9.2 | 7.5 | − | 2.2 | 390.6 | − | B |
| 110 | 8.1 | 6.0 | − | 1.3 | 336.9 | − | B |
| 111 | 8.1 | 6.1 | − | 2.6 | 261.9 | − | B |
| 112 | 9.6 | 6.0 | − | 2.0 | 370.0 | − | B |
| 113 | 9.7 | 6.2 | − | 2.2 | 406.9 | − | B |
| 114 | 7.8 | 7.0 | − | 2.2 | 339.7 | − | B |
| 115 | 8.6 | 5.7 | − | 2.2 | 242.7 | − | B |
| 116 | 8.5 | 6.1 | − | 1.5 | 319.5 | − | B |
| 117 | 10.5 | 6.0 | − | 2.0 | 346.0 | − | B |
| 118 | 8.9 | 7.5 | − | 2.3 | 456.4 | − | B |
| 119 | 7.4 | 5.4 | − | 2.0 | 195.7 | − | B |
| 120 | 11.0 | 7.0 | 3.0 | − | 561.7 | − | C |
| 121 | 13.0 | 8.2 | 2.1 | − | 933.7 | − | C |
| 122 | 2.8 | 3.0 | − | 0.5【0.7】 | 21.0 | − | D |
| 123 | 2.5 | 2.8 | − | 0.3【0.5】 | 15.7 | − | D |
| 124 | 2.7 | 2.8 | − | 0.3【0.7】 | 17.5 | − | D |
| 125 | 3.2 | 3.2 | − | 0.5【0.5】 | 28.4 | − | D |
| 126 | 2.8 | 2.6 | − | 0.4【0.6】 | 15.6 | − | D |
| 127 | 2.5 | 2.4 | − | 0.3【0.6】 | 15.2 | − | D |
| 128 | 2.5 | 2.5 | − | 0.3【0.6】 | 14.5 | − | D |
| 129 | 2.3 | 2.5 | − | 0.4【0.6】 | 12.7 | − | D |
| 130 | 2.6 | 2.9 | − | 0.4【0.6】 | 21.5 | − | D |
| 131 | 3.2 | 2.1 | − | 0.3【0.5】 | 26.5 | − | D |
| 132 | 3.0 | 2.2 | − | 0.5【0.5】 | 14.3 | − | D |
| 133 | 2.7 | 2.5 | − | 0.4【0.6】 | 15.9 | − | D |
| 134 | 3.0 | 2.4 | − | 0.3【0.7】 | 16.4 | − | D |
| 135 | 2.9 | 3.2 | − | 0.4【0.6】 | 27.5 | − | D |
| 136 | 2.5 | 2.2 | − | 0.6【0.6】 | 10.2 | − | D |
| 137 | 2.5 | 2.4 | − | 0.4【0.7】 | 15.4 | − | D |
| 138 | 2.8 | 2.9 | − | 0.4【0.6】 | 19.9 | − | D |
| 139 | 2.7 | 2.6 | − | 0.4【0.6】 | 15.5 | − | D |
| 140 | 2.5 | 2.1 | − | 0.5【0.6】 | 11.9 | − | D |
| 141 | 2.1 | 2.3 | − | 0.6【0.6】 | 10.2 | − | D |
| 142 | 3.2 | 2.4 | − | 0.5【0.6】 | 20.0 | − | D |
| 143 | 3.0 | 2.3 | − | 0.5【0.6】 | 18.0 | − | D |

# 第Ⅳ章　結　語

川入・中撫川遺跡は今回の発掘調査の結果、13世紀、８～９世紀、弥生時代後期後半～古墳時代前期に活発な遺構の形成がおこなわれていることが明らかとなった。当遺跡は瀬戸内に通じる内海へ足守川が注ぎ込む河口部に位置している。足守川は県南部でも有数の広さを誇る沖積平野を貫流しているが、中・小河川でもあることから、頻繁に流路を変えており、その痕跡は現水田面の畦畔の地割りや高低差などから読みとることができる。江戸時代の絵図面でも足守川は複雑な流路に表現されている。

川入・中撫川遺跡はその立地する環境から、港湾施設を設定するに適していたということは容易に想像できる。また足守川は、海路から内陸へ向かうために利用されていたと考えられる。当遺跡の消長に減り張りがあるのも、足守川の流路変更に伴って港湾施設が移動したことに起因しているように思われる。しかしながら、今回の調査で検出された３時期の港湾施設は、それぞれに歴史的な性格が異なるものであり、その点を明らかにするために各期の様相を整理してみたいと思う。

## Ⅰ　調査区周辺の微地形と遺跡の広がり

川入・中撫川遺跡は、山陽新幹線建設に伴う発掘調査（以下新幹線調査区）（正岡ほか1974）、新幹線の北側を平行する都市計画道路に伴う発掘調査（以下都道調査区）（中野ほか1977）によって内容が明らかとなった。いずれも遺跡に対して東西方向にトレンチを入れた調査であり、遺跡の内容や広がりについてかなり具体的な様相が把握された。それによると、東西に２つの大きな微高地が並んでおり、それぞれに遺跡が形成されている。西側が法万寺調査区、東側が大道西Ⅰ調査区に相当する。２つの微高地の中間にもやや小規模な微高地があるものの、両調査ではその端部のみを調査しただけで、詳細は不明であった。東側の微高地からは弥生時代前期、同中期末、同後期、古墳時代前期、古代、中世の遺構が検出された。西側の微高地からは、弥生時代後期、古墳時代前期、古代、中世の遺構が検出された。特に注目されるのは、東側の微高地で検出された古代の時期に属する遺構で、平城宮6225式系の軒丸瓦、平城宮6663式系の軒平瓦が伴う築地状遺構の存在である。この遺構、遺物の存在から、川入遺跡は古代の公的港湾施設であるとされてきた。ただし、築地状遺構については今回の調査成果と照合しても再考が必要であり、その点については後で触れたい。

その後、西側の微高地南半に南北方向のトレンチを入れるような調査が市道建設に伴っておこなわれた（以下市道調査区）（安川ほか2001・2002）。ちなみにこの調査区の大字は川入ではなく、中撫川である。本来ならば中撫川遺跡なのであるが、先の新幹線調査区や都道調査区では、川入遺跡としているため、遺跡名は川入・中撫川遺跡としている。今回の調査でもこの遺跡名を踏襲している。この調査で特筆されるのは飛鳥期の奥山久米寺式素弁八弁蓮華文軒丸瓦と海獣葡萄鏡が出土したことと、古代に属するかなり規模の大きな倉庫群が検出されたことである。倉庫群は少なくとも３棟が南北に並んでおり、平行して側柱建物も並んでいる。一般集落の景観とは異なるものといえよう。

市道調査区をさらに北へ延長する調査が県道建設に伴っておこなわれた（以下県道調査区）（岡田ほか2004）。各期の遺構や遺物が出土しているが、注目されるのは西側微高地の北端が確認されたことと、

薩摩半島から搬入された古墳時代の土器の出土や、９世紀前半の京都産緑釉陶器が大量に出土したことである。またそれら緑釉陶器と同期に属する遺物として銅印の鋳型がある。古代における遺物の様相は、この遺跡が一般集落とは異なる性格を有していたことを示している。

さて、以上の成果と今回の調査、さらに周辺の立会調査の成果、および微地形の特徴から、川入・中撫川遺跡の広がりを示したのが図187である。川入・中撫川遺跡は、東西に並ぶ３つの微高地によって構成されている。ここでは東から、第１微高地、第２微高地、第３微高地と仮称する。第１微高地は新幹線調査区、都道調査区の東側微高地に相当し、第３微高地は同調査区の西側微高地に相当す

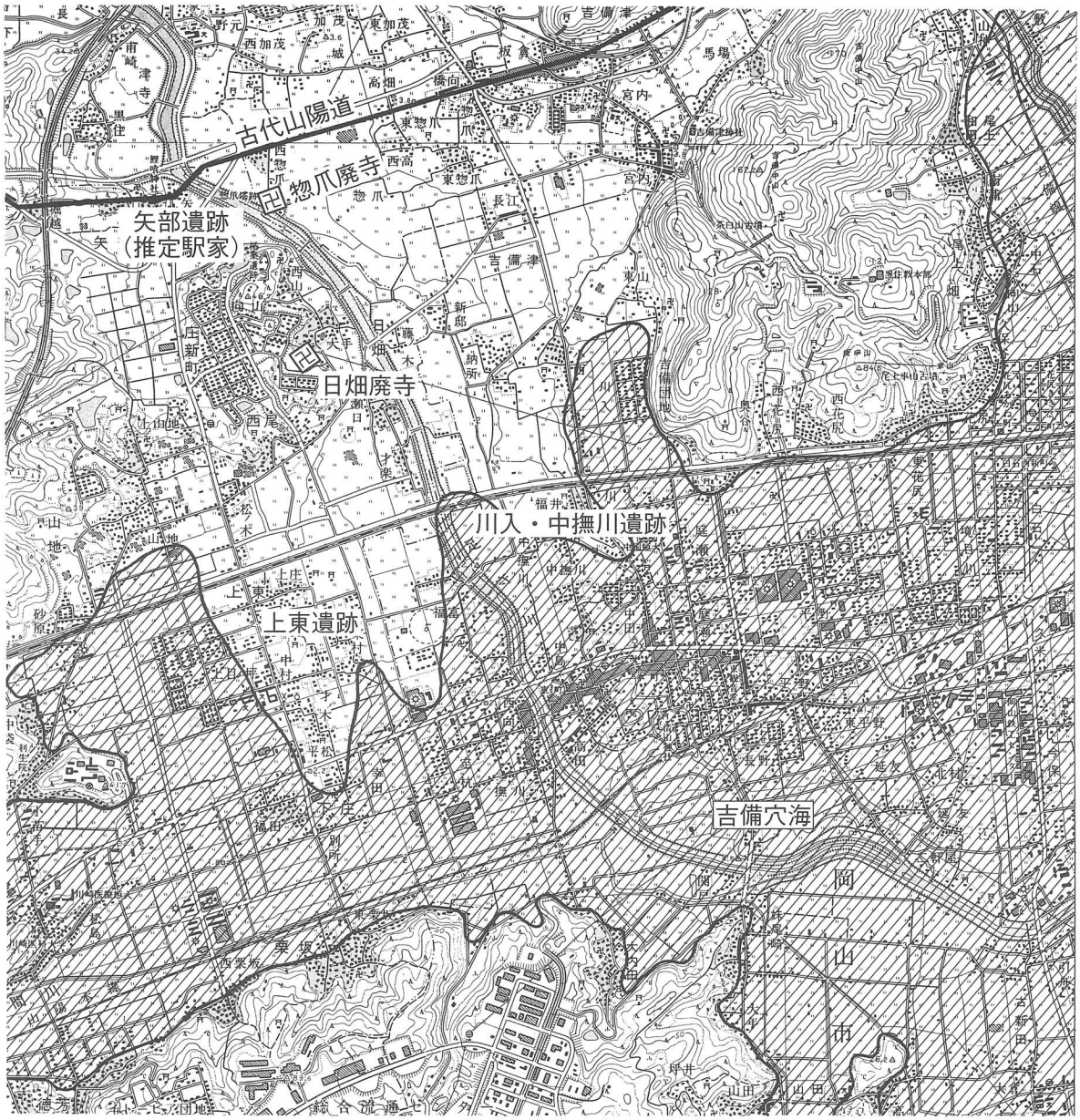
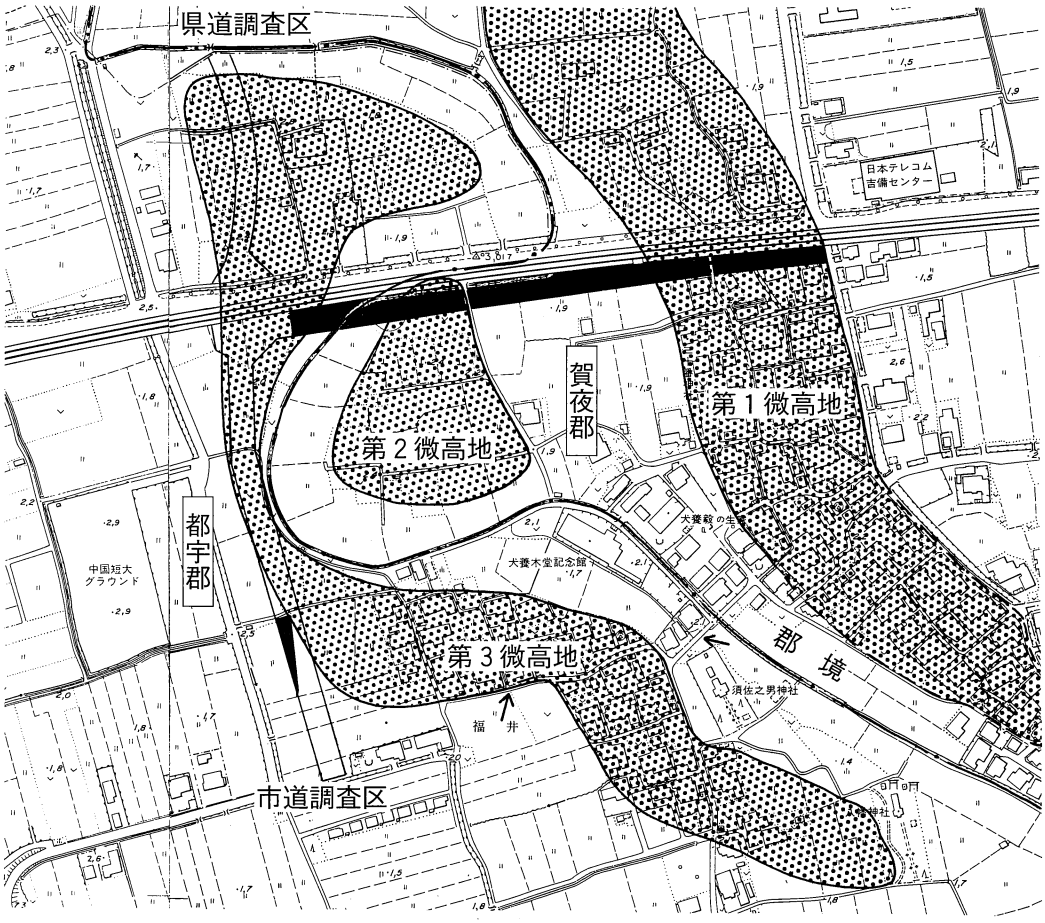


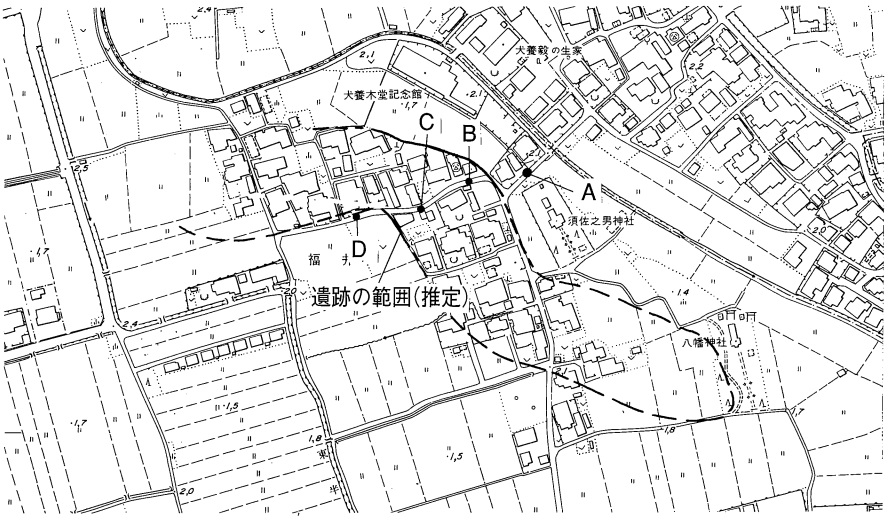

図186　川入・中撫川遺跡周辺の海岸線（推定）




黒　　塗　：今回の調査区
矢　　印　：下水道立会地点
スクリーントーン：微高地(推定)

0　100m

図187　川入・中撫川遺跡周辺の微地形




0　100m

図188　第3微高地南半　下水道立会柱状図　位置図

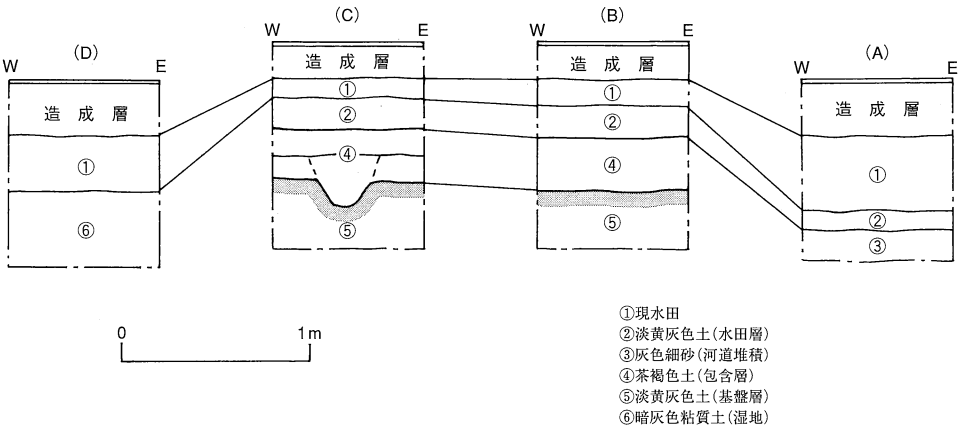



図189　下水道立会　柱状図

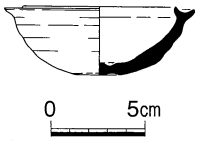



図190　下水道立会出土遺物

る。第１微高地の東西幅は80m前後で、南北の規模については不明であるが、かなり細長く南北方向に伸びる可能性が高い。第２微高地の東西幅は最大で110m、南北150mほどの規模である。第３微高地は法万寺川の西岸に沿った自然堤防状の微高地であるため、法万寺川が蛇行しているのと同様に「Ｓ」字状の形状をしている。東西幅60～100mである。第３微高地における調査区である法万寺調査区より南へ280mの位置にある東西方向の道路(図187→)において、下水道管敷設工事の立会をおこなった成果がある(図188・189)。それによると、ほぼ現況の集落に重なるように微高地基盤層と包含層が存在する。包含層には弥生時代後期から中世の土器が認められる。ただし、図化できたのは７世紀中葉前後の時期の須恵器杯身だけである(図190)。現水田面の高低差や地割りの変化から、立会地点の南250mの位置にある八幡神社の西側が第３微高地の南端に相当すると推測される。そうすると県道調査区で北端が検出されていることから、第３微高地は南北700mほどの範囲ということになる。

以上のように川入・中撫川遺跡の微高地の分布を復原すると、今回の調査は川入・中撫川遺跡を構成する東西に並んだ３つの微高地全てに対し、東西方向のトレンチを入れたことになる。

次に古代の行政区画についてみてみたい。川入・中撫川遺跡は旧国単位では備中国に属する。遺跡を分断して流れている法万寺川は郡境でもある。法万寺川は現在は用･排水路であるが、旧流路痕跡をたどっていくと吉備津神社の西側を大きく蛇行しながら板倉を通過する。これは板倉川ともいわれた足守川本流の痕跡であると考えられ、郡境となっているのも、ある時期に足守川の本流であったことに起因するものと考えられる。ただし、郡境の移動が古代以来なかったということは言い切れないが、郡境の移動はその下部単位である郷の範囲にも影響することである。法万寺川の下流には中世から近世の城郭が２つある。法万寺川の西側にあるのが撫川城で城名は都宇郡撫川郷につながり、法万寺川東側にあるのが庭瀬城で、城名は加夜郡庭妹郷につながる。それ以前の郡境に関する資料はないが、逆に郡境が移動した痕跡をうかがえるような資料はない。郡境の移動がなかったという前提でみてみると、法万寺川以西は都宇郡、以東は賀夜郡である。微高地単位では、第１・第２微高地が賀夜郡域で、第３微高地が都宇郡域ということになる。川入・中撫川遺跡が２つの郡域にまたがることは古代の遺構を理解する上でかなり示唆的である。

引用文献

正岡睦夫ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2　1974

中野雅美ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　1977

安川　満ほか「川入・中撫川(市道)遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999(平成11)年度　2001

安川　満ほか「川入・中撫川遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報１』2000(平成12)年度　2002

岡田　博ほか「川入遺跡・中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182　2004

## Ⅱ　中　世

### (１) 遺構の様相

中世の遺構は、第１～第３微高地全体に分布する。14～15世紀代の遺物も認められるが、主体は13世紀前半である。第１微高地からは、１点だけではあるが13世紀代の軒平瓦が出土している。第１微高地には古代寺院が存在していたと考えられることから、その廃絶後の跡地を利用した中世寺院が存在していたことを推測させられる。ただし、瓦の出土が極めて少ないことなどから、当遺跡の南25km

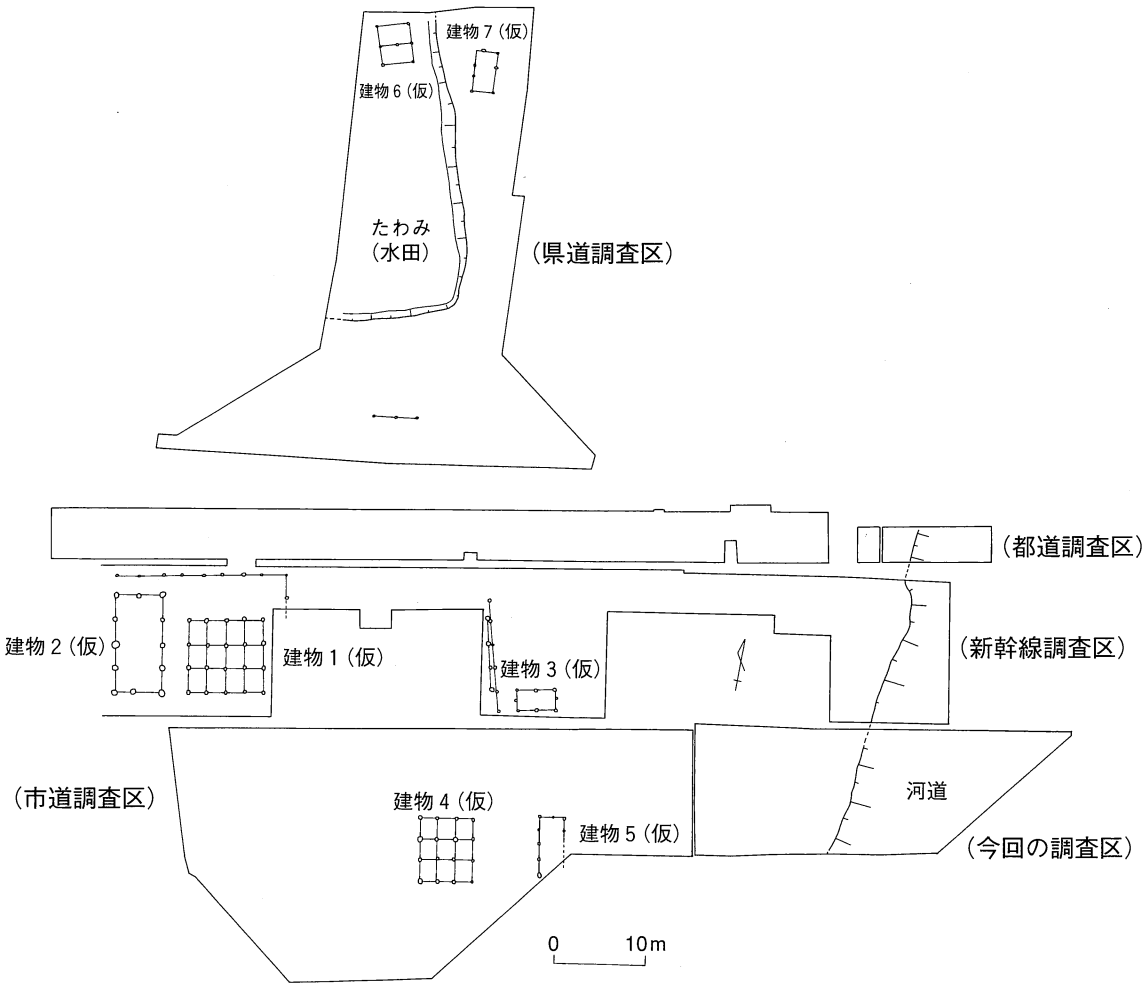



図191　第３微高地　調査区合成図

の位置で、内海に浮かぶ早島島(現早島丘陵)上の大内田廃寺(高畑ほか1983)のような小規模な寺院と思われる。第2微高地からは今回の調査で掘立柱建物や柱穴列が検出され、その北側の新幹線調査区は第2微高地の北端付近に相当し、井戸1基と柱穴が検出された。柱穴にはそれ程規模の大きなものもなく、出土遺物の構成についても特殊な遺物が集中するといったことは認められないことから、一般集落の範疇に入るものといえる。第3微高地は最も遺構や遺物が集中し、第1～第3微高地における中世集落の中心的な性格を有していたことがうかがわれる。ただし、弥生時代から中世までの複数期にわたる遺構の重複があるため、中世のみの様相を明らかにするのは困難であり、さらに建物となると、とくに中世の柱穴は同じ場所に集中して検出される場合が多く、どのような建物を構成する柱穴なのかを判断することも明確でない場合が多い。

ところが市道調査区で、中世の時期とされる磁北方向に方位を合わせた3間×3間の柱間の総柱建物(建物4と仮称)が検出され、その脇に同じく磁北方向に方位を合わせて2間×4間以上の側柱建物(建物5と仮称)が検出されている(安川ほか2001)。同様に磁北方向に方位を合わせた総柱建物(建物1と仮称)と側柱建物(建物2と仮称)のセットが新幹線調査区でも検出されている(正岡ほか1974)。これらの建物群は柱穴掘り方の平面形が円形であることや、径0.3m前後と小規模であることから、中世に属する時期と考えられる。建物1・2の北側には柵列が付属することや、建物4・5よりも床面積がかなり大きいことからも、格差のある建物群が並存していたことを推測させられる(図191)。都道調査区では柱穴はいくつもあるが、明確な建物に組み合わすことができず(中野ほか1977)、その北の県道調査区では柱穴の数も極端に減少し、中世の遺構の空白部となる。県道調査区の北半では建物が確認できるものの、遺構の時期は14～15世紀が主体となる（岡田ほか2004)。建物1～5の年代については明確な根拠は少ないが、今回調査した法万寺調査区からは中世の遺構や遺物としては13世紀代がほとんどであることや、いずれの建物も方位を一致させていることから、一応13世紀代の一連の建物群であると考えられる。すなわち都道調査区以南には13世紀代の建物群が、少なくとも2単位は存在しているということになる。

また、建物1の床面積は53.28㎡、建物2の床面積は47.04㎡で、県下における中世の建物について整理した成果(小嶋2004)を援用すると、建物1と2の床面積は13世紀代の集落では主屋に相当する規模である。少し時期が下がるが、室町時代の文献から建物の床面積について整理した成果(伊藤1968)をみると、農家の場合、平均が40㎡、大きいものは53㎡、小さいものは13～20㎡で、小さいものが多い。建物1・2とも室町時代の農家の平均値より大きいことから、階層的にも上位に位置する屋敷地と考えてよいであろう。また総柱建物は県下における現況の調査成果からすると、中世後半に顕在化してくる居館の建物によく用いられるもので、床を持つ建物と考えられる。建物1・2の単位よりも床面積的に小さい建物4・5の単位の建物4も総柱建物である。未調査部分にも同様の建物が存在している可能性は高く、おそらく総柱建物と側柱建物がセットとなった単位がいくつか集まって集落を形成していると考えられる。また、少なくとも中心となる単位だけが総柱建物を独占するのではない点は注目される。このような先進的な建物を集落内で広く採用できている背景は、この集落そのものの性格に起因すると考えられる。この点はあとで検討する。

それでは総柱建物と側柱建物のセットは、当時の屋敷地を構成するどのような建物に対応させることができるのであろうか。それを検討する材料として『法然上人絵伝』に描かれた漆時国の住居からみてみたい。漆時国は主人公である法然上人の父で、美作国久米郡の押領使であった。いわゆる有力

な在地領主である。時国の屋敷地の周囲には、小柴垣と網代垣をめぐらしており、主屋１棟、副屋１棟、厩１棟で構成されている。主屋は礎石建物で、床張り、座敷には畳を敷いている。副屋は内部の構造などはよくわからないが、桁行を比較する限り、主屋の梁間よりも短い規模で、２間×２間の柱間のようにみえる。厩は副屋よりも規模が大きく、桁行は主屋の梁間と同じで２間×３間の柱構成である。同様の屋敷地の例としては、『一遍上人絵伝』の筑前国の武士の館がある。これは一遍が建治二年(1276)に訪れた館である。時国の屋敷地のように全形を描ききってはいないが、主屋と厩は描かれており、少なくとも主屋の梁間と厩の桁行は規模的に近い。筑前国の武士の館は周囲に掘があり、はめ板塀を巡らし、櫓門があるなど、時国よりも上位の屋敷地にみえる。そのためか厩も床張りになっている。

さて、川入・中撫川遺跡第３微高地の13世紀の建物群をみてみると、建物２棟がセットであることから主屋と副屋の関係がまず想定される。しかし時国の屋敷地や筑前国の武士の館を見る限り、主屋と副屋の差は歴然といえる。ただし主屋が床張りという点は共通している。建物４と建物５は、主屋である建物４の桁行と建物５の桁行は同じか、もしくは建物５の方が長い可能性がある。建物１と建物２は、主屋である建物２の梁間よりも建物１の桁行の方が長い。こういった点は絵画資料からみた屋敷地の構成を見る限り、主屋と副屋の関係には当てはまらない。床張りという点や、２棟のうち床面積が大きいという点から総柱建物は主屋と考えてよい。そうすると、側柱建物については厩の可能性が最も高いのではなかろうか。集落の縁辺で検出された河道から、馬骨が出土していることなどは示唆的である。

川入・中撫川遺跡の13世紀代の集落の特徴を要約すると、〔１〕主屋と厩が１単位となる屋敷地で構成されていること、〔２〕主屋が中世前半段階の当地域ではまだ珍しい床張りであることである。以上の２点のうち、特に〔１〕の厩については、当時の陸上運送手段のかなりの比重を占めていたであろう馬を保有していた集落であったということを示しているといえる。この点もこの集落の性格を検討する上で重要な手掛かりとなるものである。

引用文献

伊藤鄭爾『中世住居史』東京大学出版会　1958
橋本惣司ほか「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』３　1973
正岡睦夫ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』２　1974
中野雅美ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　1977
高畑知功ほか「大内田廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53　1983
岡田　博ほか「川入遺跡・中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182　2004
小嶋善邦「中世の久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184　2004
安川　満ほか「川入・中撫川(市道)遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター発掘調査の概要』1999(平成11)年度　2001

## （２）第３微高地の集落の生業

第３微高地上の中世集落を概観すると、床張りの主屋がかなり普及しており、厩も備えているなど、第３微高地の13世紀代の集落の構成がかなり特異なことがわかった。なぜそのような集落形態になっ

たのかを追求する手掛かりとなるのが、集落の東側を流れる河道から出土した多量の遺物である。遺物の大半を占めるのは椀や皿などの土師質土器であるが、中国製陶磁器、東播系の須恵質土器、畿内産瓦器、讃岐産の土器、亀山焼などもかなり含まれていた。特に中国製陶磁器については蓋などの珍しい器種や、県下では赤野遺跡でしか確認されていない枢府窯系産の白磁(森田1980)、中国産緑釉などの極めて珍しいものが含まれている。また、備中地域では備前地域とは異なり、畿内産瓦器の出土は稀であるが、ここからは一定量を認めることができる。当時の広域流通物や、稀少品がかなり出土していることから、物流に関する性格を有した遺跡であったことがうかがわれる。内海に面した河口部の遺跡であることから、当然内海航路の拠点である津や泊であったことは容易に推測されるが、この集落の場合、別の性格を有していることがうかがえる。

それは巨大な土錘が多量に出土したことである(図192)。土錘は長さが10cm前後、幅６～７cm前後、厚さ６cm前後、重量が300～500ｇ前後である。扁平な紡錘形で、その両端に網を固定するための溝がある。溝幅は15～20cm前後ものが大半を占める。瀬戸内海の土錘に関する研究は、真鍋篤行氏によって詳細かつ精緻におこなわれている(真鍋1994･1997)。氏は土錘の形態差が網の種類によって生じることを民俗史料から数値化し、それをもとに発掘して出土した土錘を分類している。膨大な研究成果のうち、ここでは関係する土錘についてのみ援用させていただくと、川入・中撫川遺跡で出土した扁平な紡錘形の土錘は、氏の分類する有溝土錘Ｃｂ類に相当する。大文字のＣは有溝土錘という形態を示し、小文字のｂは溝幅を示す。溝幅が0.5cm以下をａ類、より広いものをｂ類としている。Ｃｂ類は両側に沈子綱を平行して装着できることから網の強度を強く保てることや、溝幅から推測できる綱の大きさから曳き網に用いられた土錘といえる。さらに瀬戸内地方の民俗史料との比較から、このような扁平な形態の土錘はタイ網か、タイ網のカズラ縄に装着する例が多いとされる。土錘の変化から網漁技術の発達過程をみた場合、網の大きさを示す土錘の孔径や溝幅が1.6cmを越えるものが出現するのが平安時代末から鎌倉時代である。これは地漕網漁法がこの時期に確立したことを示している。地漕網漁法とは３隻の船を１つの単位としておこなうもので、１隻がブリ木と呼ばれる板を装着したカズラ縄を曳いて魚を沖から陸の方へおびき出し、最後に地引き網を２隻の船で沖から曳いて陸に引き上げるといった高度でかつ規模の大きな漁法のことである。そしてこのような漁法の発達には、大量にとれた魚を処理するための塩蔵用の塩を確保するための塩田による製塩の普及が不可欠であったとされる。

川入・中撫川遺跡で多量に出土した土錘についても、真鍋氏の研究成果を前提にしながら若干検討してみたい。まず、同様の土錘の出土地の分布状況についてみてみると、溝径および、溝幅が1.6cmを越えるものは百間川原尾島遺跡(江見ほか1984)や同米田遺跡(物部ほか2002)で出土しているが、いずれも単発的な出土で、100を越えるようなまとまった量を出土する遺跡は今のところない。また、この種の土錘の出土自体も稀である。

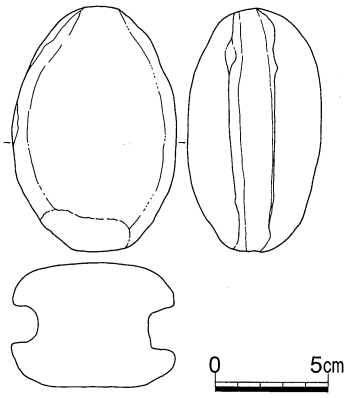


図192　河道出土Cb類土錘

では、出土した土錘の特徴について観察してみると、全形はナデ、溝部分は一定方向のナデによって成形されている。溝部分のナデがおこなわれていないものが１点あり、そこには綱の圧痕が認められる。このことから、ナデによって全体の形を成

形した後、実際に用いる網の綱を溝に当てて溝幅を確認し、最後に溝部分をヨコナデしていたという土錘の成形手順が復原される。さらにヘラ記号をつけたものが1/4ほどあり、5種類の記号が確認できる。それは棒状工具による刺突を1つつけたもの、2つのもの、3つのもの、ヘラ状工具で斜線を一本引いたもの、同じくヘラ状工具で×をつけたものである。最も多いのは刺突が2つ並んだもので、ヘラ記号のあるもの全体の5割以上を占める。ついで刺突が1つのもので、それは全体の2.5割を占める。そのほかの特徴としては、焼成不良品が認められる。特に火力が強すぎて焼け歪んだものがいくつかある。以上の土錘の特徴、特に失敗品が存在することは、この周辺で土錘が焼成されていたことを示している。そして実際に使用する網の一部である綱を押し当てていることから、それは土錘を使用する人、すなわち漁業民の手によってつくられていたといえる。このような土錘が多量に出土することの背景については、この地で集中して生産し、それを他の集落へ供給していたということも考えられるが、この種の土錘の分布が極めて限られていることから、この地で使用するために生産されたと考えるのが妥当である。すなわち川入・中撫川遺跡は漁業基地、それもかなり規模の大きなものであったことがうかがわれる。

引用文献

真鍋篤行「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』7号　1994

真鍋篤行「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題(続)」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』　1997

江見正己ほか「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　1984

物部茂樹ほか「百間川米田遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164　2002

森田　勉「枢府磁に関する二・三の資料」『月刊文化財』206号　(株)第一法規出版　1980

## (3) 13世紀の画期

川入・中撫川遺跡は、河道から出土した遺物を検討した結果、〔1〕物流拠点であったことと、〔2〕大規模な漁業基地であったことがうかがわれた。ここではもう少し文献史料等を含めて検討し、より具体的な遺跡の性格について追求してみたい。まず、河道(下層)から出土した遺物の年代について確認しておきたい。河道(下層)からは様々な遺物が出土していることは先ほど触れたが、特に多いのは土師質土器である。当地の土師質土器、特に椀についてはその成形技法や法量変化の特徴から、かなり細かな年代幅で編年されている。河道からは完形の土師質土器が多量に出土しており、かなり正確な計測が可能である。それによると、口径13～14cm前後、器高4.5～5.0cm前後に集中する。器表面のヘラミガキ調整は省略されている。以上の特徴は13世紀中葉から後半にかけての年代を示している。この年代観は、中国製陶磁器や瓦器などのほかの土器が示す年代観ともそれ程隔たりがあるものではないことから、河道(下層)全体の時期を大体示していると考えてよい。すなわち、河道(下層)の堆積は、かなり限定された時期幅であったといえる。

次に中世以前の当地の海産物に関する文献史料について見てみたい。史料は3点ある。まず最も古いのは〔1〕の藤原宮跡から出土した貢進木簡である。備中国で最も大きな河川であった高梁川の河口に近い二万里(邇万郷)から、鯛が貢進されたことを記している。これは二万里の面する吉備穴海が、古くから鯛の漁場であったことを示しているといえる。

## 鯛関連文献集成

（1）

・吉備中国下道評二万里

・多比大贄

〈藤原宮跡出土木簡概報〉

（2）

備前国一宮社法　本社文書

備前国中大小神祇［　　］

中　略

一　備中せ（妹尾）のう両うら村之あき人、右之ことく、悉く備せんノ一宮へ諸初尾参り候、并御へん、御さい浦役、はま（浜役）やくとて、春ハひらノうほ卅三こん、同たいノうほ卅三こん、秋ハしほたい百廿まい、又おかずの物とて、小肴百八十参り候、

右ノ諸はつほ、神主、祝部、借屋此三殿ノ家より被仰付候て、それ〳〵下奉行参り候、

備前国中村々在々ノ宮、かみ〳〵御祭りに付而、一宮より御存じの事、但むかしは大キ成るやうに申候、先々是は近年ノおほへを社人衆かき付申候なり、

中　略

一　備中の内せ（妹尾）のふ両うらより春秋ニ、○鯛ノうほ百卅かけ○ひらのうほ百廿まい、○はまくり、○はいがい、○白うほまいり候、いそさかな御へんとて色々子細、是備前ノ内へあきない仕候付而、其はつほの心也、むかし5如此候、ふご（春役）やく、人役、馬やくニ諸初尾いたし申候、

中　略

康永元年壬午六月廿八日

後　略

〈吉備津彦神社史料〉

〔2〕は備前国一宮(現吉備津彦神社)の祭りの有り様を記録した『備前国一宮社法』で、康永元年（1342)六月の年紀をもつ。この史料が康永元年まで遡ることに関しては疑問を呈する意見もあるが、少なくとも中世後期までの様子であることは肯定されている(久野1990)。この中には神前に捧げる各地の特産物が記されており、川入・中撫川遺跡の吉備穴海を挟んで対岸の位置にある小島(以下妹尾島と呼称する)上の備中妹尾の両うら村からも、商人は浦役、浜役として春はひらのうお(曹白魚)33、たいのうお(鯛魚)33、秋はしほたい(塩鯛)120、小魚180などを、また、ふご(畚)役、人役、馬役として、たいのうお(鯛魚)130、ひらのうお(曹白魚)120、はまくり(蛤)、はいがい(灰貝)、白うほ(白魚)を奉納している。この史料には、吉備穴海周囲の村々からの奉納品も記されており、各地の特産品の様相を知ることができる。そのうち鯛についてだけみてみると、津高郡山崎から5、児嶋から12が記されているものの、両うら村における鯛の量は破格の数値といえる。

| | |
|---|---|
| 穀物類 | 米　赤米　大麦　小麦<br>豆　大豆　小豆　蕎麦<br>胡麻　山崎胡麻 |
| 原野山間の産物類 | かち栗　搗栗　苧(からむし)　皮葛<br>筵　ウス畳　帋(かみ)　樽(くれ)<br>材木 |
| 海産物 | 海老　イカ　塩鯛　干鯛<br>少鰯　アラメ　カニ<br>フクノ干物　海月<br>ナマコ　小嶋塩 |
| 備前焼 | ツボ大小 |

図193『兵庫北関入船納帳』にみる
備前・備中船籍の積み荷

〔3〕は文安二年(1445)の『兵庫北関入船納帳』で、そのうち岡山県籍の積み荷の種類をまとめた久野修義氏の成果(久野1990)を表にした(図193)。『兵庫北関入船納帳』とは、東大寺が領有する兵庫の

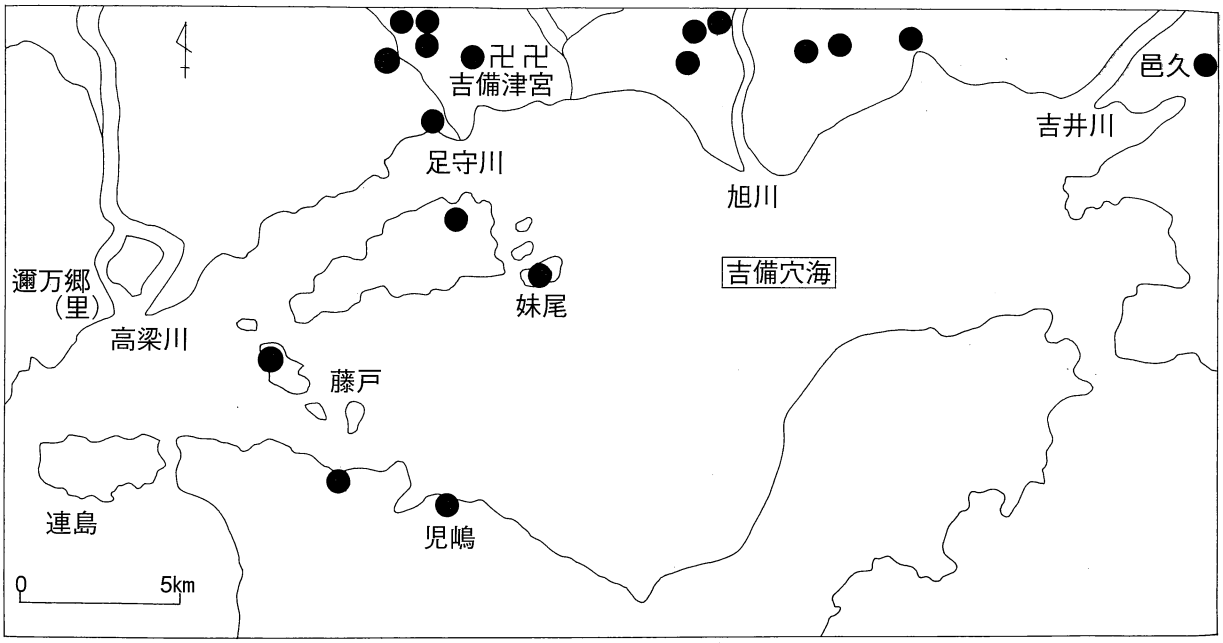



図194　中世以前の鯛骨出土遺跡分布

港(前身は大輪田の泊)に文安二年(1445)正月より翌三年正月にかけての入船に対しておこなった関税賦課の記録台帳である。船籍地は瀬戸内海全域におよび、積み荷の詳細が記載されている。さて岡山県籍の船の積み荷のうち、塩鯛、干し鯛が注目される。鯛の加工品が地域の特産の１つになっていたといえる。

〔２〕と〔３〕の文献から、14世紀代では岡山県南部において鯛漁が盛んにおこなわれていたことがうかがえる。加工品として流通していることからも、かなり大規模な操業であったといえる。さらに〔２〕の文献から、川入・中撫川遺跡の南に極めて鯛の漁獲量の多い漁場が存在していたことがうかがえる。この様相が13世紀中葉まで遡ることを直接示す文献はないものの、〔１〕の文献が示すように吉備穴海を対象とした鯛漁が古い段階から存在することや、吉備穴海周辺での発掘調査によって中世以前の鯛骨が出土した遺跡の分布をみてみると(図194)(岡嶋2004)、かなり密に分布していることからも、近世以降の干拓によって環境が激変するまでは鯛がかなり普遍的に生息していたと考えてよい。

さらに鯛のライフサイクルについてみてみると(日高1997)、鯛(マダイ)は沿岸性の魚で、水深30～150mの起伏に富んだ岩礁域か砂礫底で、潮通しがよく、沿岸水の影響が強い場所に住んでいる。そして深みの岩礁について越冬するが、春、水温の上昇とともに冬眠状態からさめて瀬戸内地域では３月下旬～５月上旬に産卵のために浅い砂底で藻場のある場所に上がってくるという。

足守川の河口から妹尾にかけての内海は、それ程深い海ではなかったと推測され、鯛の産卵には適した環境ではなかったのではないだろうか。妹尾島の南側で、当時の海浜部に位置した妹尾住田遺跡の発掘調査では、中世の遺構や遺物がまとまって検出された。しかしそのなかには、川入・中撫川遺跡で出土した大きな土錘(Ｃｂ類)は全く出土しなかった(草原2003)。これはこの遺跡が足守川の河口部と反対側にあったことに起因するのではなかろうか。つまり足守川河口部と島々に挟まれた吉備穴海の中のさらなる内海が、鯛の産卵場所として選択されていたのではなかろうか。この地点には春になると鯛が産卵のために押し寄せ、それを目当てにした鯛漁に用いられたのが今回出土した大きな土錘だったということになる。土錘の集中的な出土からも、真鍋氏が指摘するような規模の大きな漁であったといえる。その背景には塩田の開発による塩生産の飛躍的な拡大によってもたらされた塩の確保や、流通システムの整備があるとおもわれるが、基本的には季節ごとに一定の漁獲量を保証する鯛の習性によって、秋に稲の収穫が期待されているのと似た、安定した漁労活動がおこなえたからといえる。そのため、川入・中撫川遺跡第３微高地の集落が成立したのであろう。安定した漁労活動と物流拠点、これが川入・中撫川遺跡第３微高地集落の本質といえる。そして瓦器の出土などが示すように、畿内からの直接的な情報が流入しており、そのため進歩的な住居様式である床張りの住居が広く認められたのではなかろうか。また物流拠点であるが故に、そこから内陸への流通にも関わっており、それが厩や馬骨の出土にみられるような馬の広汎な保有に反映されていると考えられる。

床張りの住居様式については県北部の例ではあるが、かなりまとまって認められる遺跡がある。久田原遺跡である(小嶋2004)。久田原遺跡からは中国製陶磁器や東播系の須恵質土器、古瀬戸の椀や壺も出土しており、物流拠点的な性格もうかがえるが、多数の鍛冶関連遺構や遺物の出土が示すように、安定した鉄器生産がおこなわれたこともうかがえる。鉄器生産と漁業の相違はあるものの、13世紀前後の時期に農業生産以外の生産活動を主体としていた集落が飛躍的に成長するということでは共通しており、それはこの時期の社会的な動きともいえるものである。中世前期は大開発の時代とされている(稲垣1981･黒田1984)。それは谷水田や池水灌漑、揚げ水車などの農機具の利用(今谷1984)、中世

素堀り溝の分析から推測される二毛作の成立と水田の完全な乾田化(今尾1981)などに示された水田開発の画期を思い浮かべることが多い。しかし、一方で山野河海の開発として、林業、漁業、製塩、窯業などの多様な開発があったことも指摘されている(保立1984)。特に漁業については賀茂社の神人漁民の広域的漁業特権の主張に示されるような、大規模な漁場開発が各地で進行し、中世漁業の最初の発展期をもたらしたとされる(保立1981)。川入・中撫川遺跡で出土した土錘にヘラ記号の有無や、ヘラ記号にいくつかの種類があるのも、おそらく重層化したかなり高度な労働編成によって鯛網漁がおこなわれていたことを示しているのではないだろうか。

ところで、鯛網漁については文献史料から、近世の漁法という印象が強い。近世の鯛網漁と、ここで想定する中世の鯛網漁が漁法的にどのような関係になるのかは全く不明であるが、土錘の大きさのみの比較では、それ程大きな隔たりがあるようには思われない。吉備穴海の最後の姿である近世の児島湾には、鯛の生息は記録にないものの、各遺跡から出土している鯛骨が示すように、近世の干拓によって環境の激変する以前の内海には鯛が確実に生息しており、古代にはそれを藤原宮へ貢進している。多くの文献が残されており、あるいは新たな文献の発見が期待できる近世と異なり、おそらく現況以上の史料が発見される期待が少ない中世において、ましてや地方の漁業に関する新たな文献が新たに発見される可能性は少ない。そのため、文献によりかなり具体的な様相を把握することができる近世の鯛網漁と、推測される中世の鯛網漁との間を埋めることは難しいが、今回発掘調査された状況や間接的な文献から、近世ほどに整備された鯛網漁ではないかもしれないが、原理的には共通する鯛網漁が中世前半にはおこなわれていたことは確実といえる。

引用文献

久野修義「瀬戸内海運の発達と市庭の賑わい」『図説岡山の歴史』河出書房新社　1990
岡嶋隆司「旧児島湾の物産について ～文献に記録された魚介類たち～」『岡山学こと始め －岡山市デジタルミュージアム開設準備室研究レポート－』第3号　2004
日高敏隆監修『日本動物大百科』平凡社　1997
草原孝典『妹尾住田遺跡』岡山市教育委員会　2003
小嶋善邦「中世の久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184　2004
戸田芳実『日本領主制成立史の研究』岩波書店　1967
稲垣泰彦『日本中世社会史論』東京大学出版会　1981
黒田日出男『日本中世開発史の研究』校倉書房　1984
今谷　明「わが国中世使用揚水車の復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』四　1984
今尾文昭「『中世』素堀小溝についての一解釈」『青陵』四七　1981
保立道久「中世民衆経済の展開」『講座日本歴史3　中世1』東京大学出版会　1984
保立道久「中世前期の漁業と荘園制」『歴史評論』三六七　1981
山本秀夫「瀬戸内の鯛網漁の歴史的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第10号　1997

## Ⅲ　古　代（8・9世紀）

### （1）遺構の様相

第1～第3微高地上に古代の遺構は分布している。詳細については第3章でまとめたが、その構成

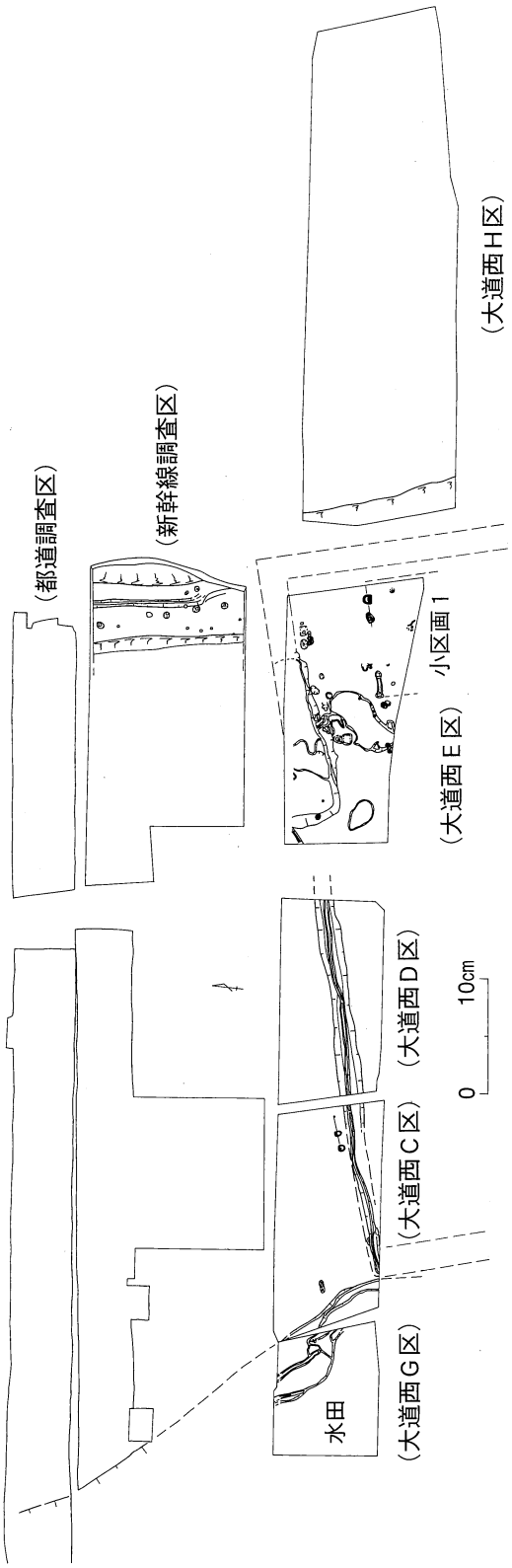



図195　第１微高地　古代遺構合成図

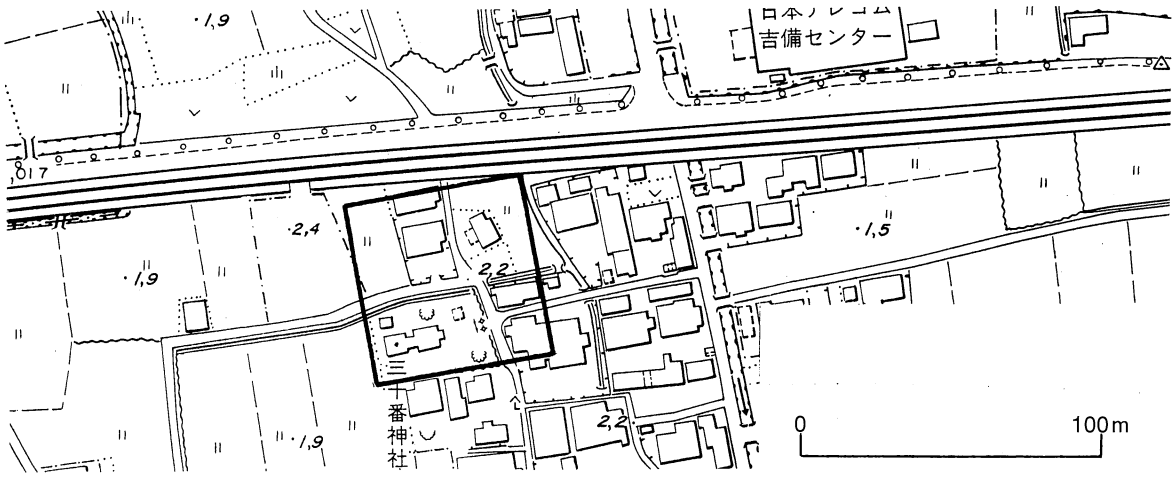



図196　第１微高地　古代区画の範囲（推定）

と性格についてを、かつて調査された調査成果とできる限り整合させて検討してみたい。

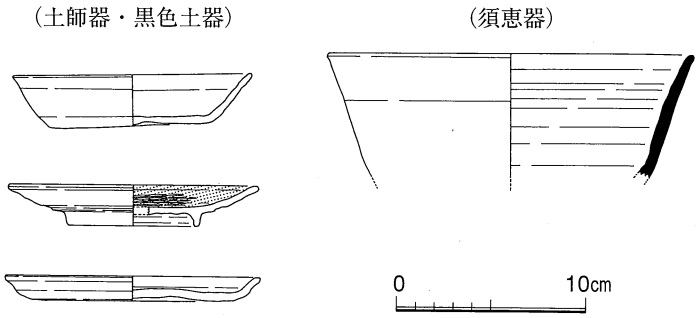



図197　区画溝の下限を示す土器

〈 第１微高地 〉

まず第１微高地であるが、この微高地では新幹線調査区において南北方向の築地状遺構が検出された。それは平城宮式6663式系軒丸瓦や、平城宮式6225式系軒平瓦が伴うとして８世紀代の遺構とされた。破片ではあるが鬼瓦や隅瓦も出土していることから、付近には本格的な瓦屋根を備えた建物が存在していたことがうかがわれる。ただし築地状遺構については、区画の範囲はもとより、どの方向を区画しているのかさえ明確でなかったことから、築地という遺構に該当させることさえも躊躇させられるものであった。今回の調査区はその南側に隣接する位置関係にあり、この遺構の性格をより明確にする手掛かりの得られることが期待された。

調査の結果、今回の調査区が北限となる幅15m前後の区画溝が検出され、そこからは瓦を主体とする遺物が多量に出土した。区画溝はE-14°-Nの方向性を有している。大道西Ｃ区で南側へ屈曲することから、この地点が区画の北西コーナー付近に相当することになる。そして、大道西Ｄ区の東端まで直線的に延びる。その間は31mである。その延長に相当する大道西Ｅ区ではやや途切れる部分があって、溝幅も広くなっている。その東側に相当する大道西Ｈ区の調査では、古代の遺構が全く検出されなかったことや、古代の遺物も極端に減少すること、地形的にも微高地端部であることから、大道西Ｈ区を越えて古代の区画が広がるとは考えられない。大道西Ｈ区の西側では中世の溝が検出されたが、これは現在、大道西Ｅ区と大道西Ｈ区の間を南北に流れている用水路の前身と考えられる。この用水路は微地形に沿って流れており、条里方向に規定された近世以降の用水路とは異なっている。今回の調査により、この用水路の開発が中世前半まで遡ることが確認できたといえる。おそらく、この溝によって区画溝の東限は削平された可能性が高いと考えられる。そうすると、区画溝の東西幅は60

m前後ということになる(図195)。そして1/2500の縮尺の岡山市域図にこの区画溝を重ね、さらにこの区画が正方形であると仮定したのが図196である。約60m四方の区画の南端は、調査区の南側にある三十番神社の南限を画する溝の位置と重なり、南西コーナー付近から西限についても三十番神社の敷地の区画とほぼ重なる。この神社と古代の遺構との関係を直接追求する史料はないが、神社が古代の区画の一部を利用していたとするならば、想定される区画と神社の敷地が重なることも十分理解されることといえる。いずれにせよ、区画の規模が一辺60mの正方形になるかどうかは別として、調査区の南側には、溝による方形の区画が存在する可能性は高いといえよう。

次に、その区画と新幹線調査区で検出された築地状遺構との関係について検討してみたい。築地状遺構はちょうど南側の区画の北東コーナー付近の北側に位置することになる。この部分は区画内を最も広く調査できたこともあってか、柱穴列からうかがわれる東西幅が10mほどの小区画か、もしくは建物(小区画1)が想定される。小区画1の北西コーナー付近に、この区画の雨落ち溝と推測される遺構(P554)が存在することからも、この区画には建物が存在していたと考えられる。したがって築地状遺構については、この建物を意識してつけられた北側から区画にいたる通路状の遺構である可能性が考えられた。都道調査区から出土した軒瓦と新幹線調査区から出土した軒瓦と比べると、より北側にある都道調査区の軒瓦の方が細片化している。このことは、両調査区から出土した軒瓦は全て南側の区画に帰属する軒瓦であり、そのため区画から離れるにしたがって細片化しているという解釈も可

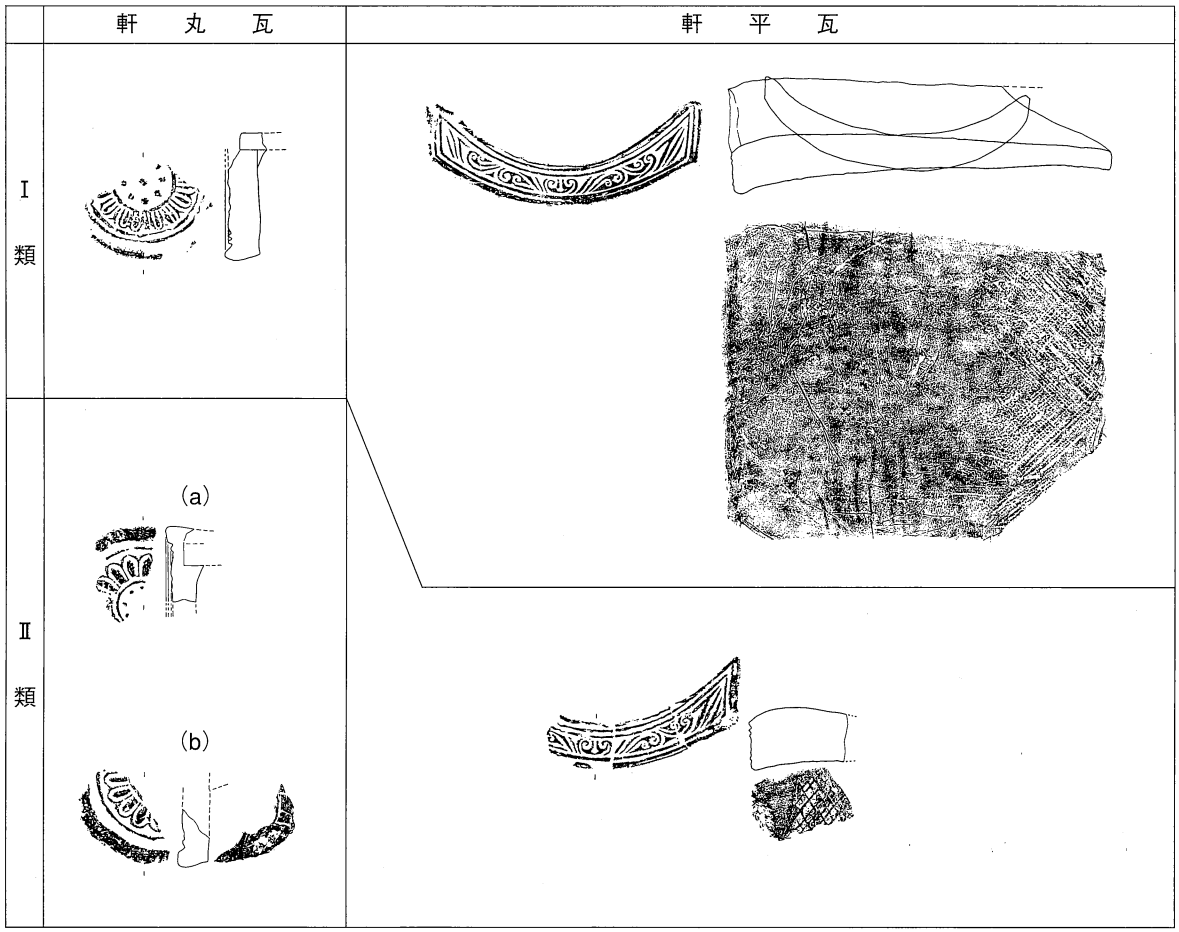



図198　軒瓦分類図

能であろう。さらに都道調査区では、築地状遺構の延長部分が検出されなかったことや、調査区が微高地の東西方向全てを調査しているにもかかわらず対応する築地遺構やその痕跡が全く認められないことから、築地のようなある空間を画する遺構ではないと判断された。そのため、南側の区画に伴う遺構として想定されたのは、備前国分寺で検出されているような区画にいたる通路(伊藤ほか1995)ということである。ところが大道西H区の中世遺構面で、調査区西端の中世溝に沿って基盤層を削りだした幅1.5～３mの畦畔が検出された。大道西E区の中世遺構面では、地形が北側に向かって傾斜しており、北側の２/３ほどは水田化されていた。このことは、その北側に位置する新幹線調査区でも中世段階には水田化されていた、あるいは、かなりの部分が水田化されていたということもいえる。さらに区画の中央に通路が存在するのではなく東端にあるのは少し不自然であることや、詳細にみると小区画１の正面よりも若干ずれた位置にくることからも、古代の遺構との整合性は積極的には認められず、大道西H区で検出された畦畔と同様の遺構であると考える方が妥当のように思われる。

第１微高地の築地状遺構については、その存在は否定される可能性が高くなったが、一辺60mほどの範囲を区画された空間が存在することが推測されることとなった。そして今まで出土していた平城宮式系軒瓦や鬼瓦、隅瓦、平瓦などは、この区画に帰属すると考えられる。今回の調査でも、多量の瓦類が出土した。都道調査区でも出土していたが、軒丸瓦はいわゆる平城宮6335式系の複弁蓮華文〔１類〕と、それが退化したものと考えられる単弁蓮華文〔２類〕の２種がある。１類と２類は、文様的にも後者の方が退化しているが、成形技法についても同様のことがいえる。１類は全て丸瓦を接合してのちに別粘土でかなり補強することから、瓦当の厚さが厚くなっている。２類には同様の成形技法でなされているものもあるが、そのほかに瓦当裏面をヘラ状工具で波状に削り、そこへ丸瓦を接合し、接合部周囲だけに粘土を補強するといった簡略化された成形技法のものもある。文様や成形技法から、１類と２類の差は時期差を示すと考えられる。

軒平瓦については断片的なものがほとんどであるため、文様の詳細な差を観察することはできない。完形品を細部にわたって比較すれば差が認められるかもしれないが、現況では平城宮6663式の陰陽を逆にした文様１種のみである。ただし平瓦部の凸面のタタキをみると、縄目と菱形の２種類があり、平瓦も同様である。菱形タタキの方が後出すると考えられることから、縄目タタキの軒平瓦〔１類〕が軒丸瓦１類とセットになり、菱形タタキの軒平瓦〔２類〕が軒丸瓦２類とセットになると考えられる。区画溝の遺物をみてみると、８世紀から９世紀後半の土器が含まれており、軒瓦の年代観からも該期が区画の存続期間で、その間におこなわれた瓦の差し替えが２類の軒丸瓦、軒平瓦に対応すると思われる。

瓦のほかに凝灰岩製の基壇の部品が出土している。区画溝やその周囲からは細片化した凝灰岩片がかなり出土しており、この区画内には凝灰岩の基壇化粧を備えた建物が存在していたことを示唆している。そのほか灯明痕のある土器も出土している。これらのことから、この区画は古代寺院であった可

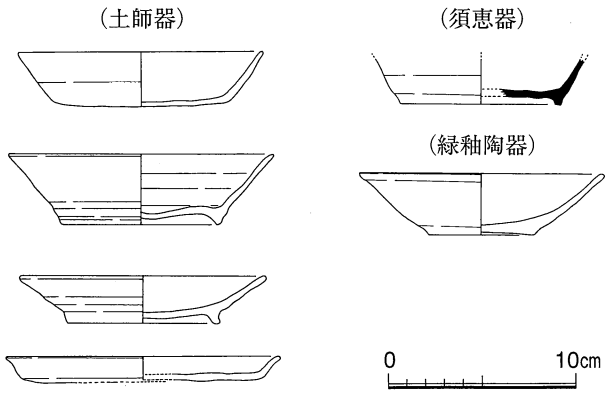



図199　第２微高地の時期を示す土器

能性が極めて高い。二彩陶器も出土しており、これも仏器と考えれば、出土した理由をスムーズに理解できる。

〈第２微高地〉

第２微高地は第１微高地と第３微高地の中間に位置し、３つの微高地のなかでは最も小さい微高地である。新幹線調査区ではこの微高地の北端付近を調査し、中世の井戸やピット等を検出している。今回の調査区はより南側であるため、微高地の様相がかなり明らかとなった。古代の遺構は掘立柱建物が主体で、Ｅ-12°-Ｎの方向に方位を合わす傾向が看取される。この方向性は微高地１の区画溝の方向性と極めて近い。調査区西半部は後の水田開発に伴ってかなり削平されているが、区画溝の一部と推測される土壙が南北方向にあり、東側については同じ方向の柱穴列が検出されている。建物の方向性とも一致し、なおかつ建物群の東西両端に位置することから、建物群を囲む区画が存在したことが推測される。東側の柱穴列と西側の溝が１つの区画を構成しているとすると、東西幅が30mほどということになる。これは第１微高地の区画溝の半分の長さということになり、方向性が共通することからも、両者の間に親縁的な関係が存在したことが推測される。

では第２微高地の古代遺構の性格であるが、極めて限られた調査範囲ではあるものの、検討してみたい。まず建物であるが、５棟が検出されており、いずれも側柱建物である。建物２と建物３のように同じ建物の建て替えがあり、官衙的なあり方を示すものがある一方で、建物１のように他の建物よりも若干方向がずれているものもある。５棟の建物のうち、建物４と建物５は梁間が３間であることから、かなり規模の大きな側柱建物といえる。区画内の建物群の中に総柱建物が存在するかしないかといった点はこの調査区内の様相だけでは断言できないが、少なくとも、調査区の中には存在していない。第３微高地では総柱建物群を主体とする建物群が検出されており、少なくともそれとは異なった様相の建物群であったといえる。

遺物からみてみると、東側の柱穴列の東側、想定される区画外に相当する微高地端部の傾斜地では一時的に多くの土器を廃棄したと考えられる土器溜まりが検出された。土器は細片化されていたが、主体は土師器の杯や皿で、緑釉陶器も含まれていた。いわゆる食膳具が主体ということであり、饗宴に用いられた土器群と考えられる。そして緑釉陶器が含まれていることは、この饗宴が一定ランク以上のものであったことを示している。そのことは建物４精査時に石帯が出土したことから首肯できる。

第２微高地の古代遺構の特徴をまとめると、〔１〕第１微高地の区画と方位を合わせた区画溝があり、その内部は、同じくその方位と方向を合わせた建物が主体で構成される。〔２〕側柱建物が主体である。〔３〕饗宴がおこなわれたことをうかがわせる食膳具が多数出土した。〔４〕緑釉陶器や石帯などの出土から、ある一定以上のランクに属するといったことになる。〔１〕・〔４〕からはこの遺跡が官衙に関連することをうかがわせるが、〔２〕・〔３〕からはこの場が官衙の中心というよりも居住区的な性格が考えられ、区画が存在しているとするならば、官人の館的な性格と考えるのが妥当といえる。

第２微高地の時期であるが、建物群は現水田耕土直下で検出されており、包含層などは後世の削平のために全く残存していなかった。そのため、遺物の出土は極めて少なかったが、微高地端部で出土した土器なども含めてみると８世紀中葉～９世紀後半の時期で、基本的には土器溜まりと同じ、９世紀後半の時期が主体といえる。柱穴埋土の土器は細片化されており、確実に時期を決定するのには困

難であるが、９世紀後半前後の時期と考えて矛盾しないものが大半であった。以上から、今回検出された建物群は、９世紀後半の可能性が最も高い。建物群が正方形の区画であったとすると、一辺が30mほどということであり、この範囲は第３微高地の一部分を占地しているだけということになる。８世紀代の遺物も出土していることから、より古い段階の居住区、あるいは館が第３微高地の別の位置に存在していたことも推測される。

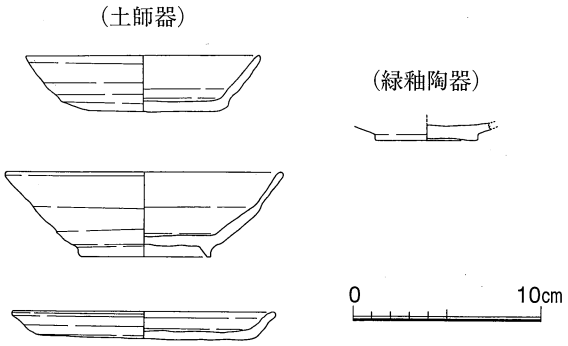



図200　第３微高地の時期を示す土器

〈 第３微高地 〉

第１・第２微高地上での調査区の面積と比べると、面積的に少ないが、かつておこなわれた調査の中では、最も広範囲に調査がおこなわれている。新幹線調査区、都道調査区、市道調査区とも、各時期の多くの遺構が錯綜しており、各遺構を時期ごとに分離することも困難といえる。ただし、柱穴掘り方が方形に近い古代の建物が複数存在していることは間違いない。特に市道調査区の南側からは南北方向の柱間が３間、東西方向が２間以上のかなり規模の大きな総柱建物が少なくとも３棟南北方向に並んでおり、その東側には側柱建物も数棟軸方向をあわせて並んでいる（安川ほか2001）。これらは倉庫群とそれに付属する管理棟と考えられ、官衙の中心施設の一部であることが推測される。また第３微高地の北端に相当する県道調査区では、９世紀前半の緑釉陶器が多量に出土しており、銅印の鋳型も出土している（岡田ほか2004）。今回の調査で検出された古代の遺構は、側柱建物１棟と井戸１基である。特に井戸は長さ180cm、幅22～30cm、厚さ２cmもの板材を８枚も用いており、その外周には内側の井戸枠を保護するための枠をめぐらし、井戸底には砂利を敷いていた。井戸枠内の規模では0.9×0.8mである。規模的にも構造的にも一般的な井戸とは考えられない。井戸枠内からは神功開宝や土器が出土したが、注目されるのは斎串が12本も出土したことである。斎串はいわゆる律令国家が規定した祭祀に用いられた祭祀具の一つである。都城における井戸から出土する祭祀遺物のなかでは、斎串が最も多い（北田2000）。都城の井戸については、宅地内の井戸も含まれている。しかし地方においては斎串の出土は極めて限られている。県下における出土例のうち（国立歴史民俗博物館1985・山本ほか1988・柳瀬ほか1996・物部ほか2002）、１遺跡および、１遺構からの出土数が最も多いのは、12本が出土した本例となる。次は美作国府の正庁に付属する曹司地区の井戸から出土した３点である。国府よりも出土数が多いというのは、川入・中撫川遺跡の性格を考える上で示唆的である。この井戸の時期は９世紀後半であり、第１・第２微高地の古代の遺構の時期と共通する。第３微高地は倉庫群が存在することや、美作国府の曹司の井戸よりも数多くの斎串が出土した井戸があり、それに伴う建物があることから、官衙本体の施設が存在していた可能性が高い。

引用文献

岡田　博「美作国府」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』６　1973
正岡睦夫ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』２　1974
中野雅美ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　1977

国立歴史民俗博物館「祭祀関係遺物出土地地名表」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集　1985
山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　1988
伊藤　晃ほか「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　1995
柳瀬昭彦ほか「百間川原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106　1996
北田裕行「古代都城における井戸祭祀」『考古学研究』第47巻第１号　2000
安川　満ほか「川入・中撫川遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査の概要』1999(平成11)年度　2001
物部茂樹ほか「百間川米田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164　2002
安川　満ほか「川入・中撫川遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報１』2000(平成12)年度　2002
岡田　博ほか「川入・中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182　2004

## （２）川入・中撫川遺跡と備中国府津

備中国のなかで最も遺跡密度の高い沖積平野を流れる足守川が内海へ注ぐ付近で、東西方向に３つ並ぶ微高地の様相を概観してみた。各微高地からは９世紀後半、あるいは９世紀後半を下限とする遺構が検出されており、しかもそれぞれの微高地で性格が異なった遺構が形成されている。第１微高地には寺院、第２微高地には館、あるいは居住区、第３微高地は官衙の本体であり、特に官衙本体と寺院がセットになっているのは注目される。美作国の久米郡衙に比定されている宮尾遺跡では、「コ」の字形に並ぶ建物や、それらを区画する溝や柱穴列があり、郡衙の政庁と考えられる。また、倉庫の一部と考えられる総柱建物なども検出された(橋本ほか1974)。そしてその西方約200mの位置には久米廃寺(粟野ほか1974)があり、郡衙付属の寺院と考えられる。同じく美作国の勝田郡衙に比定されている勝間田遺跡でも、寺院跡が付近に推測されるほどに多量の瓦が出土している(橋本ほか1974)。久米郡衙と同様に郡衙付属寺院が付近に存在している可能性が高い。さらに勝間田遺跡の北約200mの位置にある平遺跡からは、「郡」のヘラ書き土器や刻印土器、瓦、緑釉陶器、石帯が出土し、建物自体は遺物の質から比べると貧弱であるが、鍛冶炉も数多く検出されていることから郡衙付属の工房と考えられる(田中ほか1993)。川入・中撫川遺跡の場合、古代寺院が存在している点や、第３微高地の北半で銅印の鋳型が出土していることからも、付属寺院や工房が伴う郡衙クラスの施設を伴う官衙であったと考えてよい。郡衙であるとすると、位置関係から賀夜郡衙、あるいは都宇郡衙ということになるが、郡境が遺跡を分断していることが問題となる。さらに足守川の河口であることから、津などの海上交通に関連する官衙であるとの指摘は以前からされてきた(岡田1992)。この点を加味しながら検討してみると、まず第１微高地の古代寺院については凝灰岩製の切石積基壇化粧を備えていることであるが、県下において同製の切石積基壇化粧は、備前国上道郡の賞田廃寺と幡多廃寺だけである。これは両寺の造営氏族である上道氏が地方豪族としては、例外的に中央官人として成功したことを反映させたためとされる(出宮1987)。また凝灰岩製の切石積基壇化粧は、中央においても宮都や有力豪族の氏寺に限られる(近江1996)。以上のことからすると、第１微高地の古代寺院は中央との結びつきが強い寺院であったことがうかがえる。さらに出土している創建時の軒瓦は軒丸瓦・軒平瓦とも平城宮式系であり、文様の陰陽が逆転している軒平瓦は備前国津高郡の郡衙、あるいは駅家と推測される富原遺跡(伊藤ほか1986)、備前国府の付属官衙であるハガ遺跡(草原2004)、備前国分僧寺(伊藤1991)などからも出土していることからも、官衙を中心に分布するといえる。さらに備前国の場合、平城宮式系の軒瓦の分布は、備前国府を中心に分布していることから、その分布には国府の介在があったと考

えられる(草原2004)。備中の場合、国府の位置がよくわかっていないことから、より踏み込んだ検討は困難であるが、平城宮式系軒瓦の分布をみると、足守川中流域を中心に分布している(草原2004)。この点だけで、備中国府を足守川中流域に想定することは早計であるが、平城宮式系軒瓦の分布は少なくとも郡域を超えて分布しており、その分布には備前国と同様に郡クラス以上の官衙、すなわち国府の介在があったという推測は可能であろう。そうすると、第1微高地の古代寺院は凝灰岩製の切石積基壇化粧をもっている点、平城宮式系軒瓦をもっている点から、備中国府との関連がうかがえるのである。二彩あるいは三彩陶器が出土するのも、そのような寺院と考えるならば納得できる。

次に郡境である法万寺川についてはⅠ章で触れたように、その位置に大きな変更は認められない。足守川本流であった時期や、本流が別の地点に移動した可能性は十分に考えられるが、法万寺川、あるいは足守川の旧流路のラインを用いた郡境については、下流にある中世から近世の城跡の城名にも反映されているように、移動はなかったと考えられる。そうすると第1～第3微高地の官衙施設は郡域を超えて、あるいは意識しないで広がっているということになる。この点と第1微高地の古代寺院の有り様から、川入・中撫川遺跡の官衙は、郡衙よりも上位にある国府に関係する官衙の可能性が想定されてくる。さらに足守川の河口であることから、国府に付属する港湾施設、国府津であると推測されるのである。国府津とは中央への貢進物を運送する拠点とされ(栄原1972)、この点は第3微高地南半で検出された倉庫群とも合致する。いずれにせよ、川入・中撫川遺跡は検出された遺構や遺物、遺跡の存在していた地形を見る限り、備中国の国府津である可能性が最も高い。

それでは、隣接する備前国府津についてもみてみたい。備前国の国府津は倉庫群がみつかっていることと、「市」を墨書した土器が出土したことから、百間川米田遺跡を比定する考えがある(物部ほか2002)。米田遺跡の北3㎞の位置に備前国府があることからも、国府との関係は十分うかがえる。しかし備前国全体の海上交通の拠点を考えるならば、西を流れる旭川の河口を想定する方が自然ではなかろうか。国府の経済的機能を担うのは国府と結ばれた国府市、国府津とされる(栄原1972)。国府市とは、国府や国衙役人のために設定された政治的市である。百間川米田遺跡は墨書土器の通り、国府市と考えればよいのではなかろうか。では備前国府津はどこかというと、旭川河口の東岸の丘陵上に網浜廃寺がある。この寺院の周囲には寺院の位置する丘陵裾部まで海が入り込んでおり、現況のように水田耕作に適した耕地が開発されるのは近世以降である。海上交通を意識した、あるいは立脚した立地といえる。この寺院からは、川入・中撫川遺跡と同様の平城宮式系の軒瓦が出土しており、創建瓦である可能性が高い。さらに軒平瓦は陰陽の文様が逆転している(草原1993)。ただし網浜廃寺の周囲には国府津の施設が想定できるような平坦な地形は存在しない。網浜廃寺の対岸には、藤原氏の氏長者に伝えられる重要な荘園の一つである殿下渡領の鹿田庄がある。この荘園の成立は奈良時代末から平安時代はじめまで遡るようであるが、注目されるのは、長徳四年(998)の『備前国鹿田庄梶取佐伯吉永解』において、鹿田庄の船が美作国にある秋篠寺の年貢米・塩を運んでいることである。これは鹿田庄が貢進物を運送するための重要な役割を果たしていることを示しており、まさに国府津の機能をおこなっているという見方もできる。鹿田庄の設定は、備前国の物流拠点を意識しており、その意識の先には国府津があったのではないだろうか。そうすると、旭川はその東にある上道郡、西にある三野郡を画する郡境である。西岸に国府津の本体があり、東岸にその付属寺院があるという理解も可能ではなかろうか。

備前国府津に関しては、その本体となる官衙が検出されていないことなどから不確定な要素が多い

が、網浜廃寺の存在を考慮すると、備中国の国府津と同様に寺院を付属させていた可能性が考えられ、しかも、郡域を超えて両者が存在している可能性があり、これも備中国の国府津と共通することといえる。備前国と備中国の国府津が、共通する立地や遺構・遺跡の配置をおこなっていると想定されることは偶然とはいえない。いずれにせよ、川入・中撫川遺跡の様相から国府津の構成を整理すると、倉庫・工房などの中心官衙域、館などの居住域、寺院の三区域からなっている。寺院が伴う点では郡衙クラスの官衙施設を有しているといえ、さらに居住域が存在することは常駐の官人がいる恒常的な官衙であったことを示している。

引用文献

栄原永遠男「奈良時代の流通経済」『史林』第55巻第4号　1972
田中満雄ほか「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8　1973
橋本惣司ほか「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4　1974
粟野克己ほか「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4　1974
橋本惣司ほか「勝間田遺跡緊急発掘調査概要」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4　1974
伊藤　晃「富原遺跡」『岡山県史』考古史料　1986
河本　清「美作の官衙」『吉備の考古学 －吉備世界の盛衰を追う－』福武書店　1987
出宮徳尚「古代寺院址」『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987
伊藤　晃「備前」『新修国分寺の研究』第4巻　吉川弘文館　1991
岡田　博「官衙」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社　1992
草原孝典『小丸山遺跡』岡山市教育委員会　1993
山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房　1994
近江俊秀「岡寺式軒瓦をめぐる二、三の問題」『考古学雑誌』第81巻第3号　1996
物部茂樹ほか「百間川米田遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164　2002
草原孝典『ハガ遺跡』岡山市教育委員会　2004

## （3）古代山城と津

川入・中撫川遺跡が公的な津としての性格を有するようになったのは、8世紀よりも遡ると理解される。それは市道調査区（第3微高地）で奥山久米寺式の軒丸瓦が出土しているからである（安川ほか2001）。この瓦と同笵の瓦は、川入・中撫川遺跡の西方5.5kmの位置にある山手村末ノ奥窯で焼成され（日野浦2000）、北方1kmの位置にある岡山市津寺遺跡（高畑ほか1998）、加茂政所遺跡（柴田ほか1999）でも出土している（葛原2001）。しかし、川入・中撫川遺跡、津寺遺跡、加茂政所遺跡とも単発的な出土である。数量的に限定されているにもかかわらず、広範囲に同笵瓦が分布していることから、在地の寺院や施設への供給を目的とせず、港湾施設である川入・中撫川遺跡から畿内へ搬入する過程で残されたものであると考えられている（上原2001）。このことは川入・中撫川遺跡の公的港湾施設であったという性格が7世紀前半まで遡ることを示している。ただし末ノ奥窯のような瓦生産は、屯倉との関係が指摘されているが（上原2003）、それはその後の藤原宮造営のための瓦生産とはあまり整合しない。屯倉制と律令制の本質的な相違点を示しているとも解釈できそうであるが、それはその瓦生産に関わった川入・中撫川遺跡の公的港湾施設の公的な意味についても8世紀以降とは異なっていたこと

を示唆しているともいえる。川入・中撫川遺跡の第3微高地からは7世紀全般の遺物が出土しており、7世紀前半から8・9世紀まで継続していると考えてよい。さらに市道調査区からは7世紀後半と考えられる海獣葡萄鏡が出土しており(安川ほか2001)、県下では5例目である(勝部1996)。極めて稀少である点や、海獣葡萄鏡が中国からの舶載であることから、該期における公的港湾施設であったことの根拠の1つであるともいえる。

7世紀から9世紀にかけての港湾施設、しかも公的な性格の港湾施設として、川入・中撫川遺跡が位置付けられる可能性が強いとすると、その背後の山陵上にある古代山城の鬼ノ城山城との関連がうかがえる。直線距離では11kmであるが、その間には視界を遮断するものはなく、さらに吉備有数の遺跡密集地である足守川流域の平野部を挟み込むことになる。畿内中枢が地域支配をすすめていくにあたって、いくつかの諸段階や手法が存在していたことは確かであろうし、鬼ノ城山城と川入・中撫川遺跡の関係のように、地域の中枢地の背後と前面を公的施設で押さえることもその一つであったことは推測される。ただ文献に記載されている古代山城である朝鮮式山城の築造は、663年の朝鮮半島における倭側の敗戦によって来襲が予想される唐・新羅連合軍の侵攻に備えるためである。鬼ノ城山城のように文献上に記載されていない、いわゆる神籠式系山城の築城の契機も諸説あるが、だいたい朝鮮式山城の年代前後に考える意見が多く、その可能性が高い。そうすると、結果として地域社会支配への性格を有していた(出宮1978)としても、築城や契機は、唐・新羅連合軍の侵攻といった軍事的な理由ということであろう。

古代山城についてはその立地や石垣・土塁などから、その性格は明らかであるが、港湾施設についてはどうであろうか。その一端をうかがえるのが『三好清行ノ意見封事十二箇条』(延喜十四年(914))の序文の一説で、『風土記』から引用された二万郷の地名説話である。内容の概略は、天智天皇が百済救済のために筑紫へ向かう際に下道郡で兵を集めたところ、2万人集まったということからその地を二万郷と名付けたということである。二万郷(邇磨郷)は備中国最大の大河である高梁川の下流西岸に位置する。現在は近世の干拓の結果によって、かなり内陸部にある印象が強いが、藤原宮出土の木簡の中には、二万郷から鯛が貢進されたことを示すものがあり、内海への港湾施設があっても不思議ではない。畿内中枢地を主体とした朝鮮半島への大規模な軍事行動は、7世紀前半前後にもおこなわれていることが文献上に記載されている。軍編成の実態の問題は別として、派兵の過程では瀬戸内海沿岸の港湾施設を利用していたと考えるのが自然であろう。そしてそれは単なる寄港でだけではなく、二万郷の地名説話からうかがえるように、地方における兵の徴発にも用いられたと推測されるのである。そうすると、港湾施設は軍事行動の中でも攻撃時の拠点としての役割が大きかったと考えられる。そのため、外部からの侵攻に際しては直接的な攻撃目標の1つになるものであり、その防衛のために山城が設定された場合もあったのではなかろうか。つまり鬼ノ城山城の立地は、川入・中撫川遺跡を基点に設定されたとも考えられるのである。

隣接する備前国にも古代山城がある。大廻小廻山城である。大廻小廻山城についても同様の視点で見てみると、眺望的には備前国府の存在する旭川東岸平野からは良好とはいえない。むしろ、備前の東半部を流れる大河である吉井川中流域からの眺望が可能である。吉井川流域から旭川流域にかけては、複弁蓮華文の白鳳期の瓦、いわゆる川原寺式系の瓦が分布している。これらの分布をみてみると(図201)、吉井川に沿って南北方向に線的にのびる分布と、途中から西へ分岐して、備前と備中の境付近まで線的にのびる分布とがある。前者は美作と備前を結ぶルートであり、後者は備前の中枢地を

東西に横切るルートで、それは山陽道と平行する。備前の中枢地を横切るルートでは大体４～６kmの間隔で並んでおり、軒瓦は出土していないが、大廻小廻山城も分布の中の１つにあてはめることができる。また、美作は古代の製鉄遺跡が密集しており、吉井川に沿って南北に備前と美作を結ぶルートは、瀬戸内海航路へ鉄を移送するルートとも重なると推測される。これらの分布の中心は、吉井川中流域の服部廃寺付近と考えられる。それは川原寺式系軒瓦の焼成窯が二つ存在していることによって示される。分布する川原寺式系軒瓦は外区外縁や外区内縁のバリエーションからＡ・Ｂ・Ｃの３つに分けられる（図201）。服部廃寺にはＡ・Ｃが分布する。服部廃寺の近辺にある生砂池窯（池岡ほか1998）ではＡ、寺奥遺跡（窯跡と推定）（田代1988）ではＢが焼成されている。つまり３種類の川原寺式系軒瓦は、全て服部廃寺周辺で認めることができる。Ｃについては焼成窯が確認されていないが、これは服部廃寺以外では今のところ確認されておらず、おそらく服部廃寺近辺の未発見の窯で焼成されたと考えられる。そうすると３種類の川原寺式系軒瓦は、服部廃寺近辺で焼成され、各分布地点へ配布されたことが推測されてくる。この地点の吉井川沿岸部には「福岡市」というかなり活況を呈する市庭が中世には存在していた。「福岡市」の初源はもとより、実態についてもよくわかっていない。しかし少なくとも中世段階には、服部廃寺の西側には経済的な中枢地が存在していたということは確実である。

さて、検討の方向を港湾施設に戻すと、備前国東半部における主要な港湾施設は牛窓が考えられる。牛窓は吉井川河口から東寄りに位置し、可耕地が少ない地形であることにもかかわらず、古墳時代前期から後期にかけての前方後円墳が５基も築かれている。また古代以降も、著名な港湾施設として文献上に出ている。しかし、牛窓には古代寺院が存在しておらず、文献的にも７世紀後半の様相がはっきりとしていない。ところが、吉井川中流域では、服部廃寺や須恵廃寺などの古代寺院が７世紀後半

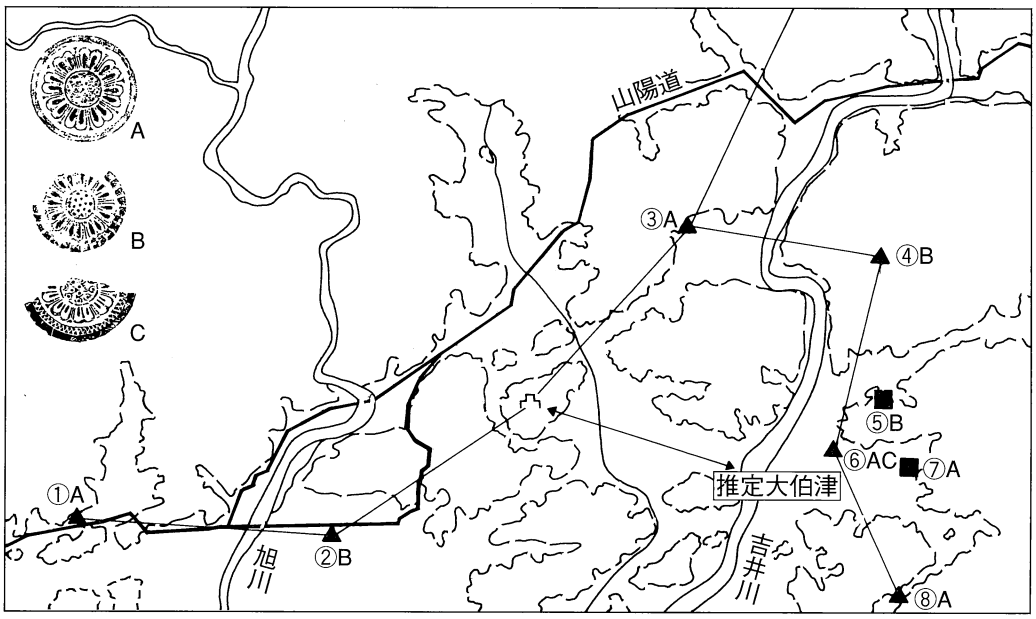



図201　川原寺式系軒瓦の分布と大廻小廻山城

に認められる。特に須恵廃寺からは、より遡る時期の瓦が出土している(亀田ほか1988)。吉井川東岸の中流域から下流域にかけては、大伯国造の領域である邑久地域として１つの地域を形成している。ただし古墳の分布からすると、この地域は１つの突出した勢力が求心的にまとめていたというのではなく、いくつかの核となる勢力が連合していたようである(小郷ほか1997～2000)。そのため、古代寺院も３寺院ある。しかし、いずれも牛窓のような内海を意識した立地ではなく内陸部にある。その中で７世紀後半の中心となるのは、須恵廃寺や服部廃寺のある吉井川中流域と考えられる。かなり内陸になるが、この周辺に邑久の中心的な港湾施設も存在していた可能性が推測されるのである。それは牛窓のように単なる瀬戸内海航路の港湾施設というだけではなく川原寺式系瓦当文の分布が示すように、美作や後の備前国中枢地との関係を意識した立地を想定して設定されたのではないだろうか。天武天皇の皇女である大伯皇女は、百済救援のために筑紫へ向かう途中に大伯の海で生まれたことから大伯と名付けられた。百済救援軍が大伯に寄港した記事は載ってないが、いわゆる軍事行動、特に救援といっても現象的には攻撃であり、その際に大伯が意識されていることは、先に想定された軍事行動の際の攻撃拠点となる港湾施設が存在していたことを推測させられる。そこが服部廃寺付近に想定されるのである。さらにこの地点から眺望でき、直線距離で東へ約６km内陸に入った位置に大廻小廻山城が存在するのは、必然的な理由といえるのではないだろうか(図201)。

吉備の２城の他に港湾施設との関係がうかがわれるのは、筑紫の大野城と河内の高安城である。大野城はその膝下にある大宰府との関係が強く意識されているが、７世紀代の遺構は大宰府よりも博多湾に近い比恵遺跡や、那珂遺跡でまとまって検出されている(石松ほか2002)。これらは「那津宮家」に比定されている。「那津宮家」の詳細については様々な検討がなされているが、両遺跡の大まかな理解としては、博多湾の港湾施設に伴った官衙的施設といえる(菅波1997)。比恵遺跡や那珂遺跡は、７世紀末以降は倉庫群がみられなくなるなどの変化がある。それは施設が内陸の大宰府へ移ったためとされる。いずれにせよ、当初は大野城も博多湾周辺の港湾施設やその周辺の官衙の背後を意識して築かれていたという可能性も考えられる。同様に、河内の高安城も難波津の背後に築かれたと考えるのが妥当と思われる。古代山城と港湾施設との関係は、より多くの事例で検討しなければならないが、川入・中撫川遺跡と鬼ノ城山城の関係は古代山城の占地パターンの１つの典型を示している可能性が推測される。

引用文献

出宮徳尚「吉備の古代山城試論」『考古学研究』98　1978

田代健二「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第10集　1988

勝部明生『海獣葡萄鏡の研究』臨川書店　1996

池田　浩ほか「服部廃寺」『長船町埋蔵文化財発掘調査報告』２　1997

小郷利幸ほか「吉井川流域の古墳の測量調査」(１)～(４)　古代吉備19～22　1997～2000

菅波正人「福岡平野の６～７世紀にかけての建物群の様相」『古墳時代から古代における地域社会』埋蔵文化財研究会　1997

池田　浩ほか「生砂(産土)池窯跡」『長船町史』史料編(上)　1998

亀田修一「須恵廃寺」『長船町史』史料編(上)　1998

高畑知功ほか「津寺遺跡」５『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127　1998

柴田英樹ほか「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　1999
日野浦弘幸「末ノ奥窯跡の出土の瓦磚」『古代瓦研究Ⅰ－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所　2000
安川　満ほか「川入・中撫川遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査の概要』1999(平成11)年度　2001
葛原克人「吉備出土の角端点珠瓦」『岡山県立博物館研究報告』第21号　2001
石松好雄ほか『太宰府正庁跡』吉川弘文館　2002
上原真人「初期瓦生産と屯倉制」『京都大学文学部研究紀要』第42号　2003
草原孝典『ハガ遺跡』岡山市教育委員会　2004

参考文献

葛原克人「鬼ノ城と小廻山城」『吉備の考古学』福武書店　1987
出宮徳尚「瀬戸内の古代山城」『新版古代の日本　中国・四国』角川書店　1992
乗岡　実「古代山城」『吉備の考古学的研究』(下)　山陽新聞社　1992
村上幸雄「鬼ノ城角楼および西門の調査」『総社市埋蔵文化財調査年報７(平成８年度)』　1997

## Ⅳ　弥生時代後期末・古墳時代前期

### (１) 遺構の様相

弥生時代後期末と古墳時代前期前半の遺構としては、第１微高地と第２微高地から竪穴住居・井戸・溝が検出されている。各微高地の遺構の様相を整理してみたい。

〈 第１微高地 〉

竪穴住居・井戸・溝・土壙が検出されている。今回の調査では後期末の井戸が６基、古墳時代前期の井戸が１基、古墳時代前期の竪穴住居が１軒検出された。新幹線調査区では後期末の井戸が１基、都道調査区では土壙が若干検出されている。後期中葉の遺構は比較的密で、広範囲に広がっているが該期の遺構はやや稀薄な状況である。

〈 第２微高地 〉

竪穴住居・井戸・溝・土壙が検出されている。県道調査区・都道調査区・新幹線調査区・市道調査区の中央部にはほぼ直線的に数条の溝が検出されており、それらは県道調査区の成果を参考にすると、弥生時代以来、幅が２ｍほどの溝が何度か掘り直された結果といえる。第３微高地の東側を流れている旧法万寺川は、県道調査区の北端で流路方向を大きく西へ変えて調査区を横切っている。おそらく検出された溝群は、旧法万寺川からの取水を目的に掘削され、第３微高地南西部の後背湿地に広がる水田域に給水されたと考えられる。

次に、竪穴住居と井戸の分布状況について整理しておきたい。第３微高地の場合(図202)、第１微高地とは異なり、古墳時代前期の遺構が主体である。検出されている竪穴住居も、古墳時代前期に属するものばかりである。まず竪穴住居の分布であるが、新幹線調査区で溝群の西側に竪穴住居１軒が検出された以外は、全て東側で検出されている。井戸も溝群以東でしか検出されていないことから、第３微高地の居住区域は微高地中央やや西寄りに掘削された溝群よりも東側で、旧法万寺川との間に挟まれた東西幅が50ｍほどの範囲と推測される。居住区の状況がよくわかるのは、都道調査区、新幹

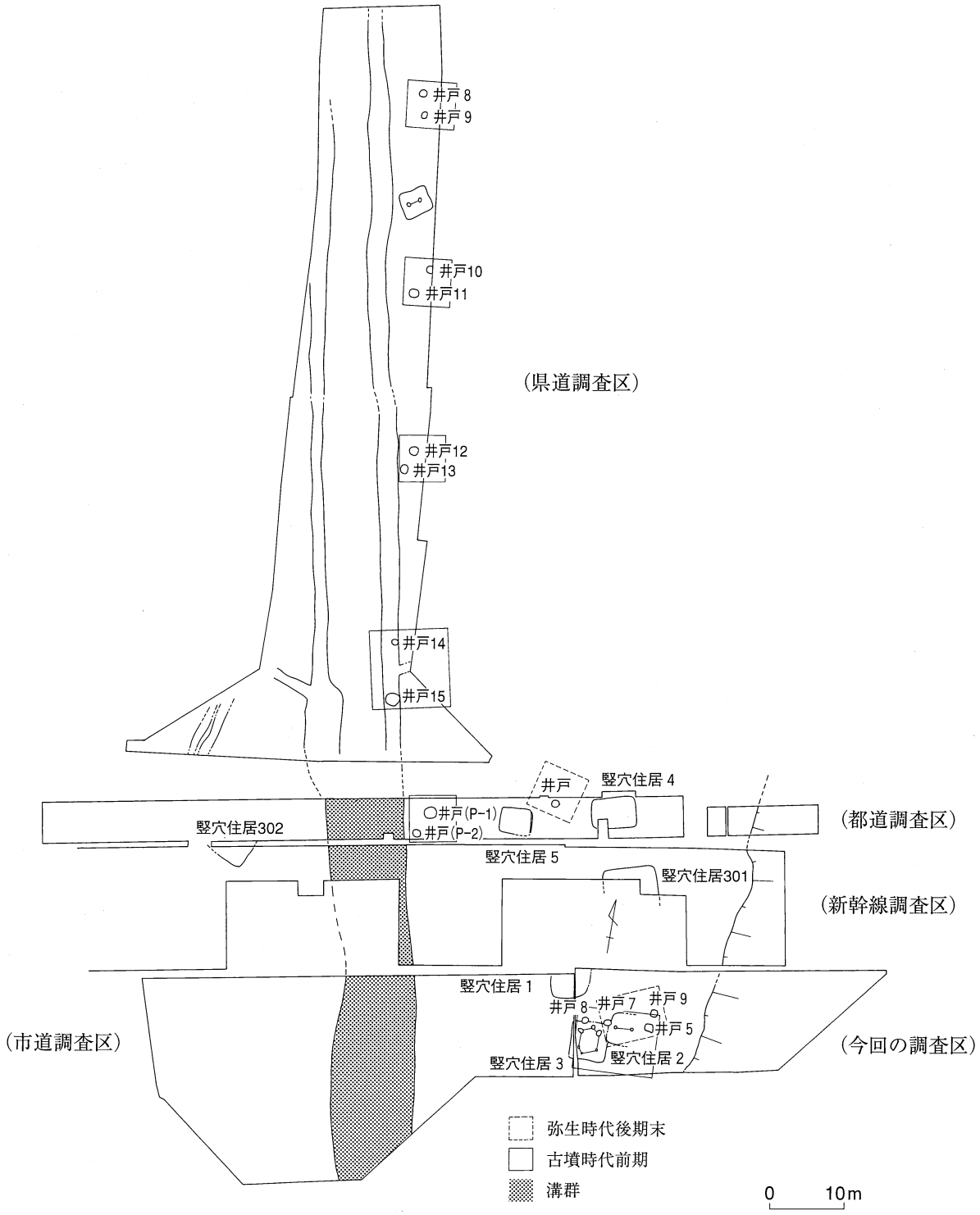



図202　第３微高地　弥生後期末・古墳前期　遺構配置

線調査区、市道調査区、今回の調査区である。竪穴住居が6軒と井戸が4基検出され、弥生時代後期末の井戸も3基検出されている。未調査区もあることから竪穴住居や井戸の総数は確定できないが、都道調査区と新幹線調査区の様相から、近接する2基の井戸があり、それに3軒前後の竪穴住居が付属しているようにみえる。県下における弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡の井戸と竪穴住居を比較した成果(中野1988)では、古墳時代前期の場合、竪穴住居1軒に対し、井戸が1.5基という比率であるという。また旭川流域の弥生時代後期では、井戸1基に対し2～3軒の竪穴住居という比率であるという。第2微高地の様相は旭川流域の後期の様相と近いといえる。さらに第3微高地の北半に相当する県道調査区では、溝群に沿って2基が1単位となる井戸が南北方向に10～15m間隔で4単位並んでいる。都道調査区や新幹線調査区のように、これらの井戸の東側には竪穴住居が存在すると予想される。今回の調査区では弥生時代後期末の井戸が近接して2基検出されており、都道調査区の北端でも同期の井戸が1基検出されている。竪穴住居は検出されていないが、弥生時代後期末も古墳時代前期の集落構成とよく似た様相であったことがうかがわれる。また検出された井戸の井戸底には、完形でしかもススが厚く付着している完形の甕形土器が複数出土する場合が多い。井戸に多くの土器を投棄する行為は、弥生時代中期以来おこなわれているが、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて、井戸底に完形の甕を投棄するあり方に統一されてきているようである。井戸における土器の投棄は、井戸廃絶の儀礼に伴うとされる場合が多い。その点を否定する理由はないが、井戸の使用と廃絶までが祭祀のあり方も含めて竪穴住居数棟の単位によっておこなわれていることは、その単位の自主性が評価できる一方で、土器を投棄する手順も統一されているのはより強い規定が存在していたこともうかがえる。溝群に沿って規則的な間隔で並ぶ井戸の景観は、むしろより強固な規定の存在によって現出したものという見方もできるように思われる。

第1微高地では、調査面積の関係から第3微高地ほどに集落景観は明らかでないが、井戸が近接して複数検出されていることや、古墳時代前期の溝が南北に直線的であることから、規模の差はあっても、集落の景観は第3微高地と同様であったと推測される。川入・中撫川遺跡の集落景観は、他の同時期の集落と比較すると、やや異質な感じを受ける。それは津の機能などを具備していたことに起因する可能性も十分あると思われるが、同じく臨海性の遺跡で、足守川の対岸に位置する上東遺跡でも指摘されているように、低位部が塩水の影響を受けやすいため、他の沖積平野の集落と比べると可耕地が少ない(藤田・柳瀬1987)ことから、耕地の管理が他の集落と比べて、厳しくならざるを得なかったことに起因するのではなかろうか。そのため、集落の構成も規則的になったと考えるのである。水田への給水路と考えられる溝群に沿って、2基が1つの単位となる井戸が等間隔で並ぶ景観は示唆的といえる。

引用文献

藤田憲司・柳瀬昭彦「弥生時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987

中野雅美「弥生・古墳時代初頭の井戸－岡山県南部の沖積地集落を中心に－」『鎌木義昌先生古稀記念論集　考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念文集刊行会　1988

## （2）布留０式について

第３微高地に広く遺構が展開するのは古墳時代前期で、それも前半に属する時期である。畿内において設定された布留０式期に相当すると指摘されている（寺沢1987）土器が主体である。ここでは当地における該期の土器の変遷を整理し、より詳細な時期を検討し、あわせて当地における布留０式期の様相の一端を概観してみたい（図203）。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期区分については、弥生時代後期を４期に、古墳時代前期を３期に分け、さらにその中を２～３の小期に分ける（草原1999）。弥生時代後期の最後となる後Ⅳ期はいわゆる酒津式で、柳瀬編年（柳瀬1977）のオノ町Ⅰ・Ⅱ式、高橋編年（高橋1980）のⅨ期、平井編年（平井1996）のⅥ期に相当する。古墳時代前期Ⅰ（以下古前Ⅰ）は、柳瀬編年の下田所式、高橋編年のⅩ期前半、平井編年Ⅶ期前半、古墳時代前期Ⅱ（以下古前Ⅱ）は、柳瀬編年の亀川上層式、高橋編年Ⅹ期後半、平井編年Ⅶ期後半に相当する。

〈古前Ⅰａ期〉

受け口状の口縁を持つ、いわゆる「吉備型甕」（甕Ａ）の口縁部端部における施文がクシ状工具における施文となり、後Ⅵ期ではやや不安定ながらも平底であった底部がほとんど喪失し、名残り程度に観察されるだけとなる。ただし平底は全く喪失し、完全な尖り底になるものもあり、むしろ主体を占めるようになっている。後Ⅵ期との相違は、主流である「吉備型甕」の形態的な変化だけでなく、甕全体に占める「吉備型甕」の割合が格段に増加し、かつ技法、容量などが画一的になったことにある。甕Ａとは別に「く」の字状口縁を持つ甕形土器も一定量伴っている。この甕形土器については外面調整がハケであるものが主流であるが、タタキ調整をもつものもかなり存在する。タタキをもつものは島嶼部や播磨、最近は淡路島からの系譜を指摘（松尾2004）されている。

壺形土器は、その形態によりＡ～Ｈが認識できる。そのうち、後Ⅵ期の壺の系譜を引くのが壺Ａである。壺Ｆは口縁端部が上方へ短く直立する二重口縁壺で、直立部の稜線が明確のものを$F_1$、稜線が緩いものを$F_2$とするが、$F_2$については後Ⅵ期から認められる。壺Ｃについては同様の口縁部を持つ鉢Ｂが存在していることから、この期にも存在していた可能性があるが、明確な資料が今のところない。

鉢形土器はＡ～Ｆまであり、後Ⅵ期からの系譜を引くのは鉢$A_1$、$A_2$、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆで、壺とは異なって大半が前段階と共通する。器台についてはよくわからないが、この期にはまだ伴っていない可能性が推測される。この期より古い時期の資料の中に器台とよく似たものもあるが、それらは高杯の杯部を小さくしたもので、古前Ⅰｂ期以降にみられる器台とは、異なるものであると考えられる。

高杯形土器はＡ、Ｂ、Ｃの３種があり、いずれも後Ⅵ期の短脚高杯の名残が認められる。また、高杯Ｂは高杯Ａの口縁端部に外傾する口縁部を付属させたものである。同様の高杯形土器は極めて少ないが、後Ⅳ期には存在する。

この期の指標となるのは百間川原尾島遺跡１の井戸２（正岡ほか1980）、同遺跡５の井戸９（柳瀬ほか1996）、同沢田遺跡２の井戸10（江見ほか1985）出土の土器群である。

〈古前Ⅰｂ期〉

甕Ａは胴部最大径がやや下がることから、肩の張りが鈍くなる。底部についても基本的には尖り底となる。甕Ｂについては一概にまとめることはできないが、注目されるのは右上がりの細かなタタキ痕を持つ、庄内河内型甕が認められることである。津寺遺跡（亀山1996）、甫崎天神山遺跡（柴田1994）、

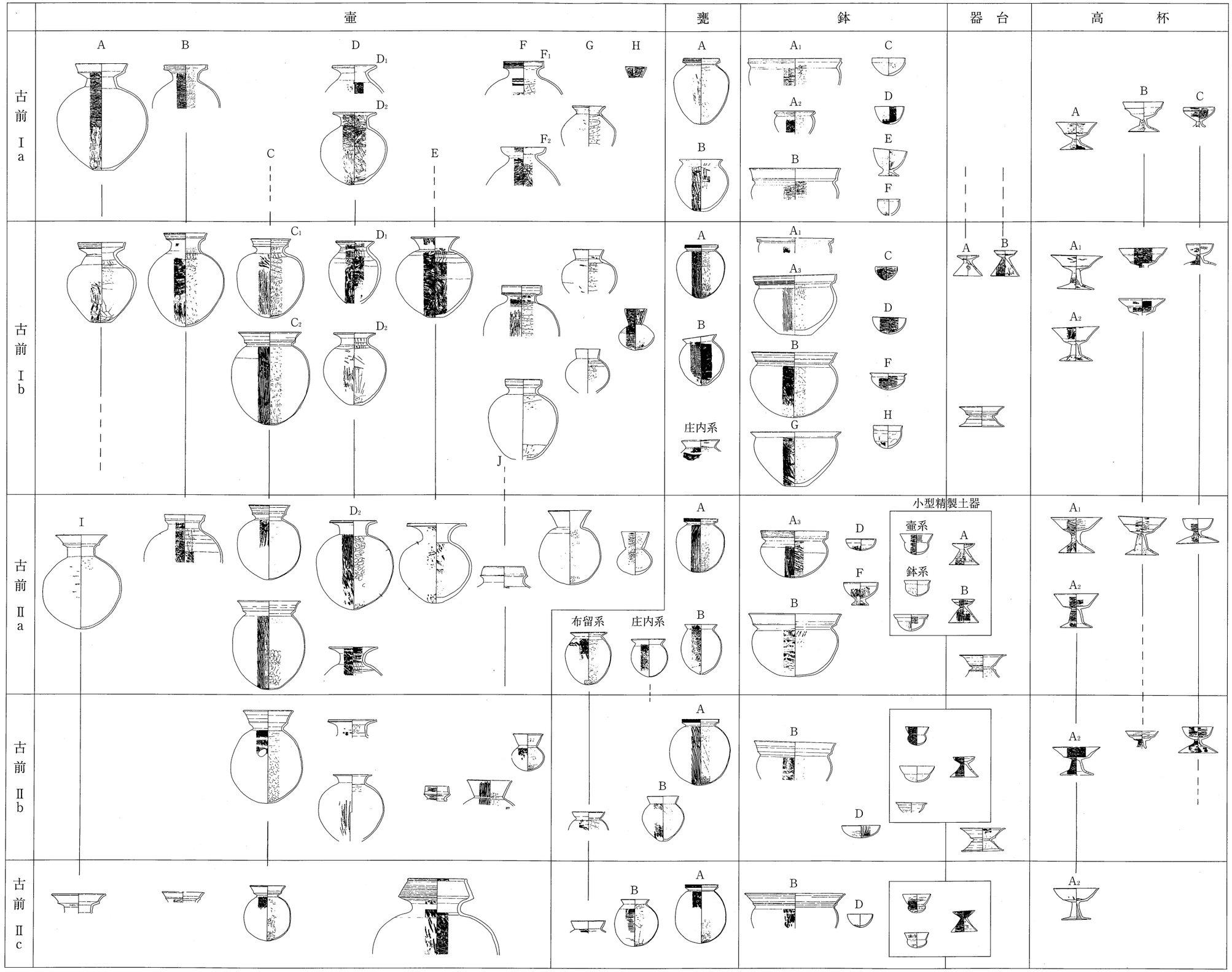



図203　古墳前期　前・中葉の土器の変遷

川入・中撫川遺跡では、この甕を模倣したものが出土しており、周辺部での遺跡では出土していないことから、限定された地点で庄内河内型甕の模倣や使用がおこなわれたようである。用語的には庄内吉備型甕、あるいは庄内備中型甕と呼称できるが(草原1995)、極めて点的な分布であるため、より検討を要するといえる。

壺形土器は、後Ⅵ期から系譜を辿れる壺Ａがまだ存在しているが、数的には壺Ｃが多く、壺の主流になりつつあることがうかがわれる。壺Ｃは外反する口縁部に稜線が認められることが特徴の一つで、頸部があるもの($C_1$)とないもの($C_2$)に分けられる。口縁部が大きく外開きとなる壺Ｄは、古前Ⅰａ期からある。頸部が内径して開くもの($D_1$) と、頸部が直立して開くもの($D_2$)があり、これらは対岸の讃岐地域と共通する器種といえる。

鉢形土器は、新たに鉢$A_3$、Ｇが認められる。鉢Ｈは前段階の鉢Ｆの亜流かもしれない。鉢$A_3$は鉢Ｂとも似ているが、平底である点や外端部の施文を意識していることから、鉢Ａの系譜と考えられる。同様に鉢Ｇについても平底である点から、古前Ⅰａ期に属する確実な資料はないものの、後Ⅵ期の「く」の字状の口縁部を持つ平底の鉢の系譜にあるといえる。

器台形土器は、この期には確実に伴っている。中空になるものは今のところ確認されておらず、直線的に斜め方向へ延びる受け部を持つもの(Ａ)と、二重口縁状の受け部を持つもの(Ｂ)の二者がある。山陰系の鼓形器台も散見される。

高杯形土器は、高杯Ａ・Ｂについては長脚化するが、高杯Ｃについては短脚のままである。さらに脚部については、中実のもの($A_1$)と中空のもの($A_2$)が存在する。

この期の指標となるのは百間川沢田遺跡の土壙117 (柳瀬他1993)、津寺遺跡２の竪穴住居40(光永ほか1995)、矢部南向遺跡の竪穴住居55(江見ほか1995)出土の土器群である。特に百間川沢田遺跡３の土壙117は、出土状況も良好であり、器種構成も多岐にわたっていることから、該期の極めて良好な資料といえる。

〈古前Ⅱａ期〉

この期の土器群は古前Ⅰ期からの継続的な変化の中にあるが、一方で極めて画期的な器種と器種構成が成立する。その点から、Ⅰ期とは明確に分離できる。まず壺形土器については、後Ⅳ期からの系譜を引き、かつては当地の壺形土器の主流を占めた壺Ａが消失し、新たな器種として直立する頸部を持つ二重口縁壺Ⅰが出現する。これは茶臼山式と呼称されるが、二重口縁部の成形をメルクマールとして細分した成果(野々口1996)ではＢ類に対応する。Ｂ類は最古の巨大前方後円墳である箸墓古墳出土の壺と同じ範疇である。二重口縁壺形土器の時期的変化については、当地における古墳出土資料の検討から畿内と同じであることが指摘されている(小郷2000)。このほか短頸の二重口縁壺形土器で、口縁部が内傾するもの(Ｊ)が認められる。ただし、同様の口縁部を持つものが後Ⅳｂ期の規準資料と考えられる加茂政所遺跡竪穴住居27(平井ほか1999)の中にも認められる。しかし、これは破片であるとともに口縁端部内側の形態などから、別器種の可能性の方が高いように思われ、壺Ｊは現況では古前Ⅱａ期前後に出現したと考えておきたい。

甕形土器は、甕Ａの胴部下半が底部中央から外方に広がる傾向が顕著となり、結果として胴部全体が丸みを帯びてくる。大げさな表現をすれば、隅丸方形気味の形状になっており、他地域ではみられない独特の胴部形態を呈する。「く」字状口縁部の甕形土器には、３者が認められる。１つは従来からのもので、ほかの２つはいわゆる布留式甕系と庄内式甕系のものである。

鉢形土器は後Ⅳ期の系譜を引く$A_3$も丸底となり、大型の鉢は鉢Ｂが圧倒的に多い。小型の壺形土器・鉢形土器・器台形土器については、壺系小型丸底壺形土器、鉢系小型丸底壺形土器、小型二重口縁鉢形土器・器台形土器のいわゆる小型精製３種の土器が揃う。また、後Ⅳ期以来の鉢Ｃが消失する。

高杯形土器の構成についてはほとんど変わらないが、中実の脚部が極めて少なくなっていること、高杯$A_2$の杯部内面の底部が水平に近くなっているものが大半を占める点が看取される。

この期の指標となるのが、百間川原尾島遺跡３の井戸７（岡本ほか1994）、矢部南向遺跡の竪穴住居62（江見ほか1995）、加茂Ｂ遺跡の土器溜まり２（光永ほか1995）、津寺遺跡５の竪穴住居218（高畑ほか1998）の土器群である。

〈古前Ⅱｂ期〉

良好な資料が少ないためかもしれないが、前の時期と比べると器種構成がかなり淘汰された感を受ける。この傾向は前段階から認められることでもある。まず壺形土器は壺Ｃが主流となり、それに若干壺Ｄが伴う。壺Ｄも前段階から$D_2$のみになり、$D_2$は口縁端部をそのまま収めるものと、端部をつまみ上げるものとに分けられる。甕形土器Ａは胴部中位に最大径がくるようになったため、より球形化が加速した印象を受ける。庄内系甕形土器は伴わない。鉢形土器は大型器種はＢのみである。小型精製３種の土器は、鉢系小型丸底壺形土器の口縁部が発達するものが表れ、小型二重口縁鉢形土器は退化していく。高杯形土器は中空の脚部の$A_2$が主流となり、中実の脚部である$A_1$は完全になくなる。Ｂも極めて少量ながら認められるが、かなり退化しており、例外的な状況で残存しているものと考えられる。

この期の指標となるのが、加茂Ａ遺跡の竪穴住居21（松本ほか1995）、津寺遺跡４の竪穴住居134（亀山ほか1997）、同遺跡135、井手天原遺跡竪穴住居７（物部ほか2001）の土器群である。

〈古前Ⅱｃ期〉

吉備型甕が伴う最後の時期である。壺形土器Ｃ、甕形土器Ａともに胴部最大径が下方に来るため、下膨れの胴部となる。ただし、下膨れの甕形土器については備前と備中とに時期差があり、備前の方がその出現が早いと指摘（江見1995）されている。鉢形土器の大型はＢのみで、口縁部が外方に開く。小型精製３種の土器のうち、小型二重口縁鉢は欠落し、器台は口縁部が直線的に斜め上方へ開き、中空となる。高杯形土器は$A_2$のみで、粗製となる。

この期の指標となるのは百間川沢田遺跡３の井戸４・６・12（柳瀬ほか1996）、同遺跡２の竪穴住居21、井戸18（江見ほか1985）の土器群である。

当地における古墳時代前期の土器の変遷を概観した場合、壺形土器の器種構成の変化、甕形土器の変化などの極めて画期的な変化から、後Ⅳ期と古Ⅰ期の間に明確な一線を引くことができる。しかし、それらの変化は多極的、多分に内在的な要素によって起こった印象を受ける。ところが、古Ⅱａ期は小型精製３種の土器の成立や茶臼山式の壺の出現にみられるように、それらの母体となる畿内から一極的な影響を受けた印象が強く、弥生時代後期の当地における主流であった壺Ａがこの期に消失していることなども示唆的である。古前Ⅱａ期は小型精製土器のセットが成立したことや、布留系・庄内系の甕形土器が並存していることから布留０式に相当する内容といえる。畿内との併行関係を求めるならば、古前Ⅱｂ期が布留Ⅰ式併行となり、古前Ⅰ期が庄内式ということになる。後Ⅳ期新段階は、

八尾市九宝寺遺跡531井戸の土師器群(西村ほか2004)と併行することから、庄内式古段階に相当する。後Ⅳ期古段階に併行するのは八尾市中田遺跡刑部土壙の土器群(高木1981)であるが、この土器群の吉備系土器には時期差があるようにもみられる。刑部土壙の土器群とほぼ同時期と考えられる八尾市中田遺跡ＳＸ０１の土器群(福田1986)は庄内式の初源期の様相であり、庄内式の開始と後Ⅳ期は併行する可能性が高いと思われる。

さて、川入・中撫川遺跡の遺構の時期幅については、上記の土器の変遷からみると、古前Ⅱａ～Ⅱｃまでの間である。第３微高地は各期の遺構が並存しており、ある程度継続的に居住していた安定的な集落であったといえる。ただし、近接する井戸のうち、県道調査区については同期のものがセットとなっているが、都道調査区の場合は古前Ⅱａと古前Ⅱｂであり、廃絶に時期差が認められる。調査区外に同期の井戸が存在している可能性もあるし、１つの単位が２時期にわたって存在していたことを示している可能性もある。同期の集落をかなり広範囲に調査している百間川原尾島遺跡の成果(柳瀬2004)と比較すると、川入・中撫川遺跡は整然としすぎているように思われる。臨海性で可耕地も限られていたであろう事が予想されるにもかかわらず、安定的な集落が営まれていることは、その背後に一般的な集落以外の要素が存在していた可能性が想像される。今回の調査において、大道西Ｃ区の古墳時代前期の井戸から前期古墳の竪穴式石室によく用いられる安山岩の板石が出土したことなどは、同種の安山岩が他地域から搬入されていること(宇垣1987･1897)からも示唆的といえよう。つまり、前方後円墳を営むような有力首長の津の役割を担った集落であったこともうかがわれるのである。

引用文献

柳瀬昭彦「川入・中撫川遺跡の弥生式土器および、古式土師器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　1977

高橋　護「入門講座 弥生土器　山陽３」『考古学ジャーナル』179　サイエンス社　1980

正岡睦夫ほか「百間川原尾島遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39　1980

江見正己ほか「百間川沢田遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59　1985

寺沢　薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所　1986

宇垣匡雅「竪穴式石室の研究 －使用石材の分析を中心に(上)(下)」『考古学研究』133･134　1987

寺沢　薫「布留０式土器拡散論」『同志社大学考古学シリーズⅢ 考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会　1987

高橋　護「土師器の編年中国･四国」『古墳時代の研究』６　雄山閣　1991

柳瀬昭彦ほか「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　1993

岡本寛久ほか「百間川原尾島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　1994

柴田英樹ほか「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　1994

江見正己ほか「矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　1995

草原孝典「吉備における庄内併行の土器」『庄内式土器研究』Ⅳ　庄内式土器研究会　1995

松本和男ほか「加茂Ａ遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　1995

光永真一ほか「加茂Ｂ遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　1995

光永真一ほか「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98　1995

平井典子「備中・備前」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会　1996
野々口陽子「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集第３集－創立15周年記念誌』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1996
柳瀬昭彦ほか「百間川原尾島遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106　1996
亀山行雄ほか「津寺遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116　1997
高畑知功ほか「津寺遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127　1998
草原孝典『長坂古墳群』岡山市教育委員会　1999
平井泰男ほか「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　1999
小郷利幸「田邑丸山古墳群・田邑丸山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第67集　2000
物部茂樹ほか「井手天原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156　2001
松尾佳子「淡路型甕について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179　2004
柳瀬昭彦「弥生～古墳時代の集落変遷」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179　2004
西村　歩ほか「九宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ」『(財)大阪府文化財センター調査報告書』第118集　2004
高木真光「中田遺跡(刑部地区)関西電力Ｋ．Ｋ地中線埋設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『八尾市文化財調査報告』７　1981
福田英人『中田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会　1986

# Ⅴ　弥生時代後期中葉

## （１）遺構の様相

弥生時代後期中葉の遺構が、ある一定の広がりをもって検出されているのは第１微高地のみである。第３微高地でも若干認められるが、概して少ない。そこで第１微高地の様相を整理してみると(図204)、今回調査した調査区の西端部(大道西Ｃ区・大道西Ｄ区・大道西Ｅ区)で、やや北へ振る東西方向の溝を検出した。この溝は大道西Ｅ区で調査区外へ出ることや、北接する新幹線調査区では検出されていないことから、直線的に東へ延びると推測される。ただし大道西Ｈ区の東端で、この溝と形態や遺物の出土状況の類似した溝が南北方向で検出されており、同期の溝が付近では検出されていないことからも、大道西Ｈ区の北側で直角に近い角度で折れ曲がるか、あるいは分岐している可能性が高い。さらにこの溝の西端に相当する大道西Ｃ区と大道西Ｇ区をみてみると、大道西Ｃ区から西へ、直線的にのびると、大道西Ｇ区でも溝の北端付近が検出されるはずであるが、検出されなかった。微高地端部という地形的な条件から削平、あるいは流出した可能性も十分にあるが、東側での有り様から、西端でもこの溝が直角に南側へ折曲した可能性もある。ただしこのことは南側にこの溝による方形区画があったことを推測しているわけではない。溝の底部には掘り直しの痕跡が２条あり、壁面の傾斜もそれほど急でないことから、水路としての機能を有していたことをうかがわせる。おそらく水田開発に用いた水路であった可能性が高く、その開発がかなり計画性を持っていたことを反映させているのではなかろうか。

この溝の北側(都道調査区・新幹線調査区)からは、竪穴住居が５軒前後検出されている。いずれも微高地の西側にかたまる傾向がある。溝の流路方向については東から西と考えられる。現在大道西Ｈ

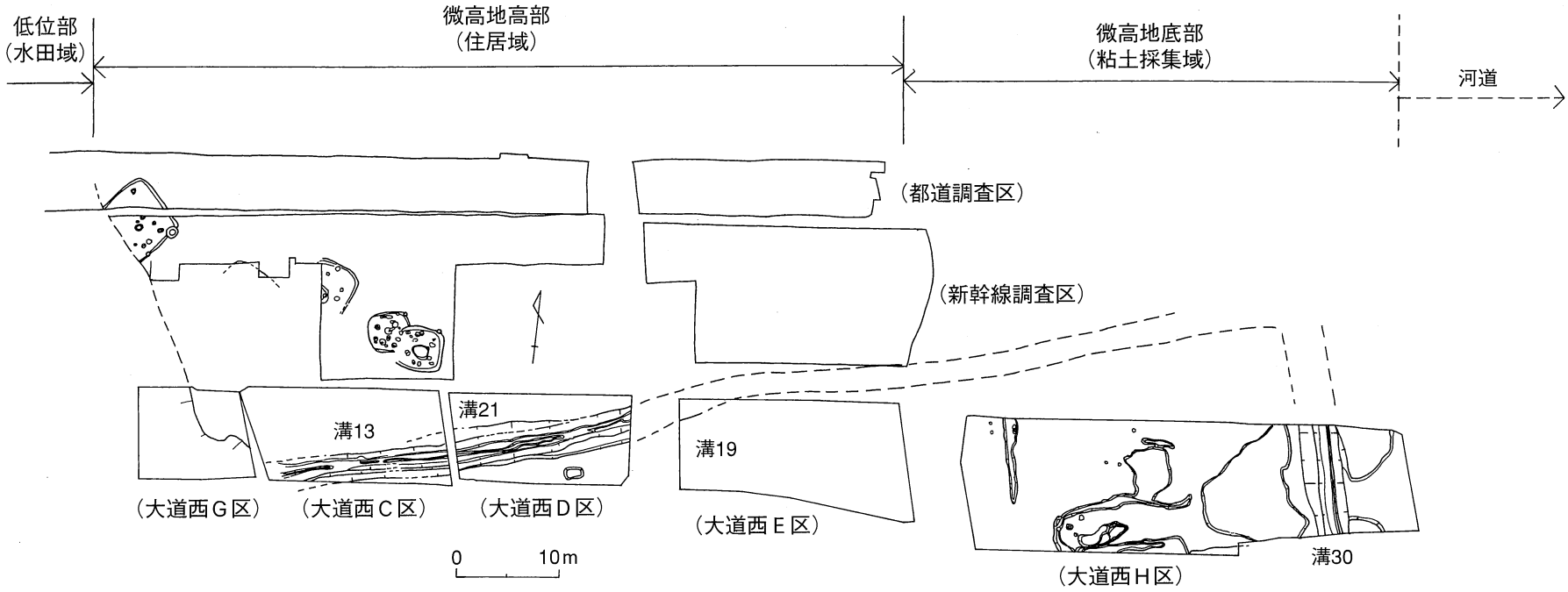



図204　第１微高地　弥生後期中葉　遺構合成図

区の東側には幹線用水路がある。この用水路は条里方向に規定されていることから、基本的にはかなり新しい時期の開発といえる。しかし、この用水路東側での立会調査の成果などからは微高地の落ち込み部、もしくは河道に相当することから、現況の用水路が旧河道を利用している可能性が高い。大道西Ｇ区西側では、旧法万寺川までは河道の痕跡が認められないことから、東西方向の溝（溝13・21・19）は第１微高地の東側を流れていた河道から取水していたといえる。そうすると、この溝を用いた水田の開発は第１微高地西側の低位部ということになる。竪穴住居が西側に偏るように検出されているのは水田域を意識して住居を設定していたことに起因するといえよう。大道西Ｈ区の溝30はさらに南側の水田開発に用いられたと推測される。

竪穴住居と溝のほかに、大道西Ｈ区では溝30の西側で不整形な土壙がいくつか検出されている。微地形的にみると、大道西Ｃ区から大道西Ｅ区にかけてはかなり強固な微高地基盤があり、海抜高も高い。大道西Ｈ区になると基盤層はやや脆弱となり海抜高も低くなる。微高地上でもやや低くなっている部分に土壙が掘られているといえる。この土壙については底面が堆積土層に沿って平坦であり、ある一定の土層を採集していると思われることから、粘土採取のために掘られたものと推測される。溝には多量の土器が廃棄されていたが、そのなかには焼成破裂（田崎2002）を生じたものが少なからず認められる。土器焼成をおこなった遺構そのものは検出されていないが、焼成不良品を含む多量の土器の廃棄と、その付近に粘土採集のためと推測される土壙があることから、付近で土器の焼成をおこなっていた可能性が高いように思われる。足守川流域における後期中葉の集落は、高塚遺跡、立田遺跡、矢部南向遺跡、加茂政所遺跡、吉野口遺跡などがある。この時期は該期の集落の遺跡消長の画期で（草原2002）、高塚遺跡や矢部南向遺跡・加茂小Ａ・Ｂ遺跡のように遺構密度の高い中心的な集落と、立田遺跡や吉野口遺跡のような、遺構密度の低い集落に分けられる。後期後葉に複数成立した拠点的集落が再編され、矢部南向遺跡や高塚遺跡のような中心的集落を中心とした求心的な地域構造に変化したと推測される。それはともかく、後期中葉の各集落をみてみると、川入・中撫川遺跡のように住居域に近接する位置に粘土採集のための土壙は検出されていない。この点を川入・中撫川遺跡の特徴であるとすると、１つの解釈が可能である。それは川入・中撫川遺跡のように、海浜部の集落の場合、潮位の関係によって低位部の水田可耕地が内陸部の集落と比べると限定される。そのため水田生産の欠損部分を填補するための一つの方策として、ほかの集落よりも集中的に土器を焼成していたのではないだろうか。もちろん土器焼成のほかにも塩生産などもおこなっていたことは十分考えられる。ただし、今回の調査では該期の製塩土器は出土していない。これは製塩作業を行っていなかったというのではなく、どこかの地点で集中的に作業していることを示していると考えたい。それと同様に不良品を含んだ土器が溝から多量にまとまって出土したことからも、集中的な土器生産が近辺でおこなわれたことを示唆していると推測するのである。

引用文献

弘田和司ほか「立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　1999

田崎博之「焼成失敗品からみた弥生土器の生産と供給」『環瀬戸内海の考古学　－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会　2002

草原孝典「集落変遷からみた水田経営の画期　－岡山県南部の弥生時代中･後期を中心に－」『環瀬戸内海の考古学　－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会　2002

（２）土器の様相（図202・203・204）

調査区内で検出された溝（溝13・19・21・30）は、その規模や遺物の出土状況などから、同一の溝であると考えられた。その溝が廃絶し、埋没過程で生じていた窪み状の部分に多量の土器が投棄されており、それは検出された溝の全域で認められた。土器は間層のないほど密な堆積状況であり、徐々に投棄されたというよりも、極めて短期間に集中して投棄されたと考えられる。溝出土の遺物ではあるが、そういう意味ではかなり一括性の高い埋没状況といえる。そこで、溝から出土した土器の様相の概略を整理しておきたい。

溝出土の土器群は、後期を４期に区分した場合の３期に相当し（草原1999）、巨視的にみれば上東式の最新段階、既存の編年成果では柳瀬編年の鬼川市Ⅲ式（柳瀬1977）、高橋編年のⅧｄ期（高橋1980）、正岡編年の備前Ｖ－４様式（正岡1992）、高畑編年の備中Ｖ－５様式（高畑1992）、平井編年の５期３ｂ（平井1996）に相当する。

まず、壺形土器はＡ～Ｅに分けられる。壺Ａは長頸壺形土器である。口縁端部の形態からａ～ｅの５種に、頸部の形態や胎土からⅠ～Ⅲの３種に分けられる。ａは口縁端部が若干上下に拡張するもので、前段階の同種の壺形土器の特徴を有しているものである。ｂは下方へもわずかに拡張するが、上方への拡張がかなり顕著なものである。ｃは上方のみに拡張するもので、ｄは上下に拡張するが、より上方への拡張が顕著なものである。ｅは上方への拡張が外開きになるもので、次の段階の壺形土器の形態と親縁性が強いものである。Ⅰは頸部の横からの形態が「ハ」の字状になるもので、胎土も橙色系を呈する。Ⅱは頸部が直立するもので、胎土は白色系である。Ⅲは形態的にはⅠｄと同じであるが、胎土がいわゆる角閃石を含む、特殊器台・壺と共通するものである。出土土器の大半はⅠで、Ⅱは旭川流域からの搬入品、Ⅲは葬送儀礼に関するものであることが推測される。

壺形土器Ｂは短い頸部をもつ広口壺である。口縁部の形態からａ～ｄの４種に分けられる。ａは壺形土器Ａａとよく似ており、わずかに端部を上下に拡張するもの。ｂは壺形土器Ａｃとよく似ており、端部の上方への拡張が顕著なもの。ｃは端部の拡張を別粘土でつくっており、二重口縁状になっているもので、頸部も直立する。ｄは上方は内傾して拡張し下方は外頃して拡張する断面「Ｔ」字状になるものである。ａとｂが壺形土器Ａとの親縁性が強いが、ｃ・ｄは加飾性を意識したものでａ・ｂとは系譜が異なる壺形土器といえる。

壺形土器Ｃは、ほとんど頸部を持たないものである。口縁端部を大きく拡張し、外端部に凹線文をめぐらすものがａ、わずかに拡張されているものがｂである。このほか脚台付の長頸壺を壺形土器Ｄとし、口縁部が外方へ開くものをⅠ、内傾するものをⅡとする。いずれも精製された粘土を用いることが多い。壺Ｅも壺Ｄとよく似ているが、玉葱型の胴部に２条の凸線をめぐらしており、いわゆる特殊壺形土器の形態を意識している。今回もこの１点しか出土しておらず、壺Ｅも壺ＡⅢと同様に、集落で用いられる土器というよりも、葬送などの特別な空間で用いられた土器であったことがうかがわれる。

甕形土器は口縁部や胴部の形態から、Ａ～Ｄに分けられる。Ａは口縁端部を上方に拡張し受け口状になっているもので、肩部に明瞭な傾斜変換点が認められる。さらに底部内面に指頭圧痕の残るものが多い。これはいわゆる「吉備型甕」といわれるものである。Ｂは若干上方へ端部を拡張しているもので、肩部の傾斜変換点はＡと比べると不明瞭である。Ｃは若干端部を上方へ拡張しているもので、肩部はほとんど張らない。Ｄは「く」の字状口縁部を持つもので、肩部はほとんど張らない。底部は

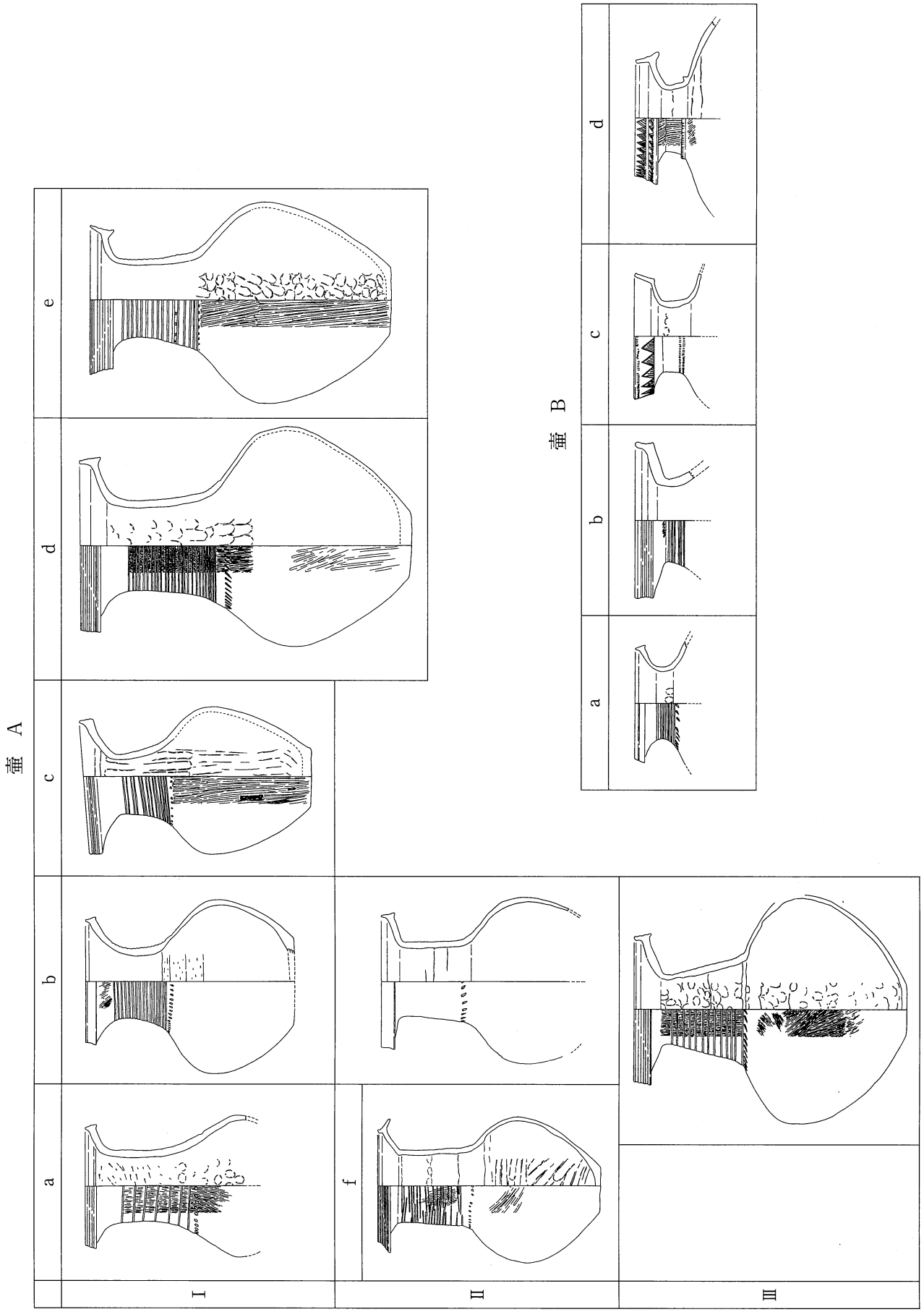



図205　溝13・19・21・30　出土土器　分類（1）

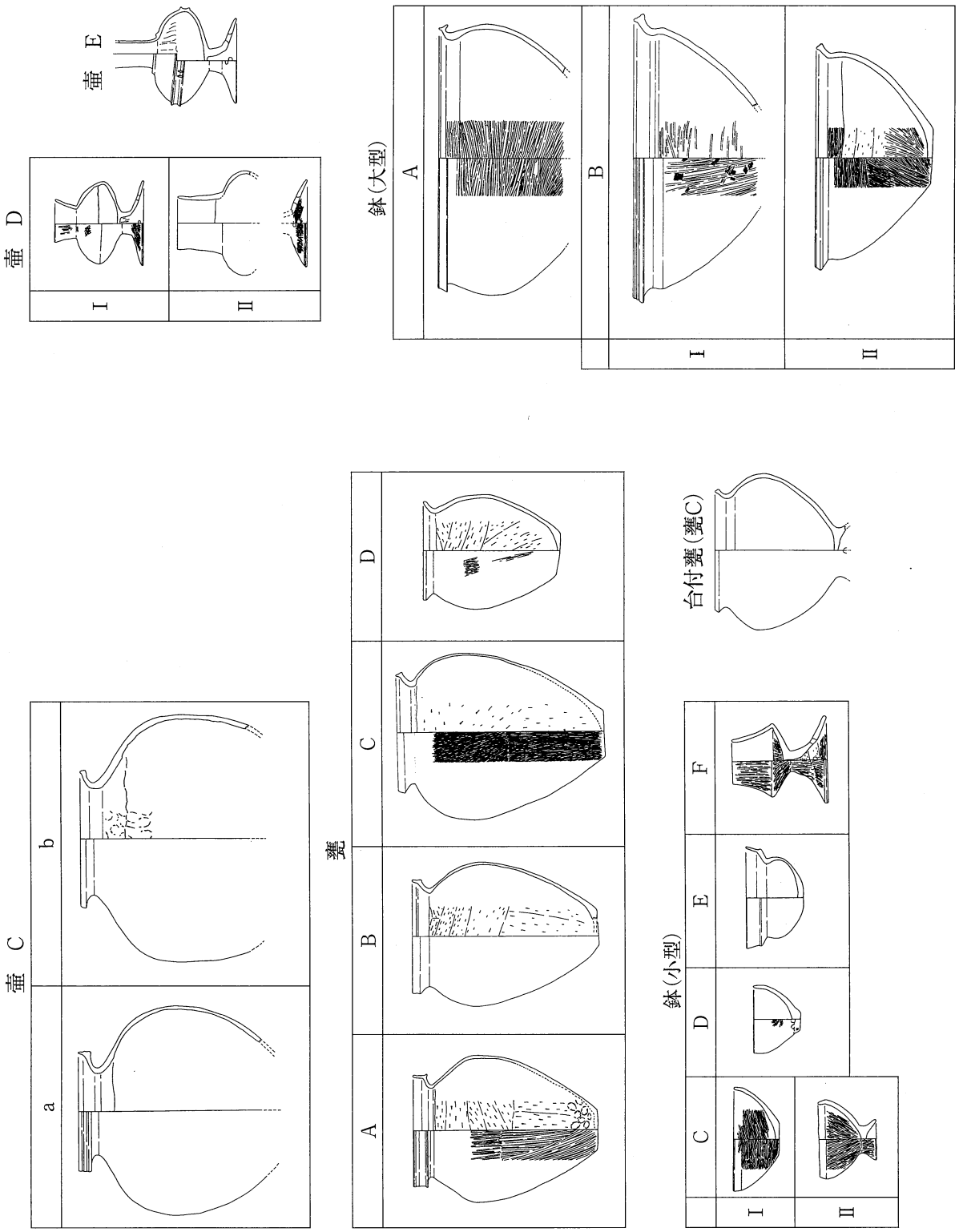



図206　溝13・19・21・30　出土土器　分類（2）

高　杯

器　台

D

図207　溝13・19・21・30　出土土器　分類（3）

平底である。また、数は少ないながらも脚台付きのもの(台付甕(甕C))もある。

鉢形土器はA～Fが認められる。そのうち大型品がA・B、小型品がC～Fである。Aは「く」の字状に外反する口縁部で端部が若干上下に拡張するもので、外端部に強いヨコナデが施されており、内面に稜線が認められる。Bは口縁部が「く」字状に外反し、端部に面をなすもので、端部に凹線が認められるものをⅠ、認められないものをⅡとする。Cは精製された粘土を用いたものが多い。脚台のないものをⅠ、あるものをⅡとし、いずれも古墳時代まで継続的に認められる。Dは椀状である。Eは甕形土器Aと同様の口縁部を持つものである。Fは壺形土器D・Eと共通するもので、供献に用いられる性格が強かったのではないかと推測される。

高杯形土器は杯部の形態からA～Eに分けられ、さらに大・小のサイズによってⅠ・Ⅱに分けられ

る。Ａは口縁部内側に稜線がいくつも認められ、脚部端部に面を持つものである。Ｂは受け部から短く外反する口縁部を持ち、口縁部内側中位に稜が認められるものである。口径が20cm前後の大きいものＩと、14cm前後の小さいものⅡがある。Ｃは受け部から大きく外反する口縁部を持つもので、口径が20cm前後の大きいものＩと、16cm前後の小さいものⅡがある。Ｄは口縁部がわずかに上方に直立するもので、口径が16cm前後の大きいものＩと、12cm前後の小さいものⅡがある。Ｅは椀状の杯部で、口縁端部はわずかに上方へ直立するものである。

器台形土器はＡ～Ｄに分けられる。いずれも器高の低い鼓形を呈する。Ａ～Ｃは口縁部の形態をメルクマールとしている。Ａは上下に拡張し、Ｂはやや下方への拡張が顕著となり、Ｃは上方のみの拡張である。Ｄは小型の器台形土器で、二重口縁をもち、装飾が顕著である。

この期に属する良好な資料としては、立田遺跡の土壙２（弘田ほか1999）、窪木薬師遺跡の土器溜まり（島崎ほか1993）、百間川米田遺跡３の土壙105（岡本ほか1989）、百間川原尾島遺跡４の井戸２（平井ほか1995）の土器群がある。このうち、壺形土器Ａの口縁端部の拡張が顕著なものが含まれているもの（新相）といないもの（古相）、鉢形土器に古相のものが含まれているものといないもの、高杯形土器に小型が伴う（新相）ものと伴わないもの（古相）、器台形土器の器高が高いものが含まれるもの（古相）といった指標から、古相と新相に分けられる。古相は立田遺跡土壙２と、窪木薬師遺跡土器溜まりで、新相は百間川米田遺跡土壙105、同原尾島遺跡４井戸２である。川入・中撫川遺跡の溝出土土器は新相に相当する。

引用文献

柳瀬昭彦「川入・上東遺跡の弥生土器及び古式土師器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　1977
高橋　護「入門講座　弥生土器　山陽３」『考古学ジャーナル』179　ニューサイエンス社　1980
岡本寛久ほか「百間川米田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74　1989
正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　1992
高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　1992
島崎　東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　1993
平井　勝ほか「百間川原尾島遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97　1995
平井典子「備前・備中」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会　1996
草原孝典『長坂古墳群』岡山市教育委員会　1999

# 附　　章

# 附章１　川入・中撫川遺跡出土粘土採掘跡の粘土分析

白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

## １．分析の目的

川入・中撫川遺跡からは、弥生時代後期の粘土採掘跡らしき遺構が確認されており、土器製作に使用された粘土を採掘した跡であることが指摘されている(1)。そこで、この採掘されたあとの粘土と同遺跡溝30出土の土器と比較することで胎土に類似性があるかどうか理化学的な胎土分析により検討した。

## ２．分析方法

分析は、蛍光Ｘ線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の二つの分析方法で検討した。

蛍光Ｘ線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分(元素)量を調べた。測定した成分は、13元素で、そのうちK(カリウム)、Ca(カルシウム)の成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒(岩石・鉱物)の種類、大きさ、含有量について調べた。

分析した土器は、第１表に示した川入・中撫川遺跡の溝30出土土器20点、粘土採掘されたあとの粘土６点の合計26点である。

## ３．蛍光Ｘ線分析法による分析結果

第１図K－Caの散布図は、弥生時代後期の土器と、粘土採掘されたあとの粘土を比較した。すると、土器の分布範囲内に粘土も分布し胎土が類似していた。

## ４．実体顕微鏡観察(肉眼観察)による結果

実体顕微鏡による肉眼観察では胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察倍率は10倍～30倍で観察した。その結果、以下のような２つに分類される。

Ⅰ類　……　1mm～2mmの石英を含み、少量の長石・角閃石とまれに黒雲母も含むもの
試料番号１・２・７・８・９・10・11・14・15・17・18・19・20

Ⅱ類　……　1mm～2mmの石英を含み、少量の長石・雲母を含む。また、素地土に0.5mm以下の火山ガラスを含んでいるもの
試料番号３・４・５・６・12・13・16

なお、粘土採掘されたあとの粘土はⅠ類に近い砂粒構成であった。

## ５．まとめ

川入・中撫川遺跡出土土器の胎土分析(蛍光Ｘ線分析、実体顕微鏡観察)を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

(1)蛍光Ｘ線分析では、粘土採掘されたあとの粘土と川入・中撫川遺跡の溝30出土の土器のあいだで、

胎土に差はみられなかったが実体顕微鏡観察では２つに分類できた。それは角閃石と火山ガラスの有無により胎土に違いがみられた(蛍光Ｘ線では差異がでなかった)。なお、粘土採掘されたあとの粘土はＩ類であった。

以上のように、限られた比較試料のため十分な検討はできなかったが、粘土採掘されたあとの粘土と溝30内出土の土器は、胎土的に類似していることが推定された(2)。しかし、実体顕微鏡による肉眼観察では、Ⅱ類のように素地土に混入していると推測される火山ガラスが入っている胎土の土器がみられた。溝30出土土器に、複数の胎土の土器があると推定される。

この分析の機会を与えていただいた、草原孝典氏をはじめ岡山市教育委員会の職員の方々には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

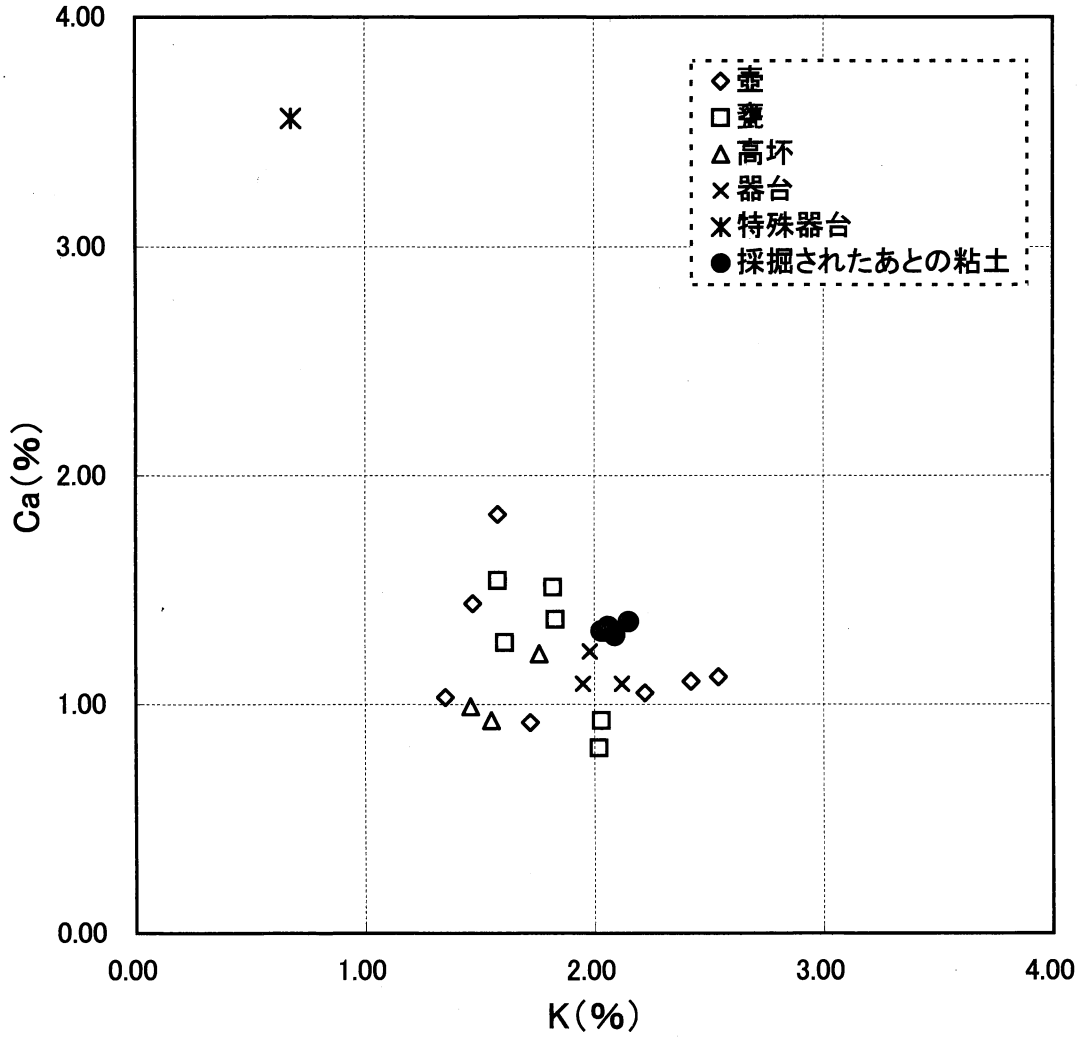
註

(1)資料提供者により指摘されている。

(2)粘土採掘されたあとの粘土と溝30の土器は、理化学的な胎土分析では類似していたが、肉眼観察では、粘土に比べ土器にやや砂粒が多いように感じられた。混和剤として砂粒を入れている可能性がある。

第１表　川入・中撫川遺跡出土土器胎土分析試料一覧表(％)ただし、Ｒｂ・Ｓｒ・Ｚｒはppm

| 番号 | 出土遺構・土層 | 器　種 | | Si | Ti | Al | Fe | Mn | Mg | Ca | Na | K | P | Rb | Sr | Zr |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 溝30 | 壺 | 408 | 60.55 | 0.95 | 19.38 | 11.66 | 0.13 | 1.46 | 1.44 | 2.49 | 1.47 | 0.30 | 192 | 176 | 457 |
| 2 | 溝30 | 壺 | 429 | 64.50 | 0.82 | 17.98 | 9.77 | 0.11 | 1.43 | 1.03 | 2.53 | 1.35 | 0.31 | 162 | 208 | 341 |
| 3 | 溝30 | 壺 | 451 | 65.33 | 0.70 | 20.41 | 4.66 | 0.03 | 1.38 | 1.12 | 3.01 | 2.54 | 0.63 | 366 | 221 | 403 |
| 4 | 溝30 | 甕 | 415 | 60.86 | 0.93 | 20.84 | 8.72 | 0.15 | 1.66 | 1.27 | 2.38 | 1.61 | 1.31 | 163 | 212 | 403 |
| 5 | 溝30 | 甕 | 430 | 71.48 | 0.86 | 18.50 | 2.07 | 0.02 | 1.36 | 0.81 | 1.94 | 2.02 | 0.75 | 201 | 135 | 325 |
| 6 | 溝30 | 高坏 | 413 | 61.96 | 0.82 | 17.85 | 10.99 | 0.13 | 1.67 | 1.22 | 2.25 | 1.76 | 1.17 | 229 | 252 | 352 |
| 7 | 溝30 | 特殊器台 | 409 | 51.57 | 1.28 | 23.96 | 13.72 | 0.24 | 1.92 | 3.56 | 1.88 | 0.68 | 1.04 | 92 | 268 | 185 |
| 8 | 溝30 | 壺 | 22 | 68.33 | 0.73 | 19.90 | 3.37 | 0.04 | 1.33 | 1.10 | 1.72 | 2.42 | 0.82 | 228 | 158 | 346 |
| 9 | 溝30 | 壺 | 26 | 65.18 | 0.84 | 22.28 | 2.97 | 0.04 | 1.44 | 1.05 | 3.24 | 2.22 | 0.51 | 217 | 162 | 483 |
| 10 | 溝30 | 甕 | 45 | 63.19 | 0.74 | 19.16 | 5.56 | 0.06 | 2.17 | 0.93 | 5.42 | 2.03 | 0.45 | 189 | 157 | 355 |
| 11 | 溝30 | 甕 | | 64.48 | 0.85 | 18.51 | 8.51 | 0.12 | 1.51 | 1.51 | 2.21 | 1.82 | 0.32 | 198 | 194 | 396 |
| 12 | 溝30 | 高坏 | B−45 | 60.42 | 0.88 | 18.32 | 12.85 | 0.14 | 1.49 | 0.93 | 2.83 | 1.55 | 0.39 | 183 | 150 | 427 |
| 13 | 溝30 | 高坏 | 418 | 66.96 | 0.92 | 20.74 | 3.68 | 0.04 | 1.49 | 0.99 | 2.84 | 1.46 | 0.73 | 185 | 166 | 341 |
| 14 | 溝30 | 器台 | | 68.43 | 0.97 | 16.96 | 6.02 | 0.08 | 1.50 | 1.09 | 2.05 | 2.12 | 0.60 | 151 | 228 | 585 |
| 15 | 溝30 | 壺 | 51 | 56.83 | 0.86 | 23.47 | 11.78 | 0.14 | 1.27 | 1.83 | 1.63 | 1.58 | 0.37 | 201 | 241 | 481 |
| 16 | 溝30 | 壺 | 59 | 61.17 | 1.03 | 23.75 | 6.70 | 0.06 | 1.54 | 0.92 | 2.67 | 1.72 | 0.27 | 186 | 167 | 420 |
| 17 | 溝30 | 甕 | 57 | 51.93 | 0.96 | 26.83 | 10.97 | 0.13 | 1.68 | 1.54 | 3.66 | 1.58 | 0.50 | 181 | 217 | 449 |
| 18 | 溝30 | 甕 | 59 | 57.09 | 0.84 | 23.86 | 11.6 | 0.12 | 1.21 | 1.37 | 1.48 | 1.83 | 0.35 | 251 | 176 | 413 |
| 19 | 溝30 | 器台 | 57 | 64.14 | 0.94 | 17.58 | 9.79 | 0.12 | 1.44 | 1.09 | 2.41 | 1.95 | 0.36 | 223 | 207 | 502 |
| 20 | 溝30 | 器台 | | 64.64 | 1.05 | 19.94 | 5.66 | 0.07 | 1.63 | 1.23 | 3.01 | 1.98 | 0.61 | 230 | 232 | 335 |
| 21 | 粘土採掘壙 | 粘土 | | 63.60 | 0.92 | 19.52 | 7.74 | 0.21 | 1.62 | 1.32 | 2.76 | 2.05 | 0.03 | 208 | 203 | 321 |
| 22 | 粘土採掘壙 | 粘土 | | 63.46 | 0.89 | 19.65 | 7.79 | 0.23 | 1.65 | 1.32 | 2.66 | 2.03 | 0.06 | 215 | 213 | 319 |
| 23 | 粘土採掘壙 | 粘土 | | 63.61 | 0.91 | 19.67 | 7.94 | 0.20 | 1.85 | 1.34 | 2.05 | 2.06 | 0.08 | 219 | 224 | 310 |
| 24 | 粘土採掘壙 | 下層の粘土 | | 63.25 | 0.94 | 19.08 | 8.63 | 0.16 | 1.84 | 1.30 | 2.48 | 2.09 | 0.02 | 216 | 201 | 307 |
| 25 | 粘土採掘壙 | 下層の粘土 | | 62.81 | 0.96 | 19.13 | 8.52 | 0.15 | 1.73 | 1.33 | 3.09 | 2.06 | 0.03 | 213 | 205 | 281 |
| 26 | 粘土採掘壙 | 下層の粘土 | | 62.86 | 0.95 | 18.95 | 8.86 | 0.17 | 1.78 | 1.36 | 2.60 | 2.15 | 0.09 | 204 | 189 | 292 |




第１図　川入・中撫川遺跡出土土器と粘土の比較

# 附章２　川入・中撫川遺跡出土凝灰岩製石材の分析

白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

## １．分析の目的

川入・中撫川遺跡より出土した凝灰岩製の石材（８世紀の建物基壇の化粧石材として使用されていたと考えられる。）を理化学的な分析方法により、その石材の成分を調べた。そして、この凝灰岩製石材の成分を調べることで、どこで産出する凝灰岩であるかを推定することが、最終的な目的である。今回は、比較試料として香川県さぬき市火山で産出する凝灰岩と比較した。火山は古墳時代の石棺石材の原産地として有名である。また、その他に、岡山市賞田廃寺、奈良県市尾古墳（石棺石材）から出土した試料も併せて分析した。なお、この凝灰岩は岡山県南部地域では産出せず、香川県内および瀬戸内島嶼部（小豆島、豊島など）で産出する石材である(1)。

## ２．分析方法

分析は、蛍光Ｘ線分析法で行った。

蛍光Ｘ線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、石材の成分（元素）量を調べた。

分析した石材は、第１表に示した消費地試料の川入・中撫川遺跡、賞田廃寺、奈良県市尾古墳と石材産地である火山産原石の合計15点である。

## ３．分析結果

第１表のデータを用いてクラスター分析を行った。この分析は13元素の全データを比較し、似たものどうしが、より低いところでグループを作る多変量解析の手法である。

その結果を、第２図に示しているが、一番分析値が類似しているものが低いところでグループを作っている。それは川入・中撫川、賞田廃寺と、火山、市尾古墳の３グループである。そして、次に類似しているものは川入・中撫川、賞田廃寺と火山のグループで、もっとも分析値が異なるのが、川入・中撫川、賞田廃寺、火山と市尾古墳であった。

## ４．まとめ

蛍光Ｘ線分析方法による凝灰岩製石材の分析を実施したが、この分析で川入・中撫川遺跡、賞田廃寺、火山の凝灰岩は分析値が類似していることが指摘できよう。しかし、岩石学的な検討を行うことができなかった。また、限られた原産地試料のためより総合的な原産地推定までには至らなかった。今後の課題としたい。

この分析の機会を与えていただいた、草原孝典氏をはじめ岡山市教育委員会の職員の方々には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

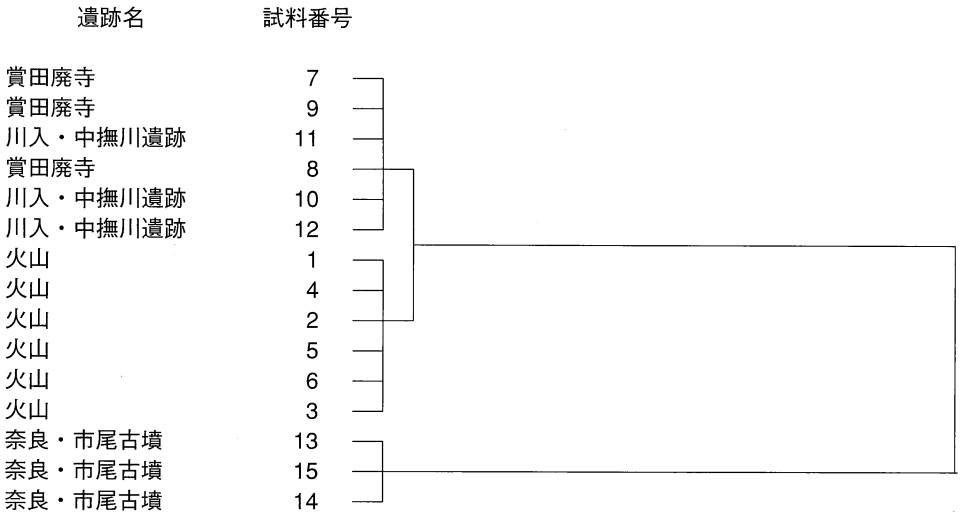
註

(1)　柏　徹哉・松田朝由　「香川県における凝灰岩石切場と石造物の検討」『香川考古』第9号　香川考古刊行会　2004。

第１表　凝灰岩および石材の分析値一覧表（%）　ただし、Rb・Sr・Zrはppm

| 試料番号 | 遺　跡　名 | Si | Ti | Al | Fe | Mn | Mg | Ca | Na | K | P | Rb | Sr | Zr |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 火山 | 72.64 | 0.06 | 14.27 | 4.25 | 0.05 | 1.71 | 1.18 | 2.06 | 3.56 | 0.08 | 286 | 166 | 63 |
| 2 | 火山 | 72.14 | 0.03 | 14.52 | 4.01 | 0.05 | 1.89 | 1.13 | 2.51 | 3.49 | 0.08 | 288 | 155 | 41 |
| 3 | 火山 | 73.41 | 0.01 | 14.12 | 4.16 | 0.05 | 1.67 | 1.25 | 0.60 | 3.4 | 1.17 | 268 | 125 | 75 |
| 4 | 火山 | 71.96 | 0.01 | 14.03 | 5.57 | 0.05 | 1.71 | 1.20 | 1.72 | 3.48 | 0.09 | 294 | 180 | 58 |
| 5 | 火山 | 71.13 | 0.04 | 14.26 | 5.14 | 0.04 | 1.89 | 1.17 | 2.76 | 3.28 | 0.04 | 255 | 146 | 63 |
| 6 | 火山 | 72.42 | 0.05 | 14.27 | 5.35 | 0.06 | 1.81 | 1.22 | 1.23 | 3.40 | 0.05 | 267 | 154 | 68 |
| 7 | 賞田廃寺 | 69.78 | 0.02 | 15.39 | 6.18 | 0.12 | 1.84 | 1.12 | 2.33 | 2.89 | 0.18 | 224 | 162 | 68 |
| 8 | 賞田廃寺 | 69.78 | 0.01 | 15.41 | 6.14 | 0.13 | 1.77 | 1.13 | 2.37 | 2.88 | 0.20 | 252 | 173 | 48 |
| 9 | 賞田廃寺 | 70.13 | 0.0 | 15.30 | 6.05 | 0.11 | 1.70 | 1.09 | 2.52 | 2.84 | 0.11 | 220 | 162 | 67 |
| 10 | 川入・中撫川遺跡 | 71.30 | 0.01 | 16.75 | 3.55 | 0.09 | 1.62 | 1.29 | 1.74 | 3.30 | 0.21 | 223 | 197 | 75 |
| 11 | 川入・中撫川遺跡 | 71.10 | 0.03 | 16.60 | 3.36 | 0.08 | 1.68 | 1.35 | 1.61 | 3.06 | 0.97 | 218 | 173 | 66 |
| 12 | 川入・中撫川遺跡 | 70.27 | 0.02 | 16.85 | 3.40 | 0.09 | 1.72 | 1.22 | 2.93 | 3.17 | 0.19 | 233 | 195 | 78 |
| 13 | 奈良・市尾古墳 | 72.97 | 0.12 | 14.84 | 2.37 | 0.04 | 1.69 | 1.99 | 2.16 | 3.35 | 0.20 | 217 | 407 | 151 |
| 14 | 奈良・市尾古墳 | 72.70 | 0.14 | 14.96 | 2.50 | 0.04 | 1.63 | 2.02 | 2.31 | 3.34 | 0.14 | 236 | 385 | 144 |
| 15 | 奈良・市尾古墳 | 72.65 | 0.09 | 14.99 | 2.41 | 0.05 | 1.71 | 2.03 | 2.40 | 3.26 | 0.14 | 217 | 402 | 154 |

第２図　川入・中撫川遺跡ほか出土凝灰岩製石材のクラスター分析結果



# 図　版

1．船橋区 掘り上がり

2．船橋区 溝 4
遺物出土状況

3．法万寺区
中世末～近世遺構

# 図版２

１．法万寺区　河道１ａ

２．法万寺区　河道１ｂ

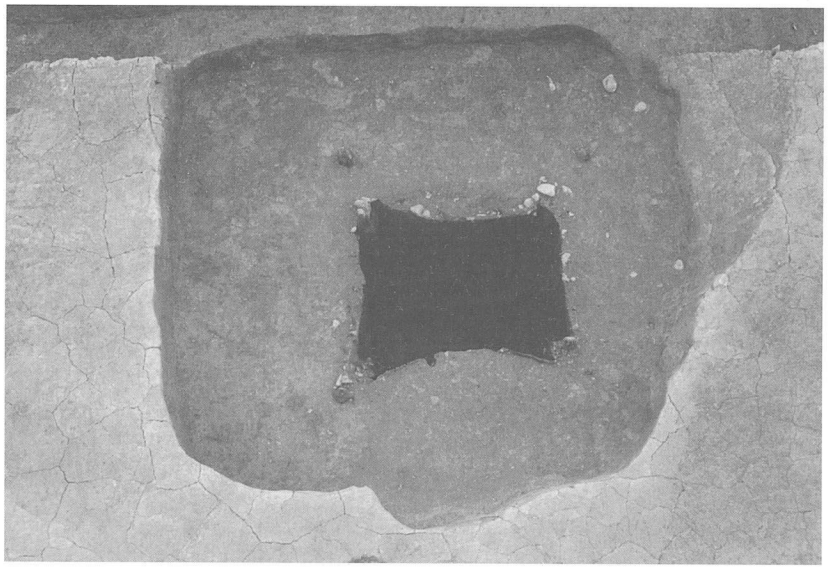
３．法万寺区　河道１
　　土錘出土状況

1．法万寺区　河道１
馬骨出土状況

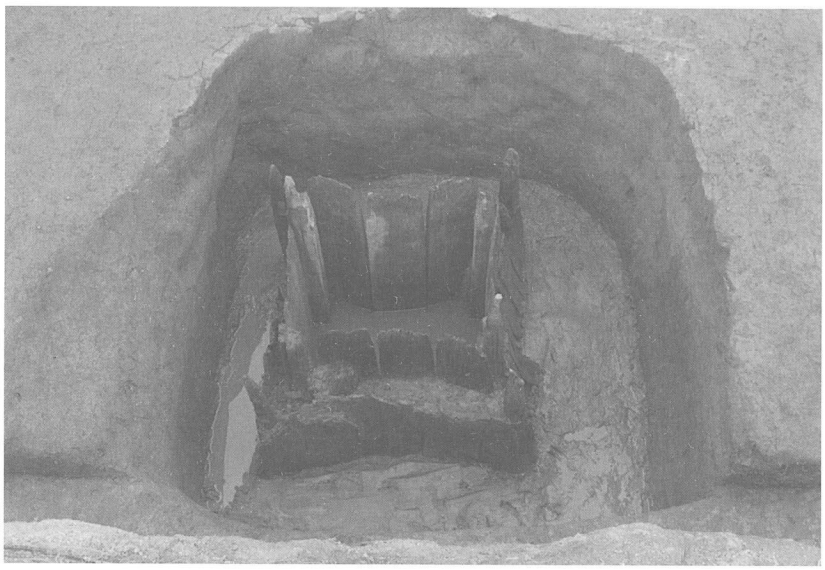
2．法万寺区
平安時代遺構面

3．法万寺区　建物１

# 図版４



１．法万寺区　井戸６



２．法万寺区　井戸６

３．法万寺区　井戸６